

唯一柱痕を確認した1919柱穴のそれは、木質が腐朽し直径15cm前後を測る粘土質の土層と化した状態であった。また、1951柱穴では底面に円窪を据え、根石としている状況を観察することができた。

各柱穴からは若干の遺物が出土し、そのうち図93右下に1915柱穴掘方より得られた須恵器杯口蓋を図化した。口縁端部外面にはハケ状工具を用いた斜位の調整痕が観察され、その形態や、口径12.3cmを測る法量的要素から、古墳時代後期末葉から飛鳥Iでも古い段階に位置づけられる。

そして、この遺物が出土したことから、建物の時期は当該期を上限とするものと考えられる。

建物72(図94、図版40-2・図版43-1~3)

調査区中央から東側の中程まで向かった位置で検出された側柱の掘立柱建物である。南北に棟を通し、主軸はその方向でN-5°-Wを示す。南東約6mでは前述した建物71が検出された。

建物の規模は、梁行2間(3.3m)、桁行3間(4.6m)を測り、床面積は約15.2m²(4.6坪)となる。なお、北側梁行については、中世の1506溝により削平されるため遺存状況が悪く、特に北西隅柱は掘方自体は失われた状態であったが、柱材が沈下したことが幸いして柱当たりのみを確認することができた。なお、1822柱穴はこれに伴う掘方の残欠となる可能性も考えられる。

柱間寸法は、梁行北側が東方向より1.65m、1.60m、南側は同方向から1.70m、1.6mとなり、桁行は東側が北方向より1.40m、1.65m、1.50mで、西側が1.60m、1.70m、1.6mを測る。

掘方の平面形は隅の丸い平行四辺形状を呈する。穴底の標高はほぼ一定で、その形状は平坦なものと皿形となるものの別がある。埋土中には攪乱を被る1831柱穴以外、直径15cm前を測る柱痕が観察され、

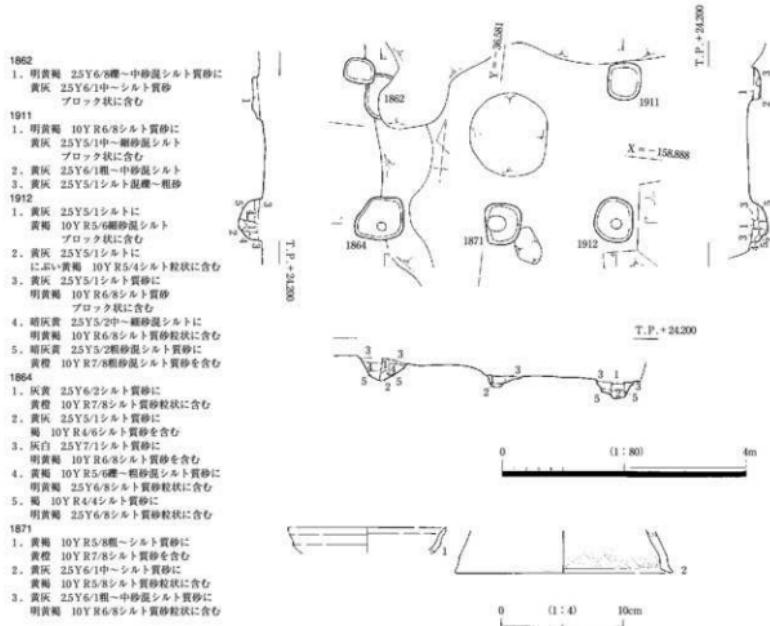


図95 建物73平・断面および出土遺物実測図

それらは図版43-1から3に示すように東桁では南側に、西桁では北側に掘方ごと倒されたような状態で傾斜していた。しかし、この状況が人為的なものか、自然の営為による変形なのはわかには断じ難い。

また、この建物の周囲には1834・1804溝が位置し、南側には平坦面が存在していることから、これらを建物に伴う雨落ち溝と南側に広がる空間とみなすことも可能である。

数基の柱穴からは土器の細片が出土したが、図化に堪えるものや時期の特定できる資料は含まれていなかった。さらに、1506溝以外、他の遺構とも重複しておらず、間接的にも時期を推測する方策は断たれている。しかし、掘方の形状や埋土の色調などの諸様相から推察して、飛鳥時代となる可能性が高い。

なお、建物に関連するとした一連の溝からは、量的には僅少ではあるが飛鳥時代の土器が出土しており、これも時期を推定する間接的証左の一つとして積極的に評価しておきたい。

建物73（図95、図版41-1・43-4）

調査区東半部中央からやや北に向かった位置の壁際で検出された側柱の掘立柱建物である。北側を近代水路により破壊され、梁・桁の方向も確定できないが、棟筋から求められる主軸はN-7°-Wを示す。南側約4mには先述した建物71が、そして、北側には建物75が東側柱筋を擴てて構築されている。

建物の規模は、南辺2間（3.9m）、東西辺1間（2.3m）以上となる。柱間寸法は、南辺が東より2.00m、1.90m、東辺が2.3m程度、西辺が2.2m前後になるものと考えられる。

掘方の平面形は、隅丸方形を指向しているようではあるが総体的には不整円形に近似し、規模は東西双方の隅柱が若干大きい。断面形は「U」字形から皿形を呈し、掘削深度は前述の2基が深い。南辺柱穴3基の埋土中には柱痕が観察され、その大きさは直径15cmから30cmを測るものであった。

おののの柱穴からは少量の土器類が出土し、そのうち2点の須恵器を図95下段に図示した。共に掘

- 2069
1. 黒 5Y5/1粗砂混シルト質砂
2068
1. 黄褐 25Y5/2粗砂混シルトに
 黄褐 10YR5/6粗砂混シルトを含む
2. 黄褐 25Y6/2粗砂混シルトに
 黄褐 10YR5/5粗砂混シルトを含む
3. 黄褐 25Y5/2粗砂混シルト質砂に
 黄褐 10YR5/5粗砂混シルトを含む
4. 黄褐 25Y5/2粗砂混シルト質砂に
 褐 10YR4/6粗シルト質砂を含む
1859
1. 黄褐 10YR5/2シルト質砂に
 褐 10YR4/4シルト質砂を含む
2. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルトに
 黄褐 10YR5/6粗砂混シルト質砂を含む
3. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルト質砂に
 褐 10YR4/4粗砂混シルト質砂を含む
4. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルト質砂に
 黄褐 10YR5/5粗砂混シルト質砂を含む
5. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルトに
 にい黄褐 10YR5/4粗砂混シルト質砂を含む
1858
1. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルト質砂に
 褐 10YR4/6粗砂混シルト質砂を含む
1853
1. 黄褐 10YR5/2シルト質砂に
 褐 10YR4/4シルト質砂を含む
2. 黄褐 10YR5/2粗砂混シルト質砂に
 にい黄褐 10YR4/3粗砂混シルト質砂を含む
3. 黄褐 25Y5/1粗砂混シルト質砂に
 褐 10YR4/4シルト質砂ブロック状に含む
4. にい黄褐 10YR5/4粗砂混シルト質砂に
 黄褐 25Y5/1粗砂混シルトブロック状に含む
5. 黄褐 25Y5/1シルト質砂に
 黄褐 10YR5/6粗砂混シルト質砂を含む

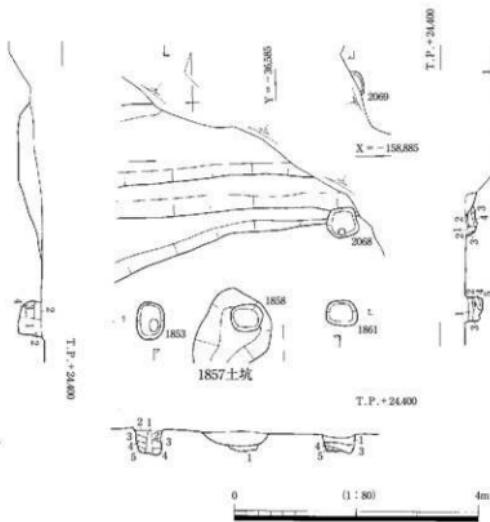


図96 建物74平・断面図

方より出土したもので、1は1862柱穴より得られた無蓋高杯、2は1864柱穴から採取した脚部である。

これらの遺物は、時期判別可能な特徴的要素に欠けるが、大略的には飛鳥時代前半代となろう。

建物74(図96、図版41-2)

調査区東半部の中央からやや北で検出された側柱の掘立柱建物である。北側は建物73と同様に近代水路による損壊を被るため詳細は不明だが、主軸をN-3°-Wに持つ南北棟の建物と考えられる。

規模は、梁行2間(3.1m)、桁行2間(3.7m)以上を測る。柱間寸法は、梁行南側が東方向より1.6m、1.5m程度で、北側は攪乱孔により破壊されまったく不明となる。桁行は東側が南方より1.3m、2.4m前後で、以北は削平のため不明、西側については溝により破壊され知る手掛かりもない。

掘方の平面形は、不整な隅丸方形を呈し、断面形は隅の丸い矩形から逆台形様のものまでさまざまだが、そのほとんどの穴底に傾斜や段を持っていることで共通する。なお、1853柱穴や2068柱穴では、直径15cm程度の柱痕を観察することができた。

柱穴からは時期の特定や固化的可能な遺物は得られなかった。しかし、1858柱穴の後に穿たれた1857土坑から、飛鳥I-3段階の須恵器が出土したことから、この時期以前の建物と解釈することはできる。

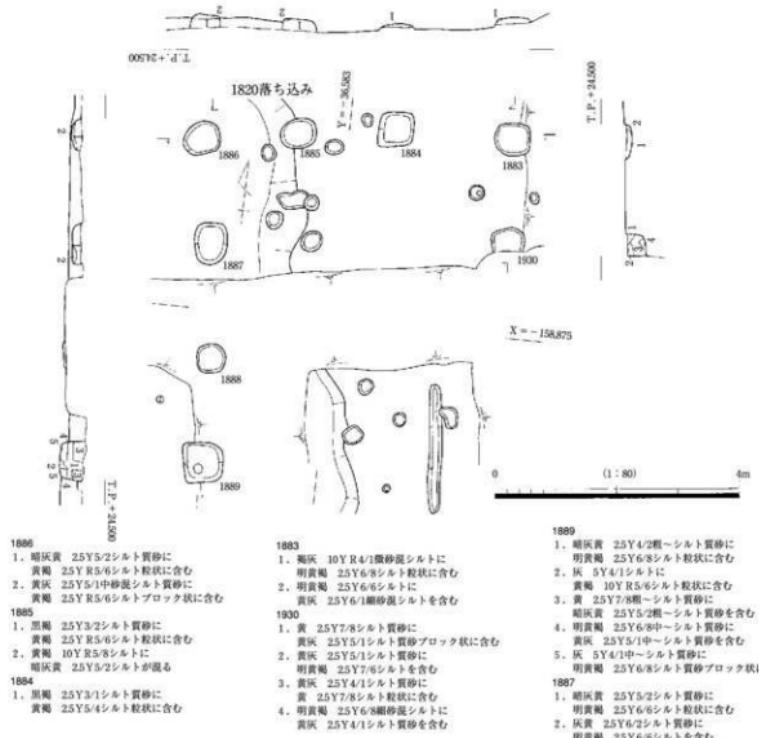


図97 建物75平・断面図

建物75（図97、図版41-3）

調査区中央部から北東に向かった位置で検出された側柱の掘立柱建物である。棟筋を南北に通し、主軸はその方向でN-5°-Wを示す。東側の柱筋は建物71や建物73のそれとほぼ一直線上に揃う。

建物の規模は、梁行3間（5.1m）、桁行3間（5.4m）以上だが、南妻を失うため確定できない。

柱間寸法は、梁行北側が東より1.9m、1.6m、1.6mで、南妻は削平のため不明となる。桁行は西側が北より1.7m、1.9m、1.8mで、以南は削平のため不明で、東側は北から1間分が1.8mである以外不明である。掘方の平面形は隅丸方形から不整円形を呈し、その規模には若干の大小がみられる。断面形は隅の丸い矩形から逆台形を呈し、穴底はほぼ平坦に掘削されている。

埋土内には1889柱穴でのみ直径約15cmの柱痕を確認したが、他の柱穴ではこれを認識できなかった。

各柱穴からは時期の特定できる資料や、図化可能な遺物は出土していない。しかし、重複関係より建物に先行する段階に埋没していたと判断した1820落ち込みより、飛鳥I-2段階を上限とする遺物が出土していることから、この段階以降に構築された建物であると考えることは可能である。

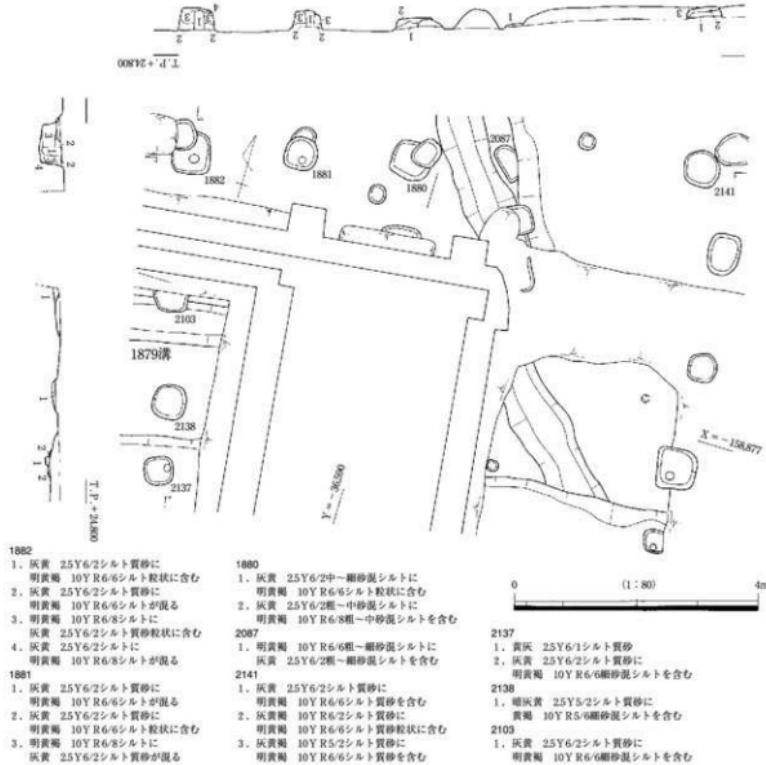


図98 建物75平・断面図

建物76 (図98、図版42-1)

調査区中央から北東側で検出された側柱の掘立柱建物である。東西に棟を通し、主軸はそれに直交する形でN-12°-Wを示す。東には前述の建物75が接しているが、現状では重複する関係はない。

攪乱を被り詳細不明だが、現況で梁行3間(5.2m)以上、桁行5間(8.5m)以上の規模となる。

柱間寸法は、梁行西側が北より2.2m、1.9m、1.1mで、東側は削平のため不明となる。桁行は北側が西より1.8m、1.8m、1.8m、以東は2間分合わせて3.1mとなる。掘方の平面形は、隅丸方形から不整円形を呈し、隅柱である1882柱穴のみ規模が大きい。断面形は隅の丸い方形から、偏平な皿形を呈し、掘削深度は南側ほど浅い。これらのうち3基の柱穴には直径15cm前後の柱痕が遺存していた。

柱穴の数基から若干の土器が出土したが、時期の特定や固化できるものはなかった。よって建物の時期は不明だが、埋土や掘方の形状などの諸相から推察して中世以前と考えておきたい。

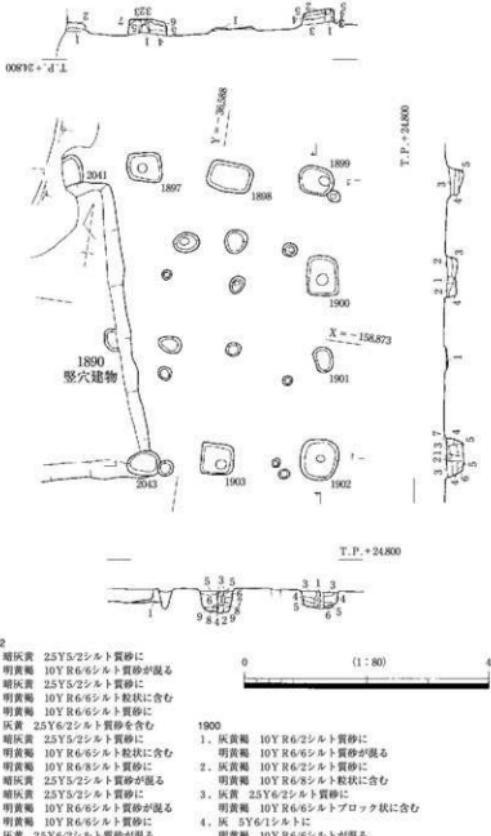


図99 建物77平・断面図

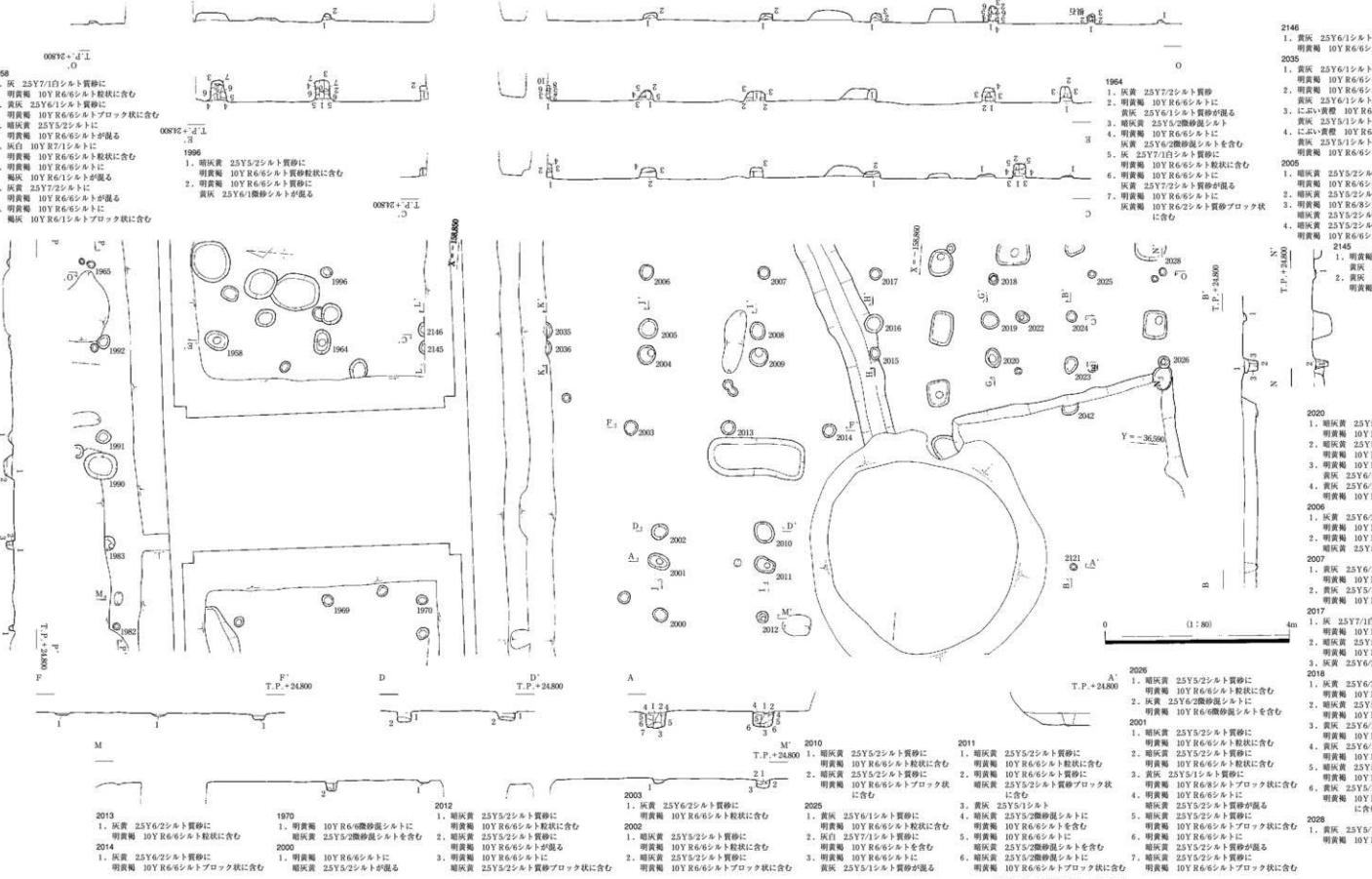


図100 建物78-1・断面図

建物77 (図99、図版42-2・43-5)

調査区中央から北東に向かった位置で検出された個柱の掘立柱建物である。

西側を1890堅穴建物により失うため、東辺が3間となることと、柱筋から主軸がN-7°-Wを示すこと以外不明である。

柱間寸法は、北辺が東より 1.6m、1.4m、
1.3m、東辺が北方より 1.65m、1.3m、1.6
m、南辺が東方より 1.65m、1.3m となる。

しかし、西辺は確認する術がない。

掘方の平面形は隅丸の方形から長方形、不整形となる。断面形は隅の丸い方形から逆台形などさまざままで、このうち1898柱穴・1901柱穴は掘削深度が極端に浅い。穴底は平坦に掘削される例が大半だが、1899柱穴は北側に下降するように掘削される。

半数以上の柱穴埋土内には、直径15cmから20cm前後の柱痕が観察された。

柱穴からの出土遺物がないため、直接的に時期を知る手段には乏しいが、飛鳥Ⅲ段階の遺物を伴う1890堅穴建物より先行するは確実であるため、それ以前の建物と位置づけることは可能である。

建物78(図100・101、図版6-2・42-3・43-6~8)

調査区北東部で検出された南北棟の掘立柱建物である。身舎の四周に一回り小形の外周柱穴列を配し、かつ、桁柱列の内側に柱穴を付随させている。主軸はN-1°-Wを示し、その方向は真北に近い。

側柱の内外で検出されたそれぞれの柱穴は、身舎のそれと比して一回り小形のものが多く、根入れも浅いことから、内側は添東、外側は縁を構成する柱穴となる可能性が高い。この状況から、建物は屋内に床張を備え、外周四方に縁をめぐらせた床東建物と復原することが可能となる。

建物の規模は、遺存状況が悪いため不確定要素を残すが、梁行は柱間寸法などから推定して2間（北側4.6m、南側5.0m）、桁行8間（18.6m）と想定され、床面積は約89.3m²（27.1坪）を測る。

これに四周の縁を含めると、梁間と桁間の数はそれぞれ2間ずつ増し、規模は梁行北側8.0m、南側7.4m、桁行東側23.3m、西側22.8mまで拡大し、総床面積も約177.5m²（53.9坪）となる。

身舎の柱間寸法は、双方の梁行が攪乱孔のため不明となり、桁行は残存状態の比較的良好な東側で、北より2.30m、2.2m、2.6m、2.3m、2.3m、2.4m、2.6m、2.5m、1.8mを測り、最短1.8mから最長2.6mまで0.8mの長短差がある。縁についてもこれと同様に、最短1.5mから最長2.55mまで約1mの相違があり、柱通りの悪さを含め、全体的にみた場合には整然性に欠ける。

掘方の平面形は円形から不整円形を呈し、規模については、先述したように身専と比較して、その内

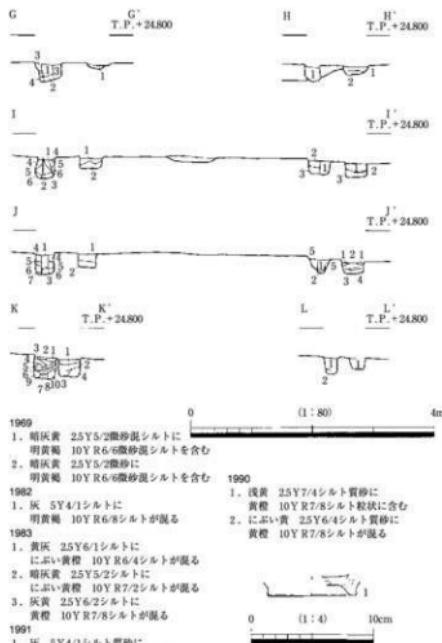


図101 建物78断面および出土遺物実測図

外に並列する添東と縁のそれが小規模となる。断面形は隅丸い矩形から「U」字形を呈するものが大多数を占め、掘削深度は相対的に身舎が深く、その内外の柱穴が浅い。穴底は平坦なものと皿形のもの2者が存在し、この中には図版43-6に示したように円礫を据えている例も確認された。

各柱穴の埋土は、灰色がかった黄褐色を呈するシルト質の強い土層を主体とするもので大部分が占められている。その中央附近には直径15cmから20cm前後を測るさらに明るい灰色味を帯びた圧密度の低い土層が観察されるものが多く、これを柱材が腐朽して土壤に置換された柱痕と認識した。

なお、身舎内で検出された2003・2013・2014柱穴は、建物の棟筋中央附近に位置することや、埋土の様相が酷似していることから、この建物の床構造に関連する何らかの目的で設置されたとみなしたい。

出土遺物は非常に僅少で、2017柱穴や2018柱穴掘方から、在地色の強い黒色土器A類の挽小片などが出土したに過ぎない。したがって、構築時期の上限を平安時代前期とすることも可能だが、掘方の形状や埋土の様相、柱の配置状況から類推した場合には、後期段階にまで下がる蓋然性が高い。

建物79（図102上段、図版6-2・図版46-1）

調査区北端部の中央から東によった位置で検出された側柱の掘立柱建物である。北東から南西に棟筋を通し、主軸はN-33°-Wを示す。この値は今回検出された建物の中で最も東偏するものである。

南側を擾乱孔により破壊されているため規模は確定できないが、現状では、梁行2間（3.1m）、桁行2間（3.4m）以上となる。

柱間寸法は、梁行北東側が東より1.5m、1.5m程度となり、南西側については前述の事由で不明である。桁行は南東側が北より1.7m、1.7m前後で、北西側も1.7mとほぼ揃う。

掘方の平面形は、隅丸方形から不整円形のものまでさまざまなものが存在し、規模については大同小異となっている。断面形は遺存状況が不良のため明確にはし難いが、隅の丸い逆台形から浅い皿形のものまで各種の形態が観察された。

掘削のよぶ範囲はおのおの差異があり、穴底についても平坦なものと、やや傾斜をつけて掘削されているものの別がある。そして、この中には1例のみだが、1976柱穴のように段差が設けられているものも確認された。埋土中には1976柱穴や1981柱穴のように、直径15cmから20cm前後を測る柱痕の観察される例があり、その状況は従前の諸例と違わぬ様相を呈していた。さらに、後者の柱穴では図版46-1のように、柱の脇に礫を添えているものもみられた。

各柱穴から遺物は出土しておらず、また、他の造構とも重複していないことから、時期の特定は困難だが、掘方の形状や埋土の様相から推察することが許されるならば、中世以前の可能性が高くなる。

建物80（図102下段、図版46-2）

調査区北東隅に近い位置で検出された側柱の掘立柱建物である。擾乱孔により激しい損壊を被っているが、1995柱穴を北東隅柱とみなし、そこから西と南へそれぞれ2間分並ぶ柱穴をまとめてることによって建物を復原した。このような状態であるため、全形を明らかにすることはできないが、柱筋から求められる主軸はN-2°-Wとなる。建物の規模は、北辺2間（3.6m）以上、東辺2間（3.3m）以上となり、南辺と西辺については、削平のため確認することができなかった。柱間寸法は、北辺が東方向より1.9m、1.7m程度を測り、東辺が北方向より1.7m、1.6m前後となる。掘方の平面形は整わない円形を呈し、その規模に統一性はみられない。断面形はいびつな「U」字形となるものが大半を占め、穴底は皿状となるものが多いが、北東隅柱の1995柱穴のように凹凸を持つ例も観察された。1993・3062柱穴では、直径10cm余りの柱痕を観察することが可能で、それらは周囲の土層より明るい黄灰色を呈した均質

な土層となり、締まりの悪い状態となっていることで識別された。

各柱穴からほとんど遺物は出土しなかったが、その中より黒色土器A類の椀1点を選出し、図102左下に掲載した。1994柱穴掘方から出土し、高台附近のみが遺存する断片的な資料ではあるが、形態的特徴やわずかながら観察される調整技法などからみて、10世紀を前後する段階の所産と考えられる。

この土器の年代観に掘方の形状や埋土の特徴などの諸様相を加味して考えた場合、建物の時期は平安時代前期の範疇に納まるものと考えられる。

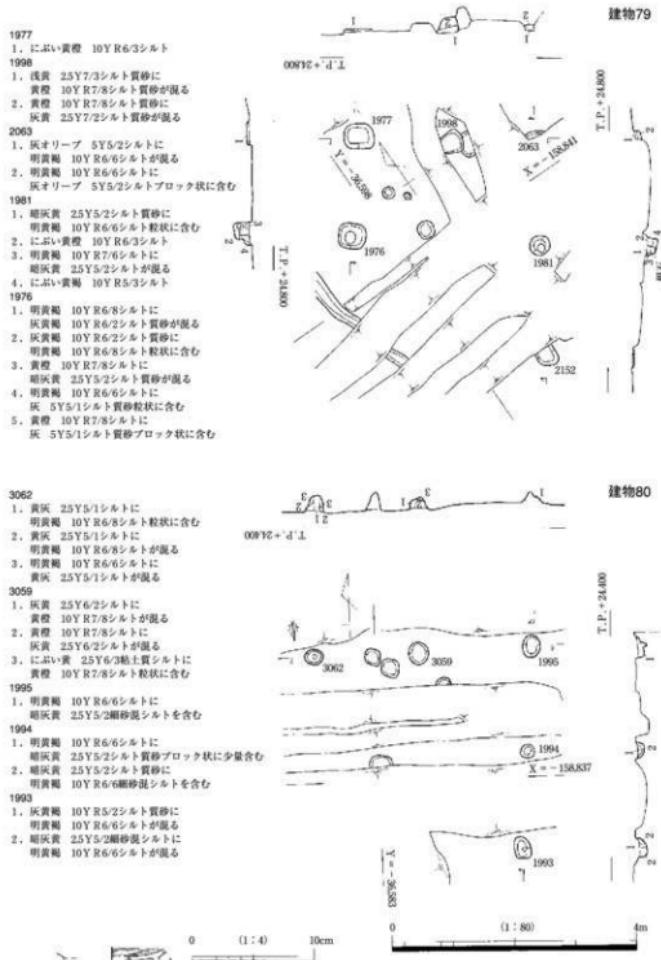
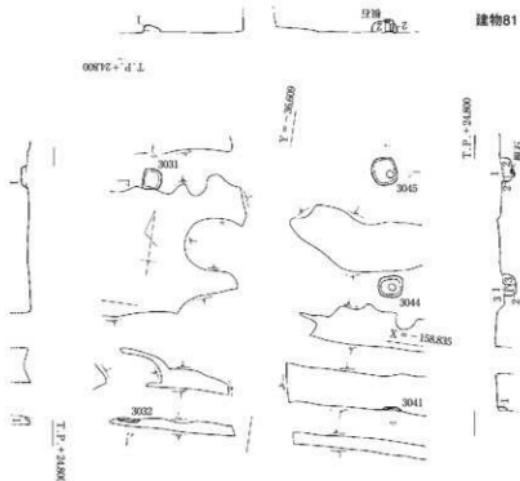


圖102 建物39・80Ⅲ・断面台上に建物30出土遺物実測図



建物82

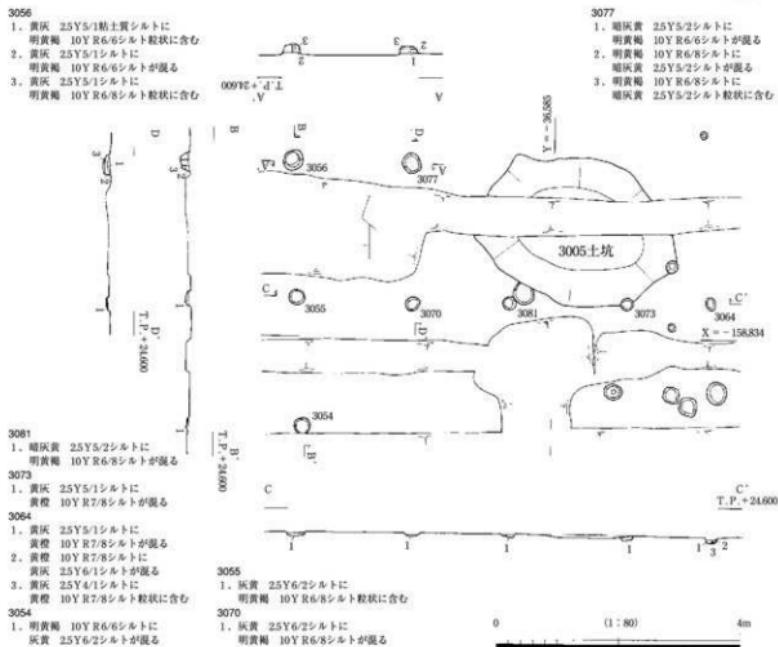


図103 建物81・82平・断面図

建物81（図103上段、図版7-1・図版44-1・46-3、4）

調査区北端部中央際で検出された側柱の掘立柱建物である。建物中央から南部の損壊が激しいため、総体を明確にし難いが、南北に平行して並ぶ柱穴列を確認したことから建物と復原した。このような状況となるため全容を把握し難いが、柱通りから求められる主軸は、N-7°-Wを示す。

したがって、建物規模の確定できる部分も少なく、わずかに、東側柱列2間、南北双方の柱列2間と推定されるのみである。柱間寸法は、東側柱列が北方向より1.85m、2.0mで、西側については不明、南北柱列は2.0m前後を測るものとみられる。遺存する柱穴と、攪乱孔の分布状況から建物の形態と規模を推定した場合、棟の方向は、東西・南北どちらとも解釈可能なため確定することは容易でない。よって、視点を変え、西側と南側に分布する攪乱孔の面積を比較した場合、西側に広がる攪乱孔の面積が、南側のそれと比較して広いにも係わらず、その部分でこの建物に伴う柱穴を確認できなかったため、確率的要素を優先させた場合には、南北棟建物と想定する考えにより有利な条件が整う。しかし、この場合には西側の棟持柱が検出されなければならないが、実際にはこれを確認することができていないという矛盾点も残されている。この問題点に関しては、西側柱列の掘り込みが非常に浅い状態となっている事実を根拠とし、調査以前段階で相当の削平を被ったために、柱穴がすでに滅失したとの解釈や、攪乱孔の位置から想定して、桁行5間の建物であったものが、偶然が重なることによって、西半分すべての柱穴が破壊されたとの解釈法を用意することによって説を成り立たせることもできる。したがって、建物は梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物となる可能性が高いとみなしたい。

掘方の諸相については、すべて遺存するものに限っての所見となるが、平面形は極度に隅の丸くなつた隅丸方形を呈するものが多く、規模には大きな差異は認められない。断面の形状は偏平な「U」字形をなし、穴底は偏平な皿状を呈す。掘削のおよぶ範囲は概して西側柱列側が深い傾向にある。

いくつかの柱穴では、埋土中に直径10cmから15cm前後を測る柱痕が観察され、それらの多くは周囲の土層と比較して、均質で明るい粘性を帯びた土層として識別された。なお、これらの中の、3044柱穴では、図版46-3に示すような状態で柱材の一部が遺存していた。また、3045柱穴では、穴底に円礫を用いて根石としており、その様相を図版46-4に示した。

柱穴のうち数基から若干の遺物が出土したが、固化できるものは存在しなかった。しかし、1994柱穴の掘方より黒色土器の小片が出土していることを確認している。

よって建物の時期は、黒色土器が出土した事実に柱穴の平面形や柱間寸法、そして、柱穴の埋土が黄褐色系を呈することなどの諸相を加味して、平安時代前期に位置づけられるものと考えておきたい。

建物82（図103下段、図版7-1・44-2）

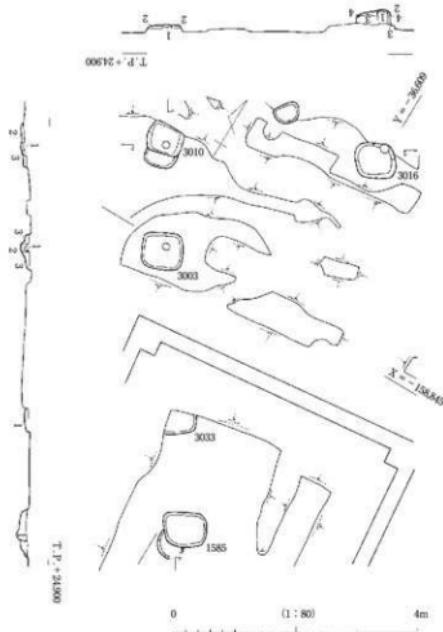
調査区北東隅で検出された総柱の掘立柱建物である。東西方向に棟を通し、主軸はそれに直交する形でN-2°-Wと真北に近い方向を示す。建物の南東側には既述した建物80が重なって検出された。

建物の規模は、3055柱穴を棟持柱とみなすことにより梁行2間（4.4m）、桁行4間（6.9m）と確定され、ここから求められる床面積は約30.4m²（9.2坪）となる。なお、建物の内側には、梁・桁行双方との柱筋を揃えて3070・3080・3073柱穴3基が検出され、これらについては、形態や埋土の様相などの諸相が、側柱のそれと共に通じていることから、この建物の床東となるものと考えられる。柱間寸法は、梁行西側が北方向より2.25m、2.10mで、東側は柱穴未確認のため不明である。桁行は計測できる部分では、北側が西方向より2.0m程度となり、より東については同前の事由により不明、南側については南西隅柱のみを確認したのみのためまったく不明である。参考までに棟筋柱列が示す柱間寸法を記すならば、西

側より 1.9m、1.8m、2.0m、1.4m 前後となる。

掘方の平面形は、多少の相違はあるが基本的には、楕円形を呈する。掘り込みのおよぶ範囲はおむね浅く、これに起因してか、柱痕の確認できたものは僅少であった。

各柱穴からは若干の遺物が出土したが、國化可能なものの時期の特定できるものはなかった。したがって、直接的に造構の時期を判別できないが、造構相互の重複関係から、この建物の構築以前に埋没していた3005土坑より11世紀後葉の黒色土器B類の椀が出土したことや、柱穴の形状、灰色味を帯びたシルト質からなる埋土、そして、柱間寸法が不揃いとなることや、床張を持つことなどの諸様相から、中世の建物となる蓋然性が高いものと類推される。



3010

1. 噴灰質 25Y5/2シルトに

黄褐色 10YR6/6シルトが混る

2. 明黄褐色 10YR6/6シルトに

噴灰質 25Y5/2シルトが混る

3. 噴灰質 25Y5/2シルトに

明黄褐色 10YR6/6シルトブロック状に含む

3016

1. 黄灰 25Y6/1シルトに

黄褐色 10YR6/6シルトブロック状に含む

2. 黄灰 25Y6/1シルト

3. 明黄褐色 10YR6/6シルトブロック状に含む

4. 黄灰 25Y6/1シルトに

明黄褐色 10YR6/6シルトが混る

1585

1. 深灰 25Y7-1/1断面混シルトに

明黄褐色 10YR6/6シルトを含む

3033

1. 明黄褐色 10YR6/6シルトに

灰褐色 25Y6/2シルトが混る

3003

1. 明黄褐色 10YR6/6シルトに

黄褐色 25Y6/1シルトが混る

2. 黄灰 25Y6/1シルトに

に混じる黄褐色 10YR5/4シルトが混る

3. 明黄褐色 10YR6/6シルトに

灰褐色 25Y6/2シルトが混る

図104 建物83平・断面図

建物83(図104、図版7-1・44-3)

調査区北端部の中央からやや東に向かった位置で検出された側柱の掘立柱建物である。棟筋を北西から南東に通し、主軸はその方向でN-32°-Wとなる。

双方の棟持柱を確認できていないため、建物の規模に不確定要素を多分に残すが、梁行2間(3.6m)、桁行3間(6.4m)以上と推定され、現状での床面積約23.0m²(約7.0坪)を測る。柱間寸法は、梁行双方が攪乱孔により不明となり、桁行は西側が北方より1間が1.70m、以下、2.7m、2.0mを測る。東側は、攪乱孔により柱穴が失われているためまったく不明となる。

掘方の平面形は、隅丸方形を標準とし、規模は比較的近似している。断面の形態は隅の丸い逆台形から極めて浅い皿形を呈し、遺存状態によるものか統じて偏平である。穴底は3010柱穴のように平坦とされるものや、1016柱穴のように傾斜を持って掘削されたもの、さらには、1585柱穴や、1003柱穴のように柱当たり部分のみが一段下がるものまで各種形態のものが観察される。なお、最後の2基は、荷重により柱材が沈下して、現状のような形態を成すに至ったと考えられ、多分に後天的な要素が加わった結果を表している可能性が高い。埋土中には直径15cm前後を測る柱痕が観察され、その様相はこれまで述べてきた他の柱穴と同様の態をなしていることで識別することが

可能であった。数基の柱穴から少量の遺物が出土したが、この中に時期の特定や、同化できるものはなかった。また、他の遺構とも重複しておらず、ここから時期を推し量る方策も閉ざされている。しかし、掘方の規模や形状などに注目するならば、方形を基本としていること、埋土の色調が黄褐色系を呈していることから考えた場合には、飛鳥時代となる可能性が高い。さらに、同軸であることを共時性に反映させ得るとするならば、周辺にはこの建物と方向をほぼ同じくして1508溝や3000溝が位置し、前者から飛鳥Ⅲ段階の遺物が出土していることから、これを当該期とみなす傍証とすることもできる。

3026

- 灰 25Y6/1シルトに
明黄褐 25Y6/6細砂混シルト粒状に少量含む
- オリーブ 5G Y6/1灰シルトに
明黄褐 25Y6/6シルト粒状に含む
- 明黄褐 25Y6/6シルトに
灰 25Y6/1シルトが混る

3017

- 灰 10Y6/1シルトに
明黄褐 10Y R6/8シルトが混る
- 灰 10Y6/1シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルト粒状に少量含む
- 灰 25Y6/1シルトに
明黄褐 25Y6/6シルトが混る
- 明黄褐 25Y6/6シルトに
灰 25Y6/1シルトが混る

3011

- 灰 25Y6/1シルトに
明黄褐 25Y7/6細砂混シルト粒状に含む
- 明黄褐 25Y6/6シルトに
灰 25Y6/1シルトが混る

3013

- 灰 10Y6/1シルトに
明黄褐 25Y6/6細砂混シルト粒状に含む
- 明黄褐 25Y6/6シルトに
灰 5Y6/1シルトが混る

3035

- 灰黄 25Y7/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルト粒状に含む
- 灰白 25Y7/1シルトに
黄褐 10Y R7/8シルト粒状に少量含む
- 黄褐 10Y R7/8シルトに
灰黄 25Y6/2シルトが混る
- 灰黄 25Y6/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトブロック状に含む
- 黄褐 25Y6/1シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る

3046

- 灰黄 25Y6/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る
- にじいろ 25Y6/3シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る
- 黄褐 10Y R7/8シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る
- 黄褐 10Y R7/8シルトに
にじいろ 25Y6/3シルトが混る
- 灰黄褐 10Y R7/8シルトに
黄褐 10Y R7/8シルト粒状に含む
- 明灰黄 25Y5/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る

1975

- にじいろ 25Y6/4シルト質砂に
明黄褐 25Y6/8シルトが混る

3039

- 灰黄 25Y7/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る

3037

- 灰黄 25Y7/2シルトに
黄褐 10Y R7/8シルトが混る

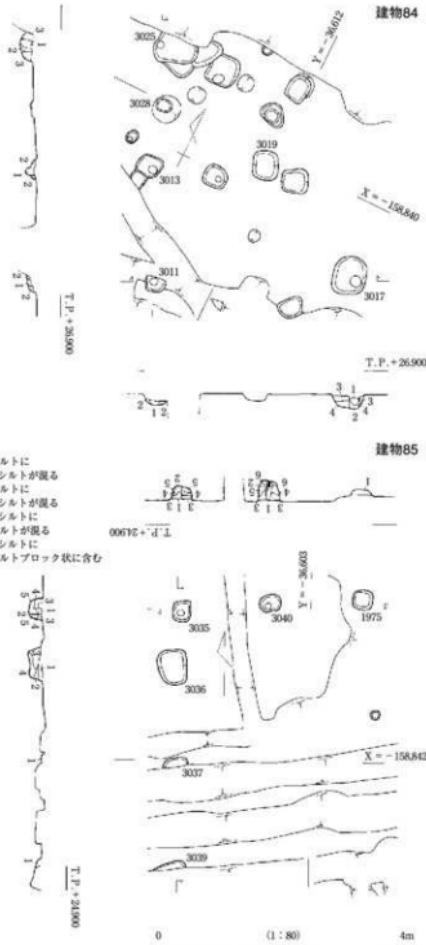


図105 建物84・85平・断面図

建物84（図105上段、図版7-1・45-1）

調査区北部の中央からわずかに東で検出された掘立柱建物である。激しい攪乱のため断片的となるが、散在する柱穴から埋土の近似するものを選出し、そこから直線的に並び、かつ、直角なすものを抽出した結果、3011柱穴を南側隅柱とし、そこから北西と北東にのびる柱列からなる建物と復原した。しかし、建物の諸相を確定することは不可能で、わずかに主軸がN-23°-Wとなることが知れる。

現状で認識できる建物の規模は、北西柱列2間（3.0m）以上、南東柱列2間（3.4m）以上で、構造は側柱建物を想定しているが、二本の柱列が交差する場所に所在する3019柱穴を組み入れるならば、総柱となる可能性も考慮しておかねばならない。

柱間寸法は、北西側柱列が北方向より2.05m、1.85m、南東側柱列が推定2間分を併せて3.35mとなる。なお、北西側柱列の北側には、その中央に柱筋を揃えるようにして3028柱穴が存在しており、これが間柱となる可能性もある。掘方の平面形は確認可能な範囲では不整円形を呈するものが多く、規模については差異が大きい。断面形は偏平な「U」字形となるもので大多数が占められ、穴底は緩やかな円弧をなす例が多い。この中で唯一3013柱穴のみは、上部から柱材に架けられた荷重の影響からか、柱が沈下した状況を留めていた。また、多くの柱穴の埋土中には直径15cmから20cm前後を測る柱痕を観察することができ、その様相は既述してきたものと同様の態をなすものであった。

数基の柱穴から土器の細片が出土したが、これらの中に國化や時期の特定できるものはない。したがって、建物の時期を特定できる直接的根拠に乏しいが、先に述べた建物83や周囲の溝とほぼ同様の方向軸を持つこと、柱穴埋土が黄褐色系の土層を主体としていることから、飛鳥時代の可能性が高い。

建物85（図105下段、図版7-1・46-5、6）

調査区北端部の中央から東側に向かった位置で検出された側柱の掘立柱建物である。攪乱孔により南側を失うが、棟を東西方向に通し、主軸はN-2°-Wと真北に近似した値となることは判明する。

建物の規模は梁行2間（3.0m）、桁行3間（4.3m）以上と考えられる。

柱間寸法は、梁行北側が東より1.55m、1.45mである。桁行は西側が北より0.9m、1.6m、1.7mである。掘方の平面形は不整円形を呈し、断面形は「U」字形をなす。埋土内には直径10cm前後の柱痕が観察される例が多く、3040柱穴では柱根も残存していた。なお、3036柱穴は諸相が他のものと若干相違しているため、この建物に伴うものではない可能性もある。遺物や、重複関係がみられないため建物の時期は不明だが、主軸や、掘方の形状、埋土などの様相から、中世となる可能性が高い。

建物86（図106、図版6-2・45-2・46-7、8）

調査区東半のはば中央で検出された側柱の掘立柱建物である。棟を東西に通し、主軸はそれに直交する形でN-10°-Wとなる。南側約2.5mには棟の方向を同じくして建物70が存在する。

建物の規模は、梁行2間（東側4.25m、西側4.05m）、桁行2間（4.8m）を測り、床面積は約19.9m²（約6.0m）を測る。柱間寸法は、梁行東側が北方より2.05m、2.20m、西側が、2.0mとなる。桁行は南側が東方より1.55m、3.25m、北側が同方向より1.7m、3.1mを測る。桁行柱間寸法がこのように大きく異なる特徴は、ここまで極端ではないが北側約10mで検出された既述の建物71にもみられる。これら2つの建物は、近接した位置関係や互いの棟の方向、そして、柱の配列状況などから密接な関係にあったことが想定され、あるいは、一時期共存していた可能性も考えられる。

掘方の平面形はやや形の崩れた隅丸方形から不整円形をなし、規模には大きな差異はない。断面形は隅丸の矩形から「U」字形を呈し、穴底は平坦なものが多いが、1089柱穴のように傾斜をもつものや、

1841柱穴のように一方に段を設けるものの、柱当たりが窪む1813柱穴や1816柱穴のような例も含まれる。

2基を除く柱穴埋土内には、これまで述べてきたような状態で直径20cm前後の柱痕が観察された。

各柱穴からは少量の遺物が出土し、そのうち図化できた須恵器4点を図106下段に示した。1は1813柱穴掘方より出土した杯H蓋、2は1814柱穴掘方から得られた杯H身、3は1815柱穴掘方出土の杯H身、4は1811柱穴掘方より検出された壺Bの口縁部から体部にかけての破片である。これらのうち、端的に時期を表す蓋杯を中心としてみた場合、1が飛鳥I-2から3段階、2と3が飛鳥I-1段階に相当するとみられ、また、壺もこれらに伴う段階のものとみなして大過なからう。

よって、建物の構築された時期は、飛鳥I-2から3段階を上限とみなすことが妥当となる。

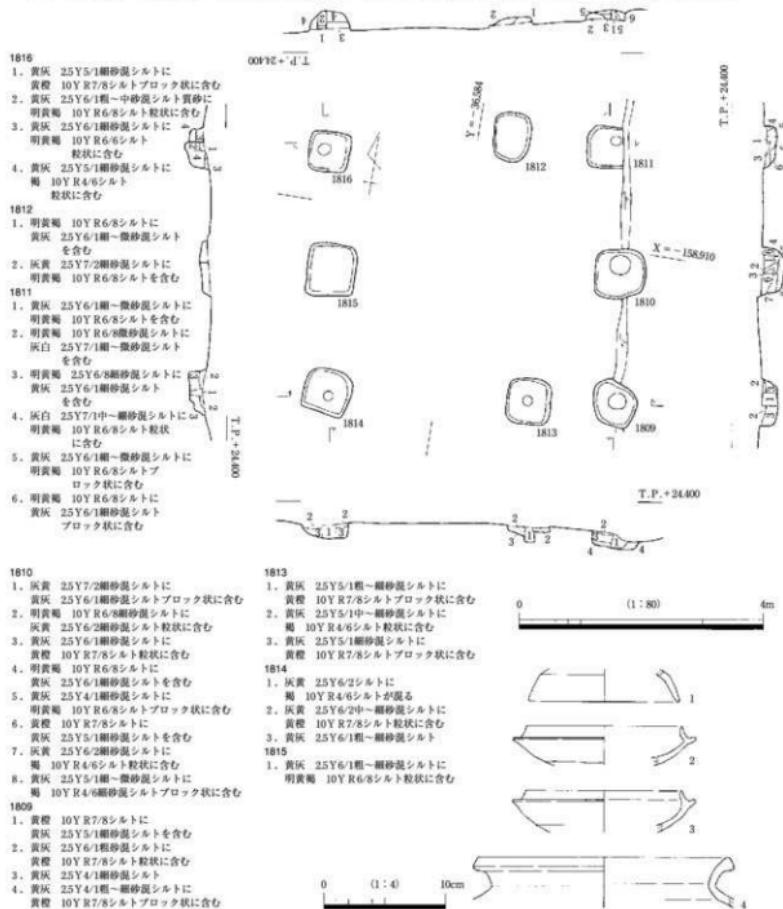
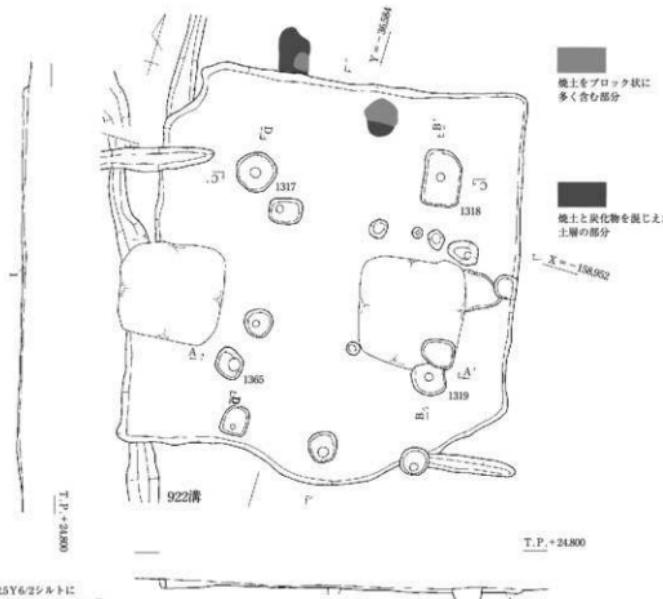
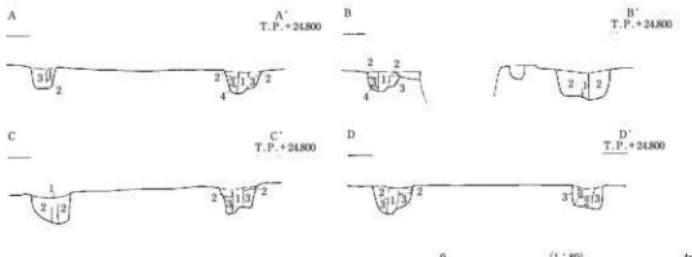


図106 建物66平・断面および出土遺物実測図



埋土

1. 灰黄褐 25YR 6/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4シルトが混る
2. 明黄褐 10YR 6/6シルトが混る



1317

1. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4シルトが混る
 2. にぶい黄褐 10YR 5/4シルトに
　　灰黄褐 10YR 6/2シルト～細砂混シルトを含む
 3. 灰黄褐 10YR 6/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4粗～細砂混シルトを含む
- 1318
1. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4シルトが混る
 2. にぶい黄褐 10YR 5/4シルトに
　　灰黄褐 10YR 6/2粗～細砂混シルトを含む
 3. 灰黄褐 10YR 6/2粗～細砂混シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 4/4シルトを含む
 4. 灰黄褐 10YR 4/4シルトに
　　灰黄褐 10YR 5/2粗～細砂混シルトを含む

1319

1. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4シルトが混む
2. にぶい黄褐 10YR 4/4シルトに
　　灰黄褐 10YR 6/2粗～細砂混シルトを含む
3. 灰黄褐 10YR 6/2粗～細砂混シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 4/4シルトを含む
4. 灰黄褐 10YR 4/4シルトに
　　灰黄褐 10YR 5/2粗～細砂混シルトを含む

1365

1. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/4シルトが混る
2. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　にぶい黄褐 10YR 5/3粗砂混シルトを含む
3. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに
　　黄褐 10YR 5/6粗砂混シルトを含む



図107 1314堅穴建物平・断面および出土遺物実測図

第2項 壁穴建物

今回の調査で検出された壁穴建物は3棟を数える。そのうち2棟の平面形は隅丸方形となり、他の1棟は隅丸長方形を呈していた。そして、後者には作り付け窓が設けられ、それを廃棄する際に破碎した圓足圓面鏡5点と獸脚圓面鏡1点を据え置くという特徴的な出土状況を示していた。

1314壁穴建物（図107、図版47上段）

調査区南半のはば中央部で検出された壁穴建物である。削平の度合いが高いためか、壁の立ち上がりを確認できたのは、最も良好な西側部で約0.1m、その他の部分では数cmしか遺存していなかった。

住居の規模は東西5.9m、南北6.2mで、床面積は約36.0mf（10.9坪）を測る。平面形は基本的には隅丸方形を呈するが、南辺中央には半円形を呈した張り出し部が設けられ、また、東辺は他と比較して短くなっていることから、ゆがんだ四辺形との表現がより実態に近い。

床面には各辺に平行するように主柱穴4基が穿たれ、それらの平面形は、北東側隅柱が隅丸長方形となる以外、不整円形を呈する。断面の形状はゆがんだ「U」字形から隅の丸い逆台形を呈し、穴底は浅い皿状のものと段を設けるものとに類別される。

各柱穴埋土内には、直径15cm前後を測る円筒形を呈した土層が観察され、かつ、それらは、周囲の埋土と比較して、明るく粘性を帯びた均質な状況となっていたことから、これらを柱材の木質が腐朽することなどによって生成された柱痕と解釈した。これらの諸様相は、前項まで述べてきた掘立柱建物のそれと酷似する状態であった。

また、床面北半部では基盤層下位に堆積する砂礫層が露呈し、その直上附近にのみ黄褐色系の粘質を帯びた土層が薄く敷き均らされている状況が観察されたことから、これを貼床と認識した。なお、北辺壁際の2ヶ所では、図107上段に示すような状態で炭・灰混じりの薄層と、焼土層が観察されたため、西側が窓本体、東側が搔き出された炭や灰などの堆積層との解釈が可能となる。ならば、反対側の辺にみられる舌状の張り出しあは、この部分が出入り口の痕跡であることを示唆しているとも考えられる。

出土遺物には図107左下に示す2点の土器がある。住居の遺存状況が不良であったため、いずれも床面に近い部分から出土したことは確実である。このうち、1は須恵器杯口蓋、2は杯部内面に放射状暗文が施された土器器の高杯Cである。これらの遺物は、共に飛鳥I-1段階に位置づけられ、ここから、建物の廃絶した時期の上限を知ることができる。

また、これらの遺物を、重複関係にある408溝や建物41出土土器と比較した場合、建物41の構築された時期は不詳だが、408溝はこの壁穴建物構築段階には廃絶していたことが確実で、そこからTK43型式を中心とする遺物が出土していることから、僅差ではあるが時間的前後関係に齟齬はきたさない。

なお、近接する建物との関係に注目した場合、この壁穴建物を中心として、東西それぞれ6m離れた位置に建物46と建物40が主軸をほぼ揃えるようにして位置し、さらに、北側には建物39が壁穴建物西辺と、東側梁の辺を揃えて主軸を一として並ぶ状況を見て取ることができる。これらについて、上屋構造を推定した場合、壁穴建物と建物39とが2mしか離れておらず、掘立柱建物である建物39の軒の出と、1314壁穴建物の葺下ろしが接する危惧が生じるため、関連性は希薄と考えられ、また、掘立柱建物の時期に注目した場合、建物39がI-4段階、建物40が飛鳥II段階以前、建物46が飛鳥II段階以降で、いずれも壁穴建物より後出する段階に構築されたとみられることから、その同時性は否定されようが、互いの位置関係が偶然の一一致とするにはあまりにも整い過ぎている感は拭きできない。

堅穴建物1502（図108、図版47下段）

調査区東半のはば中央部で検出された堅穴建物である。中央から南に「コ」字形を呈する大きな攢乱孔が存在するため残存状況は非常に悪いが、残存部から判明する諸様相は以下のとおりである。

堅穴建物の平面形は、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺6.2m、短辺5.7mを測り、ここから求められる床面積は約35.3m²（10.7坪）となる。壁の立ち上がりは、削平の度合いが高いため、断面図にも示すように、最も良好な部分でもわずか数cmを測るに過ぎない。特に南辺については、検出段階では、その輪郭を明瞭に観察することができたが、掘削に着手すると直ちに床面が露呈するという状況であった。なお、東西方向の断面位置は、建物の遺存状況に鑑みて、堅穴建物のそれを記録する本来の目的の他に、柵列3との重複関係を明確にするという副次的役割をもたせた位置に設定した。このため、その位置は中心から外れ、図中に示される2基の柱穴は、柵列3と兼用となっている。

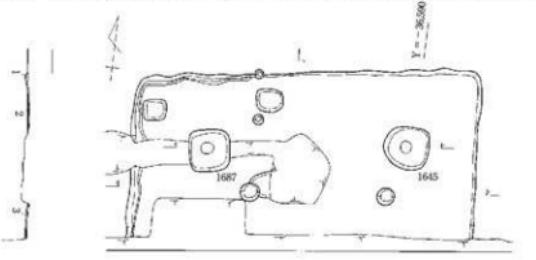
また、掘削に着手するに際しては、西端中央附近に焼土と炭がややまとまって堆積している状況を確

堆土

1. 銀灰 10YR 5/1シルトに
明黄黒 10YR 6/6ルートが混る
2. 銀灰 10YR 5/2ルートに
明黄黒 10YR 6/6ルートが混る
3. 銀灰 10YR 5/2細砂混シルトに
明黄黒 10YR 5/2ルートを含む

1687.

1. 銀灰 10YR 5/2細砂混ルートに
明黄黒 10YR 6/6ルートに含む
2. 銀灰 10YR 5/1細砂混シルトに
ふじ灰 10YR 5/3シルトを含む
3. 銀灰 10YR 5/2細砂混ルートに
明黄黒 10YR 6/6ルートを含む
4. 明黄黒 10YR 6/6細砂混シルト
銀灰 25Y 2/5シルトを含む
5. 明黄黒 10YR 6/6細砂混シルト
オーリープ灰 10Y 6/2シルトを含む
6. オリープ灰 10Y 6/2シルトに
明黄黒 25Y 6/6シルトが混る
7. 明黄黒 25Y 6/6細砂混シルトに
オーリープ灰 10Y 6/2シルトを含む



1645
 1. 噴灰黒 25Y 5/2細紗混シルトに
 明黄褐 10Y R 6/5シリトを含む
 2. 灰黃褐 10Y R 5/2糸中-中紗混シルトに
 明黄褐 10Y R 6/5シリト粒状に含む
 3. 明黄褐 10Y R 6/6粗紗混シルトに
 灰黃褐 10Y R 5/2シリトを含む
 4. 噴灰黒 25Y 5/2細-細紗混シルトに
 明黄褐 10Y R 6/5シリトを含む

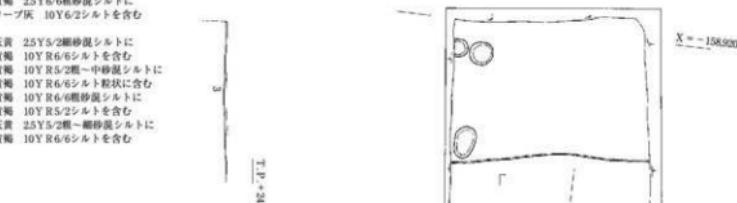


圖108 1502號穴建物平・斷面および出土遺物実測図

認していたため、この附近に竈の存在を想定して調査を進めたが、これを検出するには至らなかった。

さらに、埋土を除去し地山面を露呈させた段階では、北西隅部分の壁際に幅0.05m前後を測る壁溝を検出し、北半部で主柱穴2基を確認した。前者については、他地点でも検出されることが予測されたため壁際を詳細に観察したが、この場所以外では確認できなかった。また、後者については、南半部で一度のそれが検出されるであろう位置を重点的に精査したが、確認することはできなかった。

主柱穴の平面形態は、隅丸方形から不整円形をなし、その大きさはほぼ同様であった。断面形はゆがんだ「U」字形を呈し、穴底は傾斜を持って掘削されている。埋土内には直径15cm前後を測る柱痕が観察され、その状況は従前のものとほぼ同様の態をなしていることで識別が可能であった。また、これらの諸様相は、前述の1314堅穴建物や、掘立柱建物のそれと酷似していることが特徴的であった。

埋土中からは少量の遺物が出土し、そのうち4点の土器を抽出し図108左下に示した。1から3は須恵器の蓋杯の蓋と身で、4は土師器の高杯である。これらは、その形態的特徴や法量などの諸相から、1がMT85型式、2がTK43型式、3がTK43型式から飛鳥I-1段階頃、4が飛鳥I段階の所産と考えられる。このうち最も新しいのは3であるため、建物廃絶時期は当該期に位置づけられよう。

1890堅穴建物（巻頭図版4、図109~112、図版6・48）

調査区東北部のほぼ中央で検出された堅穴建物である。南辺の東寄りには壁面に接するようにして作り付け竈が設けられ、その中から土器と共に6点もの陶器が出土するという特殊な状況を確認した。

堅穴建物の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、北辺の約半分が既存樹木のため調査不可能となり、また、西辺約3分の2が攤乱孔により破壊されているために明確にできないが、現況で南辺7.9m、東辺

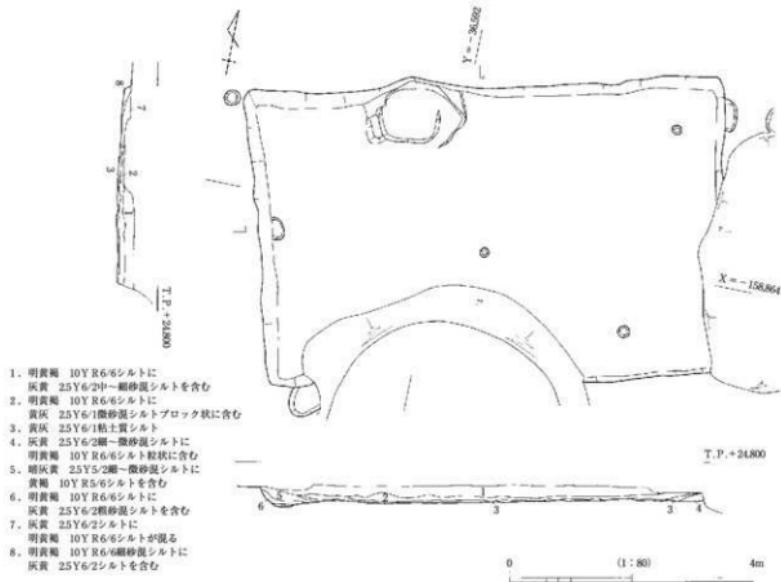


図109 1890堅穴建物平・断面および出土遺物実測図

4.8mを測り、そこから求められる床面積は約34.0 m²（10.3坪）となる。

床面から壁面への立ち上がりは比較的緩やかで、掘り込みは最も深い部分で0.3mを測る。埋土は3層に大別され、これらのうち上位の2層は黄褐色系統のシルトから微砂を中心とする土層、最下層は層厚2cmから3cm程度を測る黄灰色粘土質シルトであった。後者は淘汰の良い均質な土層で、葉理状の薄層も観察されたことから止水堆積と考えられ、このことから、住居は床面が一時水漬かりとなるような環境にさらされて、その後放棄されたものと推定される。この時点での上屋構造を推定する術はないが、あるいは、建物を放棄する直接的要因は、この浸水であったことも考えられる。なお、この層と床面の間には、近接して作り付け窓が設けられているにも係わらず、間層はおろか混濁した土層も堆積していないかった。炭や灰が供給される環境にありながらもこのような状態となる要因としては、構築後時を経ずして廃絶したことや、常時清浄な環境に保たれていたことなどが考えられる。

そして、床面を露呈させた段階で柱穴の確認につとめたが、3基の小ビットが認識されたのみで、主柱穴に相当するような規模の大きい柱穴はまったく検出されなかつた。

このような状況は、一般的な堅穴建物と比較した場合、疑念を抱かざるを得ず、よって、再三にわたり検出を試みて、基層までを削り込んではみたが、ついにその存在を確認することはできなかつた。

よって、この建物の上屋構造は、通常の堅穴建物の上屋構造とは異なっていたものと考えざるを得ず、たとえば、床面に直接柱を置くような構造、あるいは、周堤に主柱穴を設置するような壁立建物などであると想定され、このような構造は、先述した床面の状態や、多数の陶硯の出土とも相まって、一般的な住居とは異なる用途に供されていた可能性を反映しているともみなされよう。

つづいて、室内に設けられた作り付け窓は、図109に示すように、建物東西方向の中心軸から東へ約1.2m向かって場所の壁面に接するような状態で構築されていた。

その認識に至る過程は、埋土を掘削している当初の段階では、南壁に接するようにして盛り上がる幅20cmから40cmを測る偏平な逆「U」字形を呈した盛土層として認識された。そして、その中央には、東西約1.5m、南北約1.0mの範囲にわたり、焼土や炭を混じえた黄褐色系の土層が塊状をなして堆積していた。つづいてこれを除去したところ、多量の炭と灰が混じえた焼土や炭・灰の堆積層が検出され、さらに、これらの堆積層を除去すると、周囲の壁面が赤変・固化した皿状の窓みが検出された。

以上の状況から、煙道を確認することはできなかつたが、皿状の窓みを火處、そこから床面に直接つながる北側を焚口、南面を奥壁、東西両側の盛り上がりを袖の基底部とみなし、作り付け窓との判断を下した。そして、ここから求められる窓の規模は、火處の基底面が幅1.2m、奥行0.9m、袖基底部の遺存幅が、東側0.3m弱、西側0.4m、その左右の最大幅約1.7m、奥行1.0m、高さは最も遺存状況の良い部分で0.1m強を測ることとなる。この状況は、図110下段に示す土層断面図からも追認され、1から8が掛口から袖の上位が崩落した土層、9から13が窓が機能していた時点で堆積した炭や灰層を混じえた焼土層およびその純層、14から17が窓の袖を構築した時点での盛土層である。

なお、検出されなかつた煙道については、明瞭にそれとは確認できないが、作り付け窓の中央部が建物の南壁から突出するように若干広がっていること、その部分の傾斜が緩やかとなっていることから、本来はここから上位にそれが設けられていたものと考えられる。

そして、袖部の構築土を除去し、基盤層を露呈させた段階で、東側に列状をなす4基の小ビット、西側に小ビット1基と細長い窓みが検出された。これらはその位置や土層の堆積状況から推察して、作り付け窓を構築する際に芯材として用いられた木杭が腐朽した痕跡と思われる。

なお、この窓内からは、さきほどから繰り返し記しているように6点もの陶硯が出土した。これらは、その点数、堅穴建物内からの出土、他の遺構・包含層出土資料と接合関係にある資料が多いという3つの点において非常に特異であり、かつ、希有な例として特筆に値する。

これらは、厳密には先述の竈廻絶時に堆積した炭や灰屑の最上位に埋置された図112-17・21や、竈崩落の初期の段階でその間に挟まれるような状態で埋置された16のような2者に分けられる。その状況は、図版48-2から4に示すようなもので、このうち21の圈足円面觀は、下層から竈崩落土内に一部食い入るような状況で出土した。

つづいて、窓内出土陶硯・他の遺構・包含層出土資との接合関係について述べる。まず、21は、脚と陸の破片各1片は、この堅穴建物の埋土内のものだが、その他の大部分の破片は、ここより北東に約12m離れた400溝埋土の上下位層界で出土し、それらを接合した結果、ほぼ完形の状態に復することができた。400溝での出土状況は、図版65-5のようなもので、その地点は図186に示す位置である。

そして、20の脚部片は、北側約1mに平行するように位置する1893溝より出土した陶硯脚部と形状や焼成が酷似しており、直接接合・合致する関係はないが、おそらく同一個体と考えられる。

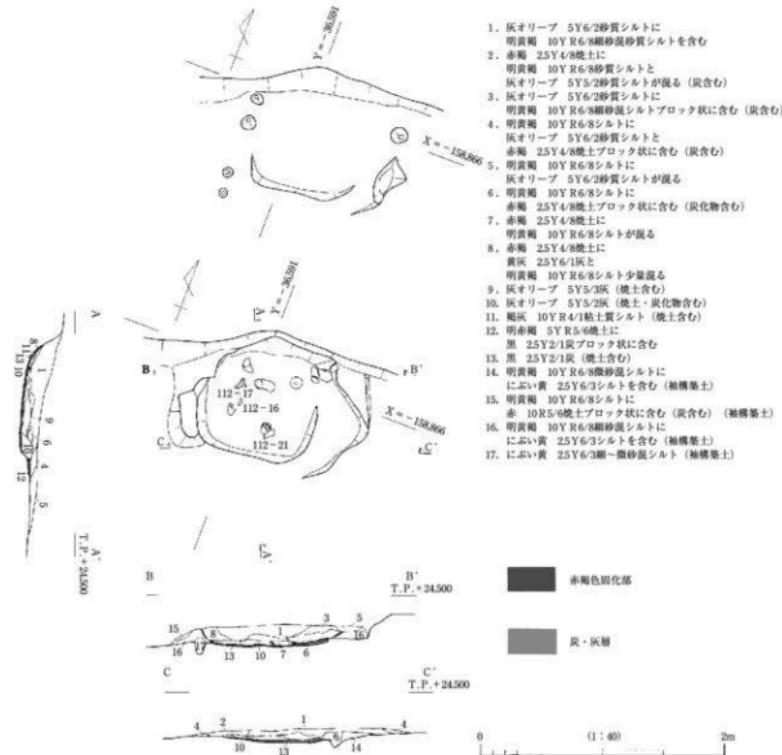


図110 1890豎穴建物竪平・断面図

また、図 112 - 18 の脚部片は、図 274 - 30 に示す 6 N - 8 g 地区包含層第3層出土の破片と、焼成や内外面の色調などの外面的様相はもとより、傾きや、器壁の厚さ、透かしの角に施される面取の様相、脚部上位に施されるヘラケズリ技法など、細部にわたる微妙な部分までが共通している。これら2点の破片は、約20m離れて出土したことや、直接接合するものではないが、同一個体として誤りなかろう。

そのほか、図 112 - 19 に図示した脚部の破片についても、おのおのが合致する関係ではないが、確実に同一個体とみなされる破片がそれぞれ竪内と埋土中から出土している。

周辺の調査で竪穴建物内から陶硯が検出された事例を検索した結果、大阪府枚方市九頭神遺跡、同招堤中町遺跡にあることを知り得た。特に九頭神遺跡では同一住居内から2点の陶硯が出土しており、また、共伴した土器から推定される時期も今回の例と近似していることで刮目される。

なお、同一個体とみられる陶硯が出土したことを根拠として、1893溝をこの竪穴建物に伴う外周溝と

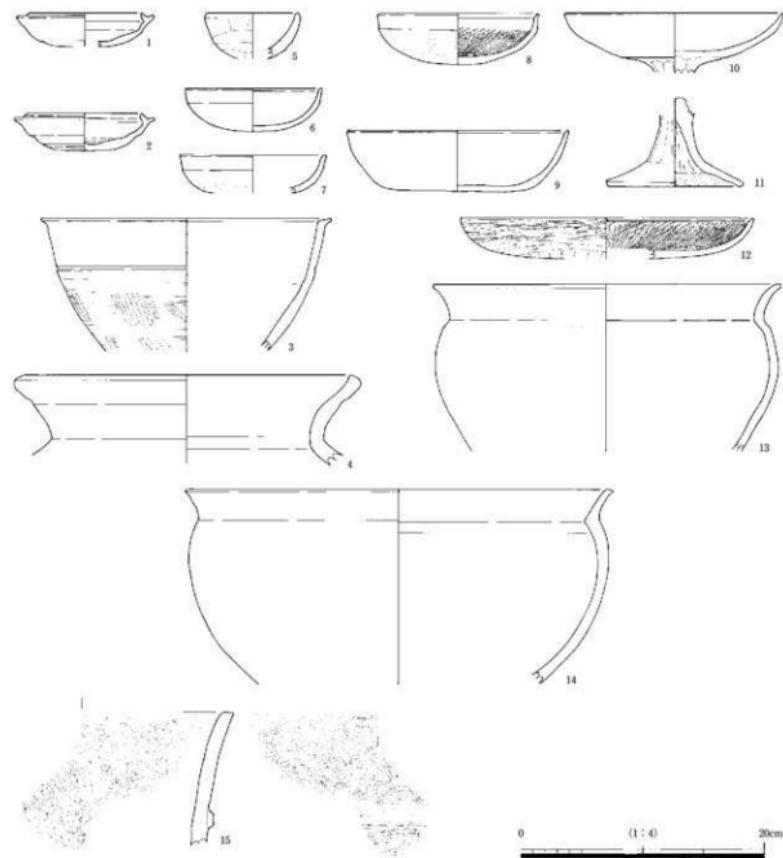


図111 1890竪穴建物出土遺物実測図(1)

仮定した場合、この溝と、想定される竪穴建物上屋の葺下ろしとの間隔が非常に狭く、周堤を設ける余地がない。対案として壁立建物と想定した場合、1893溝は雨落溝に相当することとなり、軒の出を考慮した場合には、むしろこの案の方が自然である。前段にも述べたが、この竪穴建物の上屋構造が、一般的なそれと同様であると理解するのは、この点からしても矛盾が生じよう。

出土した遺物のうち図化できたものには、図 111 および 112 に示す 21 点の土器がある。これらは大きく土器、埴輪、陶硯に分類される。土器類には須恵器と土師器がみられ、前者にはほん全形のうかがえる図 111-1・2 の杯 H 身、杯部下位から脚台部が欠失した 3 の器台、頸部から口縁部にかけての部位が遺存する 4 の甕がみられる。このうち杯 H 身は立ち上がりやその他の全体的な形状、底部の成形法が製作時の回転ヘラ切り放ちのままで整形されていないこと、そして、受部の径が 10cm 程度となる法量的要素から、その系譜の中でも最も新しい段階に近いものと考えられる。他の須恵器も器台がやや古相を示すが、それ以外については蓋杯との大きな時間的齟齬は看取されない。

土師器には図 111-5 のミニチュア杯、6 から 8 の杯 C、同じく 9 の杯 A、10 の高杯 C、11 の高杯脚部、12 の皿 A、13 および 14 の鍋がみられる。このうち杯 C は法量的に 5・6 と 8 の大小 2 形態に分類され、8 の内面には上位にまで達しない範囲で 2 段放射線暗文が施されているが、他の資料については、器面の遺存状況が悪いため観察することができない。11 は脚柱部内面に絞り目、脚裾部に指頭圧痕が観察される。12 は当該遺構出土遺物の中では比較的遺存状況が良好で、内外面には図示するような詳細な調整や細密な 2 段放射線暗文が観察される。

埴輪には図 111-15 に示す円筒埴輪がある。口縁部のみが遺存する破片で、内外面ともナナメハケが用いられ、窯窯焼成であることから 6 世紀代の所産であると考えられる。内面には薄く煤が付着しており、この建物から作り付け甕が検出されたことを併せて勘案するならば、附近的古墳に用いられていた円筒埴輪をこの場所に持ち込み、甕の煙突として再利用していた可能性も考えられよう。これらの遺物のうち、5・8・10 から 12・14 の 6 点は甕内より、それ以外は埋土内から出土したものである。

つづいて陶硯については、図 112-16 が外堤から脚にかけての部位が遺存する圓足円面硯で、甕内から 2 片に別れて出土したが、直接接合する関係にはない。双方とも全体の 10 分の 1 程度が遺存し、外堤

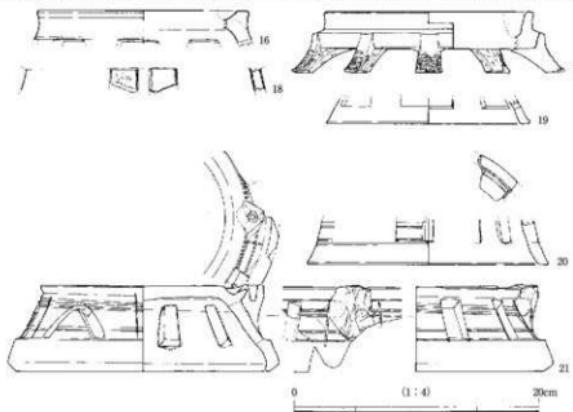


図 112 1890 竪穴建物出土遺物実測図 (2)

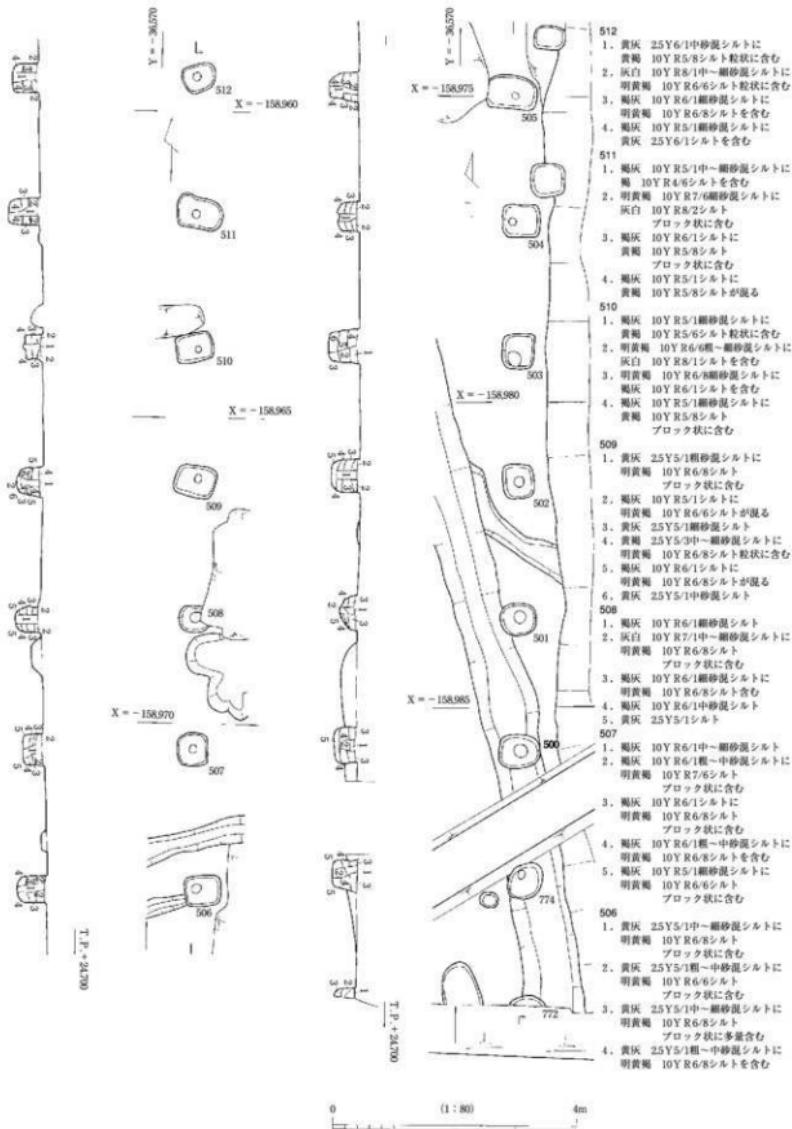
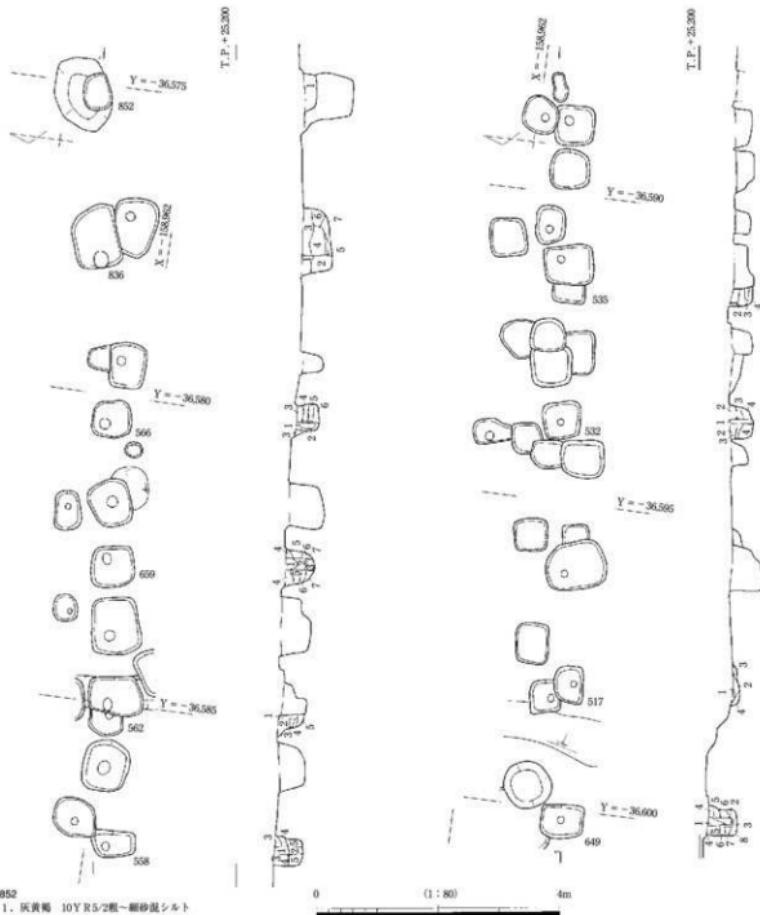


図113 棚列1平・断面図

- 505
 1. 灰黄褐 10YR 4/2中～細砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
 2. 褐灰 10YR 6/1中～細砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
 3. 灰黄褐 10YR 4/2中～細砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
 4. 灰灰黄 25Y 4/2細砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
- 506
 1. 褐灰 10YR 6/1シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
 2. 褐灰 10YR 6/1粗～中砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
 3. 褐灰 10YR 6/1シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートシルトが混る
 4. 褐灰 10YR 6/1細砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
- 507
 1. にじみ黄 25Y 6/3細砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
 2. 灰灰黄 25Y 5/3中砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトブロック状に含む
 3. 灰灰黄 25Y 5/2粗～中砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトブロック状に含む
 4. にじみ黄 25Y 6/3粗～中砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
 5. 灰灰黄 25Y 5/2粗～中砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
 6. 灰灰黄 10YR 5/2細砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートを含む
- 508
 1. 帽灰黄 25Y 5/2細砂混シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/6ルートブロック状に含む
 2. 褐灰 10YR 5/2中～細砂混シルト
 3. 灰灰黄 10YR 5/2の砂混シルトに含む
 4. 帽灰黄 25Y 5/2細砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルト状に含む
 5. 帽灰黄 25Y 5/2シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルト状に含む
- 509
 1. にじみ黄褐 10YR 5/2細砂混シルト
 2. 灰黄褐 10YR 5/2中砂混シルト
 3. 灰灰黄 10YR 5/2シルト
 4. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/8シルトブロック状に含む
 5. 灰黄褐 10YR 4/2シルト
- 510
 1. 灰黄褐 10YR 4/2中～細砂混シルトに含む
 2. 灰黄褐 10YR 4/2中砂混シルトに含む
 3. 灰黄褐 10YR 4/2シルトに含む
 4. 灰黄褐 10YR 5/2シルトに含む
 明黄褐 10YR 6/8シルト状に含む
 5. 灰黄褐 10YR 5/1シルト
- 774
 1. 帽灰黄 25Y 5/2中～細砂混シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルトを含む
 2. 黄灰 25Y 5/1細砂混シルト
 3. 黄褐 10YR 5/8シルト質地に含む
 灰灰黄 25Y 5/2シルト質地に含む
 4. 黄灰 25Y 5/1シルトに含む
 黄褐 10YR 5/8シルト状に含む
 5. 黄灰 25Y 4/1粗～微砂混シルト
- 772
 1. 黄褐 10YR 5/8シルトに含む
 黄灰 25Y 5/1中～細砂混シルトを含む
 2. 褐灰 10YR 5/1細砂混シルト
 3. 褐灰 10YR 5/1中～細砂混シルト
- 部での復原径は16.7cmを測る。成形は輥轆引によるもので、脚部上位には幅広の透かし穴が穿たれている。その内面角には面取りが施されているのを観察できるが、その全体的な形状や器形については不明である。
- 色調は大部分が灰橙色を呈しており、焼成は軟質で、土師器と須恵器の折衷のような態をなし、現状では墨を摩れるような状況ではない。あるいは、軟質焼成の須恵器が二次焼成を受けたならば、このような状態に変質するであろうかとの疑念も生じ、通常、土師器に見られる赤色酸化粒が僅少であることとも、その証左の一つとなろうかとも思慮される。
- 同図-17は獸脚円面鏡である。全体の約6分の1が遺存する破片で、外堤部での直径は、最小とみなした場合16.0m、最大として18.8cmとなるが、ひずみがあるため確定的ではない。したがって、そこから復原される脚の数も8脚から10脚の範囲となる。脚部は鏡部を輥轆引で成形した後、その周囲に貼り付けられており、最終的には外面に静止ナデ、内面にヘラケズリを用いて整形されている。形態は他の類品と比較して下外方へ開く度合いが非常に強いという特徴を持ち、外面下位には、複合鋸歯紋状を呈するまで硬直化した連弁紋が印刻技法で陽出されている。陸は欠損しているが、海から外堤への立ち上がりの度合いは非常に大きい。
- 胎土には1mm以下の長石、石英が含まれ、表面の一部には黒色の吹き出し釉や灰被りが観察される。焼成はすこぶる堅緻で硬質である。
- 同じく18は縦長の長方形透かしを持つ圈足円面鏡である。調整などの詳細は出土状況で触れたとおりで、透かしの内外面両角には細い面取が行われる。焼成は堅緻で、色調その他は通常の須恵器と違う部分はない。
- そして、19は横長の長方形透かしを持つ圈足円面鏡である。輥轆引により成形されてはいるが、焼成はまったく土師器のそれで、前掲の16のように生焼けの須恵器が二次焼成を受けたような様相も看取されない。
- つづく20も縦長の長方形透かしを持つ圈足円面鏡である。成形は輥轆引で、透かしの内面角には面取りが施されている。焼成は19と同様に土師質とされている。なお、1893溝から出土した破片は、赤変したり煤が付着したり黒化した部分が観察されることから、被熱したと考えられる。
- 6点目の21は、先述のような検出状況のもと、ほぼ旧状に復するまで破片が揃った圈足円面鏡である。焼成はやや甘く、法量は陸部の直径12.7cm、外堤径16.7cm、脚径20.7cm、器高6.9cmを測る。陸中央部の研面は使用により磨耗し、滑沢を帯びているが、墨痕は確認できない。
- この陶鏡の大きな特徴は、脚部上位から外堤にかけての部分に筆立を付随させていることである。上面からみたこの部分は三角形状を呈し、そのほぼ中央には現状で直径0.8cm、深さ1.3cmを測る円孔を焼成前に穿つ。
- 脚部には縦位の長方形と、先端の丸い逆「V」字形の透かし、そして、縦位の線刻を繰り返し施し、その配列は筆立てを中心として長方形透かし



852. 1. 黄黄褐 10Y R5/2粗一細砂混シルト

836

1. に bei 黄褐 10Y R4/3粗一細砂混シルト

2. 黄、灰 5Y5/1細一細砂混シルトに

黄褐 10Y R5/3シルトを含む

3. 布状灰 25Y5/2粗一細砂混シルトに

黄褐 10Y R5/3シルトを含む

4. 黄灰 25Y6/1シルトに

1. に bei 黄褐 10Y R6/4粗一細砂混シルト

を含む

5. 黑 30Y R17/1シルトに

黄褐 25Y5/1シルトが混る

6. 灰黄褐 10Y R4/2シルトに

黄褐 10Y R5/8シルトが混る

7. 布状灰 25Y5/2粗一中砂混シルト

532

1. 黄灰 25Y6/2シルト

2. に bei 黄 25Y6/3シルト質砂

3. 水オリーブ 5Y5/2シルト

4. 黄褐 25Y5/3シルト

566 1. 黄灰 25Y5/1中砂混シルト

2. 灰 10Y R4/4シルトに

明褐 75Y R5/8シルトが混る

3. 黄黄褐 10Y R5/2粗一中砂混シルト

4. に bei 黄褐 10Y R4/4細砂混シルト

5. 黄黄褐 10Y R4/2細砂混シルト

6. 灰褐 10Y R4/1シルトに

明黄褐 10Y R6/6細砂混シルトを含む

659 1. に bei 黄褐 10Y R5/4細砂混シルト

2. 黄黄褐 10Y R5/2シルト

3. に bei 黄褐 10Y R4/3シルト

4. 黄褐 25Y5/4シルトに

明黄褐 25Y6/6シルトが混る

5. 布状灰 25Y5/2中砂混シルト

6. 黄灰 25Y5/3シルト

7. に bei 黄褐 10Y R4/3シルト質砂

562 1. 灰褐 10Y R6/1シルト質砂

2. に bei 黄 25Y6/3シルト

3. 黄褐 25Y5/4シルト

4. 黄黄褐 10Y R4/2シルト

5. 黄灰 25Y6/1シルト質砂

558 1. 黄黄褐 10Y R5/2細砂混シルト

2. に bei 黄 10Y R5/3シルト

3. に bei 黄 25Y6/4シルト

4. 黄黄褐 10Y R5/2細砂混シルト

5. に bei 黄褐 10Y R5/4シルト

649 1. 黄黄褐 10Y R5/2細砂混シルト

2. 明黄褐 10Y R6/6シルトに

黄褐 25Y6/1シルトが混る

3. 黄 25Y2/1シルト

4. に bei 黄褐 10Y R6/3シルト

5. に bei 黄褐 10Y R5/3シルト

6. 明黄褐 10Y R6/6シルト

7. 黄褐 25Y5/2シルト

8. 明黄褐 10Y R6/6シルトに

黄褐 25Y6/1シルトが混る

図114 棚列2平・断面図

2ヶ所と線刻を施し、そこから先は逆「V」字形の透かし3ヶ所と、縱位の線刻の順となる。

これらの出土遺物から造構の時期を考えた場合、須恵器では杯H身がその最終末に近い諸様相を持つこと、土師器ではC類の中でも大形である杯CⅢや皿Aに、2段放射線暗文が残るなど古い様相が看取される一方、杯Aの器形が平坦な底部から大きく屈曲して口縁部へと至るという新しい傾向を持つことなどから勘案して、飛鳥Ⅲ

段階に位置づけられよう。これを具体的な年代に置換するならば、7世紀第4四半期でも古い段階に相当させ得るものと考えられ、この時間的位置づけは、21のような筆立付き円面鏡が、中国大陆では7世紀第3四半期から出現するという従来の研究成果とも呼応する。

また、獸脚円面鏡は、大阪府堺市陶器南遺跡、平尾遺跡、そして、奈良県飛鳥宮跡、石神遺跡、飛鳥池遺跡、藤原宮、遠くは、福岡県太宰府周辺など、当時の宮都の中枢部やそれに関連する官衙的施設での出土例が大多数を占め、出土点数も20点前後と、ごく限られている。この中には、韓半島の百濟や新羅から将来された製品も多く、また、当時の陶鏡の中でも最上位の格式を持つとされている。

このような陶鏡が、今回のはざみ山遺跡の調査で、しかも、堅穴建物から出土したということは、当遺跡の評価とも深く関係し、かつ、問題を提起する資料として非常に重要な意味合いを持つ。

第3項 櫛列

今回の調査で検出された櫛列は4条を数える。このうち2条は飛鳥時代のもの、他の2条は中世段階に属するものと考えられる。以下、造構の様相について述べる。

櫛列1（図113、図版49上・中段）

調査区南東部で柱穴15基が南北方向に一直線に並んで検出されたため、これを一本柱柱列からなる板塀と認識した。なお、南側はさらに調査区外へとのびており、全容を把握することはできなかった。

主軸はN-2°-Wを示す。この軸は西側約25mに位置する建物29と同一で、さらに、その西側には飛鳥時代建物の中では床面積が最も大きく、廂を具えた建物25ともほぼ同じである。そして、東側にはこれに接するようにして400溝が流下しているが、柱穴掘方と溝の肩が重複する部分は見られない。

掘方の形状は、隅丸方形を基本とし、一部不整円形のものも含まれる。南端の柱穴は一部を確認したのみで不明だが、その他すべての柱穴では、埋土中に周囲の埋土とは異なり、明るい色調を呈し、均質でシルト質を帯びた直径15cm前後を測る円筒形状の土層が観察されたためこれを柱痕と認識した。

柱間寸法は、北側よりそれぞれ2.30m、2.20m、2.10m、2.25m、2.15m、2.30m、2.30m、2.05m、2.25m、2.05m、2.25m、2.20m、2.05mとなり、最小から最大までの差は0.25mを測る。

出土した遺物には、図115-1と2に示す土師器杯Gと甕Aがある。それぞれ511・502柱穴の掘方から出土したもので、細片のため詳細は不明ながら、飛鳥時代前半に属するものとみなされよう。

なお、402溝との重複関係を検討した結果、溝に後出することが明らかとなり、さらに、溝と櫛列出土土の土器を比較したところ、溝に後出するものであったことから時期的な逆転も生じない。

また、先述したとおり、方向軸の関係から、建物25・29や400溝との関連性が高い造構であることは確実で、東側からの進入と視線を遮蔽する目的で設置された塀である可能性が高い。

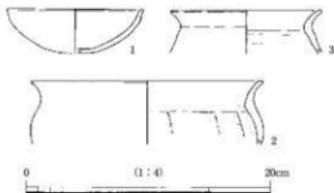
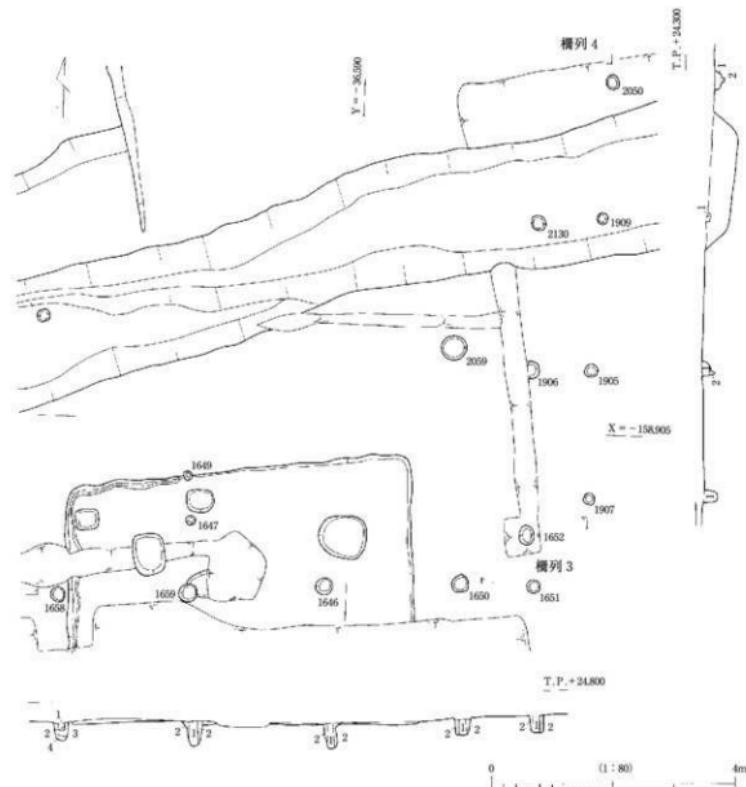


図115 櫛列1・2出土遺物実測図

柵列2 (図114・115、図版49-4・5)

調査区南部で検出された東西方向の一本柱柱列である。11基の柱穴から構成され、西部については削平の度合いが高いため、より西に延びていた可能性も考えられる。

主軸はN-12°-Wを示す。附近にはほぼ同軸を持つ東西棟の建物4棟が密集し、かつ、柱通りが悪いことや柱間寸法に差異が大きいため組み合う柱穴を選出するのに苦慮した。しかし、実際に互いの柱



柵列3

- 1658
 - 1. 灰灰 25Y6/2細砂混シルト
 - 2. 灰灰 25Y6/シルト
 - 3. 黄褐 25Y5/シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトが混る
 - 4. 明黄褐 10Y R6/6シルトに
黄褐 25Y5/シルトが混る
- 1659
 - 1. 細灰黄 25Y4/2細砂混シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルト粒状に含む
 - 2. 細灰黄 25Y4/2粗~中砂混シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトを含む

1646

- 1. 灰灰 25Y5/1中~細砂混シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトブロック状に含む
- 2. 灰灰 25Y5/1シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトが混る
- 1650
 - 1. 灰灰 25Y5/1中~細砂混シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトブロック状に含む
 - 2. 灰灰 25Y5/1中砂混シルト
- 1651
 - 1. 灰灰 25Y5/1シルト質
 - 2. 灰灰 25Y5/1シルトに
明黄褐 10Y R6/6シルトが混る

柵列4

- 1907
 - 1. 灰灰 25Y6/2細質シルト
- 1905
 - 1. 灰黄褐 10Y R5/2細質シルトに
黄褐 10Y R5/6シルトが混る
 - 2. 黄灰褐 10Y R5/2細質シルトに
にぶい黄褐 10Y R4/3シルトが混る
- 1909
 - 1. 灰灰 25Y6/2細質シルト
- 2050
 - 1. 灰灰 25Y6/2細質シルト
 - 2. 黄灰褐 10Y R5/2細質シルトに
にぶい黄褐 10Y R4/3シルトが混る

図116 柵列3・4平・断面図

穴が重複しているのは建物60のみで、その先後関係は直接、間接含めて建物31や32、建物33、この柵列2、建物60、建物34の順となることを確認している。

柱間寸法は、東より2.6m、2.65m、2.20m、2.55m、2.15m、2.10m、2.6m、2.4m、2.45m、2.25mとなり、その差は0.5mにおよぶ。

掘方の形状は、隅丸方形を基本としているようではあるが、おのとのに差異がみられ、その規模にも大小がある。埋土のほぼ中央附近には、直径0.1mから0.15m前後を測る明るい色調を帯び、均質で粘性の高い土層が堆積している状況を確認できる柱穴が多く、これらを柱痕と認識した。

この柵列の時期を直接知ることのできる資料は、558柱穴掘方から出土した図115-3に示す壺Aのみだが、細片のため漠然と飛鳥時代と捉えられるのみである。しかし、掘立柱建物との重複関係からみた場合、建物33が飛鳥Ⅲ段階であるため、これ以降に位置づけることが可能となる。

一方、目を転じて同軸を持つ周辺の掘立柱建物に注目するならば、北側約4.5mの位置に建物40、南側には同じ距離を隔てて建物31が存在する。建物40は先述のとおり総柱建物で、以北には同じ構造を持つ建物群が展開する。これに対し、南側にはこの建物28など数棟の側柱建物が検出されているため、柵列2は、これら倉庫群と住居群とを区画する目的で設置された可能性が浮上する。これらの建物出土土器と柵列出土土器の時期を比較した場合、その関係は逆転することとなるが、柱穴の重複関係を見誤った可能性を含め、建物の方向軸から提起される解釈法の一つとして書き留めておきたい。

柵列3（図116）

調査区中央から東に向かった位置で検出された。5基の柱穴が東西方向にはば一列に並び、主軸はN-4°-Wを示す。

柱穴の規模は直径0.2m内外で、形態は不整円形を呈する。深さは0.2m強から0.4m程度のものまでさまざまである。すべての柱穴では、周囲の埋土より均質で明るい色調を帯びた直径0.1m程度を測る円筒形状の土層が観察され、これを柱痕と認識して記録に止めた。柱間寸法は東側より1.25m、2.20m、2.25m、2.15mを測り、東側一間分のみ間隔が狭くなる。

出土遺物がないため柵列の時期は明確にはできないが、飛鳥時代の1502号窓建物の埋土上から掘り込まれていること、掘方の形状や規模、埋土が明るい黄灰から黄褐色系の色調を帯びていることなどから、中世段階に位置づけて大過ないと考えられる。

柵列4（図116）

柵列2北東部においてこれに直交するような形で検出された。4基の柱穴が南北方向に並び、その主軸はN-1°-Eを示す。

柱穴の平面形はほぼ円形に近く、規模は直径0.15mから0.2mを測り、深さは0.1mから0.2mとなる。柱間寸法は、北より2.25m、2.55m、2.05mと不揃いである。

出土遺物がないため時期は不明だが、古墳時代後期末葉の溝を掘り込むことや、柵列3との位置関係、そして、埋土や規模がそれと近似していることから、これとほぼ同時期とみなされる。

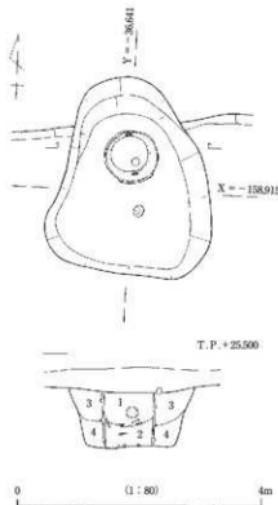


図117 26戸平・断面図

第4項 井戸

今回の調査区から検出された井戸は総数13基を数える。これらの時期は古墳時代中期から中世段階にまでおよび、その時期は今回の調査区内で検出された遺構の存続期間とほぼ合致する。

これらは素掘りのものと、枠を設置するものに大別され、後者には枠材に埴輪や、船材などの木製品を再利用した飛鳥時代の例が存在することで注目される。このほか、周辺では検出例の少ない古墳時代中期の素掘り井戸や、当地域通有の曲物を転用した枠を設置する中世のものが検出された。

以下、検出された各井戸の様相について、その様相と出土遺物を中心として述べることとした。

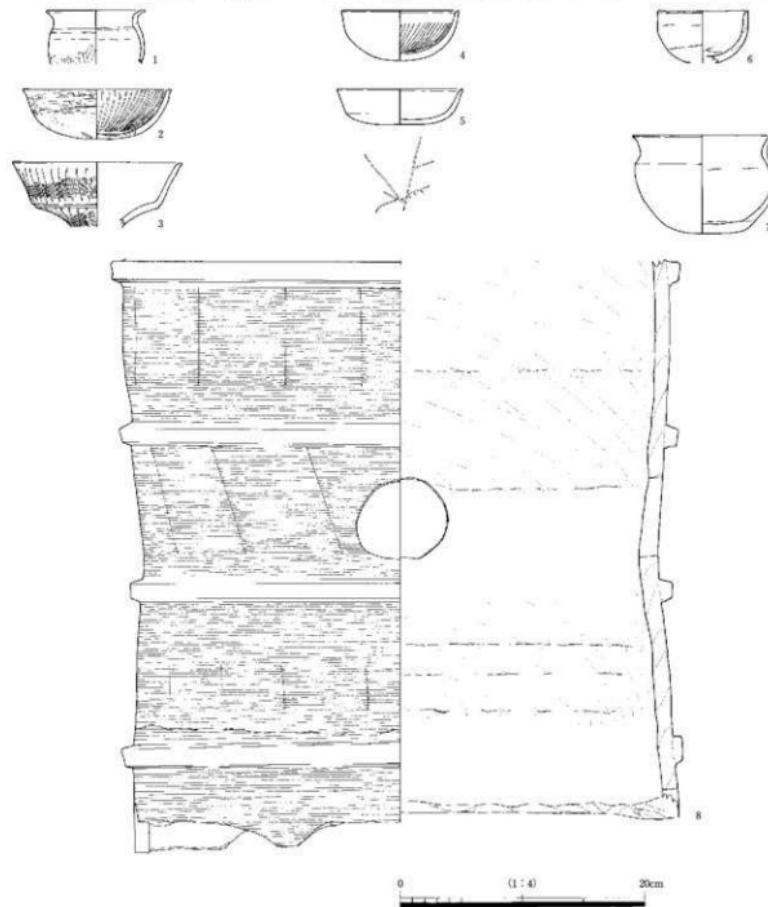


図118 26井戸出土遺物実測図

26井戸（図117・118、図版50、図版87-10）

調査区中央部から南西に向かった位置で検出された。円筒埴輪を再利用して枠材とする構造を持つ。これを確認するに至った状況は、1溝埋土掘削最終段階に溝底から直立した状態で円筒埴輪上端部の輪郭が露呈し始め、その周囲を精査した結果、溝底から肩にかけて掘方を確認したというものである。

掘方の平面形は、東西3.2m、南北2.8mの隅の丸い三角形状を呈し、深さは1.0mを測る。断面形は隅の丸い逆台形様を呈し、穴底は平らに掘削されているが、湧水層までは達していない。

掘方の中心から北方によった位置には、下位を打ち欠いた円筒埴輪1基を据えて井戸枠としていた。これより上位については、1溝による削平のため不明であるが、削平の度合いや、枠内埋土に別個体の円筒埴輪片が含まれていなかったことから、本来この円筒埴輪1基のみであった可能性が高い。なお、透かし穴については、枠外から閉塞されていたような痕跡は確認できなかった。

枠から南に向かった掘方中央のほぼ底部に近い部分からは、図117上段や、図版50-5のように伏せられた状態で土師器杯Cが出土した。これは完形の状態を保ち、底部に焼成後の穿孔が行われていることから、井戸を構築する際の儀礼に用いられた供獻土器とみなされる。

枠の内外からは土師器や須恵器などが出土し、このうち、図118に土器類8点を図化した。このうち1から3は掘方から、4から7は枠内から出土したものである。

1と2は土師器で、それぞれ小形の甕Aと杯C、3は須恵器の腹口縁部片である。うち、2の杯Cは先述した供獻土器で、底部外面には細長い工具を用い、外面から加圧することによって図版87-10のような穿孔が行われている。この土器については、器形や外面にヘラミガキが施されていることから、飛鳥I-3段階に位置づけられよう。また、甕も、当該期とみなしても大過ないものと考えられる。

つづく4から6も土師器で、4の杯Cは井戸底に接して裏向の状態で出土し、2の杯Cは図117の土層断面の1や、図版50-3に示すような横位の状態で出土した。そして、6はミニチュアの杯、7は小形の甕Aである。これららの土器のうち、4の杯は、形態や法量から判断して飛鳥I-3段階のものと考えられ、他についてもこの段階の資料として差し支えないものとみなされる。

以上から、井戸の開鑿から廃絶に至るまでの時間幅は、飛鳥I-3段階の中に納まると考えたい。

つづいて、8は枠材に転用されていた円筒埴輪である、最大径45cm、現存高50cm弱を測る。外面の二次調整には原体幅の広いB種ヨコハケが用いられ、内面には斜め方向の連続したユビオサエが観察される。焼成は無黒斑の窯窓焼成である。近隣で同様の特徴を持つ円筒埴輪を使用している古墳には、南東500mに所在する譽田御廟山古墳外堤や、南約700mに所在するはさみ山古墳などがある。

また、本調査地周辺で、今回と同様の構造を持つ井戸を検出した例には、藤井寺市教育委員会によつて行われたはさみ山古墳南側隣接地での発掘調査がある。

142井戸（巻頭図版3上段、図119~123、図版51・52-1）

調査区北東部で検出された。準構造船を解体して枠材に再利用するという特殊な構造を持つ。

掘方の平面形は東西2.2m、南北2.5mを測り、南側には舌状の張り出しがみられる。この張り出しについては、掘方の掘削や井戸枠設置時の足掛かりとして設けられたものと考えられる。

掘削深度は3.5mで、穴底は湧水層である段丘疊層を掘り抜いて一部その下位に堆積する非常に堅く締まった青灰色シルトにまで達している。そして、枠の周囲のみは強度のグライ化が進行していた。

断面の形状は、上端附近で急激に大きく広がる漏斗状を呈し、下半の中位も一段窄められるような状態に掘削されている。穴底附近的直径は約1.0mで、枠材を設置した時点では両側に0.1m程度の僅かな

隙間しかないと無駄のない状態に掘削されていた。枠の構造は大きく二つに分けられる。その状況は図119に図示するようなもので、上位は板材を長方形に組み合わせ、下位は切断した準構造船の船底部の内側を向かい合わせにしていた。上位の枠材は、長短2種類の板材それぞれ2点ずつを互いの小口が接するような状態で組み合わせ、内法の寸法で長辺80cm強、短辺50cm強を測る長方形の枠を形作っていた。遺存していたのは一段分のみであったが、検出時点では上面からすでに方形を呈した枠材の痕跡が認識されたことや、断面図の8から12に示すように、木質が腐朽して泥漬けた土層が観察されたことから、このような形状を呈する枠が、さらに3段以上積み重ねられていたことがうかがえる。下位の

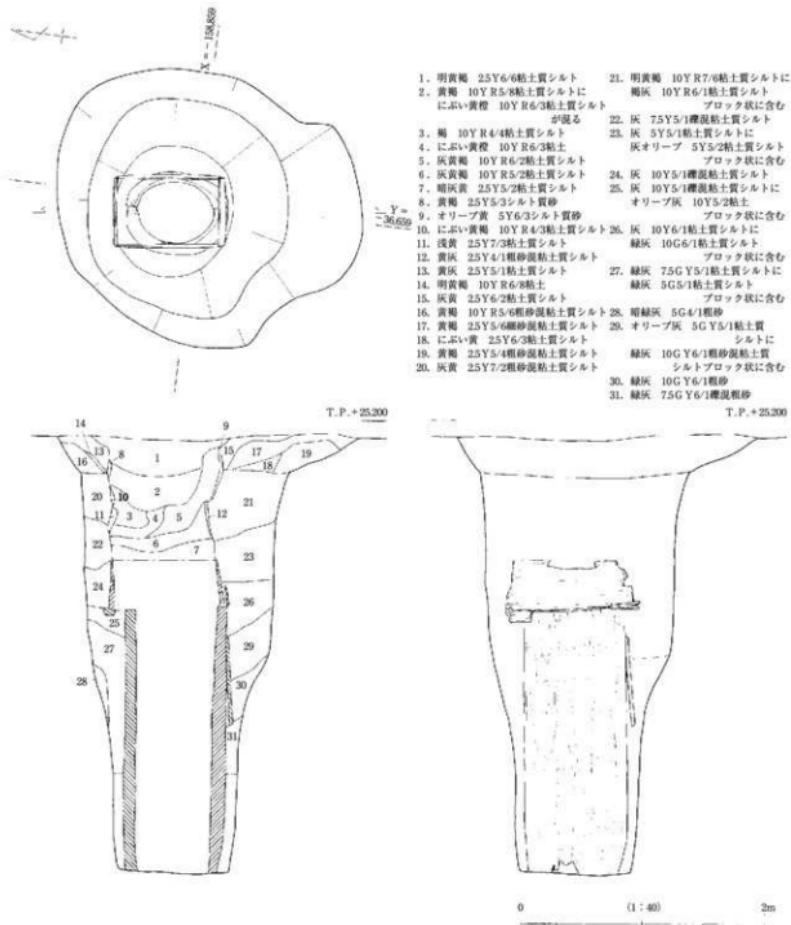


図119 142井戸平・断面図

枠材は、準構造船を再利用したもので、舳先と船尾を切断した半円形を呈する船底部を2.1mに分割し、互いの上端面を合わせるように組み合わせて空隙を形成していた。上面からみた形状は杏仁形を呈し、双方が接合する上端面は丁寧に研されている。これは、合致させた時点で互いの結合面に隙間が生じることを避けるためと考えられる。また、研は側面の一部にもおよび、この加工により互いの接する面を相似形としていた。これについては、断面図の枠材右側に示すように、枠の接合部からこれに接して数点の板材が出土したことから、外面から板材をあてがい、枠がずれないように蔓などで縛る際の密着度を高めるための所作であったとも考えられ、また、こうすることによって、結合面から泥土の流入を防ぐことを目的としたと考えられる。なお、掘方と枠材の隙間が非常に少ないとから、この所作は地上で行われ、そのまま枠を掘方内に落とし込むようにして設置したと考えられる。

出土遺物には上記の枠材として使用された板材や準構造船のほか少量の土器がみられる。このうち、枠内出土土器については、写真撮影後に枠が崩落したため、正確な出土層準を確認できなかった。

図120に示す板材は、スギの柾目材を加工したもので、1から順に南、西、北、東方向に設置されていた。長さは90cmのものと60cmのものとに分けられ、遺存する部位に節は観察されない。幅は最も残りの良いもので40cmを測るが、すべて上端部が腐朽しているため旧状は知れない。

つづいて、図121は、枠材下位の東側に用いられていた準構造船の船底部である。まったく節のないスギの一木材の木裏を削り抜いて製作され、現状での長さ210cm弱、幅85cm、最大厚10cm余を測り、体部両端は斧と鋸により切断されている。両側には舷側板を結束するため長さ6cm、幅3cm、深さ8cm以上の長方形の穴が穿たれ、左側には舷側板との結束を高めるために設けられた段状の加工が一部残存するなど、転用前の各種仕口が痕跡として残存している。図122は上記と対になる西側のもので、木目や大きさ、両側に穿たれる舷側板と固定するための長方形の仕口の形状、木取などの特徴から、東側のものと同一個体と考えられるが、直接接合する関係ではない。ただ一つ異なる点は、下位が細くなっている点であり、この特徴から舳か船尾に近い部位から切断したものと判明する。また、左側に「コ」字形の削り込みを入れ、その外面にこの穴と相似形の段差を設け、さらにこれに向かい合う右側のほぼ同位

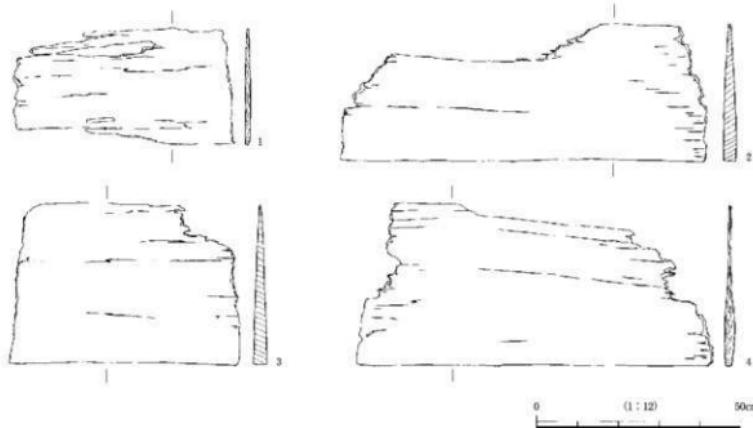


図120 142号戸枠材実測図(1) (上段)

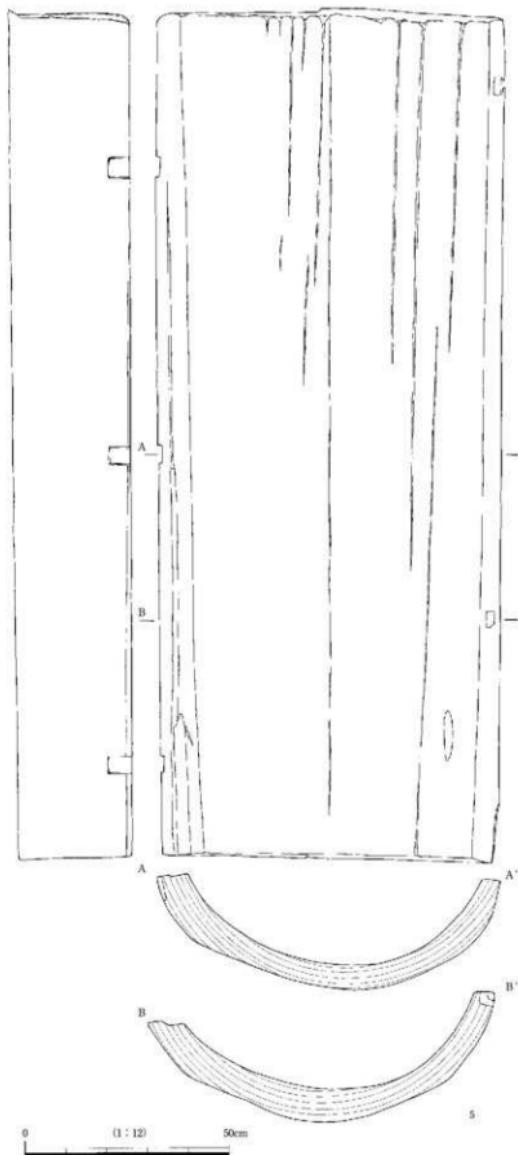


図121 142井戸枠材実測図(2) (下段東側)

置に長方形の孔を穿つ点も先例と相違する。この加工が船として機能していた時点に行われたのではないことはその位置から明白で、廃船後、目渡穴などとして設けられたのである。

また、側面左下位には、幅1.5cm、長さ9.0cmにわたって鉄錆が付着しており、その両端には断面長方形の鉄材が遺存していた。この鉄製品は、形状や、先端部から貫入する亀裂を跨ぐ位置に打設されていることから鎧と考えられる。破損部にこのような補強がみられることから、この船はかなり老朽化していたと思われる。

なお、左側上端面には釘穴状の小穴が3ヵ所観察されるが、その性格は不明である。

つづいて土器類には須恵器と土師器がある。このうち1から12は掘方内埋土より出土した。

1から8は須恵器で、1は杯G蓋、2は杯B蓋、4から6は杯B身、7は甕、8は壺Kである。9から12は土師器で、9は杯C、10は杯B、11は皿A、12は甕Aである。甕の外面調整には、19を除いて成形時のユビオサエのまま仕上げられる河内地域通有の技法が用いられている。

以上の土器は1や9などに古い様相が看取されるが、4や5など大形化した須恵器杯Bが含まれていること、土師器に杯Bがみられることや、頸部の屈曲が明瞭化した12の甕が存在する

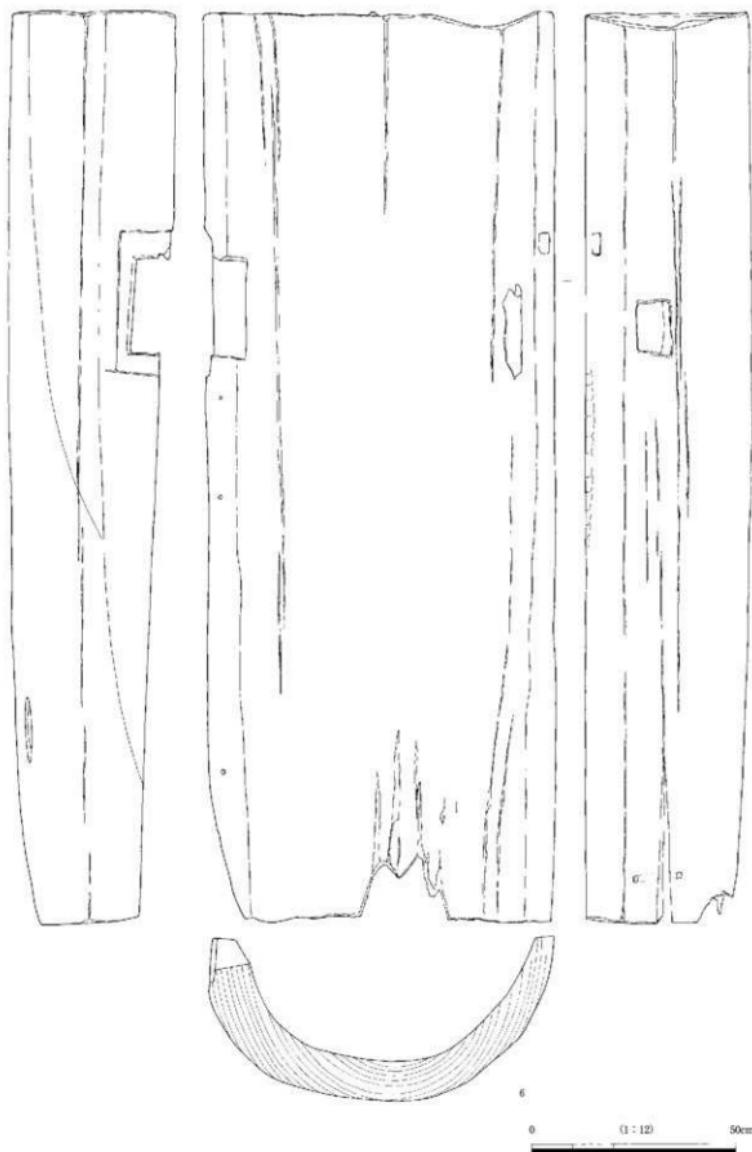


図122 142井戸枠材実測図(3) (下段西側)

ことから飛鳥IVからV段階に位置づけられる。13から25は枠内より出土し、15が須恵器である以外、すべてが土師器である。13と14は杯A、15は杯B蓋、16は皿A、18から25は甕Aで、調整にはおのとの差異はみられる。このうち20と24は完形に復原できることや、底部に焼成後の穿孔が行われていることから、井戸廃棄に伴う供獻土器と考えられる。以上の土器のうち、時期判別可能な資料に13と14の杯Aがあり、その法量や、放射線暗文の様相、口縁部の作出法などの形態的特徴からみて、飛鳥V段階に位置づけられる。したがって、井戸が開鑿されてから後、廃棄に至るまでの期間は比較的短かったものと想定される。なお、近隣で船材を枠に転用した井戸を検出したものとして、当調査区から南西約1km離れた位置で、羽曳野市遺跡調査会によって行われた野々上遺跡での例がある。

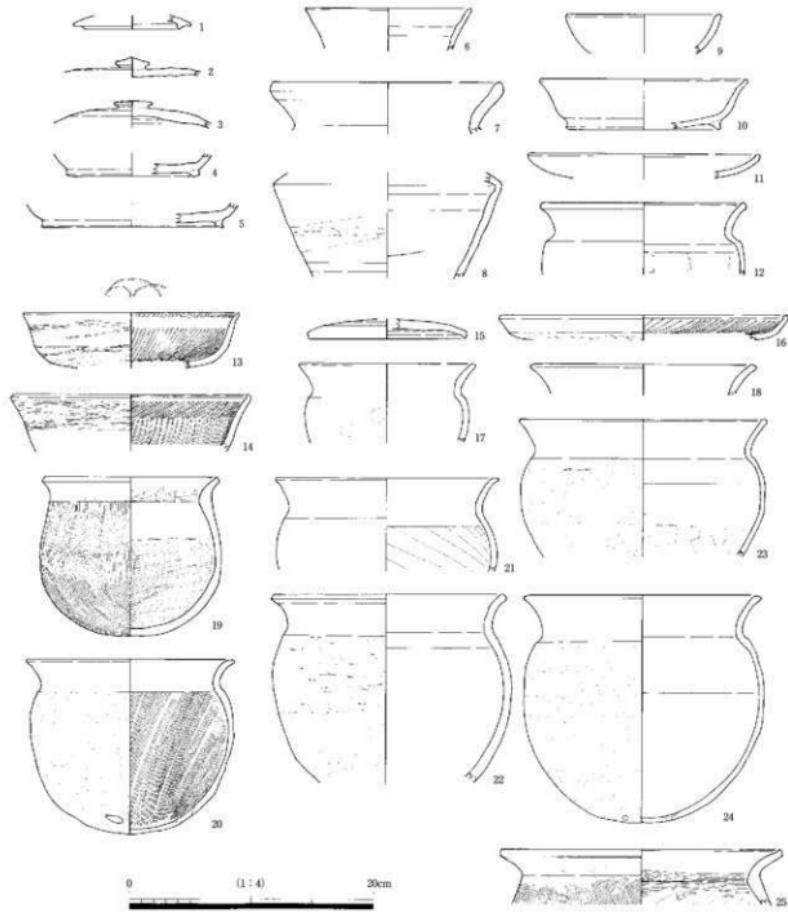


図123 142井戸出土遺物実測図

405 井戸（図124～134、図版52-2・111-3・125-5～7・126～128-1）

調査区南東部の調査区壁際で検出された。東側半分は調査区外の水路下となるため、防災上の理由から、遺構全体の平面形、掘方内すべての遺物の回収、断面図の作成は断念せざるを得なかった。そのため、以下の報告は確認できた範囲内での内容であることをあらかじめ断っておく。

掘方の規模は、東西0.7m以上、南北2.1mを測り、平面の形態は不整な半円形を呈する。掘削深度は3.9mに達するが、段丘疊層を掘り抜くまでには至っていない。断面図は、上面から1.6mまでが北側のやや広くなる漏斗状を呈し、それ以下は、直径1.0mの円筒形に真っ直ぐ掘削され床面に達する。

このほぼ中央部には、幅に狭広のある板材と、湾曲した板材7点を縦方向に組み合わせた枠が設置され、その平面形は梢円形をなし、内法での寸法は東西0.6m、南北0.5mを測る。板材の長さは現状では2.5m余であるが、上端部が腐植して滅失していることや、検出面まで約1.5mの間隔があることから、元来はより長い板材であったのが腐朽したのか、別材を用いて下位とは異なる構造の枠が設けられたのか、いくつかの可能性が考えられる。しかし、土層断面を十分観察することができず、検証することは不可能であった。

使用される板材は図125から図127に図示するようなものである。その内訳は湾曲した板材2点、図126に図化した断面長方形の板材大小各2点、そして、棒状を呈した木材の計7点である。

また、その配列は、図125右下のような状態で、相対する方向に湾曲した材を据え置き、その間に断面長方形の板材で充填するというものであった。

なお、これらのうち、4点には方孔が穿たれるなどの加工痕が観察されることから、何かの部材を転用したと考えられるが、現状からその本来の形状を知る手掛かりは得られない。

枠内からは、図129から134に図示する多量の遺物が出土した。これらは完形の土器が多いこと、斎弔や船形木製品という祭祀具を含むことから、井戸廃絶に伴い一括投棄されたものと考えられる。

なお、調査途上段階で枠内堆積土が崩落したため、これらが出土した層準を明確にすることはできなかった。しかし、調査途上段階に方孔から手を差し入れて遺物の状況を確認した感触からは、大部分が中位から以下、おそらく底部附近に集中していたとの印象を受けたことを参考として書き留めて置きたい。

また、枠の裏込土内からも、図128に図化した板

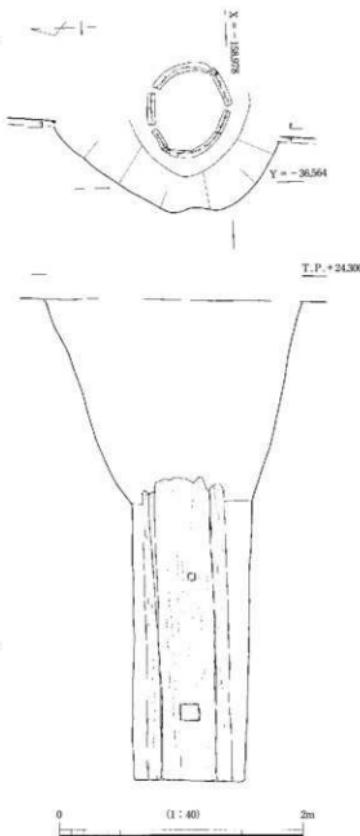


図124 405井戸平・断面図

材や、土器片など少量の遺物が出土した。全掘したわけではないので断言できないが、得られた遺物の中に時期の特定できるようなものはなかった。

以下、遺物の特徴について述べる。まず、図125-1は、東側の枠材として用いられていた曲面を持つ板材である。用材はスギで、木裏から年輪に沿うように抉り取って曲面を作出している。上端部が滅失しているため本来の長さは不明だが、現状での長さ250cm余、幅60cm、断面は最も厚い部分で8cm強を測る。なお、表面や側面、下端部についても同様の状況となるため、詳細な加工痕等は観察できない。また、下端部から上位側へ約4分1程度の位置には、図版127のような形状をなす一辺15cm余りの方孔が穿たれ、外面にはその上位に縦横3cm余りの正方形を呈する棧穴が設けられている。内面には、先述の方孔を中心として、その左右に長さ30cm、幅10cm強の範囲にわたって段状の加工が施され、これはあたかも方孔の両端に存在する反り返った部分を除去し、平滑に整えたような態をなしている。そして、左側面には段状を呈した仕口が設けられている。さらに、この方孔の左上位側面には、長さ6cm、深さ3cmにわたって枘穴状の削り込みが穿たれている。

これらの加工痕については、表面の遺存状況が悪いことにも起因して、その所作の目的は何なのか、また、戸枠に再利用される以前のものか否かなどの情報を得る手掛かりは得られなかった。

つぎに、図126-2と3は、上記の湾曲を持つ板材を挟み込むようにしてその南北に埋置されていた板材である。このうち2は、現状での長さ250cm余、幅35cm、厚さ8cm余強を測り、断面は長方形を呈する。用材はスギで、木取りは芯に近い部位を使用するため、極めて堅い板目となる。下位から約4分の1には一辺15cm前後を測る方孔が1ヶ所穿たれ、一見すれば建築部材の蹴放しを想起させる。

3も、先の例とはほぼ同形同大の板材で、木取りも方孔を穿つ点においても同様である。異なる点はその孔の穿たれる位置で、先述の例が下端部より約70cmであったのに対し、本例は下端部より160cmにこれが設けられている。ちなみに、上下を逆転させて双方の孔の位置を比較した場合、先端が腐植して失われているにも係わらず3の方が長くなることから、転用された時点における二つの材がまったくの相似形をなしたものではなかったことが知れるため、上記の建築部材ではないことが判明する。

4は、2に対峙する位置に用いられていた曲面を持つ板材である。先に述べた二つの板材の間に、両側とも一回り小形の板材を添えるようにして埋設されていた。

形態と大きさについては、先の1とほぼ同様で、方孔の形態や裏面の加工状況、さらには小形の枘孔状を呈した削り込みの形態や大きさまでもが酷似するなど、おのおの共通する部分が多く、大局的にみた場合には、元来は同じような位置で使用されていたことをうかがわせる。

異なる点は先の2・3の板材と同様に方孔の穿たれる位置にある。先の板材に倣って反転させて重ね合わせた場合、1が下端部より50cmであるのに対し、3が230cmとなる。

また、それと枘孔状の削り込みとの距離を比較した場合、前者が100cm足らずであるのに対し、後者が130cm弱となる。

なお、曲面を持つ板材の内側同士を互いに合わせ、その間に2と3の板材を直交させて組み入れた場合には、先の板材の内面に設けられた凹部と板材とが合致する関係となり、さらに、両者に設けられた方孔が、ほぼ同じ場所に位置する関係となる。これに貫を通せば、井桁状に固定されることから、あるいは、一時期このような状態に置かれていた可能性を考慮しなければならないかも知れない。

また、これらの表面には加工痕とは異なる際立った特徴が残されていた。それは、表裏面に関係なく存在する直径2cm程度の円孔である。

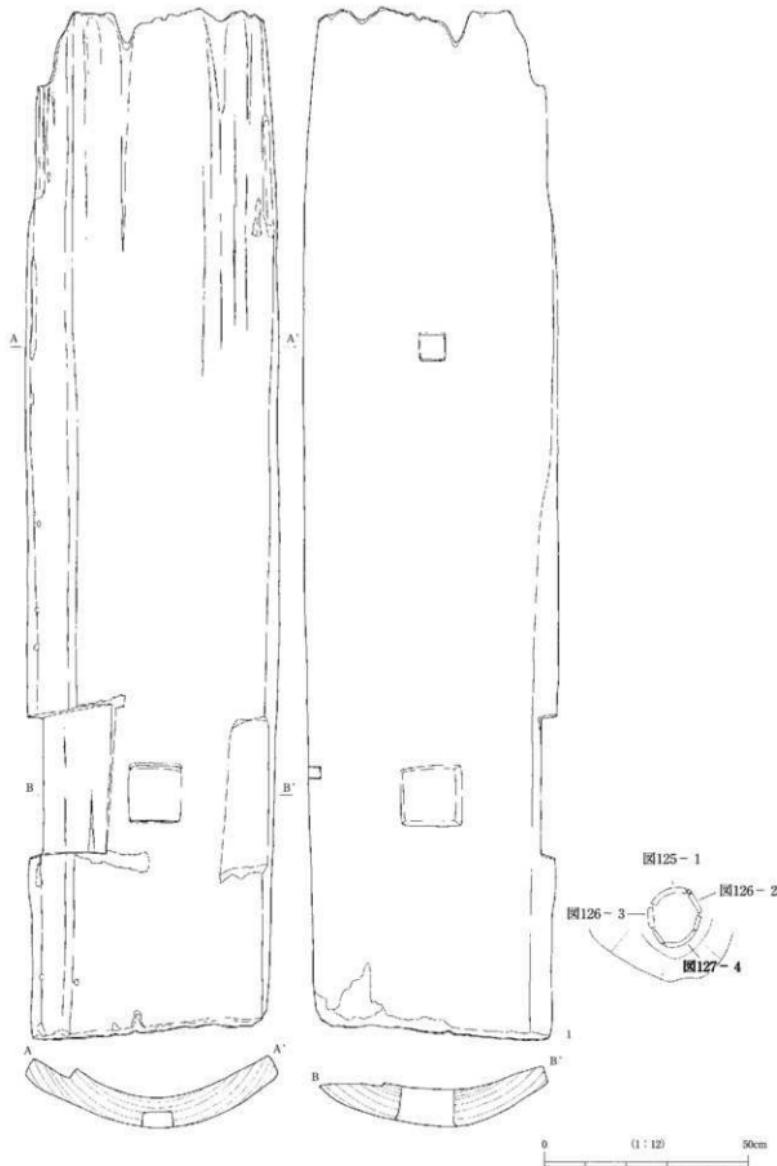


図125 405井戸枠材実測図(1)

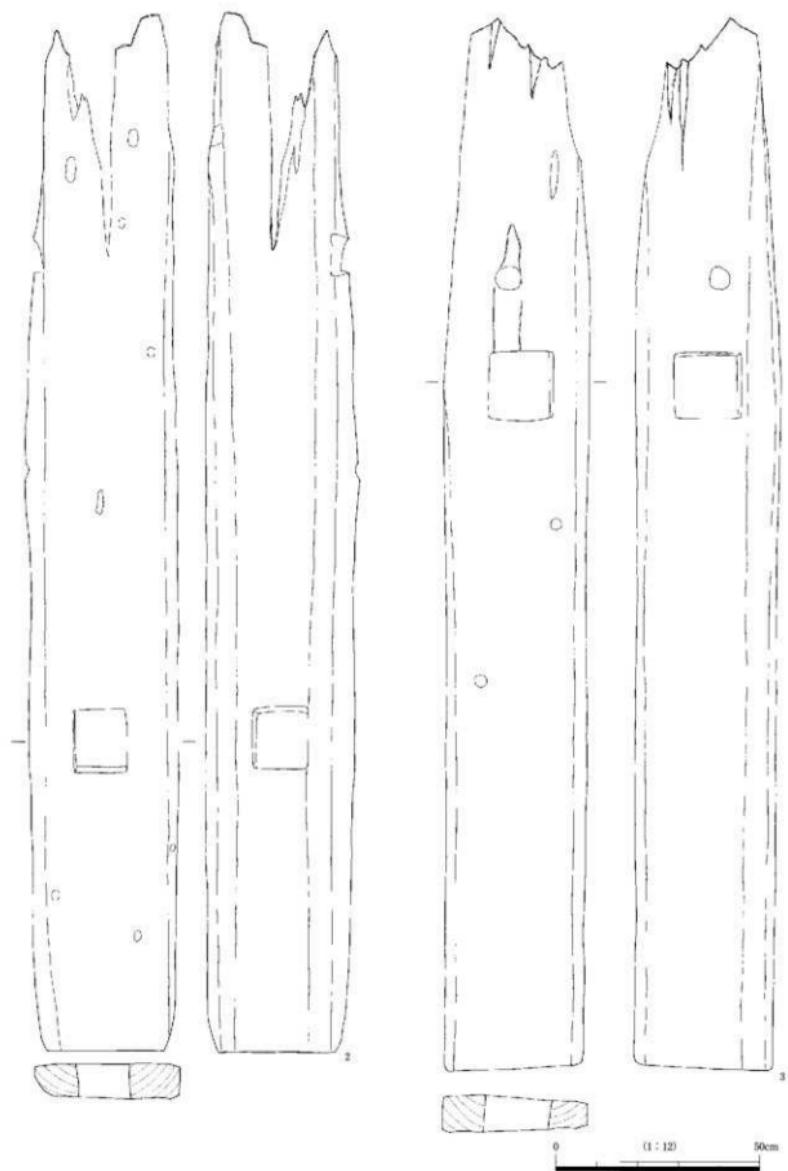


図126 405井戸枠材実測図(2)

この状況は、図版 126 および 127 の写真にも示すように、無秩序に穿たれ、その形状から人為的所作によって穿孔されたものとは考えられない。ヒト以外にこのような孔を穿つ生物は、カミキリムシなど昆虫類の幼虫か、貝類の船喰虫がその候補とされる。

製材後に穿たれた孔とみなされることや、孔の形状から推察した場合、後者によって形成された孔である可能性が高いとみなされ、もし、そうであるならば、この木材は、井戸枠として使用される以前に、船喰虫の生息場所である河口附近の汽水域に置かれていたことを示している。

そして、この解釈が正鶴を得たものであるならば、船の部材などとして用いられていた可能性が高くなり、あるいは、左側面にみられる段状の加工や、同方向端面に残された棧穴の形状、スギを用材としていること、そして何よりも意図的に曲面を持たせて加工している点において、先述の 142 井戸枠材に転用された船との近似性が指摘されることから、これらを船材の一部と推測することは、あながち荒唐無稽なこととはいえないであろう。つぎに、図 128 に図示したものは、掘方内から出土した板材である。用材はスギで、木取りは 5 と 7 が柾目材、6 が板目材となっている。これらは、枠材に用いられていた材と同様で、特に 6 の右側面にみられる加工痕は、先述の湾曲を持つ枠材のそれとほとんど同じであることから、井戸枠設置時に発生した不要な木端を投げ入れたものか、転用材の方孔や接合部を塞ぐための目止として用いられた可能性が考えられる。



図127 405井戸枠材実測図(3)

図129から139には土器類を示した。図129は須恵器で、総数11点を図化することができた。これらのうち、1は壺C蓋、2と3は組み合う器種を特定できない蓋、4・5は杯B身、7から10は体部の形態から類推して壺K、11は口縁部の形状からは壺Aに分類される。このうち9は肩部に波状紋をめぐらせており、時期的に若干遅る段階の所産にかかるものと考えられる。

また、1から3は、異様ともいえる大きなつまみを付していることで印象づけられ、胎土や焼成状況

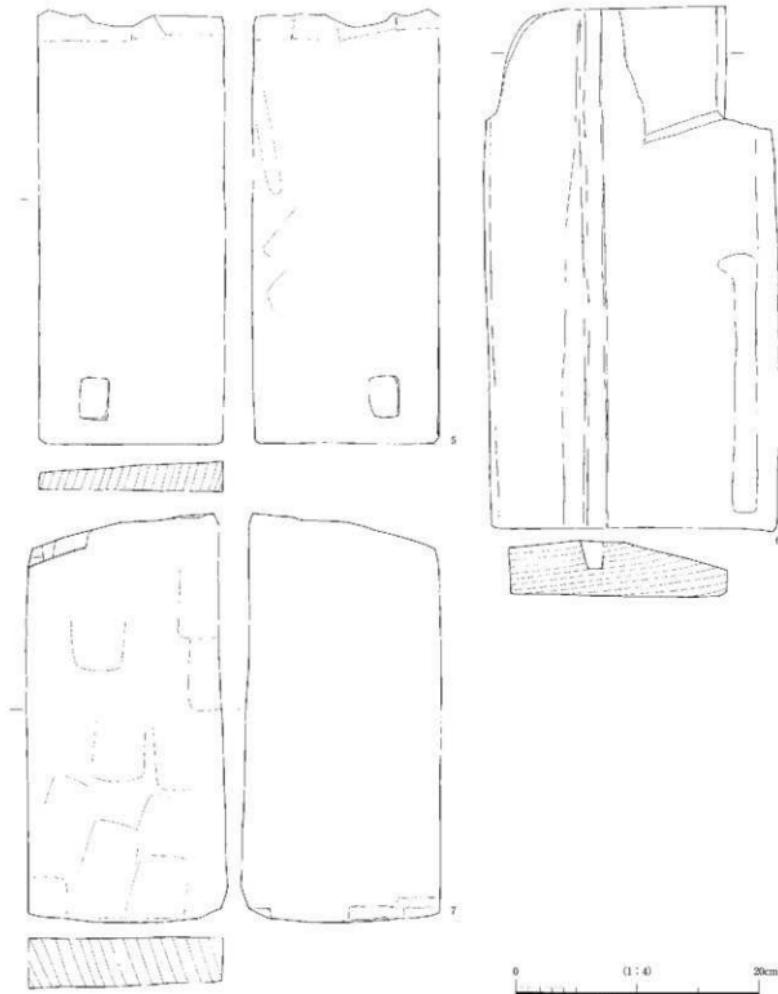


図128 405井戸枠材実測図(4)

も通有の須恵器とは相違する。さらに、内面中央に形成される轆轤目の突出部を一方向の静止ナデでスリ消すのではなく、指頭で押さえて処理することや、かえりの成形法を一本挽とするのではなく、貼り付け手法を用いて作出するなど、各所において陶邑製品とは異なる特徴を指摘することができる。

これに類似する須恵器を探索した結果、静岡県西部の湖西古窯跡群殿田第4地点古窯跡1号窯灰原出土の「かえり付坏蓋」とされる製品の中に類品をみいだすことができた。

さらに、今回の調査で出土した須恵器と、先の湖西窯跡出土のそれを現地で対比させた結果、窯跡出土資料という条件的制約から、色調や焼成状況は若干異なってはいたが、その他の点については、細部に至るまで酷似することを確認した。

つづいて、4の杯Bは、他の須恵器と比較して整形が非常に丁寧であるため、佐波理碗を模した可能性が高く、また、高台径が小さく、しっかりと形作られていることから、同類の中でも出現期に近い段階の製品と考えられる。

5の杯Bは、胎土や整形の様相は異なるが、高台の特徴は4と共通し、双方とも当該期の有為な資料と評価できる。

6は内面に車輪紋タタキが施された壺の体部破片である。今回の資料では唯一のもので、かつ、難波宮跡などの調査成果から、当該期にみられる特徴的な調整法と指摘されているため、小片ではあるが、敢えて図と拓本を掲載した。

図130から図132は土師器で、各種形態それぞれ41点の図を掲載した。

これらのうち、図130-12から18は杯G、19から26が杯C、28と29が杯A、30が皿A、31が鉢B、32が小形鉢、33が高杯脚部、34が鍋、図131-35から48と、図132-49から54が壺Aである。

以上のうち、杯Cは法量的に19から22のC I、23-27のC II、24-25・26のC IIIの3つに細分され、法量が大きくなるにしたがって調整や、暗文が丁寧となる傾向が看取される。また、28の内面には

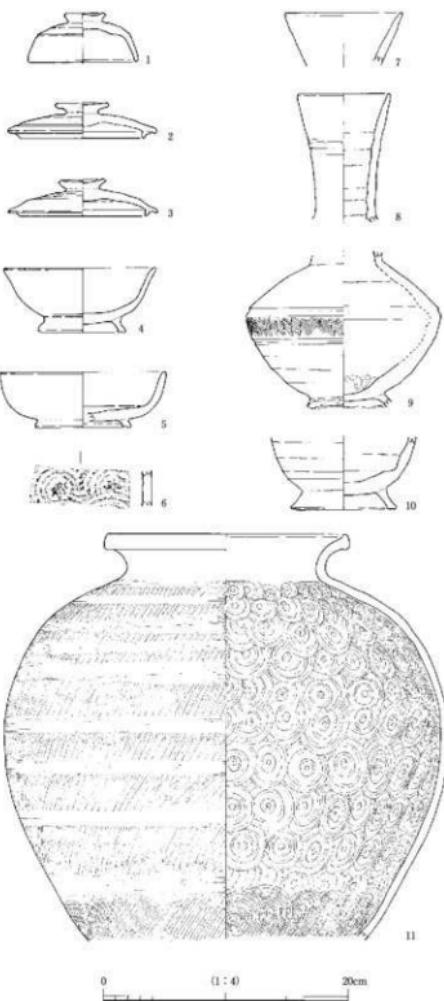


図129 405井戸出土遺物実測図(1)

2段放射線暗文間に振幅の少ない連弧状暗文を加えるという、この段階に特徴的な施紋法が用いられ、29の暗文は非常に細密で、ほとんど隙間のない状態となっている。つづいて、30の皿は、内面に施される暗文は1段放射線となってはいるが、底部から口縁部へ移行する屈曲部がゆるやかであることから、形態的には古い要素を留めている。また、31の鉢内面にみられる2段放射線暗文は、上・下位の長さの差が少なく、新しい段階にまでは下らない特徴を有している。

甕はその容量を比較した場合、図131-35や36の小形のもの、41から49の中形のもの、そして、51か

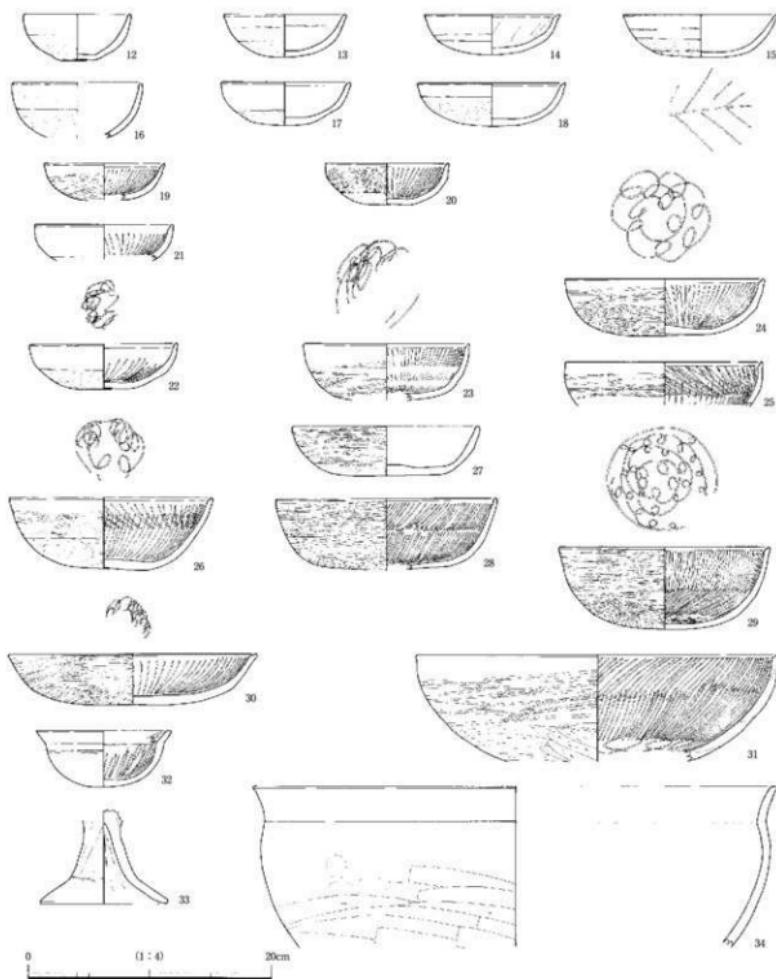


図130 405井戸出土遺物実測図〔2〕

ら54の大形のもの3種に分類可能である。これらに用いられる調整技法はさまざまで規範に乏しいが、各部位にユビオサエを多用するという南河内的傾向は看取される。

なお、43は下半部を削り過ぎて器壁に穴が開いたものを、粘土を補填して修復し使用に耐えるようにしている状況が観察される。また、50については、形態的には甕に近似するが、外面全体にヘラミガキが施されていること、口縁部外面に施される緻密なヘラミガキが暗文を想起させることから、短頸壺との折衷的要素を多分に有する南河内に特徴的な土器で、あるいはこれが後の壺Aの祖形となる可能性も指摘される。また、37と38は底部のみの破片とはなっているが、破断面を打ち欠いて疑似口縁状に整えられていることから、その状態のまま図化し、向後に備えることとした。

以上、報告を行った土器の時期は、各所で述べた諸様相と共に、土師器杯Cの径高指数が30代前半に納まること、器種の中に須恵器では杯B、土師器には杯Aや皿Aが含まれることから、大略的には飛鳥Ⅲ段階の範疇で捉えられ、その中でも古い様相を持つ資料と考えている。具体的な年代観としては、7

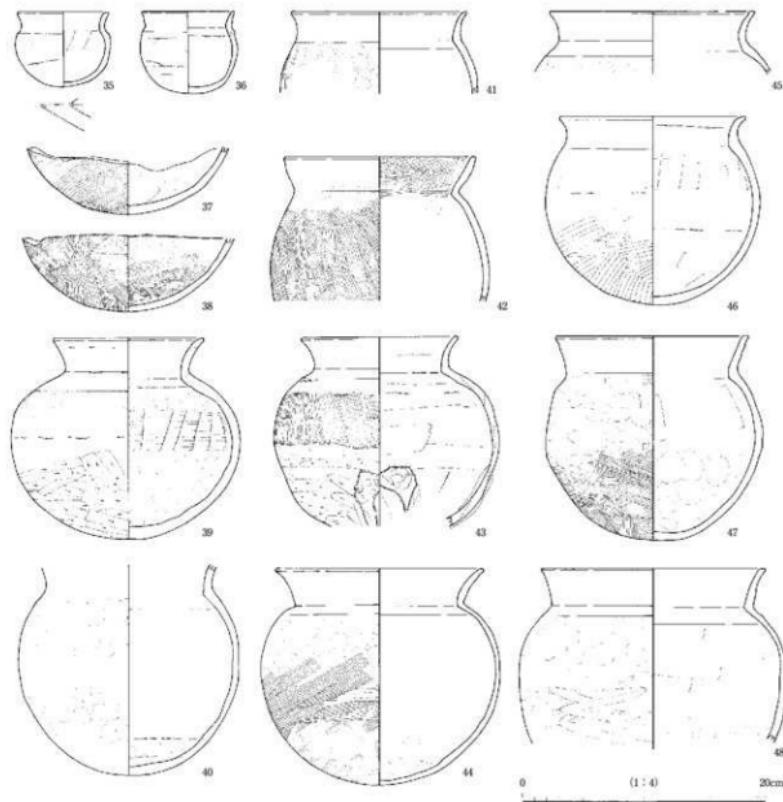


図131 405井戸出土遺物実測図(3)

世紀第3四半期の新しい部分に相当すると思われ、当該期の良好な一括資料として位置づけられよう。図133には埴輪と土製品を掲載した。55は右側の欠損する半円形の土製品である。断面は湾曲し、焼成は土師器と同様である。凸面にはハケが施されてはいるが、粘土紐の接合痕が明瞭に観察され、その態は移動式壺の体部を想起させる。そのような観点からみると、その焚口部を削り抜いた残余の部分に

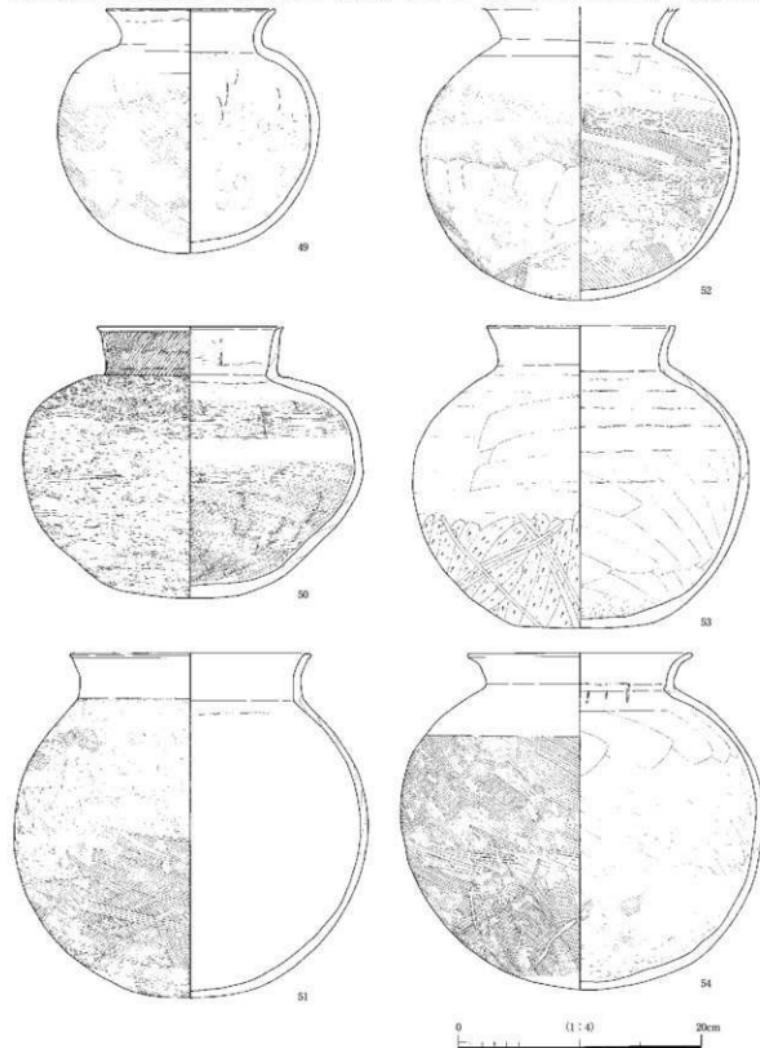


図132 405井戸出土遺物実測図(4)

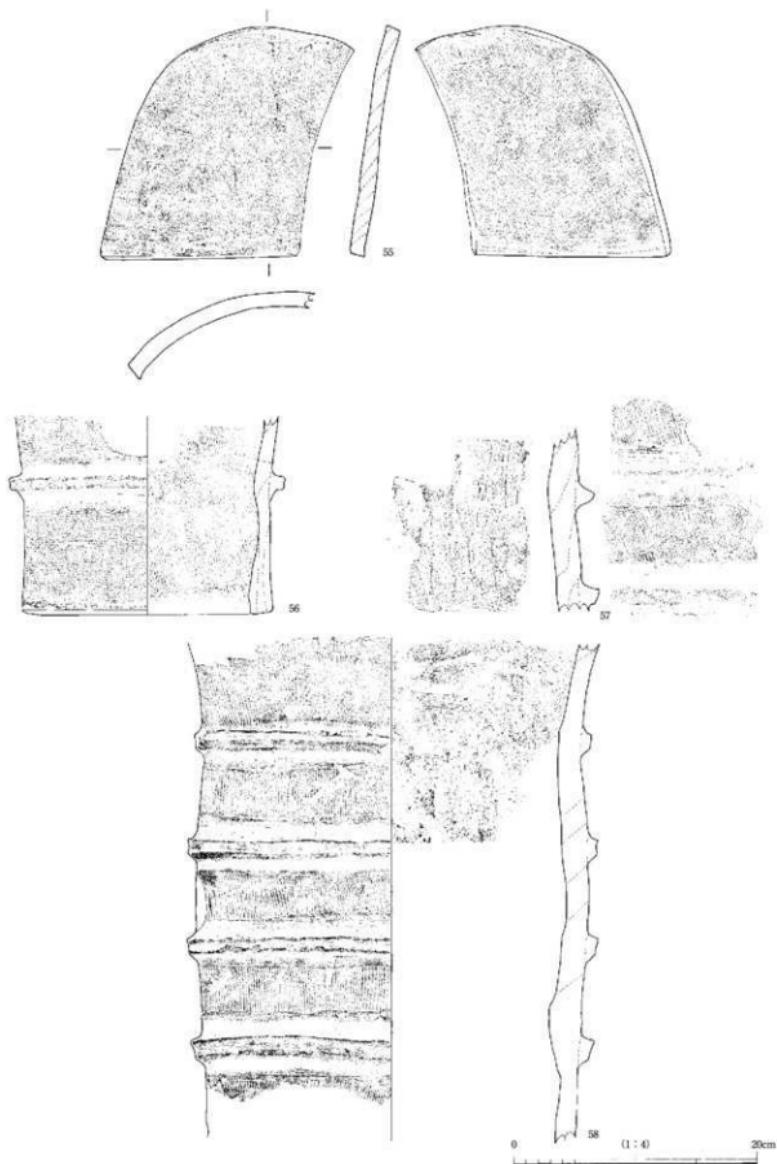


図133 405井戸出土遺物実測図 (5)

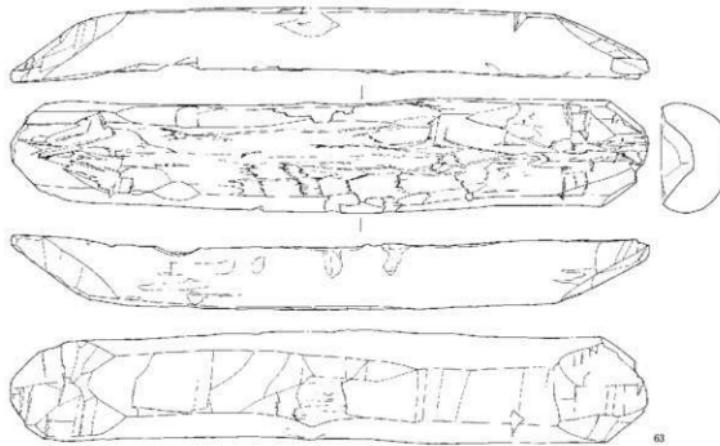
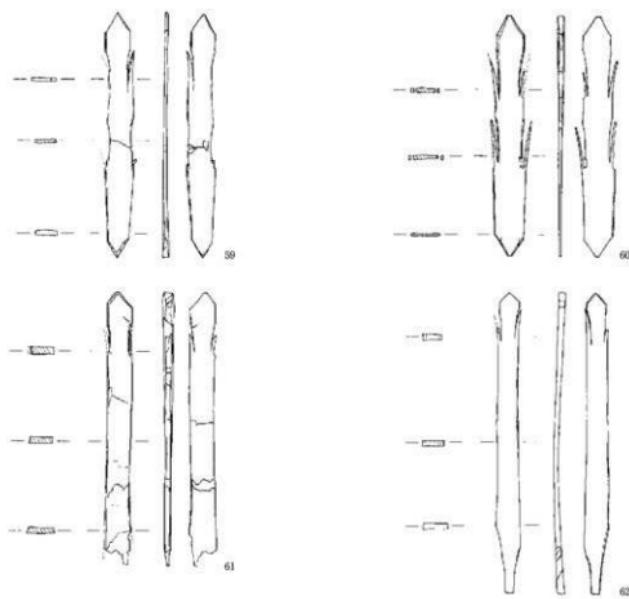


図134 405井戸出土遺物実測図(6)

類似しており、あるいは、これの蓋として供するために焼成されたとも考えられる。56から58は円筒埴輪である。58には内面に煤が非常に厚く付着していることから、竈など火を用いる施設の煙突として再利用されたことが考えられ、同様の例は摂津の大和川今池遺跡などでも確認されている。なお、埴輪自体は、56が外面の二次調整にB種ヨコハケを施し、無黒斑の窯窓焼成となることからⅣ期に位置づけられ、その他は、外面調整が一次調整のナナメハケやタテハケのみで終えられているためⅤ期に相当する。また、56の外面には、僅かながら赤色顔料が付着している。

図134には木製品を掲載した。その内訳は4点の斎申、船形木製品である。59から62は斎申で、小形であるため、時期の遡ることが知れる。4点ともヒノキの柾目材を用い、頭部を圭頭状に加工する点で共通する。しかし、両側面の切込みについては、59と60が2対4ヶ所であるのに対し、61と62のそれが1対2ヶ所となり、全長も前者が10cmであるのに対し、61は下位を欠損するため不明ながら、後者の62が12.5cmと約2.5cm長くなる点で相違する。また、61は不明だが、下端部の形状についても前者が三角形状を呈するのに対し、後者は棒状となる。両者はこのように、形態上まったく二分されており、2点一組として用いられる事例の具体的な姿相をうかがわせる例として新資料を加えることができた。63は、直径約9cmのケヤキ丸太材に加工を施した船形木製品である。成形技法は、最初に材の樹皮を剥ぎ、その上下面を両端に僅かに反りを持たせるように削り取り、つづいて上面から粗い研を入れて船室を表現する。そして、両端部を側面から斜め方向に削り出して舳先と船尾を作出するというものである。なお、舳先と船尾の作り分けは不分明であるが、図の左側は三角形様を呈するのに対し、右側のその部分は稜が削り取られているため、これがその差異を表しているとも推定される。これら2種類の木製品は、宮都や官衙などで執り行われる祭祀関連遺物と共に通する形態であることから、この井戸の廃棄行為を執り行った集団が、いち早くその祭祀形態を導入したものと考えられ、これを採用した集団の性格を色濃く反映する遺物としてその持つ意味は大きい。

金属製品には、図270-6に示す鉄斧がある。形態は有肩の横斧で、基本構造は鍛造の袋式不完全鍛着有隙とされ、袋部の内側にはアカガシ亜族を用いた柄の一部が遺存する。一部に鏽影が発生しているが、全体的にみて保存状態は良好で、鍛造後に掛けられた整形時の鎚目が隨所に観察される。また、刃部は鋭く研ぎ出されており、一部には鈍い光沢の観察される部分も存在する。

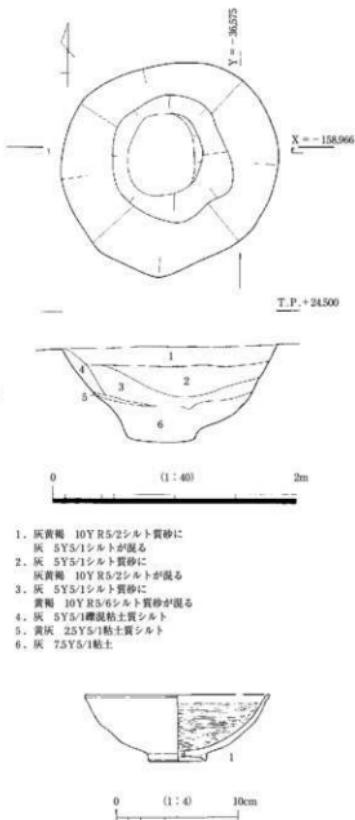


図135 415井戸平・断面および出土遺物実測図

415 井戸 (図135)

調査区南東部で検出された。重複関係からみて、417 落ち込みや416 溝よりも後出すると判明した。規模は、東西1.8m、南北1.7mを測り、平面形は円形に近い楕円形を呈する。遺構検出面から0.8mまで掘削され、穴底は段丘疊層内に止まる。しかし、これらを開析する谷筋地形の法面附近に開墾されるという立地条件から伏流水に恵まれ、調査段階でも豊富な湧水が認められた。この様相は特に雨後、顯著に表れ、ほとんど満水になることもしばしばであった。この状況は、谷筋周辺に開墾された他の井戸にも共通し、掘削が深くにまで及ばないものについても比較的豊富な湧水が認められた。

断面形は楕円形を呈し、さらに、底部附近の0.6mにわたっては糸底状に1段窪む。その形状から類推して、本来は曲物などを利用した井戸枠が設けられていたものとも考えられる。埋土は、図中の土層番号5とする薄層を境として大きく二分されるが、両者の様相に大差はみられない。そこからは少量の瓦器や土師器の破片が出土し、うち、瓦器1点を図135下段に示した。その器形や暗文の様相からみて、尾上編年のII-1段階に相当するものとみられ、よって、井戸が廃絶した時期は、12世紀の第14半期と考えられる。

851 井戸 (図136左)

調査区南東部の東に寄った位置で検出された。埋土上面からは柵列2の東端柱穴である852柱穴が掘り込まれている。北東から南西方向に長軸を有し、平面形は両端がやや尖り気味の楕円形を呈する。

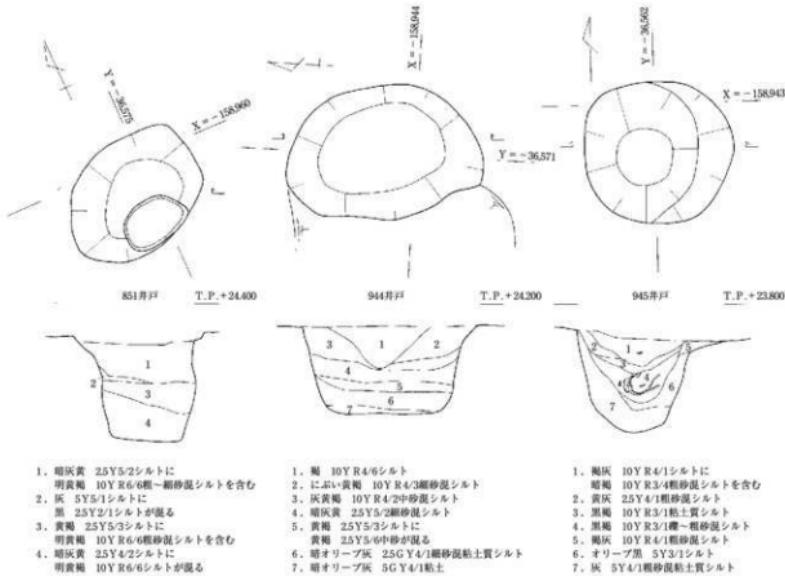


図136 851・944・945井戸平・断面図

規模は、長径1.3m、短径0.9m、深さ0.8mとなり、穴底は平らに掘削されている。断面形は西側のやや広がるいびつな長方形を呈し、床面には段丘の疊層が露呈している。

埋土は、黄灰色系のシルトから粗砂を中心とし、これらが水平様の埋積状態を示していることに加え、掘方が円筒状を呈していることから、元来、枠などを設けない素掘り井戸であったと考えられる。

出土遺物には若干の土器などがあるが、細片化しているため時期の判別は不可能である。したがって遺物から時代を特定できないが、柵列2との重複関係から、飛鳥時代前半代以前と位置づけられる。

944 井戸（図136中）

調査区東半部の南よりの位置で検出された。西側は擾乱孔により段状に掘り取られているが、平面形態は楕円形を呈し、主軸は南北方向となることは確実である。規模は、長径1.6m、短径1.1mで、深さは0.7mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、穴底は平らに掘削されている。壁面および底面には段丘の疊層が露呈している。埋土は、下位から3分の2程度まで、層厚10cmから20cmを測る黄褐色やオリーブ灰色のシルトから粘土がほぼ水平に堆積し、その上位には、褐色から灰黄褐色系シルトがみられた。このような状況や、断片すら本質を検出できなかったことから、枠は当初より設置されていなかったと考えられる。埋土からは土器の細片など若干の遺物が出土したが、この中に時期の特定できるものや、國化可能なものは含まれていなかった。したがって、遺物から遺構の時期を限定できないが、埋土の様相などから推定して、飛鳥時代のいづれかの段階に属するものと考えられる。

945 井戸（図136右、図版53）

調査区東際の中央から南側に向かった位置で検出された。平面形は、東西方向にやや長い不整円形を

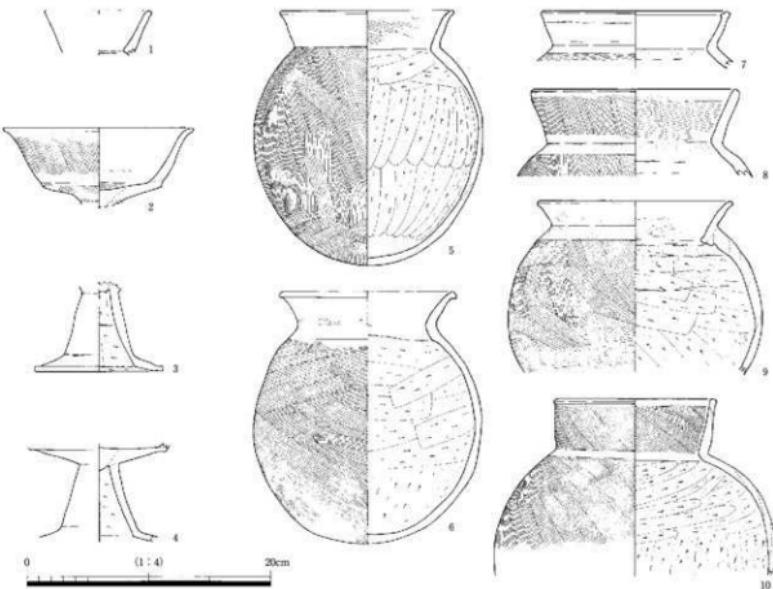


図137 945井戸出土遺物実測図

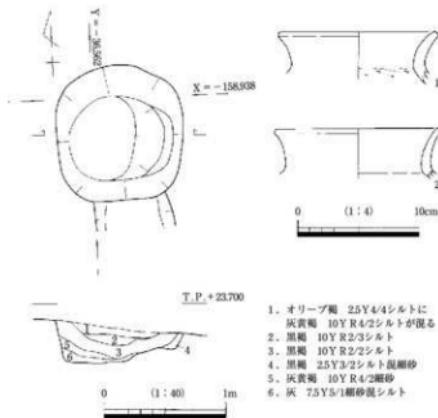


図138 947井戸出土遺物実測図

には、ほぼ旧状にまで復原できる資料も含まれているため、一括投棄されたことは確実だが、井戸内堆積土の中位より出土したことから勘案するならば、廃絶後しばらく時間が経過し、埋まりかけた段階で投棄されたか、改修した井戸底に投棄されたかのいずれかであろう。図137にはこのうち10点の土器を図化した。その内容は壺1点、高杯2点、甕6点である。1は直口壺の口縁部片、2は高杯の受部、3と4は同じ器種の脚部、5から10は甕である。このうち形態的差異のうかがえる甕の口縁部に注目した場合、5から9のように外反するものと、10のように直立するものに大別され、さらに端部の形態を細別するならば、8のように丸くおさめるもの、9のごく面をなすもの、7のような内側に肥厚させるものとに分類が可能である。特に最後の7については、布留式甕の系譜を引くものでも最終末期に位置づけられる資料で、須恵器出現前後段階の資料として興味深い。

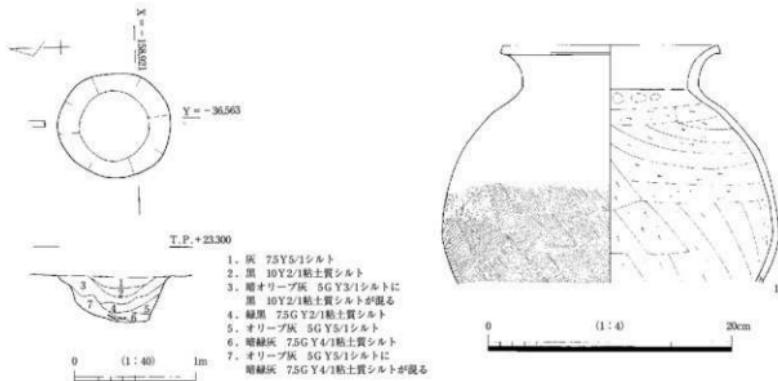


図139 1059井戸平・断面および出土遺物実測図

呈する。規模は東西1.1m、南北1.2mを測り、上面は東側に向かって大きく広がる。掘削深度は0.8m弱を測り、断面の形状は「U」形を呈する。穴底は擂鉢状を呈し、段丘疊層内に止まっている。

埋土は、中央が大きく窪むような形をなして堆積しており、それがいくつかの単位をなしていたことから、最低でも2回以上の改修が行われたものと考えられる。また、そのいずれの段階にも枠材が設置されたような形跡が確認されなかったことから、終始素掘りの井戸とされていたと考えられる。

埋土の中位に堆積する4層からは図136の断面図や写真53-2に示すように、中央附近に集中して土器が出土した。この中

947 井戸（図138）

先述の945 井戸から北へ5 m弱の位置で検出された素掘りの井戸である。平面形は角が大きく丸くなつた隅丸方形を呈する。

規模は東西1.0m強、南北1.1m、深さ0.3m余りを測る。断面の形態は隅丸の逆台形を呈し、西側はさらに1段低く掘り下げられている。穴底はやや起伏を持つ状態に掘削され、壁面には段丘疊層が露呈する。深くまで掘削されていないのは、削平を被っていることも一因ではあろうが、前記のような湧水に恵まれた立地条件によるものである公算が高いと考えられる。

埋土は6層に細分される。最下層には灰色を呈した細砂混シルトが堆積しており、その様相から滲水した環境のもとで堆積した土層であると考えられる。

埋土中からは少量の土師器が出土し、このうち2点を図138右側に図示した。

ともに甕の口縁部片で、法量に若干の差異はみられるが、形態や調整技法、砂粒を多量に含んだ粗い胎土からなることで共通している。

時期については、小片となっていることや、器種に偏りがみられるため不確定要素を多く残すが、須恵器が共伴していないこと、形態や胎土の様相が、先の945 井戸出土遺物と共通していることから、おむね5世紀前葉に位置づけられよう。

1059 井戸（図139）

調査区東半部の中央からやや南に向かった位置で検出された。掘方の平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は東西0.8m強、南北0.9mを測り、深さは0.4m弱となる。

断面形は、偏平な「U」字形を呈し、北側には小さな段が設けられている。

穴底は、南側に向かってわずかに下る。埋土は、粘質を帯びた暗い色調を呈するシルトを主体とし、その中に棒材などの痕跡が確認されなかったことから、素掘りの井戸であったと考えられる。その中からは、図139左の断面図に示すような位置と状態で1点の壺が出土した。同図右に図示したのがその土器で、これについては、口縁部の形態や、体部内外面の調整技法、粗粒の混和材を用いて製作さ

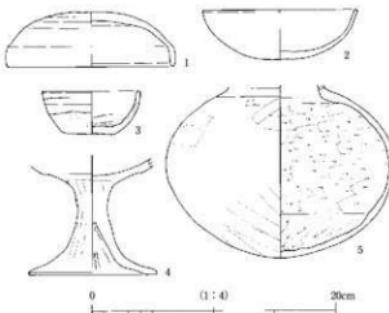
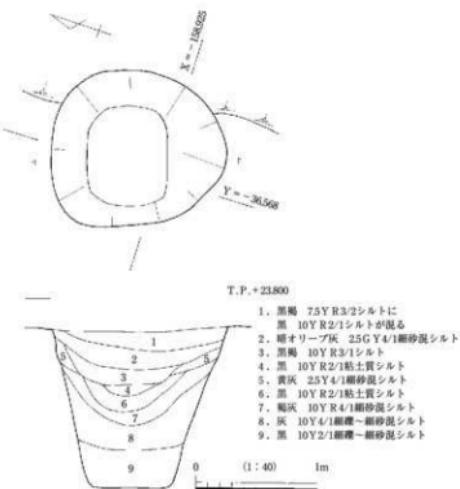


図139 1059井戸平・断面および出土遺物実測図

れている点など、これまでに述べてきた 945 井戸や、947 井戸出土資料と共通する部分が多い。したがって、この土器もそれらと同時期の所産にかかるもの可能性が高い。これに埋土の特徴を加味して遺構の時期を類推した場合でも相互の関係に齟齬はきたさず、ゆえにこの年代観を充てるのが最も妥当であると考えられる。

1060井戸（図140）

調査区東半部の中央からやや南で検出された。平面形は、南西部のやや張り出す不整円形を呈する。規模は、長径1.4m強、短径1.3m弱、深さ1.3mを測る。断面形は、隅の丸い丈長の逆台形を呈し、穴底は平らに掘削されている。埋土は上位と下位に大きく二分され、断面観察から、上位についてはほぼ以上まで埋まつた段階で2回程度掘り直された様相が看取される。また、下位の堆積状況を観察する限りにおいては、枠を撤去したような所作は観察されないため、当初より素掘りの井戸として開鑿されたものと考えられる。

埋土内からは図140下段に図示した須恵器1点、土師器4点などが出土した。1は須恵器杯H蓋で、2は土師器杯G、3は外面に粘土紐の接合痕が明瞭に観察される土師器小形杯、4は高杯脚部、5は内面の調整にヘラケズリを多用し、器壁を薄く仕上げた壺の体部である。これらの遺物は、須恵器杯H蓋の形状や法量的要素、また、2の土師器杯の形態などからみて飛鳥I-1段階に位置づけられる。

1805井戸（図141・142、図版54）

調査区東半中央附近で検出された。穴底からやや東側に偏った位置には、底板を取り外した曲物を重ね合わせることによって構築された枠が設けられている。

掘方の平面形は、東西方向に長軸を通す不整円形を呈する。規模は、東西1.7m強、南北1.4m、深さ1.2m弱を測る。

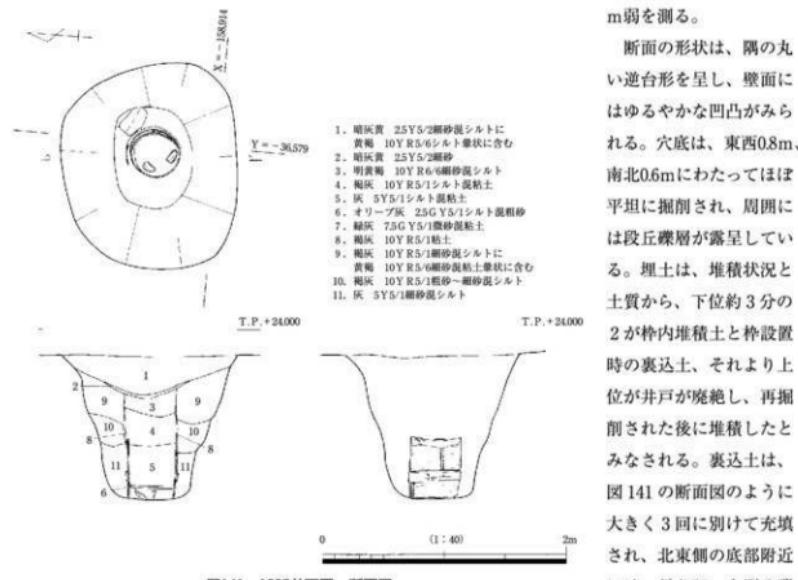


図141 1805井戸・断面図

断面の形状は、隅の丸い逆台形を呈し、壁面にはゆるやかな凹凸がみられる。穴底は、東西0.8m、南北0.6mにわたってほぼ平坦に掘削され、周間に段丘層が露呈している。埋土は、堆積状況と土質から、下位約3分の2が枠内堆積土と枠設置時の裏込土、それより上位が井戸が廃絶し、再掘削された後に堆積したとみなされる。裏込土は、図141の断面図のように大きく3回に別けて充填され、北東側の底部附近には、長さ25cmを測る砾

が投入されていた。

枠内堆積土は、土質から同図7と6が井戸機能時の堆積層、それ以上が井戸廃絶後の流入土と考えられる。そして、再び上位が掘削され、2が流入した後に完全に埋没した状況を止めている。

枠材は曲物二段分を確認したが、土層断面図の8に示すように、より上位に木質が腐朽して生成された土層が観察されることや、ここから上位にも裏込土と隔絶した枠内堆積土が観察されることから、さらに、2段ないし3段の曲物が設置されていた状況を復原できる。

枠の内外からは少量の土師器や須恵器などが出土し、このうち図142に示す2点の土師質土器と、枠材に転用された曲物2点を図化した。1は、枠内上層から出土した小皿で、口縁端部はヨコナデにより「て」の字状に成形される。2は、枠内最下層より出土した中形の皿で、口縁部にヨコナデが施され、端部は丸く仕上げられている。枠材2点は、3が下位から1段目に設置されていたもので、4が2段目に用いられていたものである。法量は両者とも直径30cmを測り、残存高は3が13cm、4が9cmである。これらは、遺存状況におのおの差異はみられるが、双方ともヒノキの柾目材を用いていること、内面に縦位の跡引を入れて製作されていること、綴じに桜の樹皮を用いていていることにおいて共通している。

出土遺物から井戸の時期を考えた場合、開整された時期については掘方から時期の特定できる資料が得られていないため不明だが、枠内上位から1の土師器が出土したことから、井戸が機能を停止し、枠内上位まで土層が堆積した段階が11世紀後半代であることが判明する。

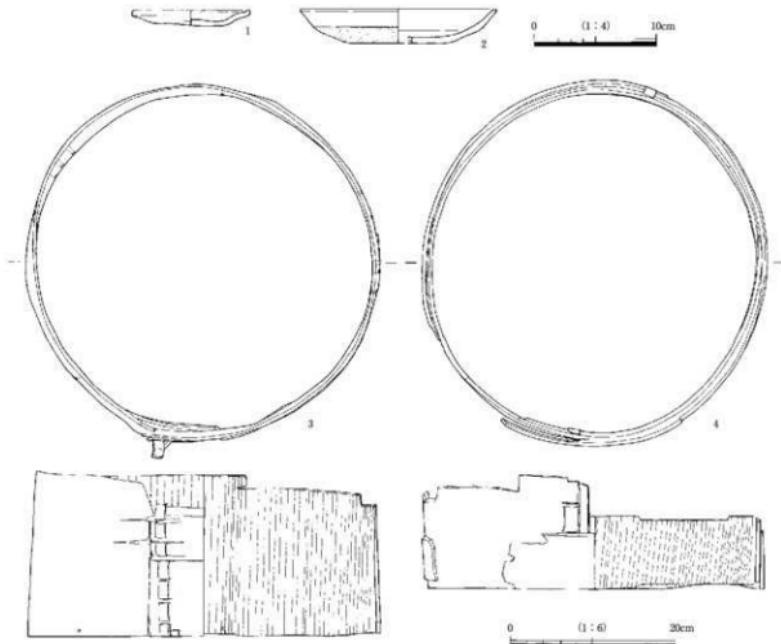


図142 1805井戸出土遺物および枠材実測図

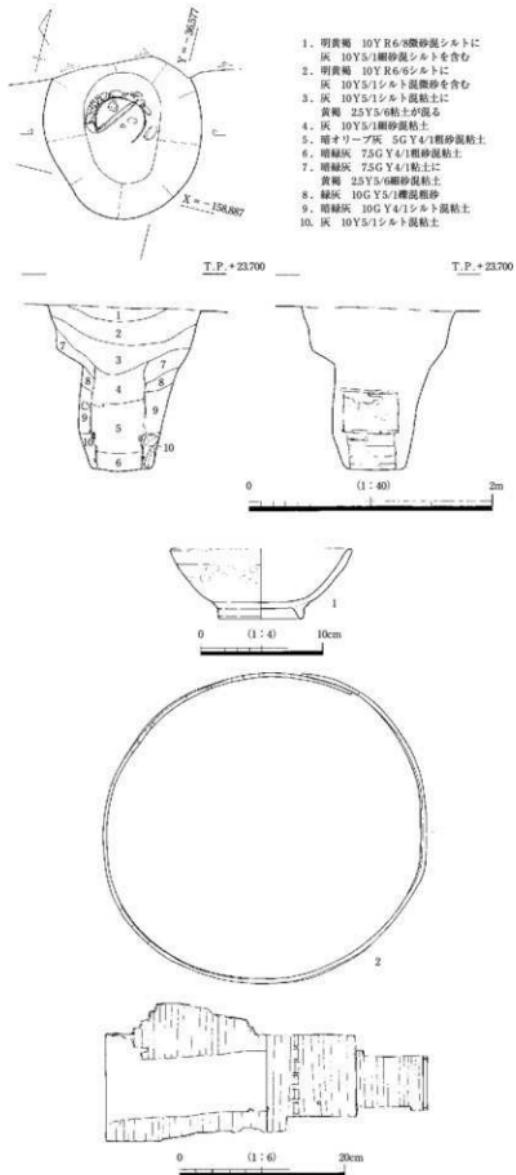


図143 1910井戸平・断面および出土遺物・枠材実測図

1910井戸 (図143、図版55)

調査区北東隅から3分の1程度南に向かった位置の壁際で検出された。中央には底板を取り外した直径30cmを測る曲物の側材を積み重ねて枠を設置している。掘方北側の一部を搅乱によって失うが、遺存する部分から推定して、平面形は南北に若干長い不整円形を呈するものとみられる。規模は、東西1.2m、南北1.4m以上、深さ1.3m強を測り、掘削範囲は、礫層内に止まる。断面の形状は、基本的に縱長の逆台形を呈するが、西側中位には斜め方向の段が設けられている。埋土は大きく二分され、下位が枠設置時の裏込土と枠内埋積土、上位が井戸廃絶後に周囲から崩落あるいは流入した土層となる。また、裏込土の最下位には、図143の平・断面図に示すように拳大の礫を充填していた。この所作は、湧水を枠内に導き入れやすくするための配慮と考えられる。

枠材に転用された曲物は2段分を検出したが、土層断面にはさらに1段以上重ねられていた痕跡を観察できた。なお、上段の枠材については、遺存状況が悪く、取り上げ後に崩壊して図化できなかった。

掘方内からは図143中段に示す黒色土器B類の楕が出土した。その形態から11世紀後半階を中心とする時期に位置づけられる。

したがって、井戸が開削されたのは当該期とみなされる。

2151井戸 (図144~148)

調査区北東隅から、やや南に向

かった位置で検出された。北東側約4分の1は調査区外となるため、埋土の掘削を一部断念した。掘方の平面形は、検出した範囲内の所見では、東西に長軸を有する橢円形を呈するものとみられる。規模は、東西3.7m、南北2.8m以上、深さ20mを測り、穴底の南西部は、直径0.9m、深さ0.3mの範囲にわたってさらに1段深く掘り下げられている。断面形は東側壁面の傾斜角がゆるやかな逆三角形状を呈し、先述した1段掘り下げられた部分のみは隅丸の方形を呈する。

埋土は図144下段に示すようなもので、大きく3段階にわけられる。これを下位より述べるならば、まず、井戸枠を抜去し、そこに16と17の流入土が堆積した段階、つづいて、これを大きく再掘削し、大量の土砂と、土器片や木片などの塵芥を投入した10から15の土層が堆積した段階、そして、この西側を再度掘削し、そこに1から9の土砂が堆積した段階である。これらのうち、中位と上位において瓦器碗

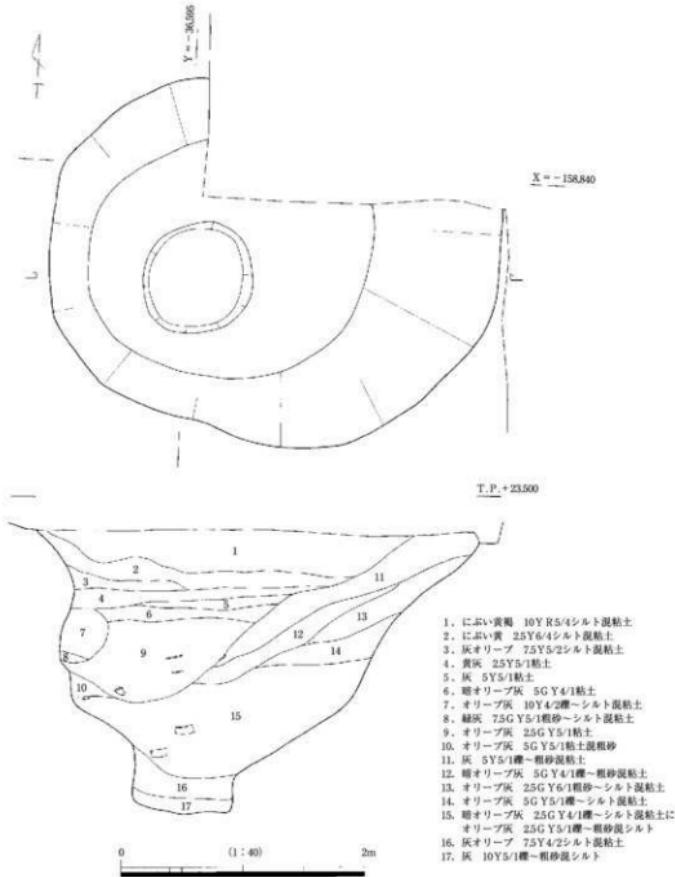


図144 2151井戸平・断面図

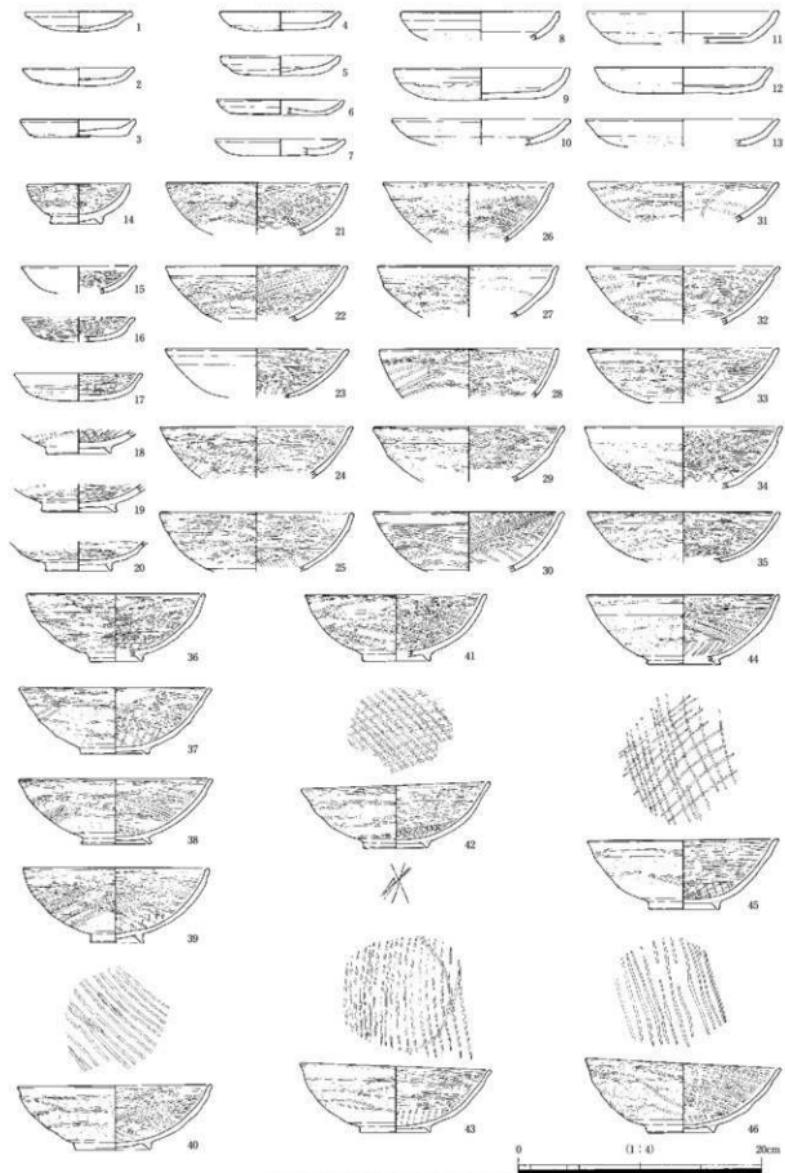


図145 2151井戸出土遺物実測図(1)

をはじめとする大量の遺物が出土し、これらを下層、上層と呼称して遺物の取り上げを行った。

上層出土遺物には図145-1から32、34から46、図146-47から50に示す土師器、瓦器、輸入磁器類、それに、図147-70と71の瓦、図148-72から78に示す木製品がある。土器類のうち、1から13は土師器で、1から7が小皿、8から13が中皿である。14から32、および、34から46は瓦器で、14が小椀、15から17の3点が小皿、それ以外が椀である。図146-47と48は、輸入磁器で、47は廈門湾窯系白磁碗V類の口縁部小片、48は同じくIV類の碗高台部片である。図146-49は東播系須恵器片口鉢の底部で、下面には糸切り痕がみられる。同図50は土師器羽釜の口縁部破片である。

つづいて、図147-70と71はともに丸瓦で、70には端部の一部が遺存し、71には有段部が付随する。図148-72は竹の短辺部を加工した箆状製品、73はマツ材を用いた木杭、74はヒノキ製の箸、75は頂部に円孔を穿った扇の骨状のヒノキ製木製品、76は柄、77と78は木球でクロガキを用いている。79はヒノキ製の曲物容器の底板で、長径13cm、短径12cmを測る梢円形を呈し、側面の4ヶ所には側板を固定するための釘孔が観察される。

下層出土遺物には、図145-33、および、図146-51から67の土師器や瓦器、図147-68から71の瓦、図148-80から82の木製品がある。このうち図146-51から58は土師器で、51から56は小皿、57から59は中皿である。図145-33と、図146-60から67は瓦器で、60は小皿、それ以外は椀である。図147-68・69は2点とも平瓦で、68の凸面にはスリケシ技法、凹面には模骨痕が観察される。図148-80から82はヒノキ製曲物の枠と底板である。80はヒノキの追柾目材を用いた底板で、直径20cm強、厚さ1cm弱の円盤状を呈し、側面に3ヶ所の釘孔が存在する。81は底板までが遺存するヒノキ製の曲物で、法量は

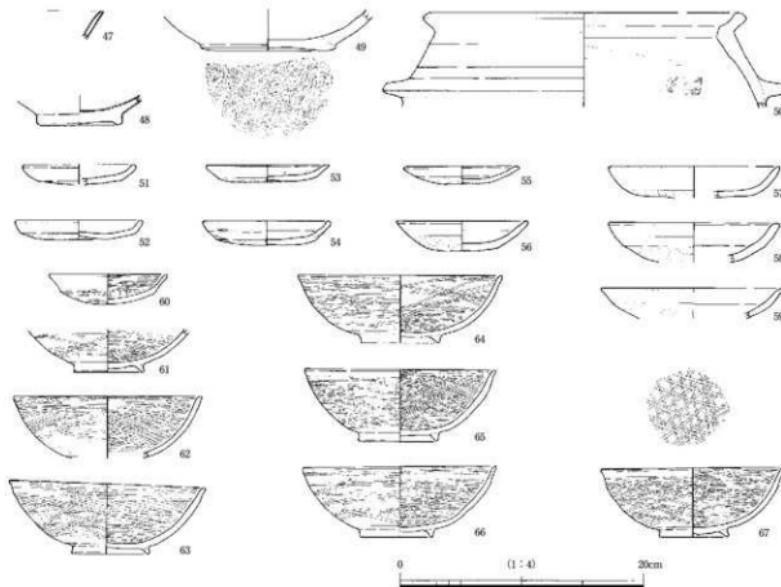


図146 2151井戸出土遺物実測図(2)

直径19.5cmを測る。側板内面に縦位の罫引を入れて成形し、端末をサクラの樹皮で縫じ合わせ、下位に10方向から竹釘を打ち込んで側板と固定している。82は上位が欠損した曲物の側板である。ヒノキを用材とし、内面には縦位の罫引が施され、端部をサクラの樹皮で縫じている。側面には釘孔が2ヶ所以上観察され、その間隔や直径から80の底板と一对であった可能性が高い。

以上の遺物の中から、瓦器を中心として年代を特定するならば、椀の外面調整にヘラケズリがみられないため11世紀代までは遡らることはできず、内面見込みの暗文に注目した場合、下層出土資料が井桁と格子状のもので占められるのに対し、上層資料にはこれに平行線暗文が加わることから、下層の時期を12世紀前半代、上層の時期をそこから12世紀中葉にかけての段階のものとみなすことができる。

この年代観は、東播系須恵器の体部が内湾汽味となることで12世紀前半代頃に位置づけられることや、白磁の年代観とも齟齬をきたさない。

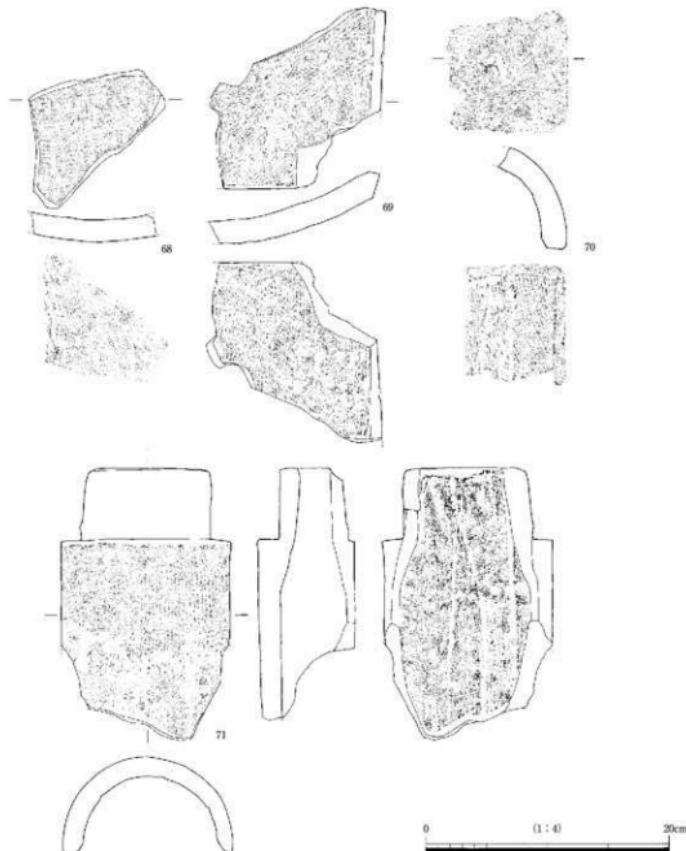


図147 2151井戸出土遺物実測図〔3〕

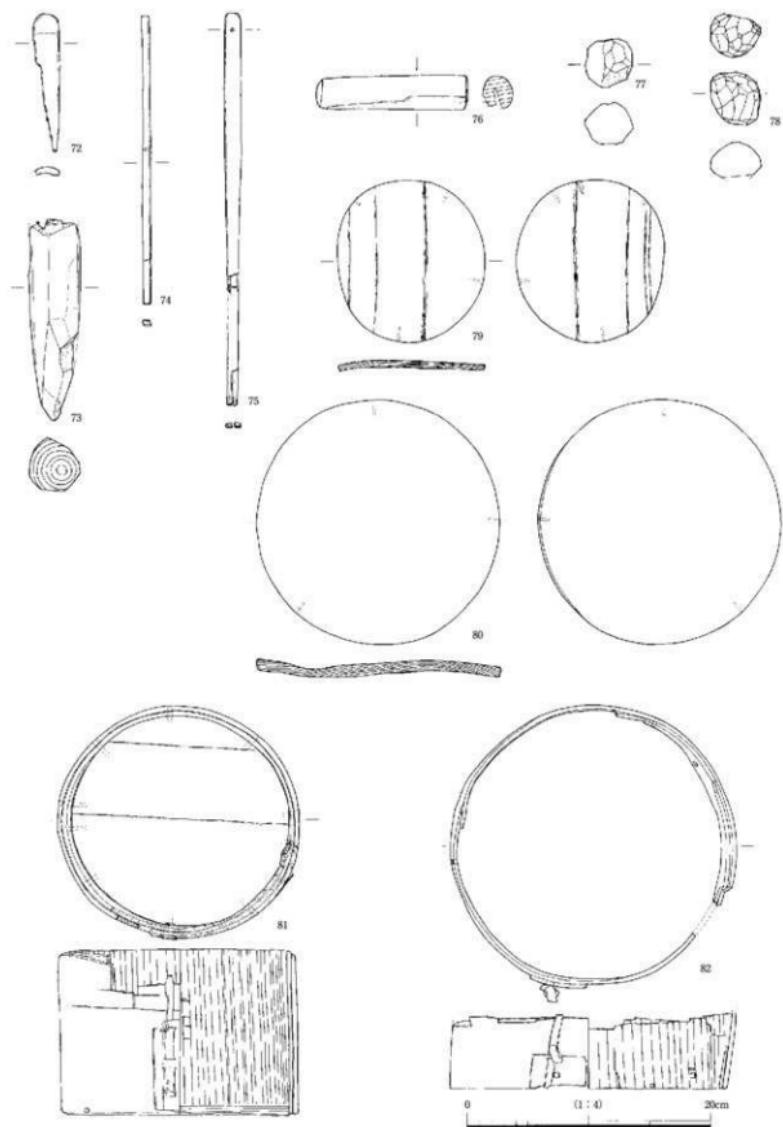


図148 2151井戸出土遺物実測図(4)

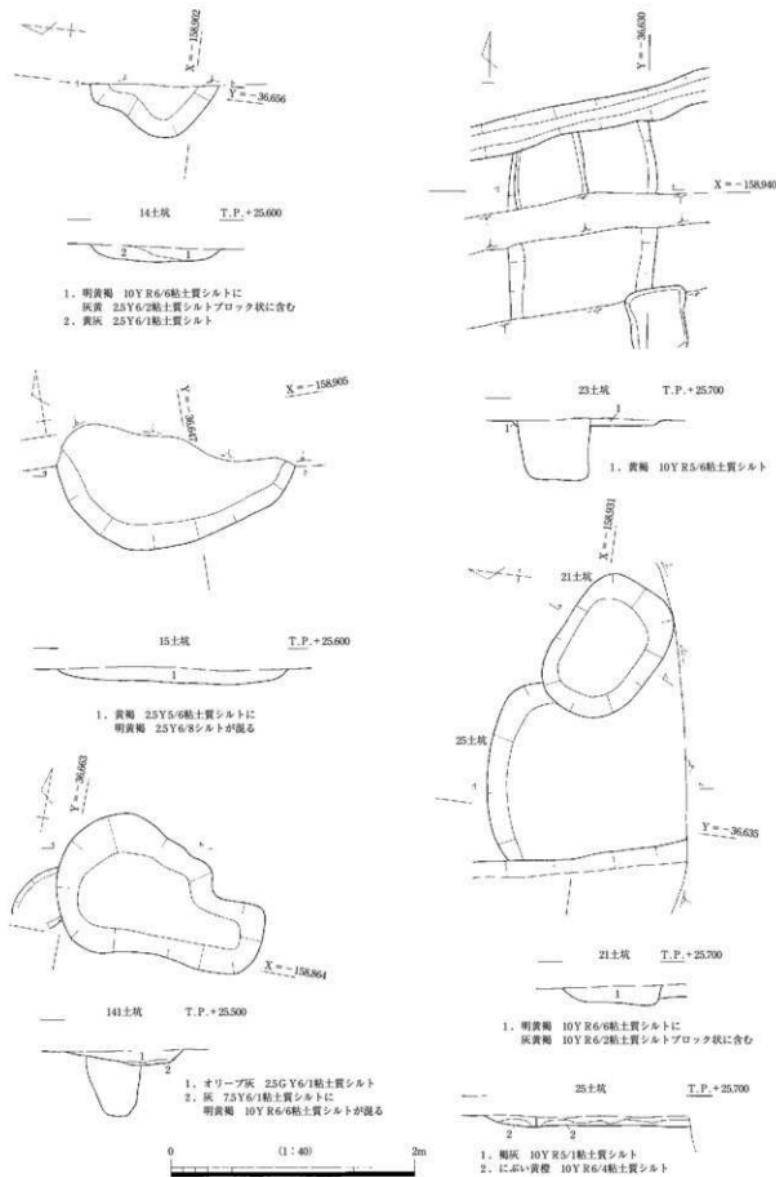


図149 14・15・21・23・25・141土坑平・断面図

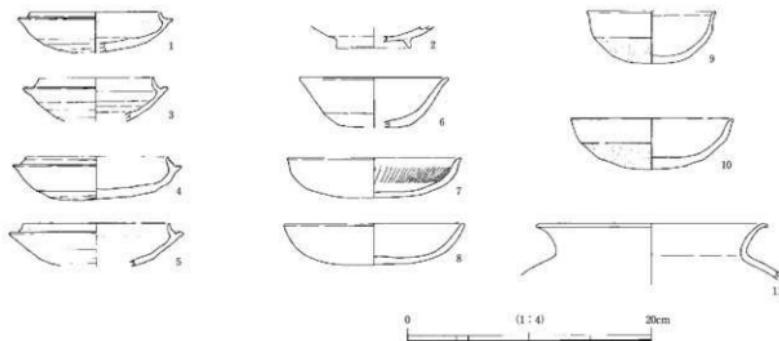


図150 14・21・23・25・141土坑出土遺物実測図

第5項 土坑

調査区全域において多数の土坑を検出した。これらの規模や形状に規則性はみいだせず、また、その分布状況についても疎密や関連性は看取されなかった。なお、時期については、出土遺物などから判断して、他の遺構と同様に古墳時代後期末葉から平安時代末期頃までのものが存在するとみられる。

以下、遺物などから時期の特定が可能となったものや、特徴的なものを中心として報告を行いたい。

14土坑（図149・150）

調査区西半中央の調査区間で検出された。東半部は攪乱孔により滅失し、平面形は不定形となる。現状での規模は東西0.4m、南北1.0m、深さ0.1mで、断面形は浅い皿形を呈す。

埋土は2層に細分され、図150-9から11に示す土師器3点など少量の遺物が出土した。9は杯C1、10は同C2、11は甕Aに分類され、暗文は遺存していないが、杯の形態や法量からみて、飛鳥I段階の後半に位置づけられる。よって遺構の埋没時期はこの段階と考えられる。

15土坑（図149）

先述の土坑14から南東に約8m離れた位置で検出された。北側を攪乱孔によって削平され、現状での規模は、東西2.0m、南北1.0m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅い皿形を呈し、埋土は粒状構造混じりシルト層の單一層となる。時代判別可能な遺物が出土していないため、遺構の時期は不明である。

21土坑（図149・150）

調査区西半分の南側で検出された。平面形は、北西から南東方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。規模は、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.15mを測り、埋土は、粒状構造混じりのシルト層單一層となる。

埋土からは少量の遺物が出土し、このうち図150-5に示す須恵器杯口身を図化した。その形態や法量から、飛鳥I-1段階に位置づけられる。そして、この段階が遺構埋没時期の上限となる。

23土坑（図149）

調査区西半分の南側で検出された。南北双方を失うため平面形や規模は確定できないが、現況で東西12m、南北1.5m、深さ0.05mを測る。断面形は浅い逆台形で、埋土は單一層となる。上面からは建物1-2の35・73柱穴が掘り込まれるため、これらに先行する遺構と判明する。遺物には図150-1と2の須恵器など少量の土器類がある。1は須恵器杯口身、2は瓦器輪高台部片である。このうち2は、掘立

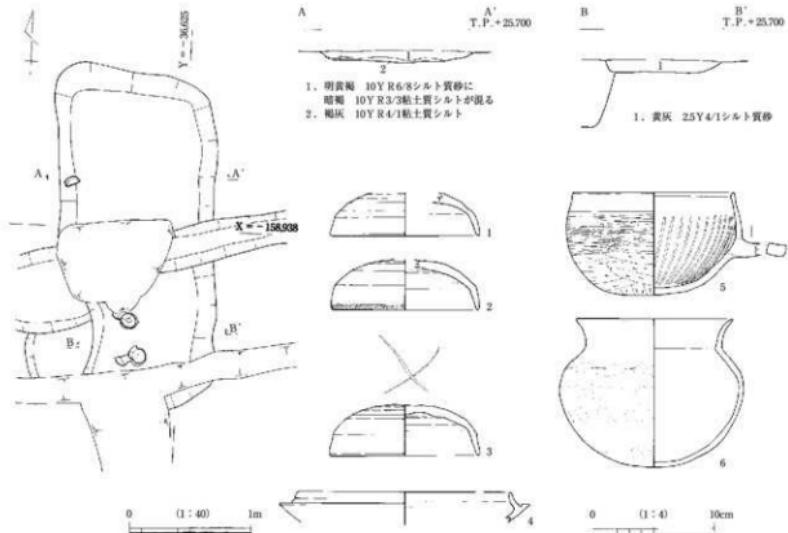


図151 24土坑平・断面および出土遺物実測図

柱建物構築以前の遺構であることが確実なため混入とみなされる。したがって、埋没時期は、1の示す飛鳥I-2段階頃に位置づけられる。なおこの年代観は、掘立柱建物の時期とも矛盾を生じない。

24土坑（図151・図版56）

先述の土坑23から東へ約5m離れた位置で検出された。南西側を欠失するが、平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形になると考えられる。規模は、長さ2.9m、幅1.3m、深さ0.1mを測り、西辺は建物2の48柱穴を一部削り取って掘り込まれる。断面形は偏平な逆台形で、埋土は、A-A'断面に粘性を帯びたシルトの薄層が観察されるため漏水したことをうかがわせる。

南半分では、図151左に示すような状態で土器が出土した。これらの多くは坑底に接し、かつ、ほぼ全形のうかがえるまでに復原できる例が多いため、完形品を埋置したと考えられる。

出土遺物のうち、1から3は須恵器杯H蓋で、2の口縁端部外面には櫛歯状の工具を用いた斜め方向の条線が観察される。4は同器種の身、5は土師器把手鉢、6は同じく壺Aである。

これらの遺物は、4を有蓋高杯とみなし、須恵器杯H蓋の法量や形態、土師器把手鉢の形態や暗文に注目するならば飛鳥I-3段階に位置づけられる。この時期は、建物2の前後関係とも合致する。

25土坑（図149）

前掲の21土坑と重複して検出された。西側を19溝、南側を攪乱孔により破壊されるため、北東隅が隅丸形を呈する以外全容を把握し難い。残存長は東西1.4m、南北1.6mで、深さは0.1mを測る。断面形は浅い皿形を呈し、埋土は上層と下層とに分割される。

出土遺物には図150-3と4に示す杯H身などがある。3は小片のため法量に不確定要素を残すが、形態的には古墳時代後期にまで遡らせて考えても問題はなく、4は飛鳥I-1段階頃のものと考えられる。したがって、遺構の埋没時期は後者の段階と考えることが妥当となる。

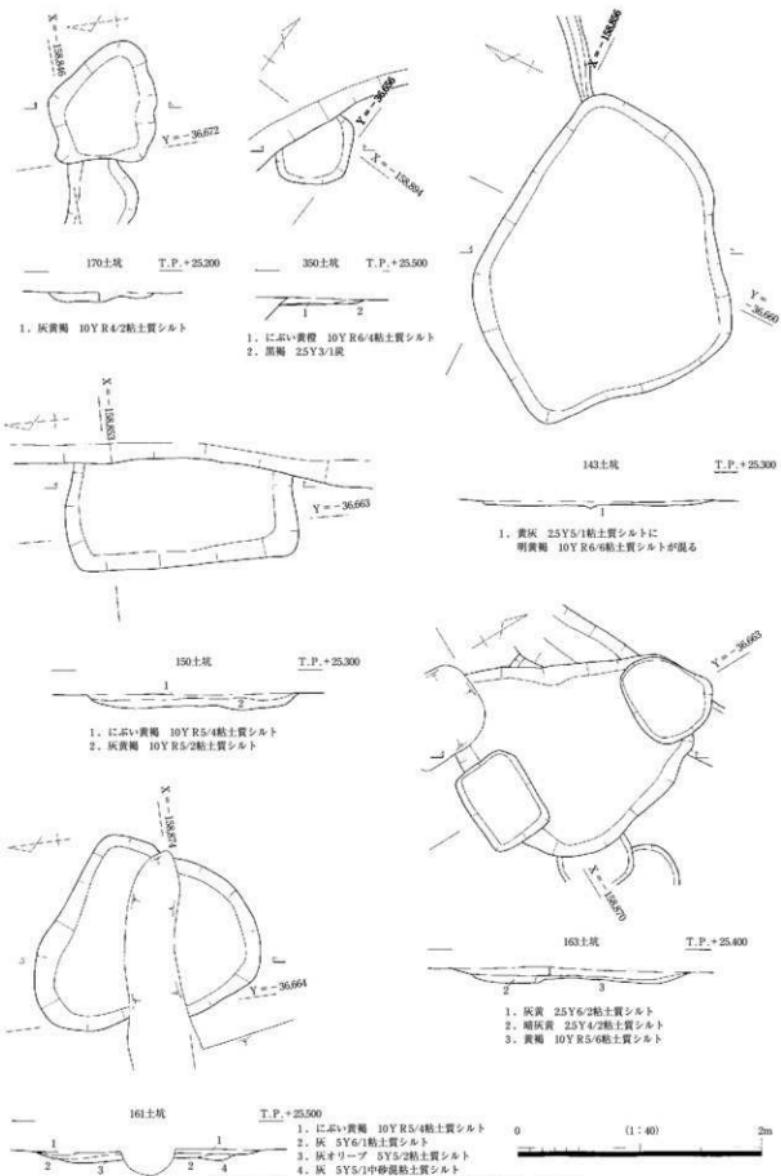


図152 143・150・161・163・170・350土坑平・断面図

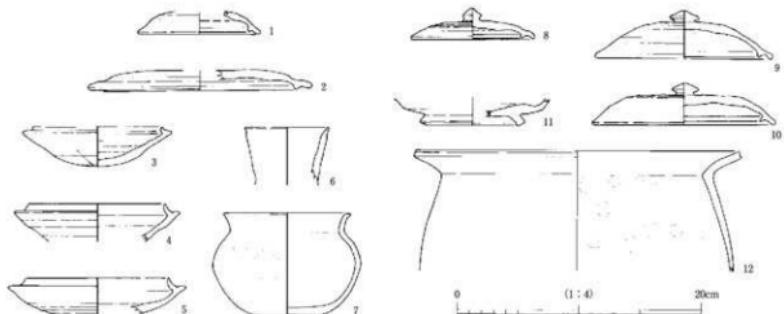


図153 143・150・163・170土坑出土遺物実測図

141 土坑（図149・150）

調査区北西隅からやや南に向かった位置で検出された。建物18の187柱穴と重複し、当遺構の埋土を除去した段階で建物の柱穴掘方を確認した。平面形は、東西に長い不定形を呈し、規模は、長径1.8m、短径1.2m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅い皿形を呈し、埋土は2層からなる。

出土遺物には、図150-6から7に示す土器などがある。6は須恵器杯A、7・8は土師器杯Cで、形態や暗文などの様相から飛鳥V段階に位置づけられる。なお、これと建物18と時期差は僅少である。

143 土坑（図152・153）

調査区北西隅から検出された。平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西2.7m、南北2.1m、深さ0.05mを測る。断面の形状は非常に偏平な皿形を呈し、坑底は平坦となる。埋土は黄灰色と黄褐色が入り混じったような土層で、そこから図153-2に図示する須恵器杯B蓋が出土した。この土器はつまりを欠損するが、その法量や偏平となった器形などから飛鳥IV段階に位置づけられよう。

なお、断面の形状や埋土の様相から、掘り込まれたと考えるよりは、踏み込まれたような様相が看取されること、142井戸が南東に隣接していること、遺物の時期がこれと近接していることから、人の集う井戸端の作業場の空間が結果的に土坑状の窪みとなつたとみなすほうが実態に近いのかも知れない。

150 土坑（図152・153）

調査区北西隅から検出された。南東約3mには前述の143土坑が所在する。平面形は南北に長い隅丸長方形になるとみられるが、東側を145溝に破壊され不分明である。規模は、南北1.9m、東西0.9m以上、深さ0.1mを測る。断面形は、底面にやや起伏のみられる浅い皿形を呈し、埋土は2層に分けられる。

出土した遺物には、図153-1に図化した須恵器杯G蓋などがある。この資料は上位が欠損するため詳細を把握し難いが、その形態的特徴や法量からみて、飛鳥III段階かその直前頃に位置づけられるとみなされる。したがって、遺構埋没時期の上限を、この段階と考えることができる。

161 土坑（図152）

調査区北西隅から約3分の1南に向かった位置で検出された。中央部に擾乱孔が存在するが、全形が隅丸三角形を呈することは判別可能である。規模は東西1.6m、南北1.9m、深さ0.1mを測り、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は4層に細分され、淘汰の進んだ薄層からなることから、徐々に埋積していくと考えられる。この中からは少量の遺物が出土したが、時期の特定できるものはなかった。

163 土坑（図152・153）

前出の161土坑から、北方約2mで検出された。上面からは建物16の284・326柱穴が穿たれている。平面形は隅丸三角形状を呈し、規模は長径2.0m、短径1.6m、深さ0.1m強を測る。断面形は、底面にやや起伏のある浅い皿形を呈し、埋土は2層に分けられる。

出土遺物には、図153-3から7の土器などがある。7が土師器の甕Aである以外、須恵器で占められ、このうち3から5は杯H身、6は平瓶の口縁部である。遺構の時期は、これらの土器より飛鳥I-4段階と考えられる。

170 土坑（図152・153）

調査区北西隅で検出された。平面形は、東西に長軸を持つ不整形で、規模は、東西1.0m、南北0.9m、深さ0.1m弱となる。断面形は、坑底に起伏のある皿形を呈し、埋土は単一層で、そこからは、図153-8から12に示す土器などが出土した。このうち12が土師器の甕A、それ以外が須恵

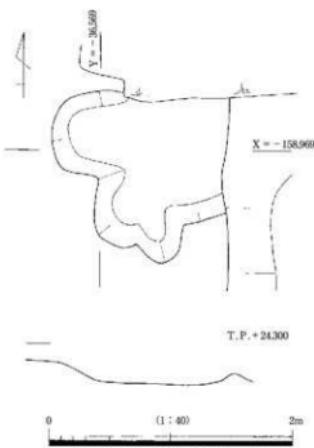


図154 609土坑平・断面図

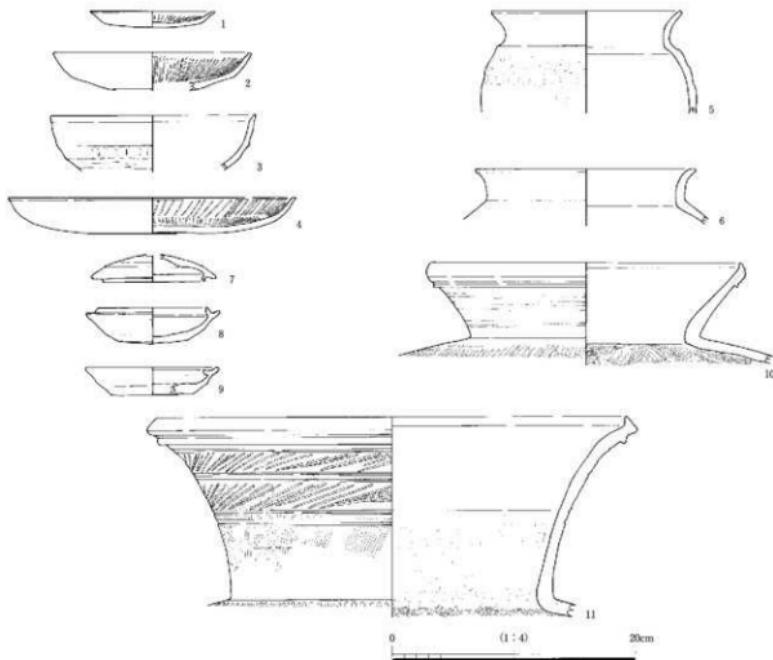


図155 609土坑出土遺物実測図

器となる。このうち8は杯G蓋、9と10が杯B蓋、11が杯B身である。そして、時期は、杯Bが含まれること、その高台径が小さく、明瞭に作出されることから、飛鳥Ⅲ段階に相当するとみなされる。

350 土坑 (図152)

調査区西半部のほぼ中央で検出された。北西隅は13溝の開削により欠失する。

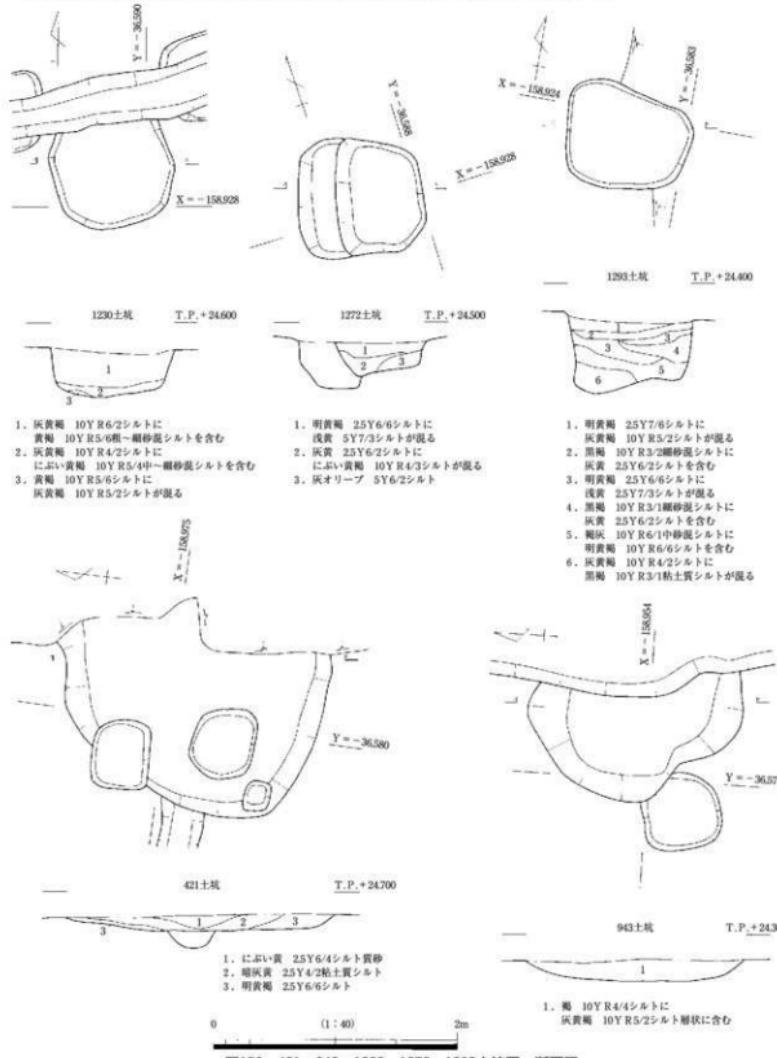


図156 421・943・1230・1272・1293土坑平・断面図

現状での平面の形態は隅丸方形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.4m以上、深さ0.1m弱を測る。断面の形態は浅い皿形を呈し、坑底から壁面にかけては炭の堆積が確認された。それを除去した段階で、わずかに赤変している部分が観察されたため、被熱する環境にあったことをうかがわせた。

このような状況から、工房に付随する炉の可能性を考え、埋土や炭を慎重に観察したが、鍛造剣片や各種の残滓など生産に関連する資料をみいだすことはできなかった。

421 土坑（図156）

調査区南端部の中央からやや東で検出された。東部は攪乱孔により破壊を被り、消滅している。平面の形態は不整円形を呈し、規模は現存値で東西1.7m、南北2.2m、深さ0.15m弱を測る。断面形は、南肩の角度が急な浅い皿形を呈する。埋土は3層に分けられ、堆積状況より周囲から中央に向かって埋積し

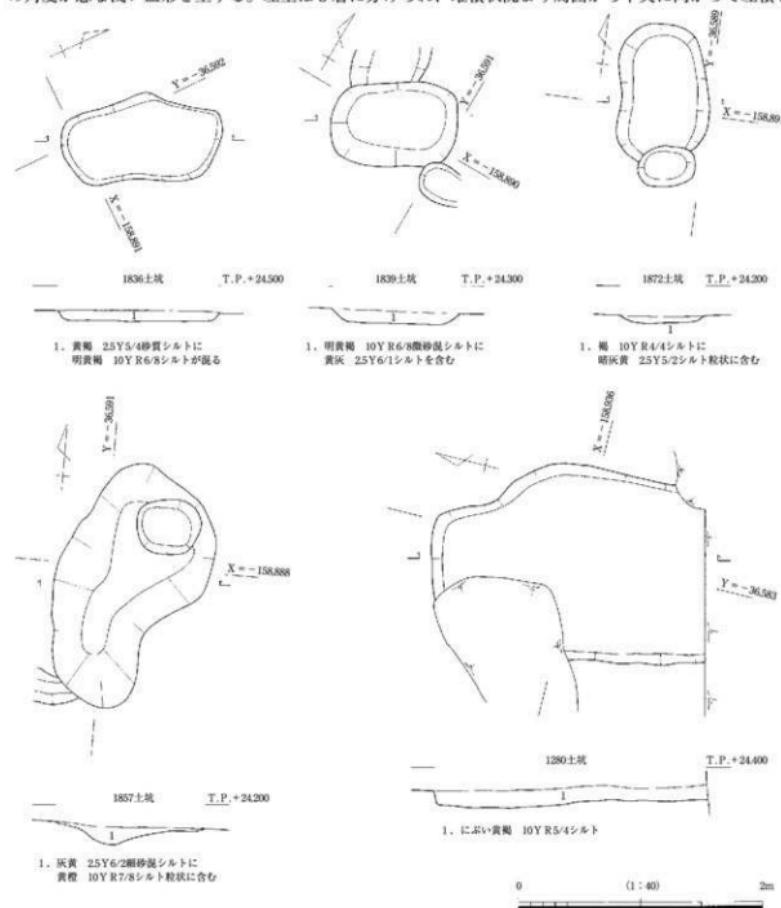


図156 1280・1836・1839・1857・1872土坑平・断面図

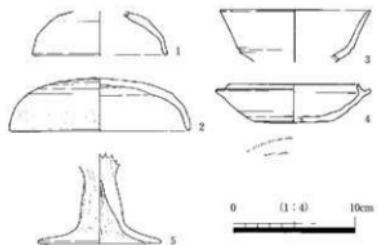


図158 1272・1293・1839・1857・土坑出土遺物実測図
の平面形は柏手状の不整形となり、規模は東西・南北とも1.4m、深さ0.1mを測る。埋土については、400溝との関係を追求するため徐々に掘削している途上でそれが途切れ、別遺構と判断したため記録できていない。あるいは併存の可能性も残る。

出土遺物は非常に多く、そのうち代表的なものを図155に示した。1から6は土器で、1と4はそれぞれ小形と通有規格の皿A、2は高杯C、3は杯C 5と6は河内型の壺Aである。7から8は須恵器で、7は杯G蓋、8と9は杯H身、10と11は大形の壺Aである。これらの土器の特徴は、杯H身の矮小化が著しいこと、8の壺の口縁部下端に段が形成されていることなどであり、これらの様相から、その時期を飛鳥II-2段階頃に位置づけられる。

609 土坑（図154・155）

調査区南東隅から北に約10mの位置で検出された。北を擾乱孔、東を400溝によって失う。後者との層界は不明瞭で、その識別は不可能であった。現況での平面形は柏手状の不整形となり、規模は東西・南北とも1.4m、深さ0.1mを測る。埋土については、400溝との関係を追求するため徐々に掘削している途上でそれが途切れ、別遺構と判断したため記録できていない。あるいは併存の可能性も残る。

943 土坑（図156）

調査区南半部中央から東によった位置で検出された。平面形は不整形を呈し、規模は東西0.9m以上、南北1.8m、深さ0.2mを測る。断面形は皿状となり、埋土は1層のみで、葉理状の構造が観察されることから、自然に埋没したとみられる。遺構の時期は、特徴的な遺物が出土しておらず不明だが、建物46の1347柱穴掘方によって一部が削られ、東部を404溝に消滅させられていることから、それらの時期である飛鳥II-2段階以前の遺構と位置づけられる。

1230 土坑（図156）

調査区中央から南東へ約30mほど向かった位置で検出された。北端は94溝によって一部失われるが、平面形は不整円形となる可能性が高い。規模は、東西1.0m、南北0.9m以上、深さ0.3mを測る。

断面形は浅い皿形を呈し、埋土は、暈状となった混合土が観察されるため、埋め戻された可能性が考えられる。特徴的な遺物が出土しなかつたため、遺構の時期は不明である。

1272 土坑（図156）

上記の1230土坑から東に約1m離れた位置で検出



1. 灰質 25Y6/2砂質シルトに
明黄質 25Y6/6シルト粒状に含む
2. 明黄質 25Y6/6シルトに
灰質 25Y6/2細砂質シルトを含む
3. 明黄質 25Y6/8P-細砂質シルト

図159 1878土坑平・断面図

された。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.0m、短辺0.7m、深さ0.3mを測る。断面形は隅丸の逆台形を呈し、埋土は混合されたような土層である。出土遺物には、図158-5に図示した土師器高杯の脚部がある。形態から飛鳥時代のものとみられ、遺構の埋没時期を当該期に比定できる。

1280土坑（図157）

調査区南部の保存地区東側に隣接して検出された。南側と北西隅を擾乱孔により失うが、平面形は隅丸長方形となるとみられる。

現状での規模は長辺2.2m、短辺1.6m、深さ0.15mを測る。断面形は偏平な矩形で、埋土は単一層である。

遺構の時期は、特徴的な遺物が出土していないため不明だが、埋土から推察して飛鳥時代となる可能性が高い。

1293土坑（図156）

先述の1280土坑から北方10mの位置で検出された。平面形は、東西に長い隅丸の台形様を呈し、規模は長辺1.0m、短辺0.9m、深さ0.9mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、坑底には段差が形成されている。

埋土は、数種類の土層を混合したような土層が堆積していることから、埋め戻されたことが考えられる。

出土遺物には図158-2に図示する須恵器杯口蓋がある。口縁部外面にはハケ状工具を用いた斜め方向の擦過痕が観察され、口径が14cmを大きく凌駕することや全体的な形狀から、T K43型式に位置づけられる。よって、遺構の埋没時期は、古墳時代後期末葉が上限となる。

1836土坑（図157）

調査区中央から北東約20mの位置で検出された。平面形は南北方向に長い不整な梢円形で、規模は長辺1.3m、短辺0.7m、深さ0.1mを測る。断面形は偏平な逆台形を呈し、埋土は単一層となる。

時期判別可能な遺物が出土していないため時期は不明ながら、埋土の様相から飛鳥時代のものと考えられる。

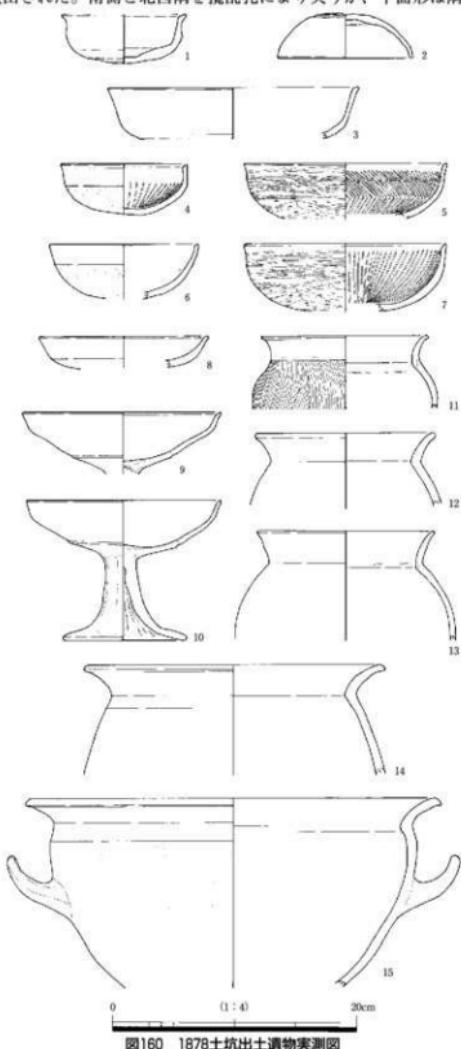


図160 1878土坑出土遺物実測図

1839土坑（図157）

前出の1836土坑から南方15mの位置で検出された。平面形は、北東から南西方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。断面形は、偏平な逆台形を呈し、埋土は単一層である。埋土からは若干の遺物が出土し、うち須恵器杯口身1点を図158-1に図化した。その形態や法量から飛鳥I-4段階に位置づけられ、この段階が造構の埋没した上限時期となる。

1857土坑（図157）

調査区東半の中央からやや北よりで検出された。平面形は、北東から南西に長軸を持つ不規則な楕円形を呈する。規模は、長径2.0m、短径1.1m、深さ0.15mを測り、断面形は偏平な漏斗状となる。埋土は1

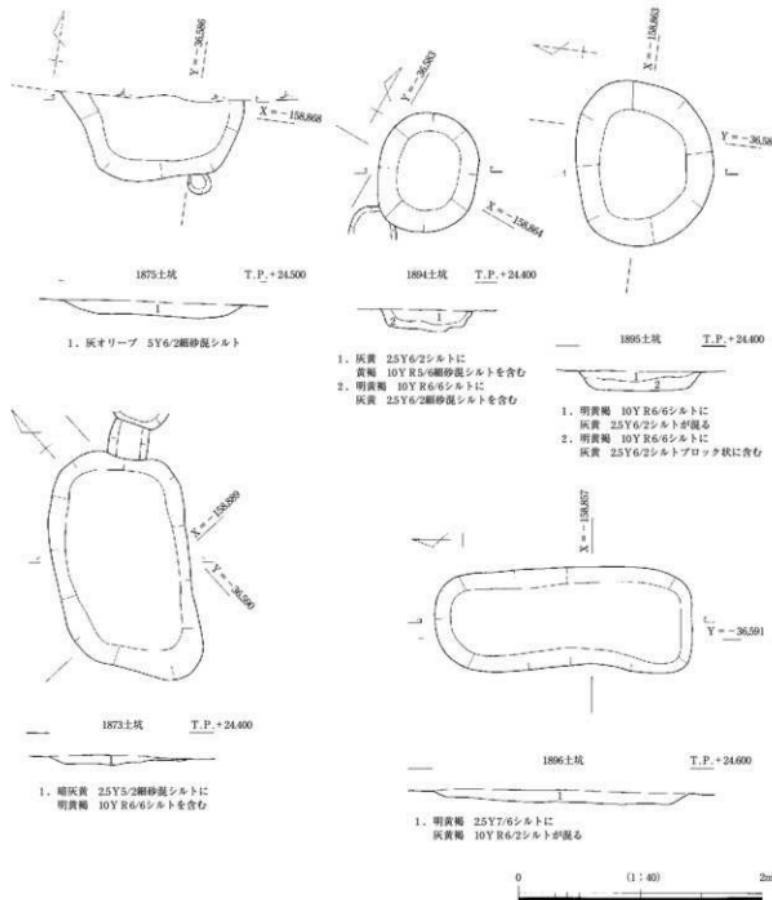


図161 1873・1875・1894から1896土坑平・断面図

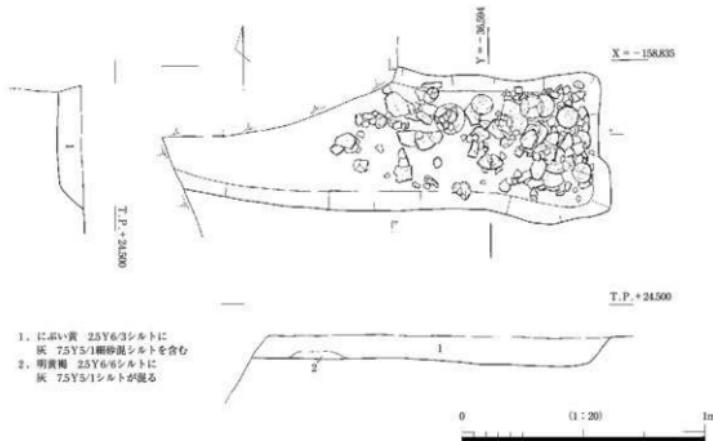


図162 3004土坑遺物出土状況・断面図

層で、これを除去した段階で建物74の1858柱穴を検出した。その中から、若干の土器が出土し、うち図158-3と4に示す2点の須恵器を図化した。3は縁の口縁部、4は杯H身で、形態的特徴や法量から飛鳥I-3段階と考えられる。よって、造構が埋没した上限の時期をこの段階に設定できる。

1872土坑（図157）

先述の1857土坑から南東約1.5m離れた位置で検出された。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.7m、深さ0.05mを測る。断面形は偏平な皿形で、埋土は粒状構造を含む土層のみからなる。詳細を知り得る遺物がなく時期は不明だが、埋土から類推して飛鳥時代の可能性が高い。

1873土坑（図161）

前掲の1836土坑の北東約1mで検出された。平面は隅丸の平行四辺形状を呈し、規模は長辺1.8m、短辺1.1m、深さ0.1m弱を測る。断面は薄い皿状を呈し、坑底には起伏がみられる。埋土は単一層で、2つの土が混じり合ったような状態となっている。時期については、特徴的な遺物が出土しなかつたため不明であるが、埋土の様相や周辺の状況から察して、飛鳥時代の造構である可能性が高い。

1875土坑（図161）

調査区東半部の北から南へ約4分1の位置で検出された。北側を攪乱孔で失うが、現状での平面形は隅丸の逆台形を呈する。規模は東西1.5m、南北0.7m、深さ0.1mを測り、断面形は皿形で、埋土は単一層となる。時期判別可能な遺物がなく確定的ではないが、埋土の様相から飛鳥時代とみなされる。

1878土坑（図159・160）

調査区北東隅から南方約35mの位置で検出された。北側を攪乱孔により失うが、平面形は不整な隅丸四角形を呈すると考えられ、規模は東西2.3m、南北1.6m以上、深さ0.1mを測る。断面の形状は偏平な逆台形を呈し、穴底はほぼ平らである。埋土は3層に細分されるが、直立した状態で坑底に接する土器片が最上層にまで達していたことから、比較的短期間のうちに埋没したものとも考えられる。

出土遺物は比較的多く、そのうち15点を図160に図示した。1から3は須恵器で、1と3は小形と大形の鉢、2は杯H蓋である。4から15は土師器で、4・6・8は各規格の杯H、5と7は杯A、9と10

は高杯C、11から14は壺Aで、11以外は河内型に分類され、15は鍋Bである。これらのうち、2の須恵器は法量や形態から飛鳥I - 4段階とされようが、3の須恵器大形鉢を含むこと、5のような2段放射線を施し、口縁が上位に立ち上がる杯Aが含まれることから、飛鳥II - 1段階にまで下がる要素も看取される。したがって、主体は後者にあるものとみなし、この段階に遺構が埋没したと考えておきたい。

1894土坑（図161）

前述の1878土坑より北東約5mの位置で検出された。平面形は北西から南東に長軸を持つ楕円形で、規模は長径1.0m、南北0.8m、深さ0.2mを測る。断面形は隅丸の逆台形を呈し、壁に沿うようにして2層が堆積する。時期を示す土器は出土していないが、埋土の様相より飛鳥時代と考えられる。

1895土坑（図161）

先の1894土坑北側に隣接して検出された。平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は東西1.3m、南北1.1m、深さ0.15mを測る。断面形は偏平な逆台形で、埋土は粒状構造を含んだ土層である。

遺構の時期は、特徴的な土器がみられないため不明だが、埋土の様相より飛鳥時代の可能性が高い。

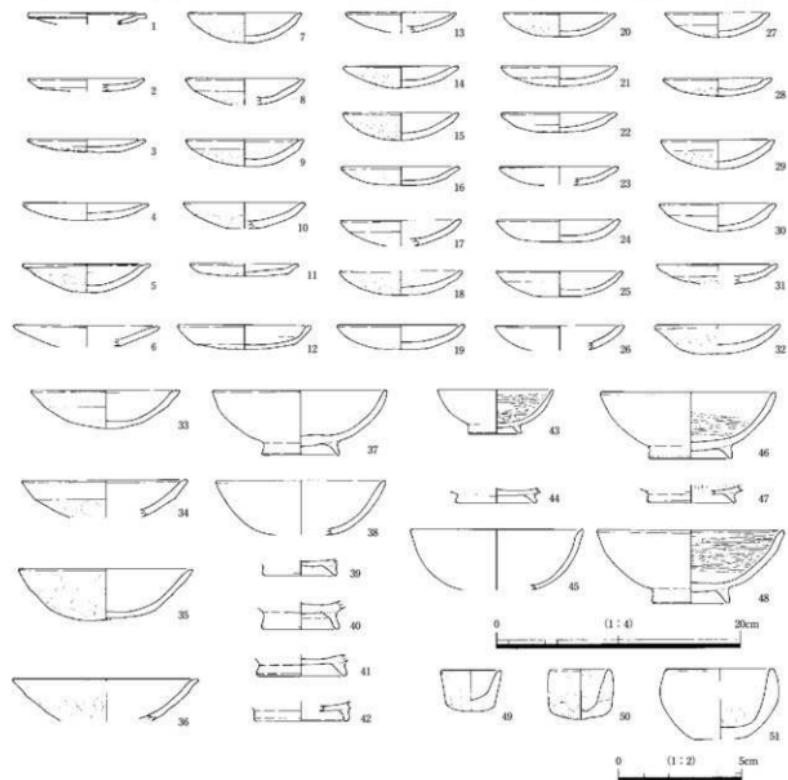


図163 3004土坑出土遺物実測図

1896土坑(図161)

調査区北東部の保存樹木北西側で検出された。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は、長辺2.1m、南北0.8m、深さ0.1mを測る。断面形は偏平な逆台形を呈し、埋土は2種類の土を混合したかのような土層である。遺物からは遺構の時期を知り得ないが、埋土から飛鳥時代と考えられる。

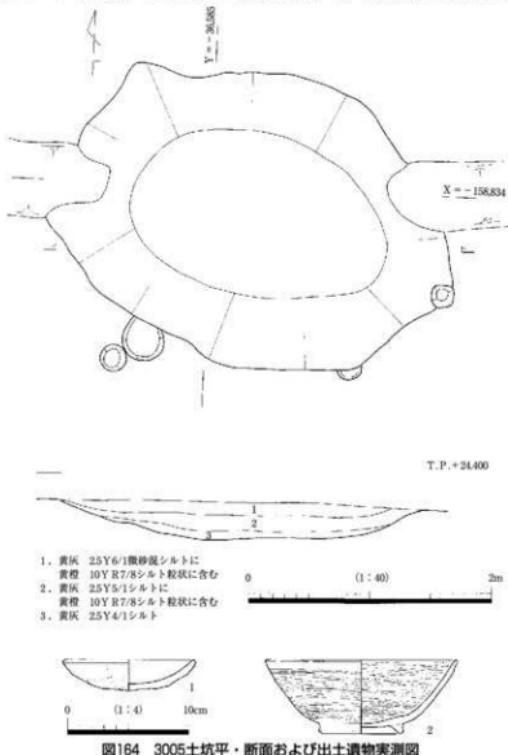
3004土坑(図162・163・270-4、5、図版57)

調査区北端の中央からやや東で検出された。平面形は北西部を攪乱により失うため確定できないが、東西方向に長い隅丸長方形となろう。現状での規模は、東西1.9m弱、南北0.6m、深さ0.1mを測り、断面形は坑底の平らな隅丸の逆台形を呈する。

埋土は基本的に1層で、その中の東側に集中して土器などが出土した。その状況は、図162や図版57に示すようなもので、完形品が多いのが特徴である。

出土遺物は、図163や270に示すような土師器、黒色土器、鉄製品で、図化可能なものをほとんど掲載した。このうち、図163-1から32は土師器小皿で、1が白色を呈し精良な胎土となる以外、砂粒を非常に多く含み粗雑である。器形的には、1が「て」の字状口縁、2や3が偏平で円盤状、7が口縁端部を真っ直ぐ作出し、11が口縁部に強いヨコナデを施すことによって段を形成する。同図33から36は杯である。形態は大同小異で、胎土は非常に粗いものと共通する。なお、35は器形や外面調整は、当該期に盛行する南河内に特徴的な土師器と通ずるが、胎土はまったく異質である。37から42は土師器の碗で、胎土は前記の粗雑な例と同じで、器壁は非常に厚く粗野な作りとなる。43から48はA類の黒色土器で、形態的には43の小形のものと、それ以外の別がある。一部を除いて胎土や成形技法は上記と同様に粗雑だが、44と47の2点のみは、胎土が精良で器壁も薄く、内面見込みにまで密なヘラミガキが施されるなど、通有の黒色土器と違和感がない。49から51は土師器の手捏土器で、49・50の内外面は黒色を呈し、黒色土器B類を想起させる。

以上の土器は非常に局地性が強いため、黒色土器に注目した場合、A類のみでB類を含まないこと、高台径が小さいわりに高いことなどからみて、10世紀後葉から末頃



に位置づけられるものと考えたい。

鉄製品には図270-4と5がある。欠損部が多いため双方から形状を補完すると、長径約6cm、厚さ0.2cmの心葉形に復原される。用途は不明だが、非常に脆いことから鉄素材の可能性も考えられる。

3005土坑（図164）

調査区北東隅で検出された。平面形は、東西方向に長い不整形な梢円となる。規模は、東西3.4m、南北2.4m、深さ0.3mを測り、断面の形状は浅い擂鉢状となる。

埋土は3層に細分され、最下層には細粒質の土層が筋状に堆積しているため、滲水した環境にあったことがうかがえる。また、この土坑は、建物82の柱穴と重複しているが、埋土上面でこれを確認できしたことから土坑の方が古い。

埋土からは少量の土器が出土し、このうち2点を図164下段に図示した。1は土師器の小皿で、2は黒色土器B類の碗である。このうち後者は焼成法や、形態的特徴から11世紀後葉のものと考えられる。

第6項 落ち込み

平面形態や肩口を明確に把握し難いものを落ち込みとした。このうち、特徴的なものを以下に記す。

147落ち込み（図165）

調査区北西部で検出された。北部は調査区外にのびる。断面観察や、出土遺物の内容から、溝3-1埋没後に形成されたことは明らかである。平面は南北に長い隅丸方形状を呈し、規模は東西1.4m、南北2.0m、深さ0.05m強を測る。断面形は偏平な隅丸の逆台形で、埋土はシルト質土層が堆積する。

出土遺物のうち土器6点、瓦1点を図化し、図165右側に掲載した。1から3は須恵器で、1は杯G身、2は杯B蓋、3は外面に回転ヘラミガキが施された皿Aである。4から6は土師器で、4は皿A、5は杯A、6は壺である。7は丸瓦で凸面に縄目タキ、内面に布目圧痕が観察される。これらの遺物

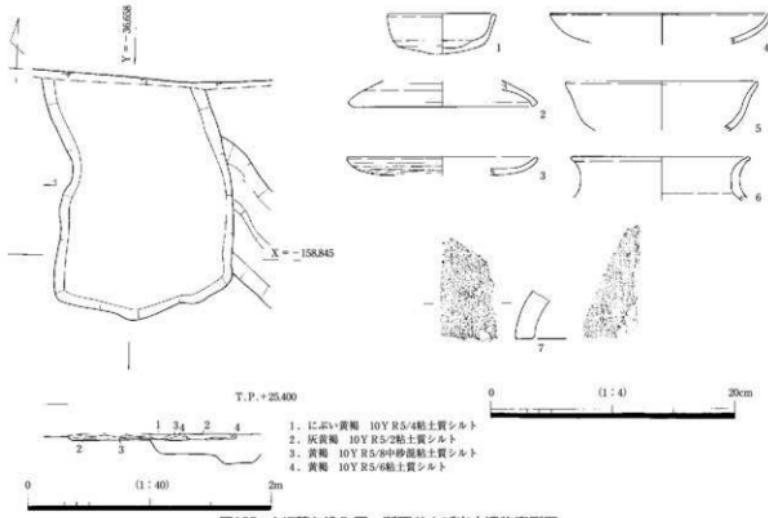


図165 147落ち込み平・断面および出土遺物実測図

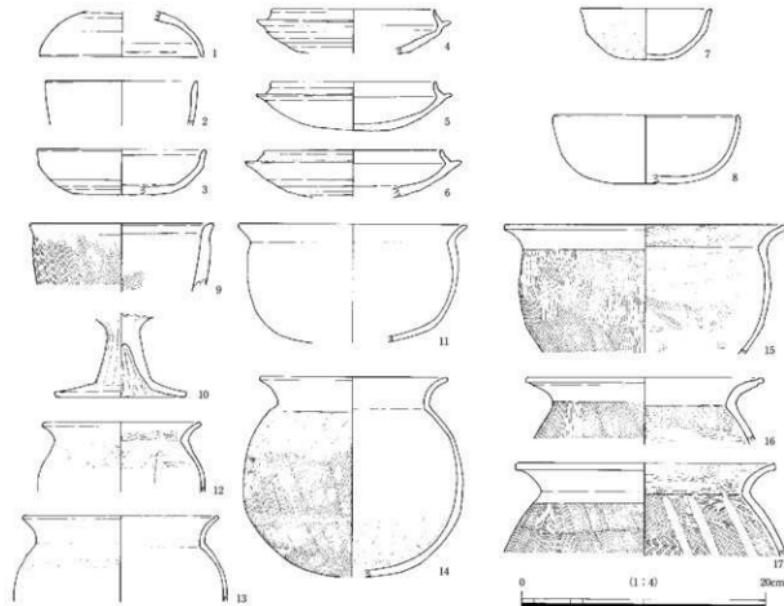
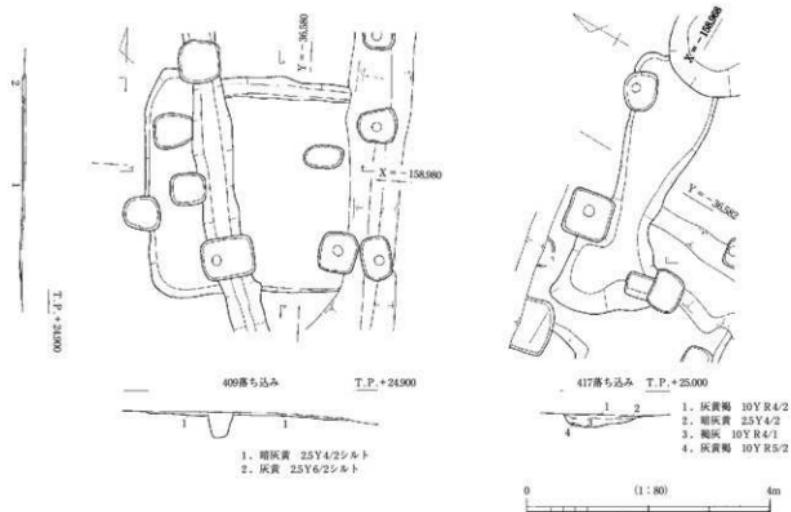


図166 409・417落ち込み平・断面および417落ち込み出土物実測図

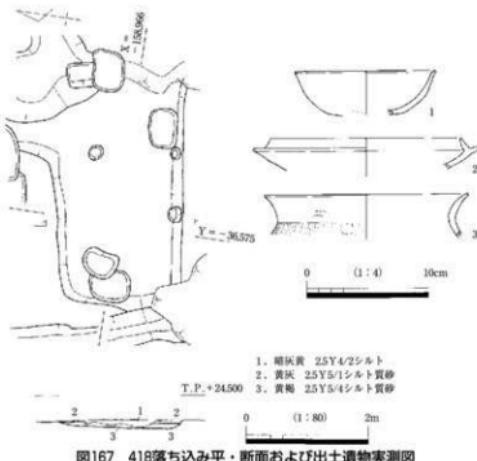


図167 418落ち込み平・断面および出土遺物実測図

平面形は隅丸方形を呈するものとみられ、規模は東西3.8m以上、南北3.4m、深さ0.05m未満となる。このような形状や規模となることから、検出段階では小形の堅穴住居との可能性を想定し調査に着手した。しかし、北側の壁際に壁溝とも考えられる小溝が検出されたのみで、底面は平坦ではあるが東側に傾斜し、また、壁面の立ち上がりが確認できないほど浅い状態となり、竈や炉など火處に関連する施設も検出されなかったことから落ち込みとした。

埋土から特徴的な遺物が出土しておらず直接的に時期を知る手立てではないが、これに後出する408溝より飛鳥I-1段階頃までの土器が出土したため、少なくともこの時期以前となるのは確実である。

417 落ち込み（図166）

先述の409落ち込みから北東約12m離れた位置で検出された。西側に隣接して408落ち込みが所在する。埋土上面では、建物31の812柱穴や、建物33の634・651柱穴が検出された。平面形は、東西に長軸を持つ不整形な溝状を呈し、断面形は皿形を呈す。規模は長さ4.4m、幅1.6m、深さ0.2mを測る。

出土遺物には図166下段に図示した土器がある。このうち、1から6は須恵器で、1は杯口蓋、2と3は鉢、4と5は杯口身、6は下位に透かし孔が遺存するため有蓋高杯の杯部となる。7から17は土師器で、7と8は規格の異なる杯C、9は鉢、10は高杯脚部、12・13、および、14・16・17は壺Aで、このうち12と13は河内型に分類される。そして、11と15は鍋Aとなる。これらの遺物は、一部の須恵器杯類が古い様相を持つものに対し、土師器杯に飛鳥I-2段階の様相が看取されるため、上限は飛鳥I-1段階に遡るが、最終的にはI-2の段階に埋没したと考えられる。

418 落ち込み（図167）

前掲の417落ち込みの西側に接して検出された。東側を攪乱孔と417落ち込みによって失い、埋土上面からは建物31の624・812柱穴が掘り込まれている。このため全容は不明だが、現況での平面形は、北側の張り出した東西に長い隅丸方形を呈す。規模は東西3.8m、南北2.8m、深さ0.1mを測る。断面の形状は、底部が平坦な隅の丸い偏平な逆台形を呈し、埋土は3層に細分される。

出土遺物には図167右に示す3点の土器などがある。1は土師器杯C、2は杯口身または有蓋高杯で

は、1は飛鳥II段階となるが、須恵器では2がかえりを失い大形化しており、3は金属器模倣形態となる。また、土師器では5が形態的に新しく位置づけられ、6の口縁部下位の屈曲部も明瞭に作出される。さらに、瓦には7のような整形手法が用いられていることから、全体的には8世紀前葉の様相が強い。よって、遺構の時期は、奈良時代とみなされる。

409 落ち込み（図166）

調査区南端部のほぼ中央で検出された。東辺を攪乱孔により滅失し、埋土上面より408溝や建物27の756・757柱穴などが掘り込まれている。

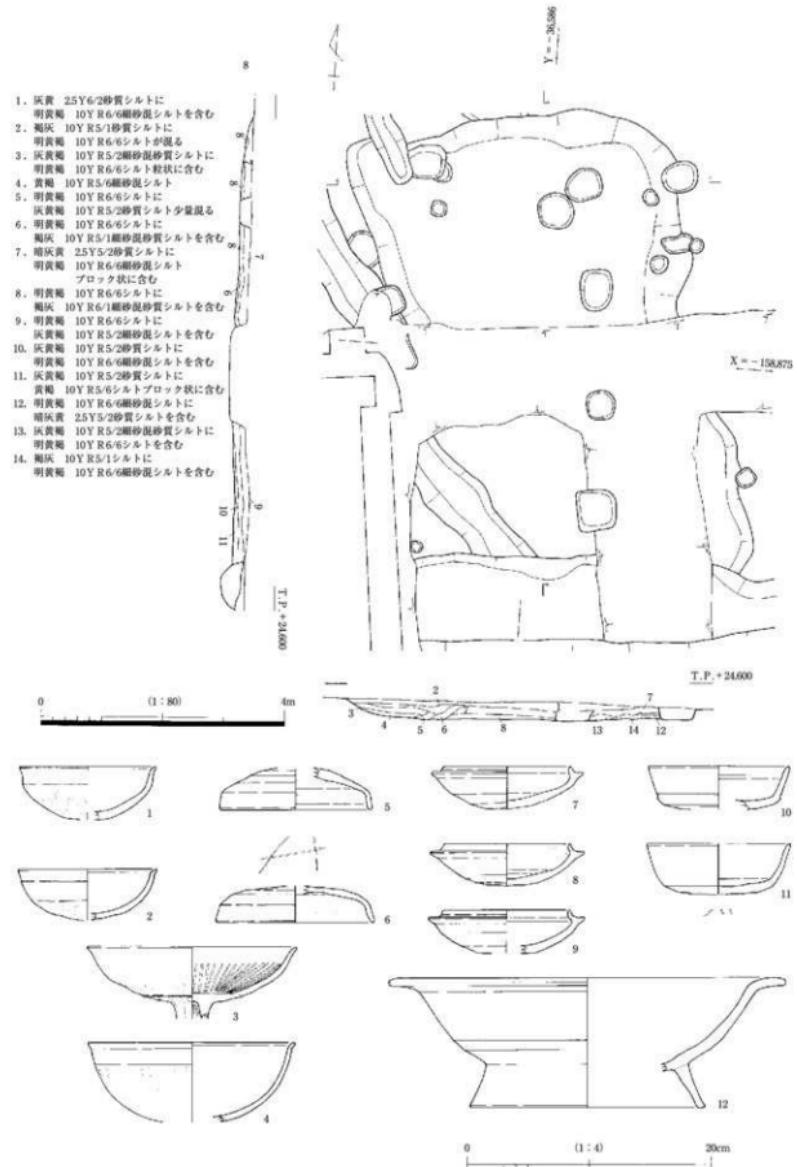


図168 1820落ち込み平・断面および出土遺物実測図

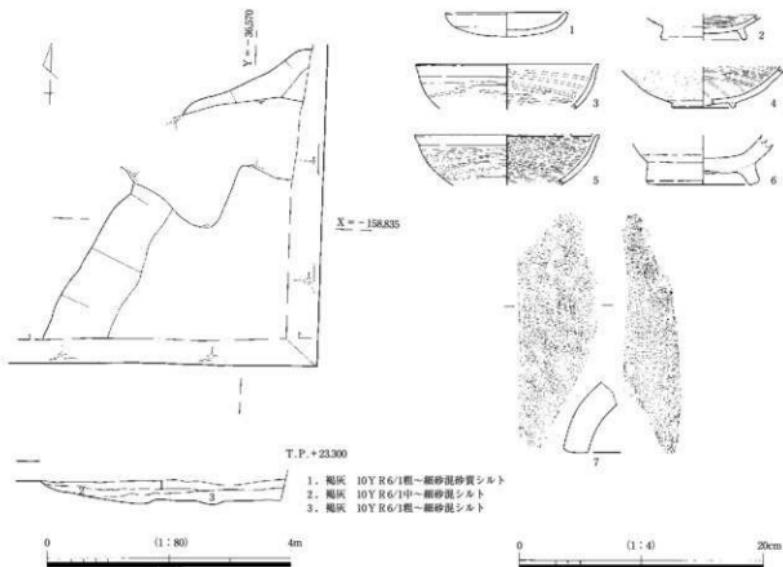


図169 1908落ち込み平・断面および出土遺物実測図

あるが小片のため特定できない。3は土師器の壺Aである。このうち1はその形態から飛鳥I段階前半に位置づけられ、ここから、遺構の埋没時期を当該期とすることが可能となる。この時期比定を建物31出土遺物と比較した場合、それが飛鳥II段階の前半代であることから、その関係に齟齬は生じない。

1820落ち込み（図168）

調査区東半分の北から約3分の1の位置で検出された。南側を1819溝、南西側を1821溝で破壊されて全体の形状は不明だが、平面形は南北に長い不整形な隅丸長方形様を呈するとみられる。

規模は東西5.4m、南北7.3m、深さ0.3mを測る。断面形は偏平な皿形を呈し、底部は平らに掘削される。埋土は大きく3層に分割され、その上位を除去した段階で建物75の1886から1889柱穴を確認した。

遺物には土器などがみられ、そのうち12点を図168下段に図化した。1から4は土師器で、1・2・4は大きさの異なる杯C、3は高杯Cである。5から12は須恵器で、5と6が杯H蓋、7から9が同器種の身、10が無蓋高杯、11が杯G身、12が大形の脚付鉢である。これらの土器は、その法量や形態的特徴から飛鳥I～2段階に位置づけられ、これらから、落ち込みが埋没した時期の上限が知れる。

1908落ち込み（図169）

調査区北東際で検出された。平面形は北西部を除いて調査区外となるため不明である。現況の規模は、東西4.0m、南北4.8m、深さ0.4mを測る。断面形は浅い皿形を呈し、底面はやや起伏を持つ。埋土は3層に分割され、ここから図169右のような土器類が出土した。

これらのうち、1と6は土師質土器で、2から5は瓦器、7は瓦である。1は小皿で、端部は丸く仕上げられる。2から5は瓦器碗で、口縁から底部にかけての部位片がある。6は高台部片で、形態や器壁の厚さなどから類推して鉢となる可能性が高い。7は丸瓦の側縁部片で、凸面はタタキを施した後こ

れを丁寧にスリ消し、凹面には布目が観察される。

これらの遺物は、瓦が奈良時代前期まで遡る特徴を持つが、瓦器碗やその他の土器については、12世紀中葉前後に位置づけられる。

よって、遺構の埋没した時期の上限は、この段階であるとみなされる。

第7項 ピット

調査区内から検出された比較的小規模な遺構の中で、柱痕など柱を設置した様相がまったく看取されず、確実にそれらと区別できるものをピットとして認識した。

そのうち特徴的なものを以下に記す。

1316ピット（図170、図版58）

建物34と建物41のほぼ中間で検出された。附近に飛鳥時代の遺物包含層が良好に遺存していたため、その上面から確認することができた。平面形は、東西にやや長い不整円形を呈し、規模は東西0.4m、南北0.35m、深さ0.2mを測る。

埋土は、図170に示すように3層に細分されるが、上位の2層は、その土質や堆積状況から、下位の層が堆積してから後、その隙間に周囲から土壤が流入したような状況であった。

上位からは、図170や図版58に示すように、完形の瓦器碗と土師質小皿それぞれ2点が重なるような状態で出土した。その様相から遺構が埋没する最終段階にこれらを重ねて埋設したものとみなされ、よって、この遺構の性格は、土器などを納めるために掘削された埋納ピットである可能性が高い。

そして、瓦器碗の形態や暗文に注目した場合、双方とも12世紀前葉の特徴を有していることから、ピットを掘削し、土器を埋納する一連の所作がこの時期に行われたことがうかがい知れる。

このほか、ピットや柱穴から出土した遺物を図171に一括して掲載した。それぞれの遺構番号については観察表を参照していただくこととし、主要なものとの特徴と全体的な傾向について以下に記す。

遺物の種類は土師器や須恵器が主で、これに1の土師質土器、4の黒色土器A類、2・5・6の瓦器が含まれている。器種は1と2が小皿、3から6が平安時代の碗で、5の瓦器碗の見込みには平行線暗文、6の同器種には格子状暗文が施されている。7・13・17、および、27から33は、須恵器杯H身で、各種形態のものがある。12・16は同器種の蓋、9は碗、10は櫛齒状工具を用いて縦位の直線紋を施す瓶口縁部、11は高杯の蓋である。8・14・15、および、34から36の6点は土師器杯C、18は今回の調査では検出例の少ない蓋のつまみ、20と21は河内型の甕A、21と22は甕G蓋、23は同器種の身、24が甕C蓋、

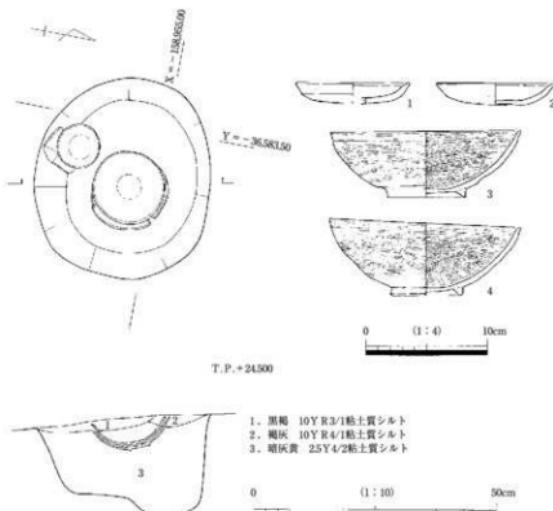


図170 1316ピット平・断面および出土遺物実測図

(1 : 10) 50cm

0 (1 : 10) 50cm

1. 黒褐 10YR3/1粘土質シルト
2. 黑褐 10YR4/1粘土質シルト
3. 單灰質 25Y4/2粘土質シルト

T.P.+24.500

Y = -36.58150

X = -36.58150

— 223 —

25と26が古墳時代後期と考えられる高杯蓋、37が鉢B、38が瓶の口縁部である。

これらの遺物の時期は、古いものでは11の高杯蓋や33の須恵器杯H身のように、古墳時代後期のTK43型式のものがあり、つづいて、27から30の須恵器杯H身や、21から30の杯G、34から36の土師器杯Cのような飛鳥時代全般の土器、そして、新しいものでは、5の瓦器椀のような12世紀中葉までのものが含まれる。この時期的傾向は、検出された他の遺構の時期とも符合しているため、これらのピットが、建物を中心とする一連の環境の下で形成された状況を反映しているといえよう。

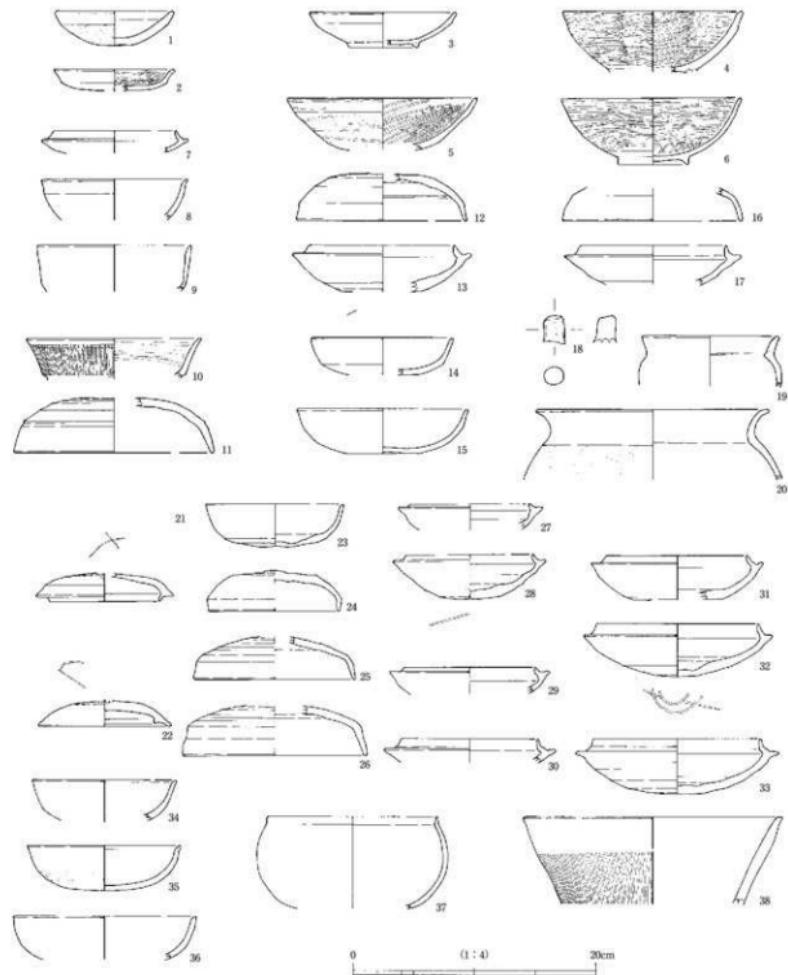


図171 柱穴出土遺物実測図

第8項 溝

調査区内全域より各種の溝が検出された。微地形的見地からこれらの溝を分類した場合、等高線に直行・平行・斜行するものの別がある。時期変遷の中にこれを投影してもその出現順序は同じで、地形に働きかける労力の時代的変移がみてとれる。

なお、記述の順序は、図を掲載したものからとしたため、必ずしも番号順とはなっていない。煩雑となることをご寛恕願いたい。

7001溝（図173、図版7-2）

調査区北西端で検出された南北溝で、南から北へ流下する。また、等高線に斜行して直線的にのびていることから、人工的に開墾されたことは明らかである。規模は幅2.7m、深さ0.6mで、検出長は20mを測る。断面形は偏平な「U」字形を呈し、その中間にはゆるやかな段差がみられる。埋土は5層に分割され、堆積状況や土質から、下層より順次自然埋没したと考えられる。出土した遺物には須恵器や土師器のほか、瓦器や、常滑焼の破片などがある。これらは量的にも少なく細片化しているため、時期を限定し難いが、新しいものは中世段階に比定されるため、この時期までに埋没したものと考えられる。

3-1溝（図173・175~178・182、図版61

-1~4）

調査区北西部を南東から北西に向かって直線的に流下し、その方向は周囲の等高線にはほぼ平行する。検出長は約40mで、途中、樹枝状にのびる一回り小形の溝を収束するような形で1本の溝となる。これらについては、3-1溝に繋がる一連の溝と位置づけたため、枝番号を付して順次、後述する。

断面形は、図182に示す隅丸の逆台形から矩形に近い形態を呈する。埋土はやや複雑な堆積状況であるが、いずれもシルト質の強い土層であること、最下層にやや粘性を帯びたシルトが水平様に堆積している点で共通し、流量の少なかったことをうかがわせる。

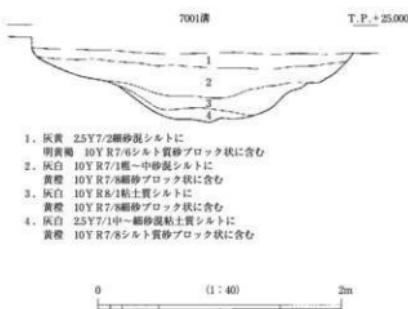
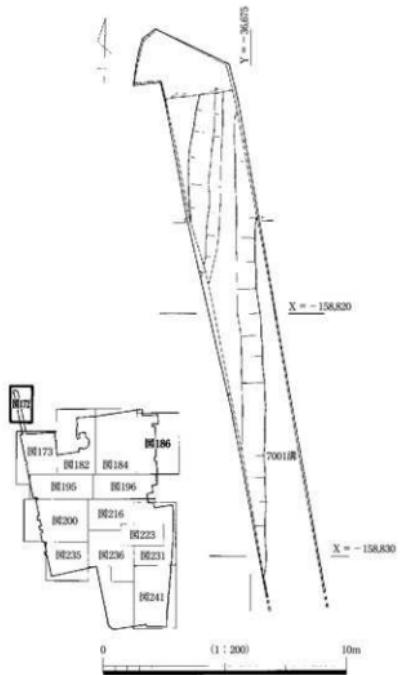


図172 7001溝平・断面図

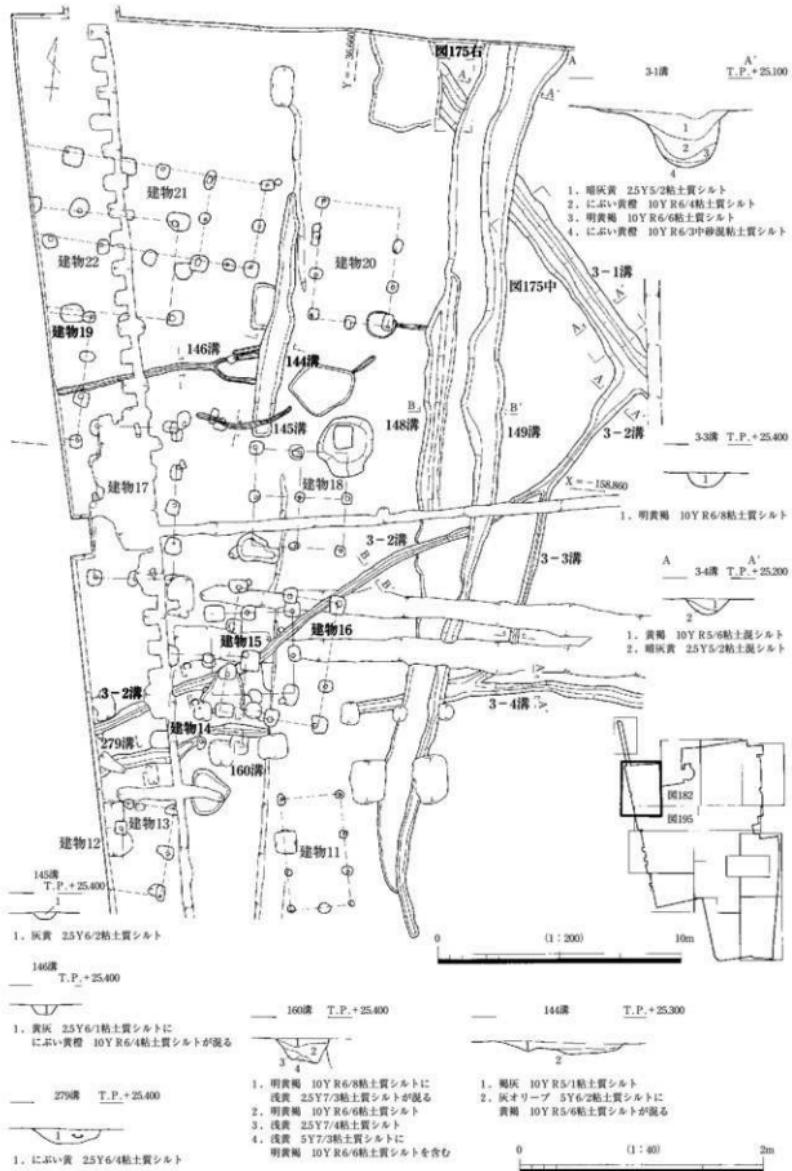


図173 3-1から3-4・144から146・148・149・160・279溝平・断面図

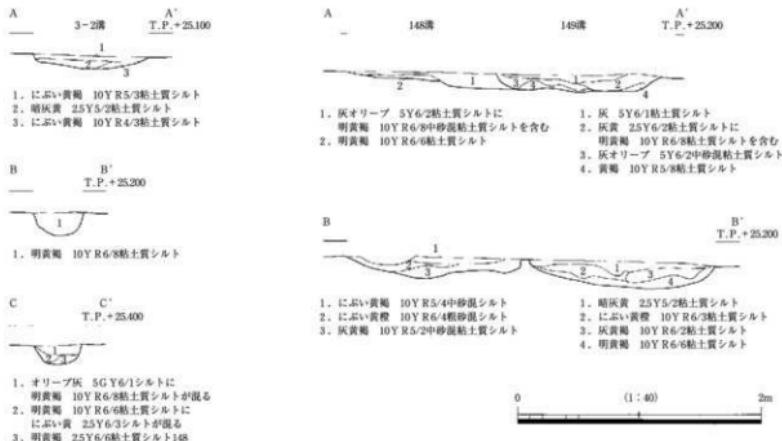


図174 3-2・148・149溝断面図

そして、基本層序第2層を除去し、遺構検出を行っている段階で、図175や図版61-2・3に示すような状態で須恵器片が敷き詰められるようにして露呈はじめ、断面からこれらを観察した結果、埋土の最上位に層をなして堆積していることを確認した。これらを接合した結果、図177に示す2点の壺がほぼ完形となり、他に図176-6や8と同一個体と目される破片も多数得られた。後者については、全形のうかがえる状態にまでは復原できなかったが、各部位の破片が識別されることから、本来は、旧状に復せたと考えられる。したがって、当初の段階には4個体の大形壺片が密集していたと想定される。

埋土からは上記の須恵器をはじめ土師器などが出土した。そのうち図化可能なものの大半を図176から図178に示した。このうち図176と図177は須恵器で、1と2は杯口身、3は横瓶の口縁部、4は個数は不明ながら肩に縦位の耳を付した耳壺、5は胎土や焼成が類似することから本来は同一個体であったと考えられる壺K、6から8および、図177-1と2は壺Aである。

図178には土師器と埴輪を掲載した。11から13は法量に差異のある杯C、14は鉢A、15は小形の高杯、16と17は高杯Cの脚部と杯部である。18は鉢か盤の脚部、19から22は壺Aで、うち19は河内型に分類される。23は壺Cで、24は外面調整にナメハケとヨコハケを混用する円筒埴輪である。

以上の土器は、須恵器壺Kや壺にやや古い様相が看取されるものの、須恵器杯H身の形態や法量、土師器杯Cにみられる法量差などから勘案して、飛鳥I-2段階に位置づけられよう。なお、南東部延長線上には擾乱を隔てて1503溝が位置する。3-1溝とこの溝とは、埋土の様相が類似し、出土遺物の時期も同じで、この様相を積極的に評価し、同一遺構とみなすならば、総延長90m余にも達する。

3-2溝(図173・174・179、図版61-5)

調査区北西側で検出された。等高線に直交する形で南西から北東に流下し、末端は3-1溝と「T」字状に交わる。平面形は、やや蛇行し、規模は長さ26.5m、幅0.5m前後、深さ0.2m程度を測る。断面は偏平な「U」字形を呈し、埋土は3層に細分される。出土遺物のうち図179-4に示す土師器の壺A 1点を図化した。小片のため詳細は不明ながら、その形態から飛鳥時代のものと考えられる。

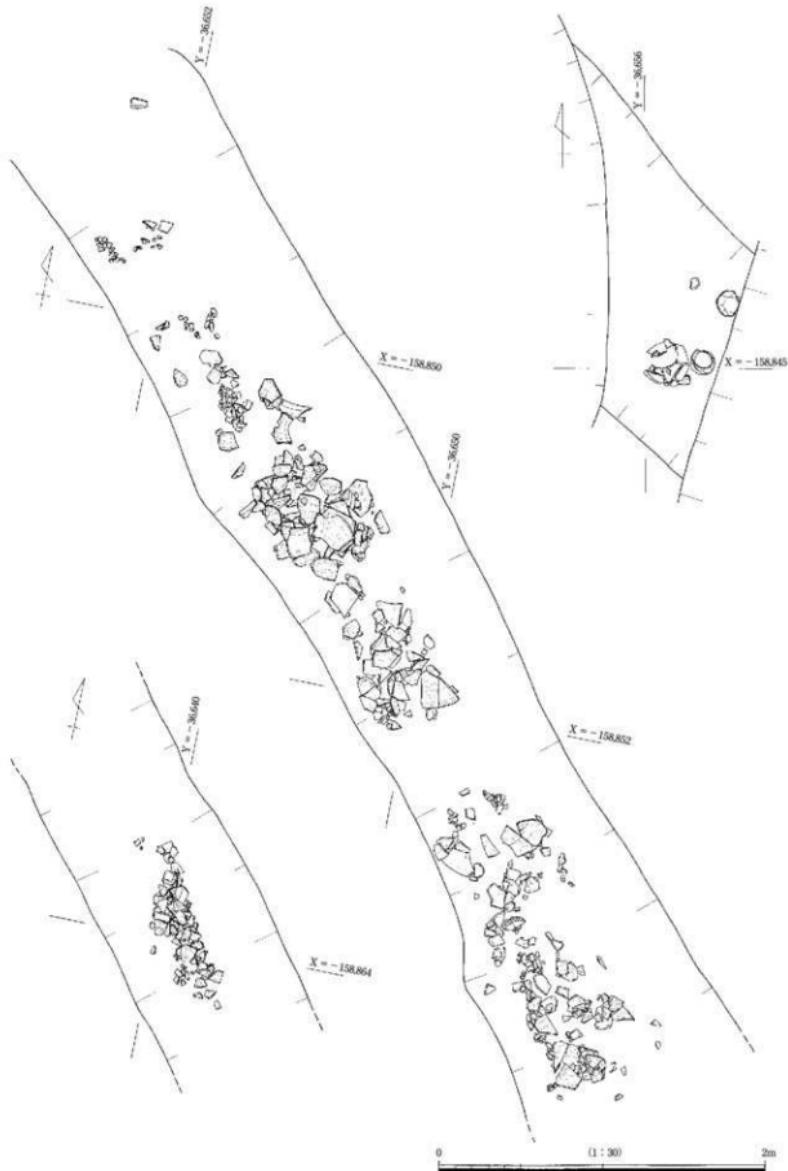


图175 3-1沟遗物出土状况图

3-3溝（図173、図版61-1）

調査区北西部で検出された。ほぼ南から北に直線的に流下する。現状での規模は長さ6.3m、幅0.4m、深さ0.1mを測り、北端は、3-2溝と「Y」字形に交わって合流する。遺物は出土していないが、埋土の様相や、周辺の溝と合流することから、飛鳥時代の遺構になるものと考えられる。

3-4溝（図173・179・182、図版61-1）

調査区北東部で検出された。西から東へ等高線に直交するような形で流下し、途中、南側に分岐して3-3溝と分かたれる。規模は、長さ15.2m、幅0.6m、深さ0.2m弱を測る。

埋土からは、図79-3に図示する土師器高杯などが出土した。その形状から飛鳥時代とみなされ、上記3つの溝と一連となるものと考えられる。

144溝（図173・179）

調査区北東部から検出された。南から北へ等高線に斜行するように流下する。規模は、長さ10.0m、幅1.0m、深さ0.1mを測る。出土遺物には図179-2に示す須恵器杯B身などがあり、その形態から飛鳥IVからV段階頃に位置づけられる。その時期や主軸方向、そして位置関係からみて、周辺に所在する建物21や井戸142などと非常に強い関連性を持つ溝と考えられる。

145溝（図173）

調査区北西部で検出された西から東にのびる溝である。平面の形態は南側に湾曲する弓形を呈し、規

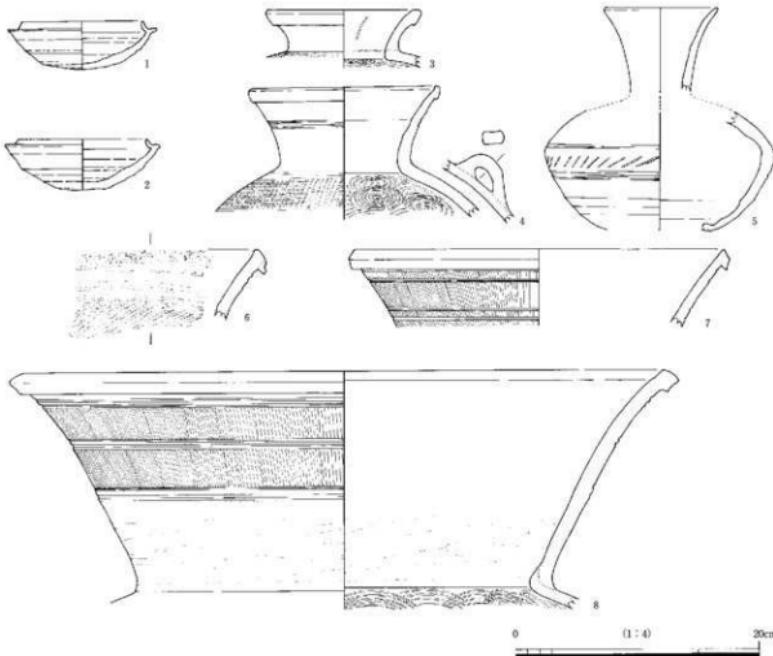


図176 3-1溝出土遺物実測図(1)

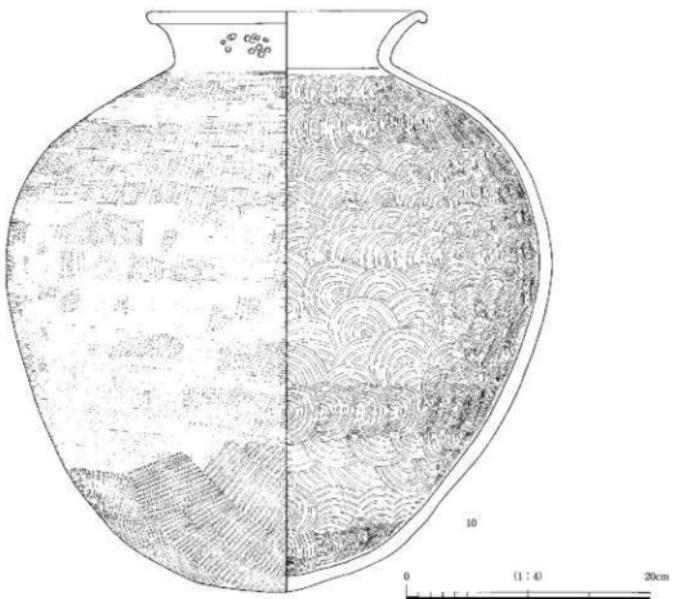
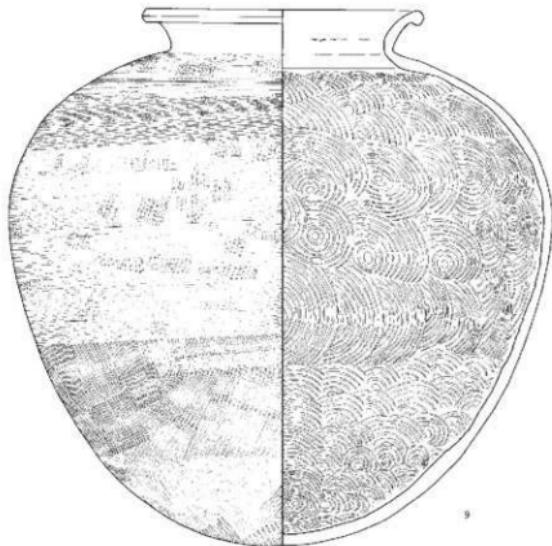


図177 3-1溝出土遺物実測図(2)

模は、長さ4.1m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。

断面形は図173左のような楕形で、埋土はシルトや粘土を混合したような層となる。

146溝（図173）

調査区北西部に位置する。西側は調査区外となり、東端は144溝により損壊される。現状の長さ8.7m、幅0.2m、深さ0.1m弱となる。断面の形は図173左下のような隅丸逆台形を呈し、埋土は粒状構造を持つシルトや粘土を混合したような土層であった。

出土遺物がみられないため時期を明らかにすることはできないが、建物19の柱穴掘方や、144溝に先行していることから、平城II段階以前とみなされる。

148溝（図173・174・180、図版61-1）

調査区北西部で検出され、南から北へ流下する。先述の溝とは約15m離れ、これに平行するような形となる。

検出長は35.0mを測り、北部は調査区外にまで伸びる。幅は最も広い部分で2.4mを測り、深さは最深部で0.2m弱で、断面形は広く浅い。

埋土は図174-右に示すような堆積状況を示し、東肩は149溝によって失われる。

遺物には図180に示す各種の土器がある。このうち、1から22と25は須恵器で、それ

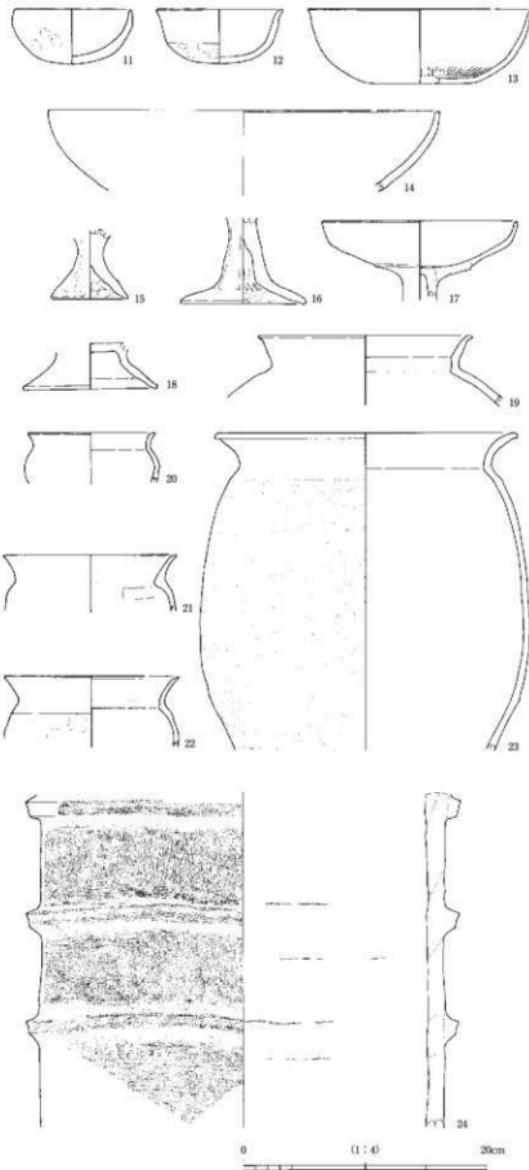


図178 3-1溝出土遺物実測図(3)

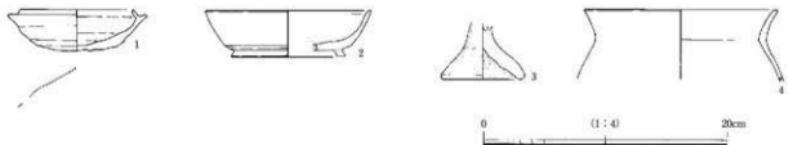


図179 3-2・3-4・144・279溝出土遺物実測図

以外は土師器である。須恵器には1・25の杯Bあるいは皿Bの蓋、4・5の杯B蓋、6から12の同器種身、2・3の杯G蓋、13・14の皿A、15・16の壺、17・20の平瓶、18の壺C、19の壺E、21・22の壺Aがある。このうち、11の高台内面には爪形圧痕が観察され、皿の外面には回転ヘラミガキが施されているため、金属器を模倣したとみなされる。また、19は器壁が薄く焼成も非常に堅緻な製品である。なお、21の壺には口縁上端部にまでタタキが施され、それがスリ消された状況を止めている。

土師器のそれには全形のうかがえるものはないが、23・24の杯Bか皿Bのつまみ、26の杯C、27から29の杯A、30から32の壺A、33・34の鍋があり、うち、28の内面には1段放射線暗文が観察される。

以上の土器は、2や3のように飛鳥時代の資料も含まれるが、11のように高台が体部脇にまで寄った杯Bがみられること、平瓶に高台が付されていることなどからみて、平城V段階頃に位置づけられる。

149溝（図173・174・181、図版61-1）

調査区北西から先述の148溝東側に沿うような形で検出された。等高線に斜行するように南から北へ流下し、検出長は37.0m、幅0.5mから2.3m、深さ0.2mを測り、北端部は調査区外へと続く。断面形は、図174右側に示すような浅い逆台形から皿形を呈し、埋土は4層程度に細分される。

出土遺物には図181に示す各種のものがある。このうち1から8は須恵器で、器種には1の壺L頭部から口縁部、2の杯B蓋、3・4の同身、5の壺H、6の壺底部、7・8の壺A口縁部がある。

9から13は土師器で、9は面取りの施された高杯A脚部、10から12は小形の高杯、13は壺である。

瓦類には14と15があり、前者は平・後者は丸に分類され、共に布目圧痕が観察される。

以上の遺物は、3のような体部脇に高台を付す須恵器Bや、布目の粗くなつた15のような瓦が存在することから平城V段階に位置づけられよう。

なお、これらと148溝出土遺物とを比較した場合同時期となるが、重複関係からはこの溝の方が後出する。しかし、その状況からみて、その時間幅は非常に少ないものと理解しておきたい。

160溝（図173）

調査区北西から検出され、その傾斜から西から東方向に流下すると考えられる。規模は長さ2.5m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。断面の形状は図170-下段中央に示すような逆台形を呈し、埋土は4層前後に細分されるが、いずれもシルト質の強い土壤からなる。

また、位置関係に注目した場合、東には3-4溝、反対の西には279溝が所在し、ちょうどその間を繋ぐような形で開墾されていることから、本来はこれら3遺構が一連のものであった可能性が高い。

出土遺物がないため時期は不明であるが、上記の様相から推察して飛鳥時代となる可能性が高い。

279溝（図173・179）

調査区北西部の西壁際で検出された。西から東に流下するとみられ、西側についてはさらに調査区外へとのびる。現状での規模は長さ4.4m、幅0.6m、深さ0.1m程度を測り、断面形は、図173左下に示すような底面にやや起伏のある偏平な「U」字形を呈し、埋土は粘性を帯びたシルト質の土層からなる。

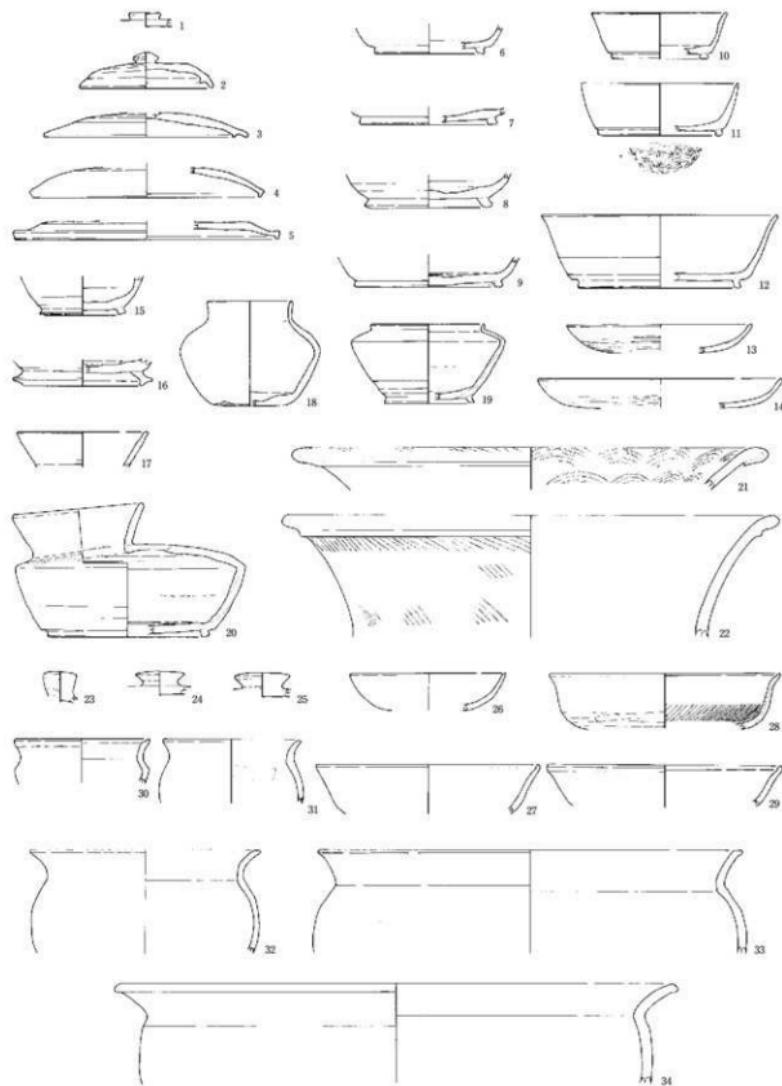


图180 148号墓出土遗物实测图

出土遺物のうち図化できたものに、図 179 - 1 に示す須恵器杯口身がある。断面図に示す位置から出土し、底部にはヘラ記号が観察される。その形態や調整技法、法量からみて、飛鳥 II - 1 段階頃に位置づけられるが、一連の遺構とみなした 3 - 1 溝出土遺物と比較した場合には、やや新しい様相を持つ。

3 - 5 溝（図 182）

調査区北東部から検出された。北から南へ流下し、北東部は 3 - 1 溝と「V」字形に合流する。検出された長さは 9.0m で、幅 1.0m、深さ 0.1m を測る。断面形は底面がやや凸を持つ皿形を呈し、埋土は、黄褐色と黄色からなるシルトから粘土が混じり合ったような態をなす。遺物が出土していないため時期は不明だが、3 - 1 溝に連結することを根拠とするならば、飛鳥時代前半とみなされよう。

1509 溝（図 182）

調査区北端の西よりで検出された。やや東へ向かった南から北方向へ流下する。北側が調査区外、南側が保存樹木区域となるため両端を確認できないが、現況で長さ 4.0m、幅 0.9m、深さ 0.2m 前後を測る。

断面形は、図 182 左下に示すような偏平な逆台形を呈し、埋土は黄褐色系のシルトである。

出土遺物がないため時期は不明だが、埋土の様相や位置からみて、3 溝に関連するとも考えられる。

1510 溝（図 182）

先述の 1509 溝から西約 3m 離れた位置で検出されたほぼ南から北へ流下する溝である。最前の溝と同様の状況となるため規模は確定できないが、現状での長さ 4.4m、幅 0.3m、深さ 0.05m 強を測る。

断面形は図 182 下段のような皿形を呈し、埋土は 2 種類の黄褐色系シルトを混ぜ合わせたような状況であった。この中から遺物は出土しなかったため、時期については判然としない。

1582 溝（図 182）

調査区北側のほぼ中央から検出された東西方向の溝である。その傾斜角度から西から東に流れてい

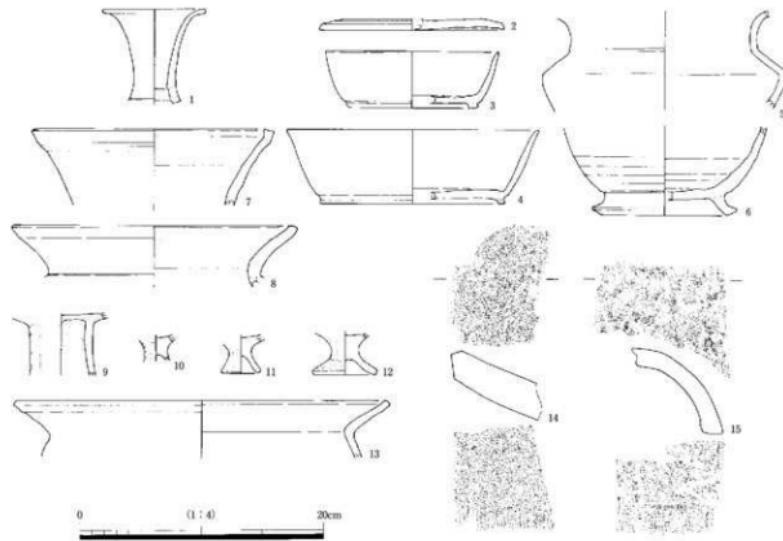
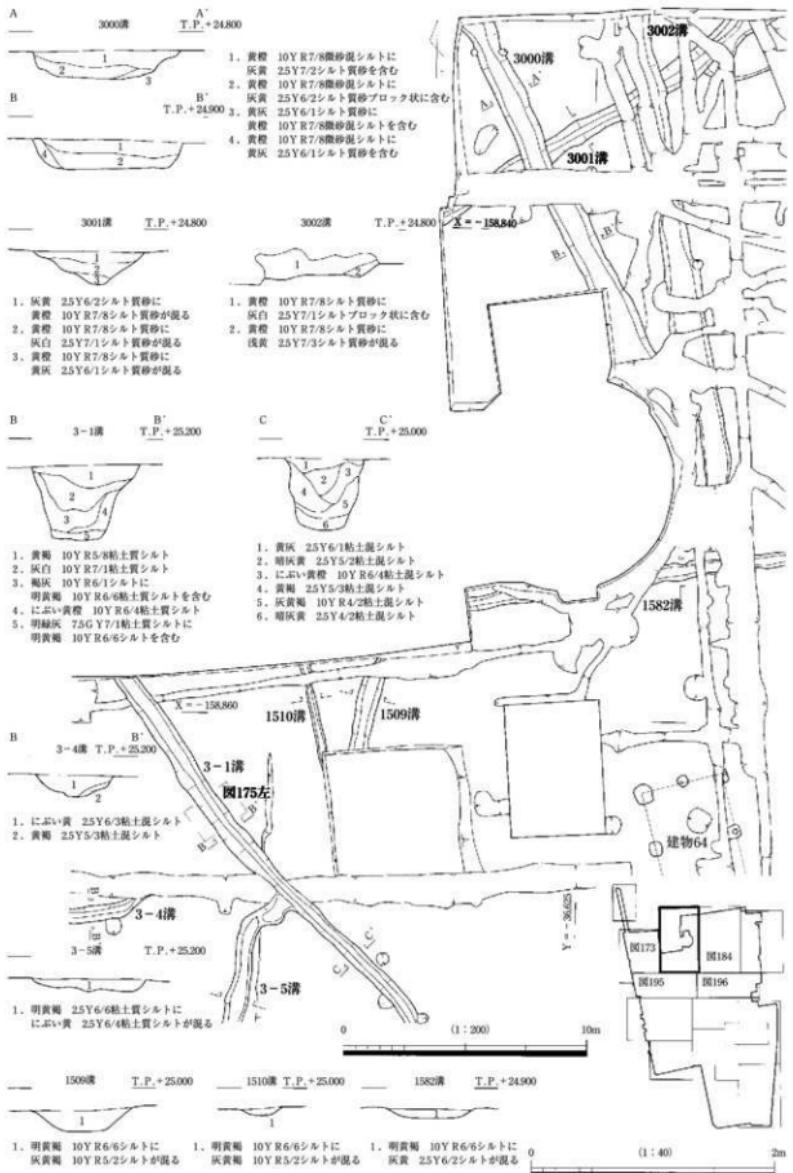


図 181 149 溝出土遺物実測図



いたものと考えられる。各所で寸断されているが、検出長18.8m、幅0.7m程度、深さ0.10m弱を測る。断面形は偏平な逆台形を呈し、埋土は2種類のシルトを混じえたような態をなす。

出土遺物がないため時期は不明だが、西端から円筒埴輪2基を用いた円筒棺墓3が検出され、その附近から飛鳥I前半段階頃の土器が出土したため、これに近似する時期が与えられる。

3000溝（図182・183）

調査区北端中央からやや西に向かった位置で検出された。傾斜から推定して、ほぼ南から北へ流下するものと考えられる。北側が調査区外となり、南側を擾乱孔で破壊されるため規模は確定できないが、現況で長さ15.5m、幅1.3m、深さ0.25mを測る。

断面形は、図182左上のようなびつな形状を呈し、埋土は3層前後に細分される。

出土遺物には図183-1に示す甕がある。上方からみると楕円形を呈し、ゆえに通常の容器とは異なる印象が与えられる。時期については不明だが、胎土的には飛鳥時代の土器と大きく変わることはない。

3001溝（図182・183）

調査区北端中央附近に位置する。南西から北東に流下し、両端とも調査区外にのびるため規模を確定できないが、現況での長さ16.0m、幅1.0m、深さ0.3m前後を測る。

断面形は図182左上のような頂部の丸い逆三角形状を呈し、埋土は3層に細分されるが、粒状構造を含む点で共通する。

出土遺物のうち、図183-2から6の5点を図化した。2と3は須恵器杯口の蓋と身、4と5は土師器高杯Cと脚部、6は7段6尖帯までが遺存する埴輪円筒である。

これらのうち、須恵器に注目すると、口径11cm前後となる法量的要素や形態から、飛鳥I-4段階に位置づけられる。よって、溝の埋没した時期は当該期となる。

3002溝（図182）

調査区北端中央部から検出され、北端は調査区外へと続く。傾斜面に斜行して、南

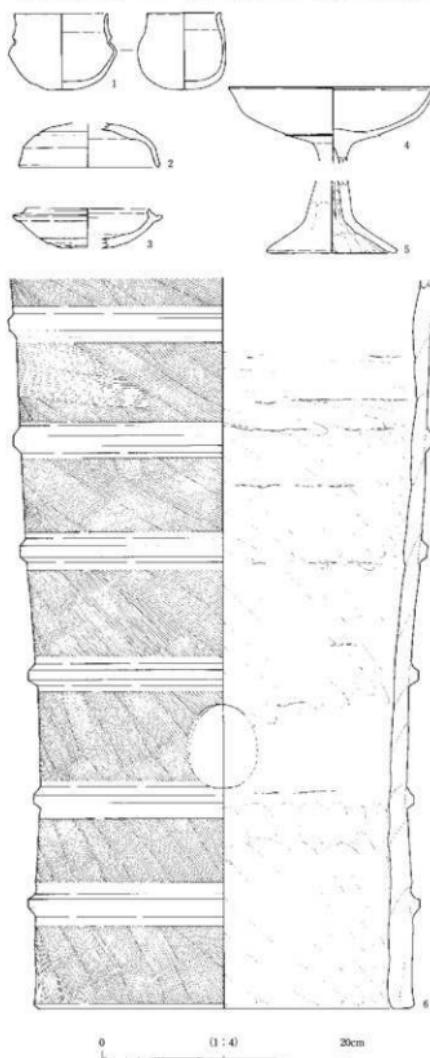


図183 3000・3001溝出土遺物実測図

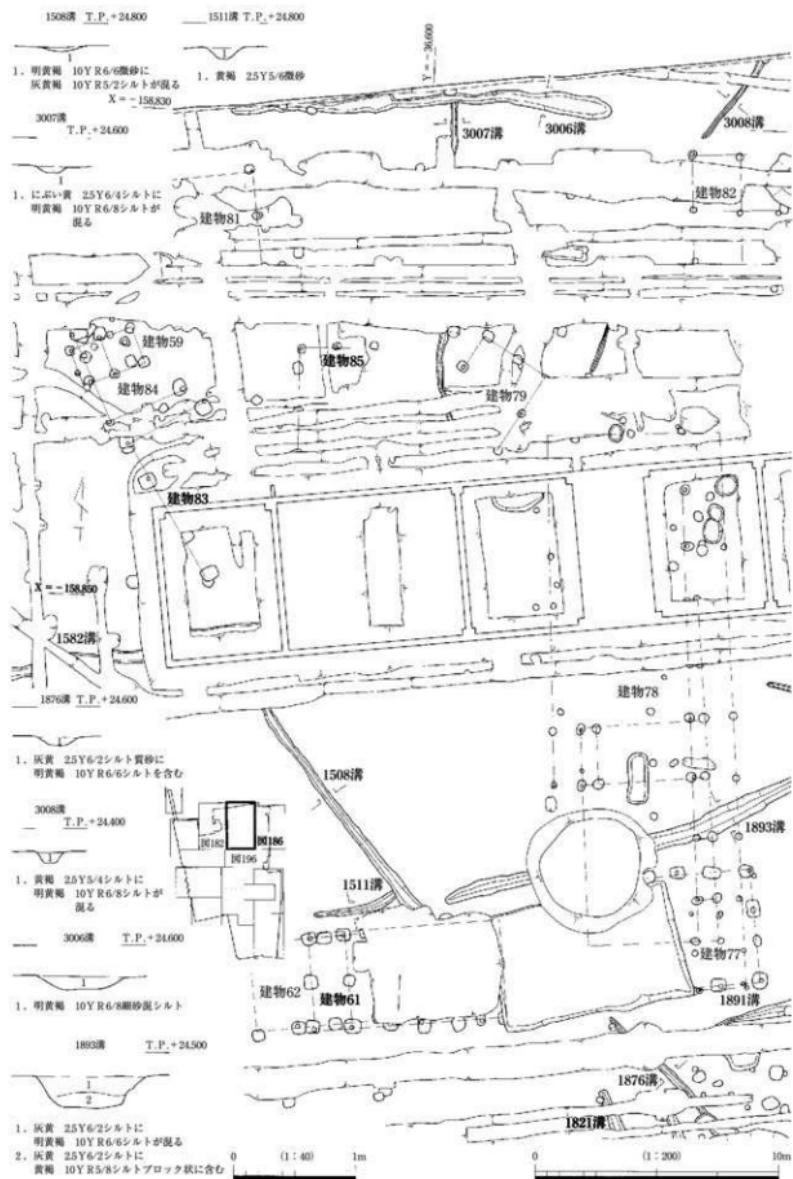


図184 1508・1511・1876・1893・3006から3008溝平・断面図

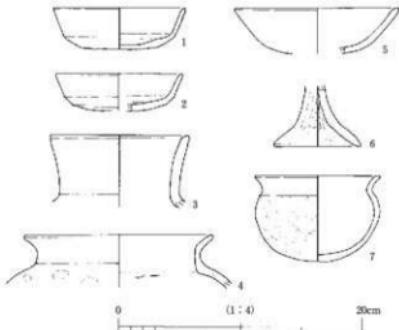


図185 1508・1511・1876溝出土遺物実測図

遺物には図185-1から4の土器などがある。1と2は須恵器杯G身、3は須恵器直口壺、4は土師器壺Aである。これらは杯Gの法量や、土師器壺Aの形態からみて、飛鳥Ⅲ段階に位置づけらる。

1511溝（図184・185）

調査区北東部から検出された。西から東に流下し、東端は前述の1508溝によって寸断される。規模は長さ3.5m、幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形は図184左上のような頂部の丸い逆三角形状を呈する。

出土遺物には図185-5・6に示す2点の土師器などがある。5は杯C、6は小形の高杯である。詳細な時期は知り得ないが、おおむね飛鳥時代に帰属するものであろう。

1876溝（図184・185）

調査区北東部から検出され、前述の1508溝や隣接する1821溝と同方向に流下する。南部を1820落ち込みにより破壊されるため規模を確定できないが、現況での長さ6.1m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。断面の形態は図184左下に示すような皿形を呈し、埋土は粒状構造を持つ土層の單一層からなる。

出土遺物には図185-7に示す河内型の壺Aなどがある。これ単独のため遺構の時期は不分明であるが、後出する1820落ち込みより飛鳥I-2段階の遺物が出土したことにより、これ以前と確定できた。

1893溝（図184）

調査区北東から検出された。西から東に流下し、東端部は段差によって滅失する。途中、保存樹木により分断されるが、長さ15.2m、幅0.9m、深さ0.25m程度の規模を有する。断面形は図184左下のような隅丸の逆台形を呈する。埋土は2層に細分されるが、いずれも粒状構造を含んでいる。

陶化可能な土器は出土していないが、1890堅穴建物から出土した陶硯と同一個体と考えられる破片が出土したことから、これと同時期である飛鳥Ⅲ段階に降とみなされる。

3006溝（図184）

調査区北端部の中央から東に向かった壁際で検出された。西から東に直線的に流下し、北肩の一部が調査区外となるが、規模は長さ15.5m、幅0.3mから0.9m、深さ0.05m前後を測るものとみられる。断面の形態は図184左下に示すような皿形で、埋土は砂質の強い黄褐色系シルトの單一層となる。

出土遺物がないため時期は不明だが、埋土の様相や方向軸からみると古代以降の可能性が高い。

3007溝（図184）

調査区北東部の壁際で検出された。南から北へ流下し、途中、分断されるが、規模は長さ13.0m、幅

から北へ流下する。検出長は19.3mを測り、幅1.5m、深さ0.2mとなる。断面形は、擾乱部での測図のため図182のような状態である。埋土は2層に細分され、いずれも粒状構造を含む。

出土遺物がないため時期は特定できない。

1508溝（図184・185）

調査区北部の中央からやや東で検出された。傾斜に平行する形で南東から北西に流下する。両端を擾乱により失うが、現況での規模は長さ10.2m、幅0.5m、深さ0.05m弱を測る。

断面形は図184左上のように非常に浅く、埋土は粒状構造を持つ土層の單一層からなる。

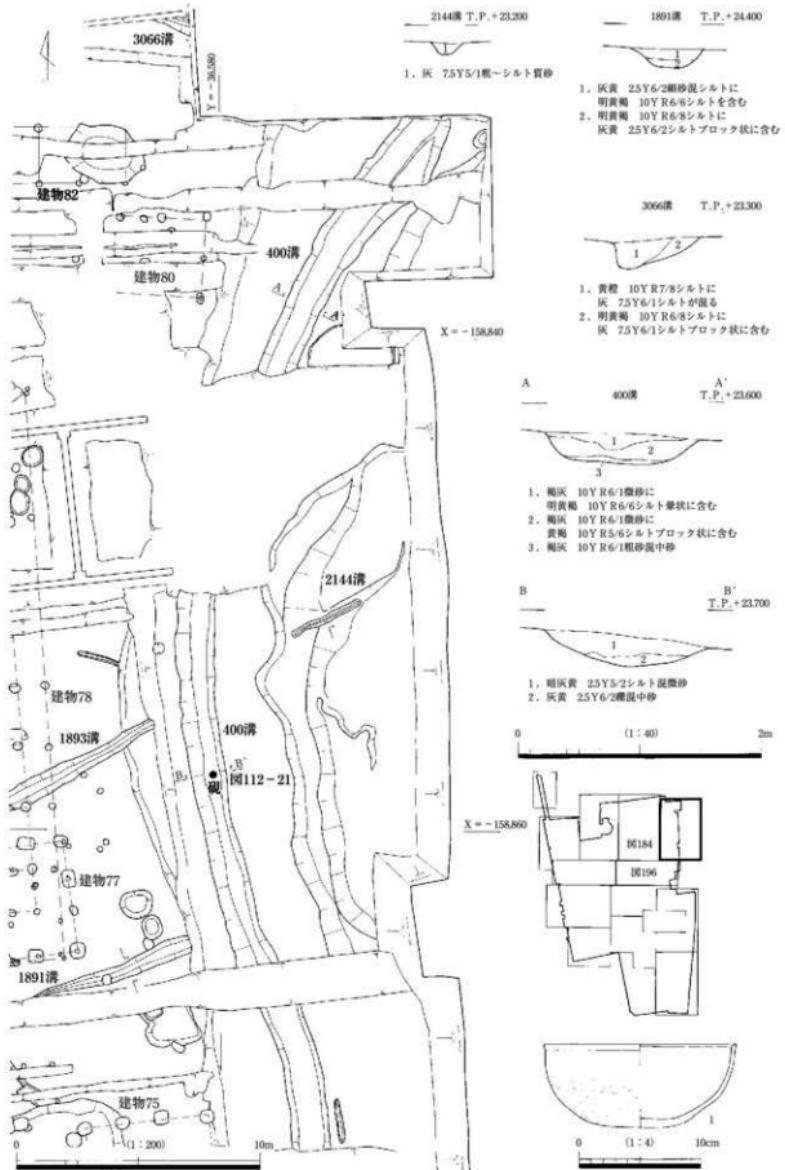


図186 400・1891・2144・3066溝平・断面および3066溝出土遺物実測図

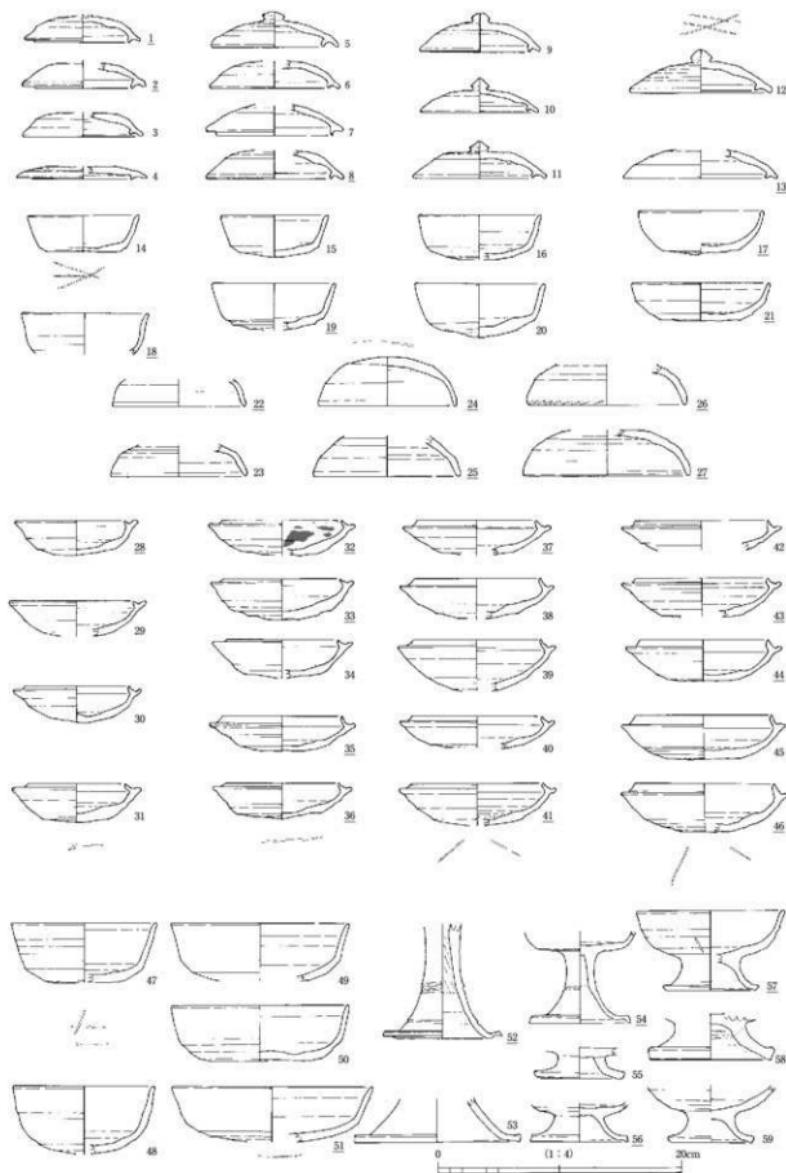


图187 400清出土遗物实测图(1)

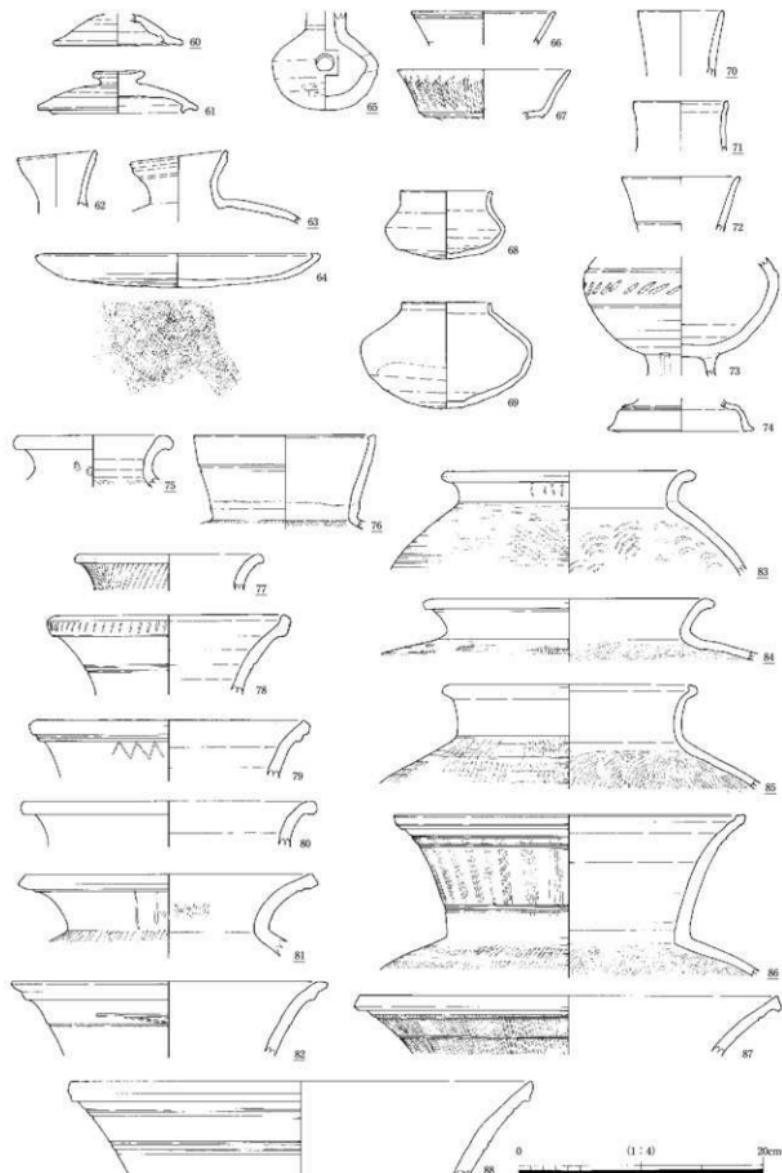


圖188 400溝出土遺物実測図(2)

0.3m、深さ0.3mを測る。断面形は図184右上のような隅丸の逆台形を呈し、埋土は粒状構造をもつシルトが中心となる。遺物が出土していないため時期は不明だが、重複関係より3006溝よりは古い。

3008溝（図184）

調査区北東部から検出され、北端は調査区外へと続く。地形に直交するように南西から北東に流下し、その規模は長さ4.0m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。なお、これに似た小溝がさらに南西に所在し、これも同一造溝とみなすならば総延長は15.0mとなる。断面形は図184左下のような隅丸の逆台形を呈し、粒状構造からなる黄褐色系シルトを埋土とする。時期については遺物がないため不明である。

400溝（図186～194・231・232・241・242、図版64・65）

調査区東際を南から北に向かって貫通する溝で、北端部では地形に規制されて東北に方向を変える。途中いくつかに分断されるが、総延長は164m余となる。幅については部分により広狭がみられるが、0.9mから3.5mの範囲内で、深さについては0.3m前後が基本となる。

断面形は各地点で異なるが、基本的には隅の丸い偏平な逆台形から皿形を呈する。埋土は2層から4層前後に細分され、概して下位には粗砂混じりの中砂から細砂が堆積するのに対し、上位にはシルトから細砂が堆積する傾向にあり、これをそのまま上・下層に2分して遺物の取り上げを行った。

なお、図186左の平面図のほぼ中央部に黒丸で示した地点は、1890堅穴建物より出土した図112～21の圓足円面鏡の破片と接合・合致する陶鏡片が出土した地点を表す。その出土状況は、図版65-5に示

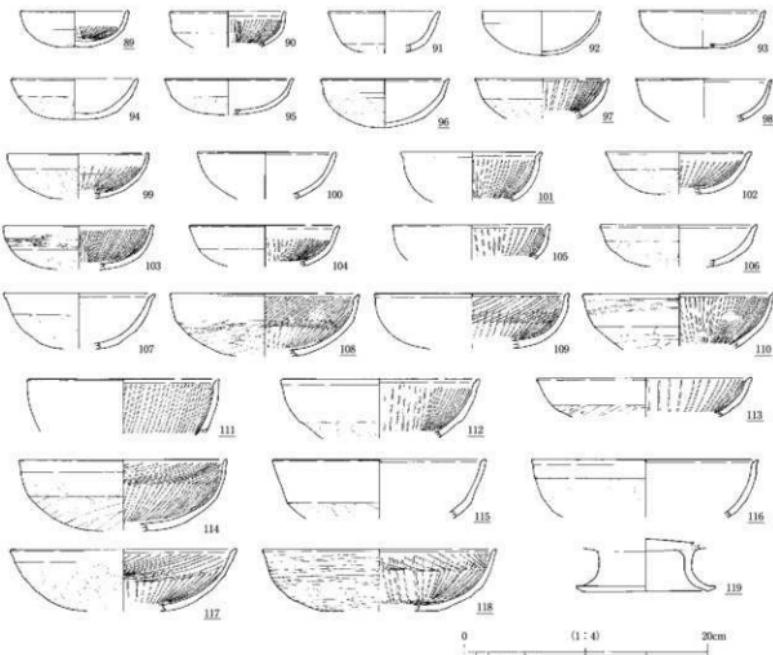


図189 400溝出土遺物実測図(3)

すように、上下位の層界附近に破片が2ヶ所に群在しているという状況であった。

溝内からは土器類を主とする大量の遺物が出土した。その内容は図187から192が土器、図193・194が埴輪、図258・259が土製品、図263・264・266・268・269が石器および石製品である。これらのうち、個々の遺物番号に下線を加えたものが下位出土資料である。

土器には須恵器と土師器がみられる。このうち須恵器を図187と188に示した。器種は図187-1から13が杯G蓋、14から21が杯G身、22から27が杯H蓋、28から46が杯H身、47から51が鉢A、52から59が高杯、つづいて、図188-60が壺蓋、61が前の井戸の項でも問題とした静岡県湖西古窯跡の「かえり付壺蓋」に酷似する須恵器、62と63が平瓶、64が皿A、65から67が甌、68と69が壺C、70と71が壺および壺L、75が横瓶、76が直口壺、77から87が各種口縁部形態を持つ甌Aである。

土師器などには図189から192に示す資料がある。このうち、図191-161は韓式系土器小形平底鉢の体部片で、この溝に直接伴う資料ではないが、今回の中では僅少な資料のため敢えて掲載した。

器種は、図189-91から96が杯G、89・90および、97・99から118が杯Cで、後者は法量的に89・90・97のC I、99から110のC II、111から116のC IIIの3つに分類される。119は器種の特定は不可能だが、杯Cや皿Aなど大形器種に付随する脚部、図190-120から135は皿Aである。なお、図191-136

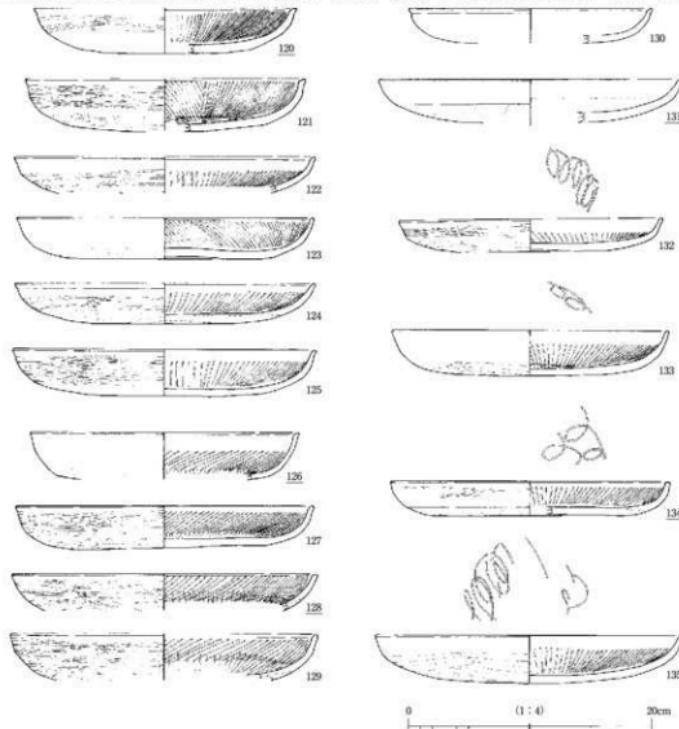


図190 400溝出土遺物実測図(4)

から138は杯を象ったミニチュア土器、139と140が直口壺、141と142が小形高杯、143から151が高杯Cとそれらの脚部、152から154が仮に捏鉢とする土器、155から158が鉢B、159が鉢A、160が口縁部を形成する鉢である。つづいて、図192-162から180が法量や口縁部におのおの差異がみられる壺A、181から184が壺C、185と186が瓶、187と188が鍋Aである。

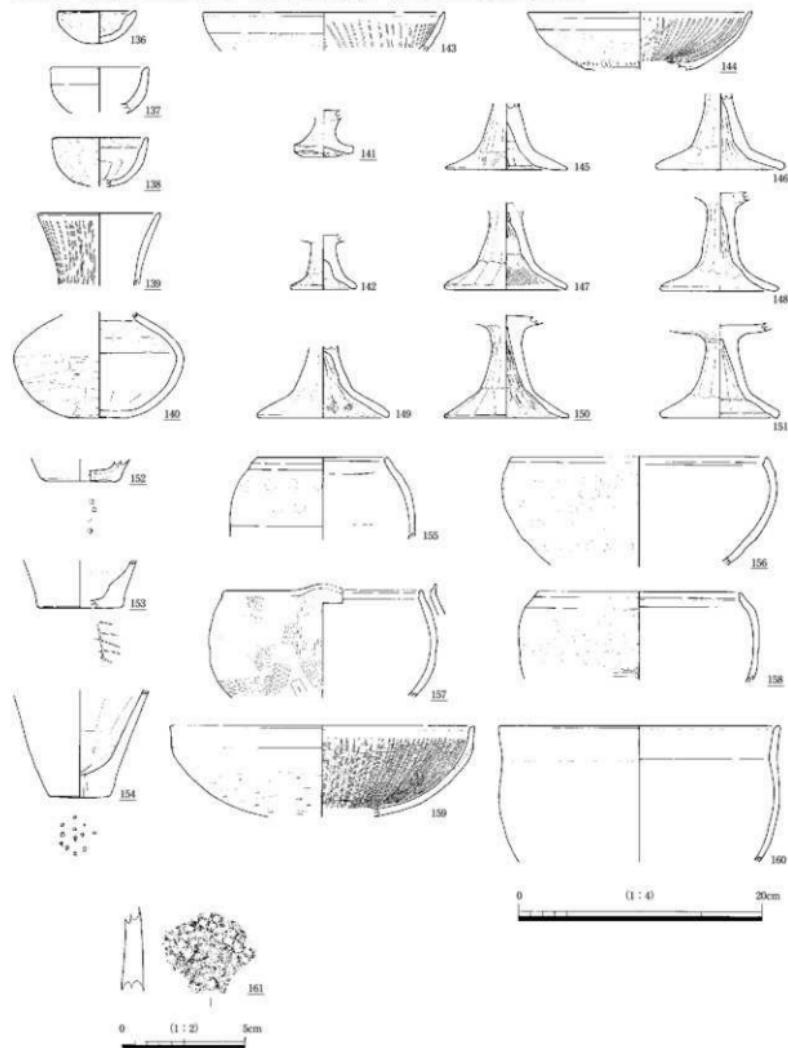


図191 400清出土遺物実測図(5)

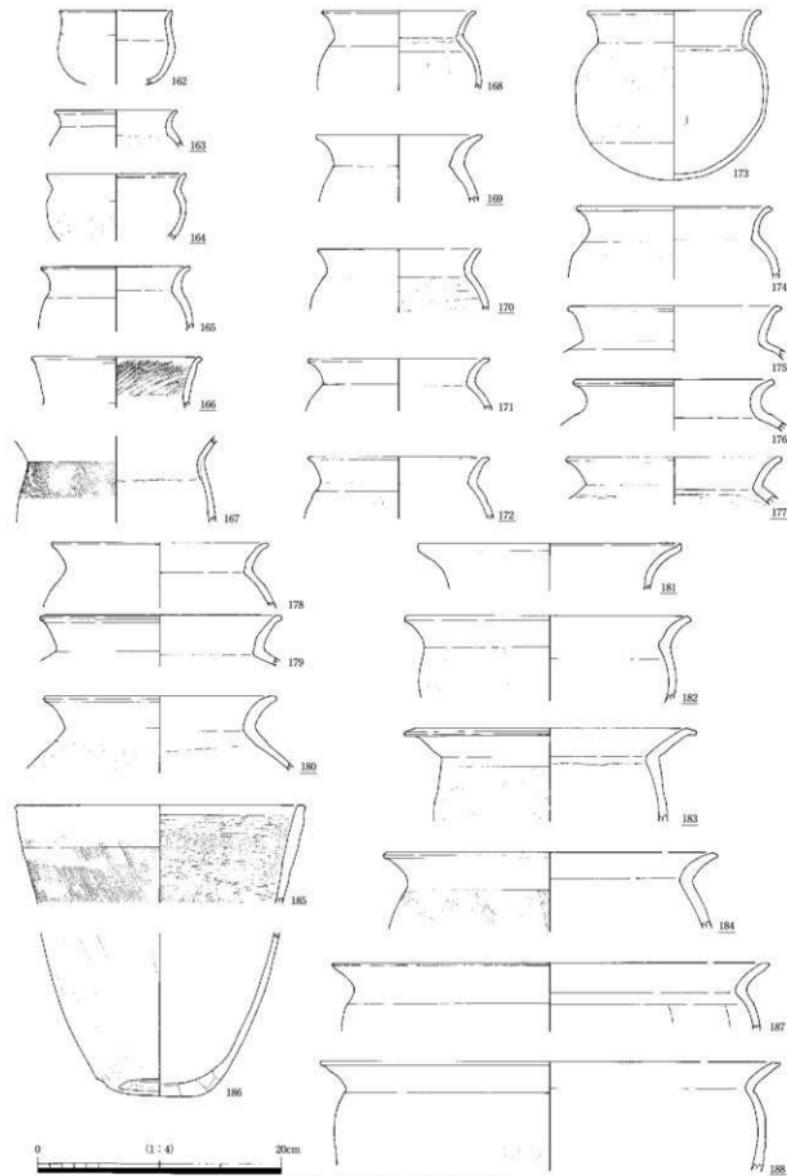


圖192 400溝出土遺物測量圖(6)

以上の土器の特徴として、溝出土資料という制約から時期的にやや幅を持つことを考慮しておかねばならないが、まず、須恵器に注目した場合、杯Hの口・受部径が10cm未満と矮小化し、その極相段階となっていることが重視される。これに対する杯Gは未だ小形で、器高の高いものが多く、口・受部径が10cmを凌駕するものは僅少である。また、47や51の鉢などに次段階の先駆的様相が看取されるものの、破片たりとも杯B身は出土しておらず、さらに、形骸化してはいるが長脚高杯を含む高杯類や、壺K、甌も一定量含まれていることにも留意しておかなければならない。

つづいて土器では、杯C I類の資料数がやや不安定となりながらも、C類に3つの法量分化が維持されている点に注目される。しかしながら、器形的には径高指数がやや低くなる傾向にあり、ここに時期的変移を看取することができる。皿の暗文についても上端部の螺旋状暗文はみられず、これに変わって2段放射線暗文が出現している点に後出の要素が現出している。

これらの様相に最も近似するのは飛鳥II-2段階とみなされる。しかし、陶硯同士が直接接合関係にある1890堅穴建物出土資料とこれを比較した場合、溝の方が古く位置づけられるのが問題となる。後述する資料に瓦も含まれているため、冒頭にも述べたが信頼度には十分な検討が必要となろう。

なお、特殊な土器として図187-32の須恵器杯H身と、図191-152から154の土器がある。前者の内面には漆膜が遺存しているため、これを塗布する際の受皿として用いられたものと考えられる。後

者は、ここでは仮に捏鉢と報告したが、用途や機能などについてはまったく不明であり、これに類するものとして、難波宮跡から特徴的に出土する「台付鉢」があげられる。

図190-189は須恵質焼成された平瓦で、表面には布目压痕と模骨痕が観察され、裏面には丁寧なナデが施される。その様相から奈良時代前期の所産であると考えられる。

図190-190は器材埴輪で、線刻により縁を表現していることから盛矢具の腹と考えられ、また、その製作法から5世紀後半代の所産とみられる。なお、これについては接合しないが、同一個体の破片が複数出土したため、これを含めて図281-174に再掲した。

191と192は別個体の家形埴輪で、前者は大棟とそこか

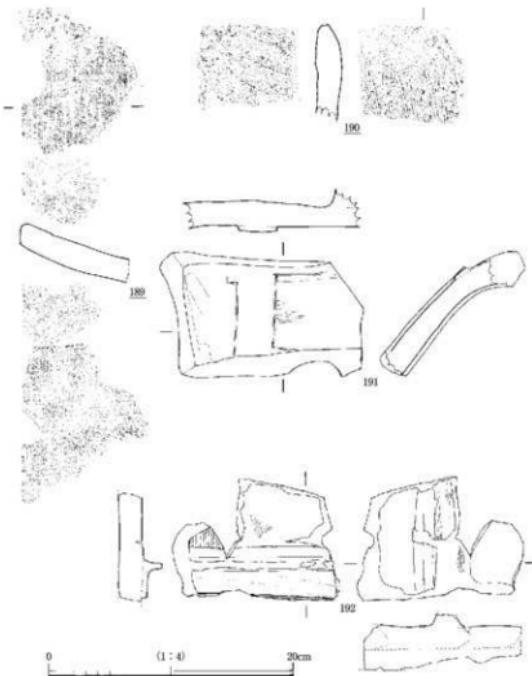


図193 400溝出土遺物実測図(7)

ら葺下ろしの部分が遺存し、後者には根太と側壁が表現されている。

図194-193は表面に5条の刻線が施された円筒埴輪で、B種ヨコハケを用いた窯窓焼成の製品である。194は朝顔形埴輪で、調整と焼成法は前者と同様となり、表面にはベンガラが塗布されている。これら2点の埴輪は共に5世紀後半に位置づけられる。

195は口縁部から3段2条尖帯までが遺存する円筒埴輪である。外側調整はナナメハケのみで、部分的にユビナデによりこれをスリ消している。上位から2段目のタガの突出度は低く、これに類するものは岡ミサンザイ古墳に用いられている。

図258-4は土師質焼成された土鉢の釣手部分、同図8から11・14・15・17は板状土製品で、表面には多数の小孔が穿たれている。他にも同様の資料が複数得られたが、用途は不明である。

図259-24は輪の送風管である。表面は被熱痕跡を止め、先の漆取皿と共に附近に工房城の存在を語らしめる資料である。図260-27は土師質焼成された手づくね成形の土製品で用途は不明である。

図263-6と10および、図264-1・2・8・12はサスカイト製石器とその剥片である。1と2は凹基式の石鎌、6は石核、8は使用痕のある剥片、10は剥片、12は縦長剥片である。これらは、溝に関係するものではないが、周辺の環境を考える上で取り上げた。詳細については後文を参照されたい。

図266-2は凝灰岩切石である。

表面には煤が付着し、脆弱化が進行している。図269-6は凝灰岩質の石材を用いた粗砾石である。

4面とも使用され全体的に研ぎ減りが激しい。

1891溝（図186）

調査区北東部から検出された。

ほぼ西から東に流下し、東端は段差により滅失する。

現況での規模は、長さ6.9m、幅0.2mから0.8m、深さ0.15m前後を測る。断面形は図186右上のような楕円形を呈し、埋土は粒状構造を含むシルトからなる。

遺物がないため時期は不明だが、北側約8mに1893溝が平行するよう位置するため、両者に関連性があるともみなされる。

2144溝（図186）

調査区北東部で検出された。

南西から北東に流下し、長さ3.1m、幅0.3m、深さ0.1mの規模を有す。断面形は偏平な「U」字形

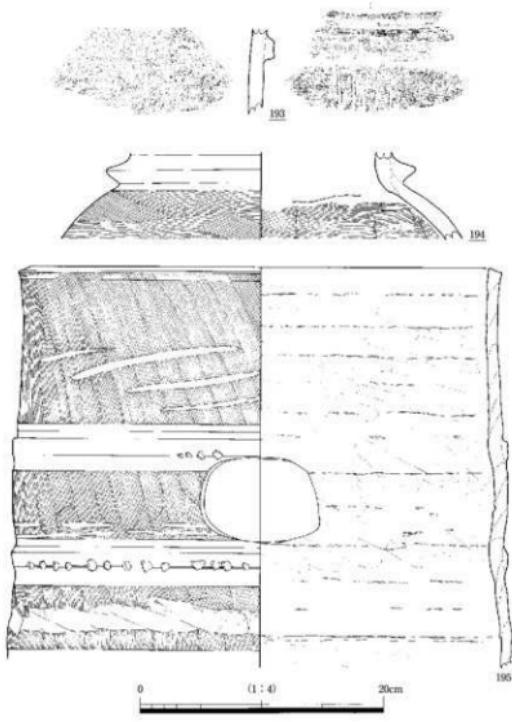


図194 400溝出土遺物実測図(8)

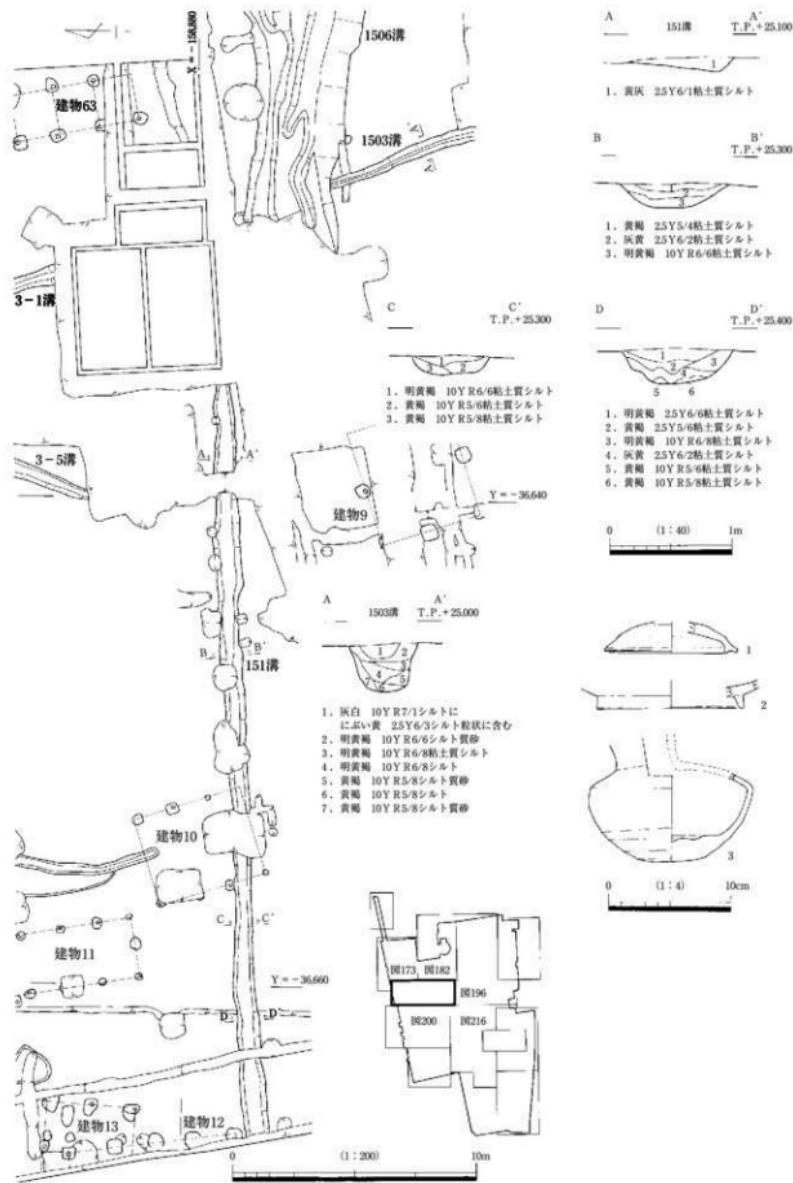
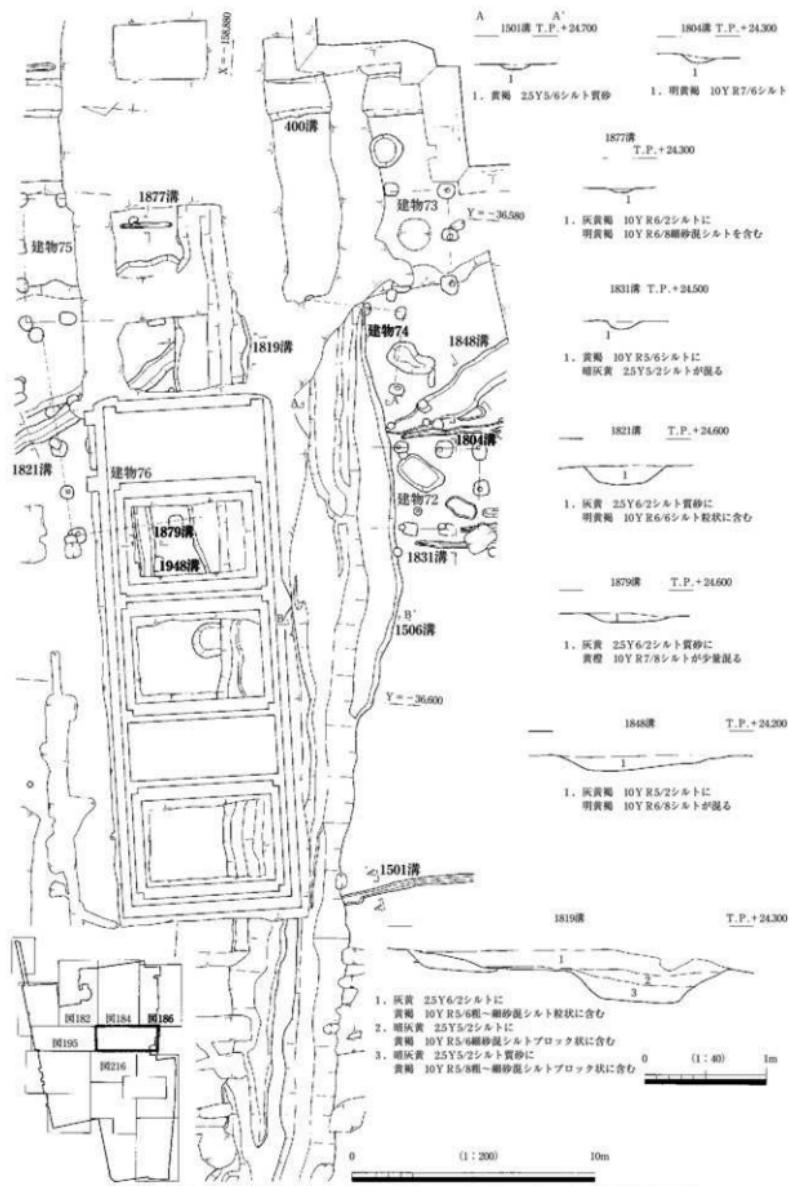


図195 151・1503溝平・断面および151溝出土遺物実測図



を呈し、埋土は攪拌されたような淘汰の悪い土層となる。遺物がないため時期は不明だが、検出された位置や重複する遺構など、間接的に関連する要素から考えた場合には古代以降となる可能性が高い。

3066溝（図186）

調査区北東壁際で検出された。約1.6mの限られた部分を確認したに過ぎないため詳細は知り得ないが、現状では北西から南東へ下流するものとみられ、規模は、幅0.6m、深さ0.1mを測る。

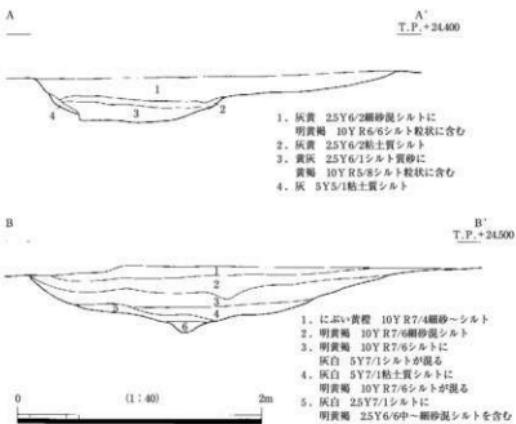


図186 3066溝断面図

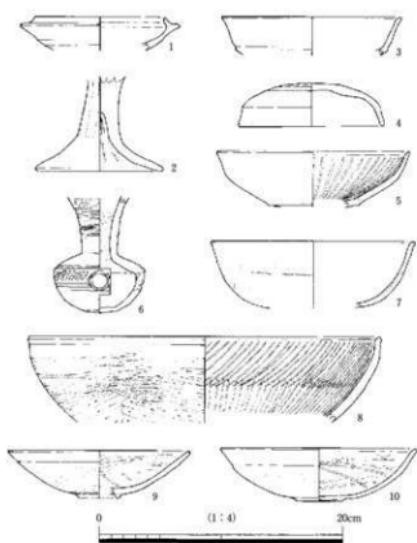


図187 1506溝断面図

出土遺物には図186右下に示す1の土師器がある。杯CⅢに分類され、形態から飛鳥Ⅰ後半段階に属するものと考えられる。

よって、溝の埋没時期は当該期に位置づけられようが、これ1点のみの資料であることから、その信頼度は低いとみなされる。

151溝（図195）

調査区西半の中央からやや北に向かった位置で検出された。傾斜面に斜行するように西から東へ直線的に開整されているため、人工的な溝とみなされる。西側は調査区外にまで及び、また、東側は攪拌

乱孔により破壊されるため全容を把握し難いが、現況で長さ30.5mを測る。幅は1.0m前後、深さは0.1mから0.3mを測る。4ヶ所に断面を設定し、それぞれを観察した結果、その形状は、削平の激しい東側一か所を除いて、偏平な「U」字形を呈していた。埋土は、各地点で3層から5層前後に細分され、いずれも粘性を帯びたシルト質の土層からなることと共通している。

出土遺物には図195右下に示す須恵器などがある。1は杯G蓋、2は大形器種の高台、3は平瓶で、これらは法量や形態から飛鳥Ⅲ段階に位置づけられる。したがって、溝の埋没した時期の上限はこの段階と考えられる。

なお、この溝は建物10の柱穴を一部削り取っているため、双方から出土した土器を比較した。その結果、建物の構築された時期が飛鳥Ⅱ段階以前と判断されたため、遺構の重複関係との間に相関関係が成立した。

1501溝（図196・198・216、図版6-1）

調査区中央を南から北へやや西に内彎しながら流下する。南北両端を擾乱孔により滅失するため、現況の規模は長さ30.0m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。断面形は浅い皿形を呈し、埋土は單一層となる。

出土遺物には図198-1の飛鳥Ⅲ段階頃と思われる須恵器杯H身、2の土師器高杯脚部がある。

1506溝（図196・197・199・263）

調査区中央を西から東に流下する直線的な溝で、7001溝と共に条里坪境を区画するものと考えられる。規模は、長さ46.0m、幅2.1から4.4m、深さ0.5m強を測り、西側は、住宅建設直前まで機能していた灌漑用排水路が直上に開鑿されたため滅失する。断面形は図197のような浅い皿形を呈し、埋土はシルトから粘土が中心となることから、比較的穏やかな水流のもとで堆積したものと考えられる。

遺物には図199・263の土器類や石器があり、下線を付すのが下層出土のものである。図199-1と2は土師質の小皿と中皿で、3から5は瓦器楕、6は盤などの高台、7は土師質の把手、8は羽釜、9は常滑の片口鉢、10は渥美など東海系の大甕、11から16は奈良時代後期の瓦、図263-4はサスカイト石核である。これらのうち最新のものは13世紀中葉であり、この頃まで機能していたと考えられる。

1819溝（図196・198）

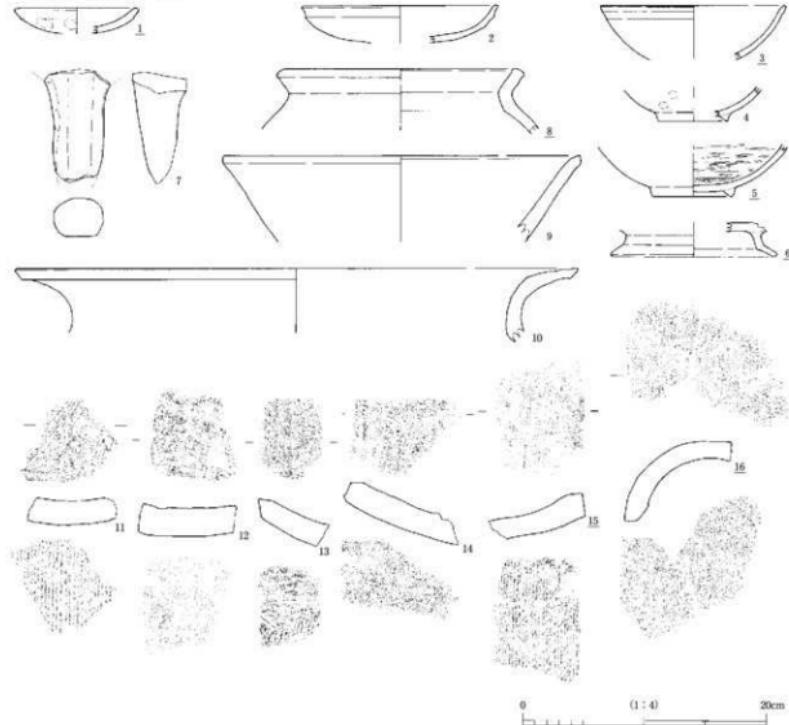


図199 1506溝出土遺物実測図

1506溝の北側でこれから分岐するような形で検出された。寸断されるため規模は確定できないが、現況で長さ39.5m、幅1.5m、深さ0.5mを測る。断面形は図196右下のような隅の丸い逆台形を呈し、埋土は3層に細分可能だが、いずれも塊状の粘土やシルトを含んでいる。遺物には図198-3の躰があるが、下面から確認できた1948溝から13世紀前葉の瓦器碗が出土したため、当該期以降の溝と確定される。



図200 1・2・10から13・92・133・134溝平面および92溝出土遺物実測図

1821溝 (図196・198)

調査区北東部からやや南に向かった位置で検出され、北西から南東方向へ等高線に沿って流下する。南端部を1819溝で破壊されるため、現存長10.6m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。これをさらに北西に延長した位置には1508溝が存在しており、本来は同一遺構であった可能性も考えられる。断面形は図196右側のような底面の丸い逆台形で、埋土は粒状構造がみられるシルトの単一層である。

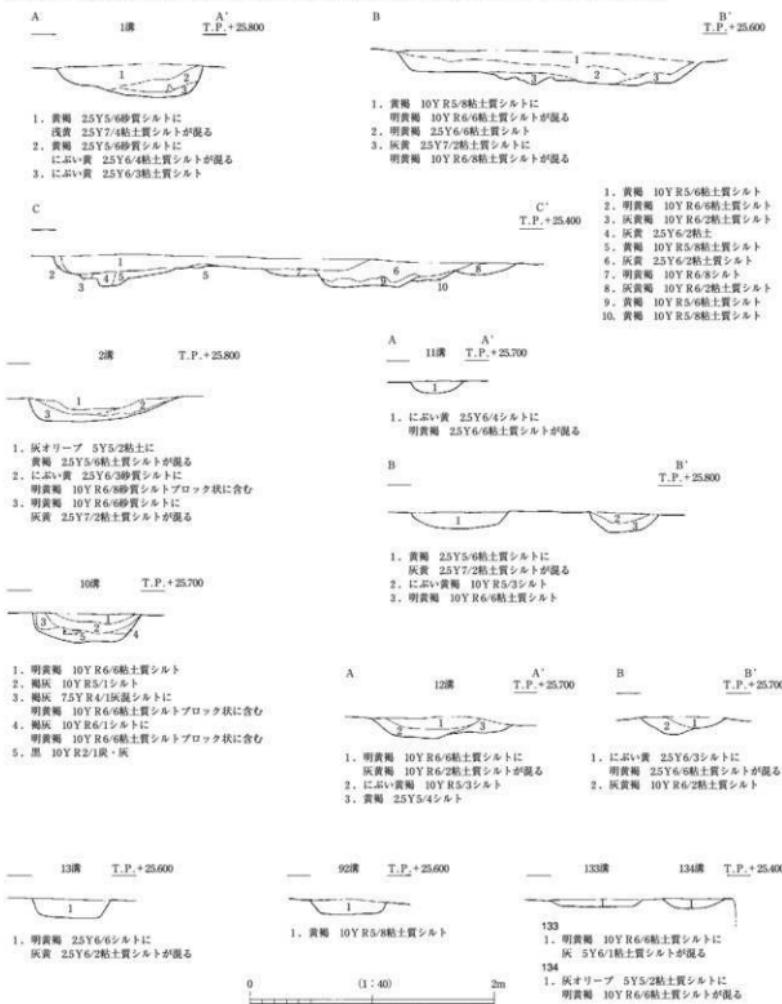


図201 1・2・10から13・92・133・134溝断面図

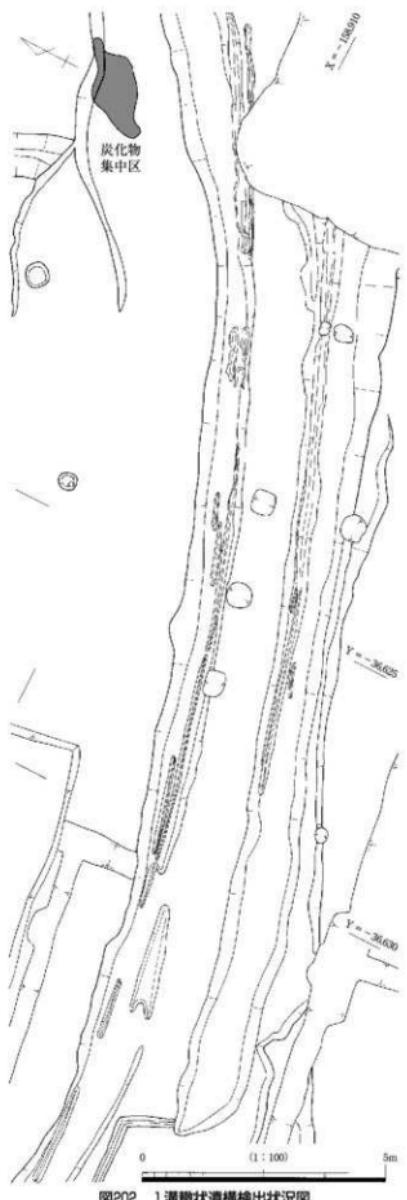


図202 1溝織状遺構検出状況図

図化できた遺物には図198-4と5がある。4は須恵器杯口蓋、5は土師器高杯Cで、その形態や法量から飛鳥Ⅰ段階の後半に位置づけられる。よって、これが溝埋没時期の上限となる。

1831溝（図196）

調査区東部からやや南で検出された。南側を擾乱孔により滅失し、現状での規模は長さ2.1m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。断面の形状は図196右のような椀形で、埋土は單一層からなる。

遺物がないため時期は不明だが、建物72との位置関係からみて、これの区画溝とも考えられる。

1848溝（図196・198）

調査区東半部中央からやや北で検出された、北西から南東方向にのびる溝である。

規模は長さ6.2m、幅1.5m、深さ0.1mを測る。断面形は、図196右下のような偏平な逆台形で、埋土は粒状構造を持つシルトの單一層である。

出土した遺物の中から図198-6の須恵器甌、7の土師器杯A、8の土師器CⅢを図化した。

これらの土器は、飛鳥ⅡからⅢ段階頃に位置づけられ、溝の廃絶時期を示している。

1877溝（図196）

調査区半部中央からやや北で検出された、南北方向の溝である。規模は長さ2.0m、幅0.2m、深さ0.5mで、断面形は図196右のような偏平な皿形を呈し、埋土は砂混じりシルトの單一層である。

遺物が出土しておらず、時期は不明である。

1879溝（図196）

調査区東部からやや南で検出された東西方向の溝である。両端が擾乱孔で失われ、現状での規模は3.8m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。

断面形は図196右のような偏平な皿形を呈し、埋土は粒状構造を含むシルトの單一層である。

出土遺物がないため、時期は不明である。

1948溝（図196・198）

1891溝埋土を除去した段階で確認された東西溝で、本来はこれと一連の遺構と考えられる。擾乱部が多いが、現状での規模は長さ15.1m、幅1.4m、

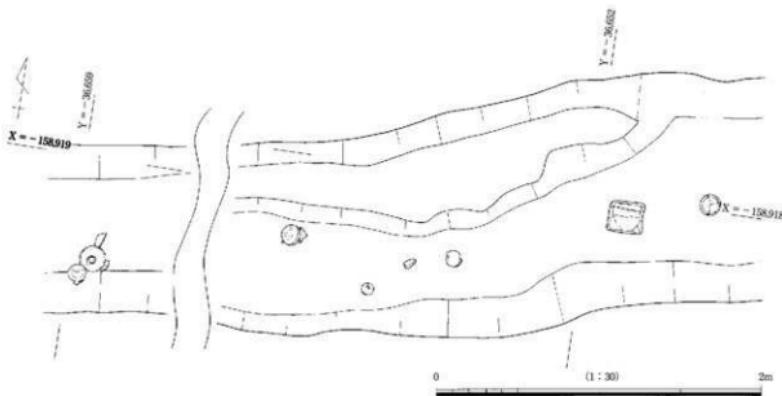


図203 1溝遺物出土状況図

深さ0.15mを測る。断面の形状は偏平な逆台形で、埋土は粒状構造の混じるシルトの単一層である。

出土遺物のうち図198-9と10に示す瓦器椀2点を図示することができた。その形態や暗文の様相から13世紀前葉に位置づけられる。よって、溝が埋没したのは、当該期以降と考えられる。

1溝（図200・201～211・216・217、図版3・59・60）

調査区のはば中央を西から東方向に横断する形で流下する溝である。途中、寸断や削平される部分も多いが、総延長83.6m、幅0.9から3.8m、深さ0.1から0.6mの規模を有する。

断面形は、各部分で様相が若干異なるが、基本的には隅の丸い偏平な逆台形を呈する。埋土は、粘性を帯びた黄褐色から黄灰色シルトを中心とし、図201および、図217に示すように、断面のC-C'やD-D'附近のみは両側が一段窪み、その部分に細かな凹凸や攪拌されたような土層がみられた。

この状況は平面的にも対応し、断面で確認された前述の凹凸や攪拌されたような土層を平面的に観察すると、幅0.1m前後の細長い溝が幾重にも折り重なりながら、最大1.7m前後の間隔をもって平行しながらのびていることを確認し、これを図化すると図202に示すような状態となった。

そして、一部分では図版59-4に示すように、上方からの加圧により土器片が破碎され、地面に食い込むような状況も観察された。この様相に前述した土層の堆積状況や平面の形状などの要素を加味して勘案した場合、この溝を轍と考えるのが妥当との結論に達した。

しかし、それとした場合、これまでの検出例から導き出された車輪間隔の平均が1.5mという数値を上回ることとなる。この問題に関しては、中央にみられる高まりの間隔が1.5m弱であることを重視し、一定程度の範囲内で往来の繰り返された結果がすなわち遺構の現状であり、0.2mの差は、車台の振幅の範囲内とみなすという回答を用意することで対処できるものと思慮する。

埋土内からは土器を始めとする多量の遺物が出土した。その状況は図203や、図版59-2と3に一部を示したが、西部と東部に集中する傾向にあり、これは、多分に削平を免れたことに起因する。なお、従前と同様に、遺物番号に下線を加えたものについては、堆積層内の下位より出土したことを示す。

遺物の種類には図204から209に示す土器類のほか、図210から212に図化した埴輪、また、図258から260に示す土製品、図263に図示する石器、図266および、269に図示した石製品がある。

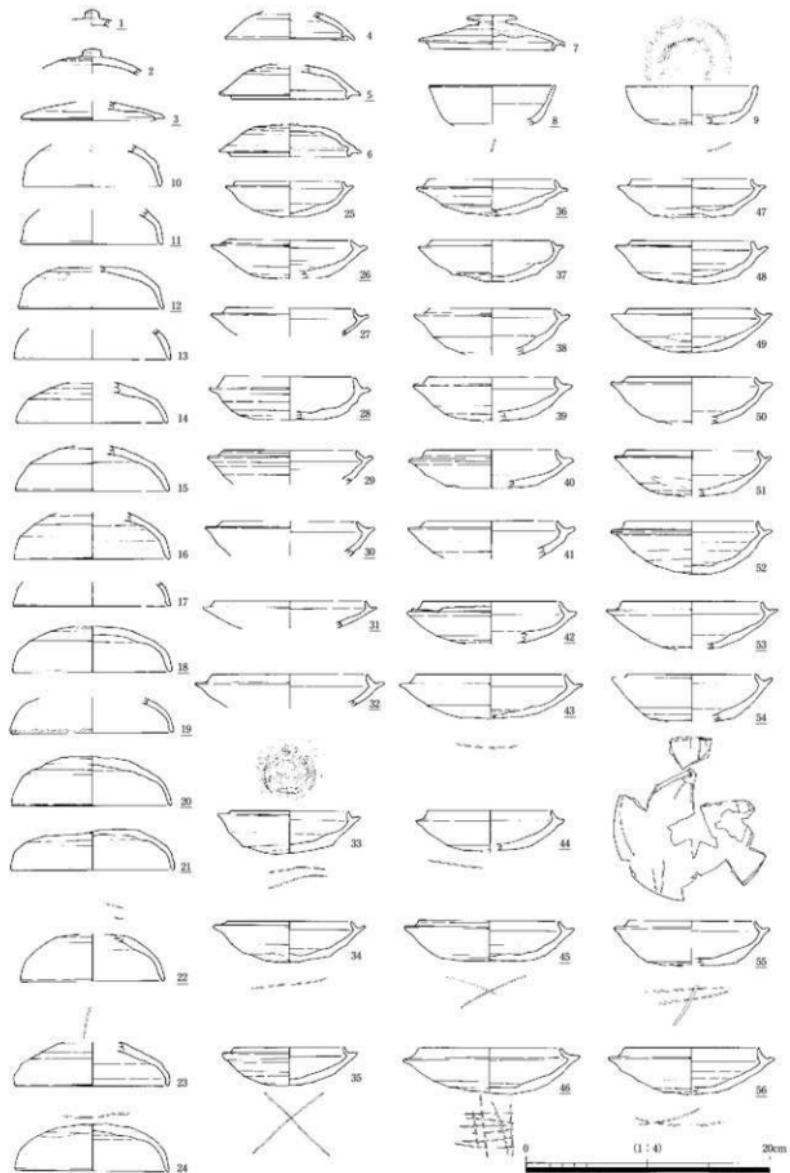


図204 1溝出土遺物実測図(1)

土器には須恵器類と土師器がある。須恵器には図204から206に示すものがあり、このうち、1から6は杯G蓋、7は遠江西部の湖西古窯跡群に例の知られる「かえり付き坏蓋」に酷似する製品、8と9は杯G身、10から24は杯H蓋、25から56は杯H身で、左下には各種ヘラ記号を入れたものを掲示した。つぎに、図205-57は縁口縁部、58から73は高杯の各部位の破片で、このうち、59について形態的

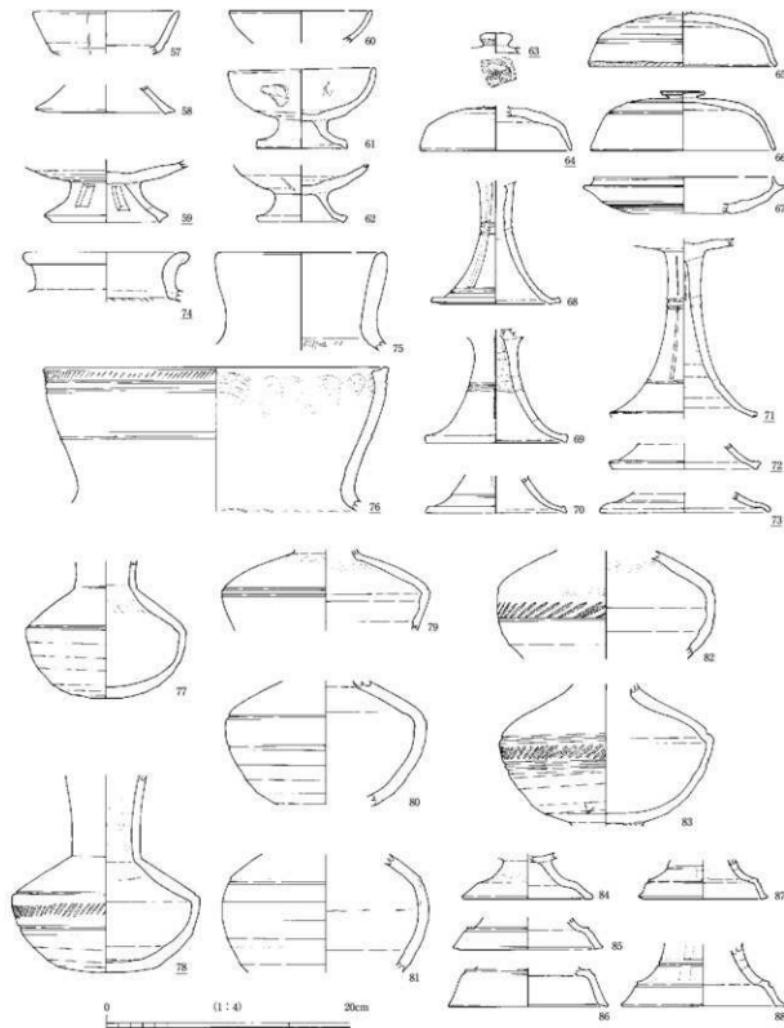


図205 1溝出土遺物実測図(2)

に古相を示していることから、5世紀代の遺物が混入したものと考えられる。つづいて、74および、図206-99は横瓶の口縁部片で、後者は灰白色を呈し、非常に硬質に焼成された器壁の薄い製品で、口縁部の形態も通常の陶邑製品とは異なっているため、他地域産の可能性も考えられる。75と76は直口壺で、後者については加飾よりこの器種に分類したが、内面の調整からみて子持ち器台など特殊な製品の脚部となる可能性も残されている。77と78は壺で、79から88は壺Kの体部と脚部の各部分である。さらに、図206-89から92および、97は平瓶で、97の頸部両側面には半円形のヘラ記号が加えられている。93から96は捏鉢である。98は捏鉢の可能性も残るが、形状や調整法からみて須恵質焼成された陶植の脚部とすることに、より説得力があろう。100と101は鉢Aで、102から108は壺Aである。

土師器については図207-109から137が杯CとGで、121については杯Hの可能性もある。これらについては、内外面の調整が観察できない資料が多く、必ずしも明確には分類し難い。しかしながら、C類の中には法量的に、111や119などのI類、131などのII類、132・133・136などのIII類が存在するようでもある。つづいて139は類例の少ない把手付台付鉢、138および140から154は高杯Cの杯部とそれらに組み合う脚部で、153については、特に成形や調整が粗い。

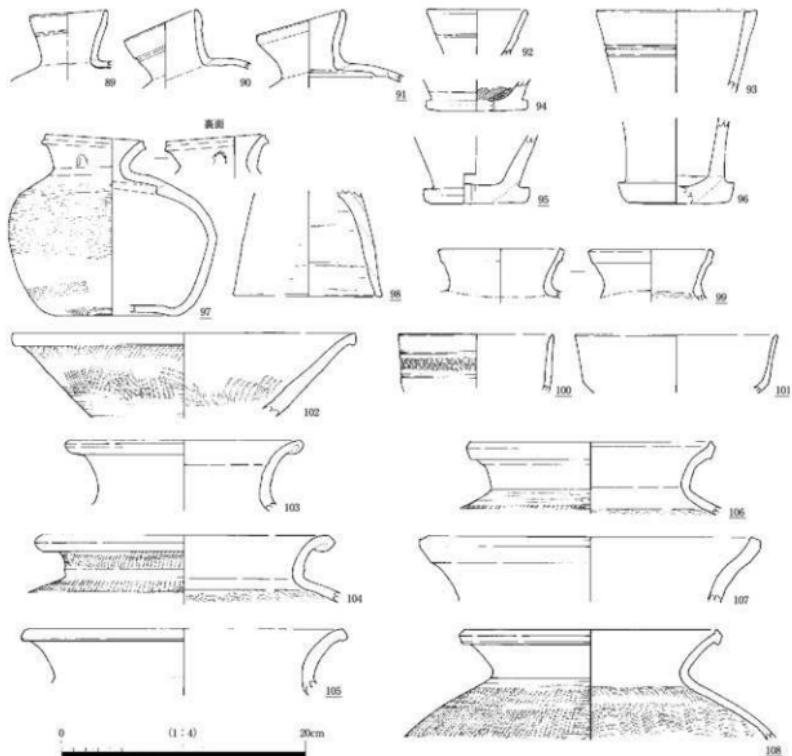


図206 1溝出土遺物実測図(3)

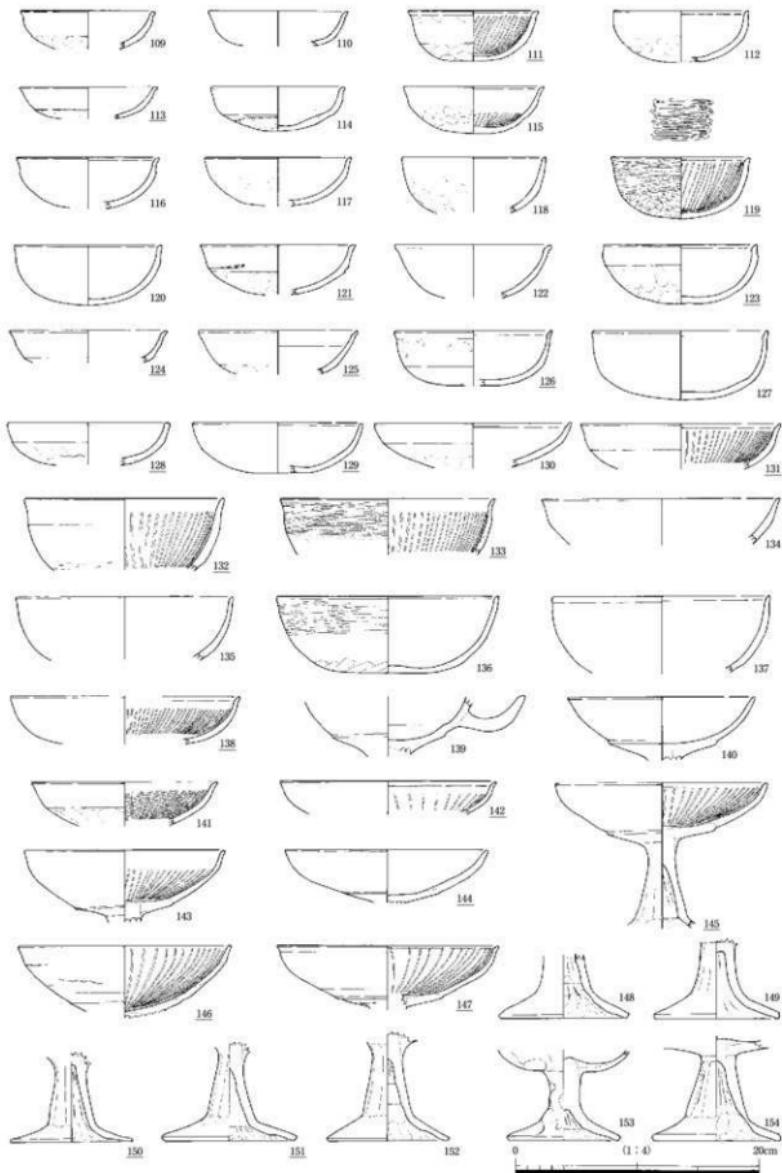


图207 1清出土遗物实测图(4)

つぎに、図208-155と156はミニチュア土器で、前者は鉢、後者は壺を模したものであろう。

157から160は小形の高杯で、いずれも手捏に近い成形手法を用いて製作されている。161から164は、承前、難波宮より出土する台付鉢に類似していると述べた捏鉢と仮称する製品である。165は盤の脚部、166から176と鉢で、形態的には166・167・169・171・172のA類と、それ以外のB類とに分類され、さらに、166と167については把手が付されている点において他と異なっている。

図209-177から185は壺で、そのほとんどが外面調整にハケを用いていない点で、河内地域の特質を表している。186は通有と異なる胎土を用いて製作された土器製品で、張り出し部の下面全体に被熱痕跡と煤が付着していることに注目するならば、羽釜となる蓋然性が高い。187から189は鍋で、190は瓶、191は把手を付した大形器種の口縁部破片で、類例の少ないものである。

以上の遺物に対し、器種構成と時期についての注目点を述べるならば、まず、器種構成については、

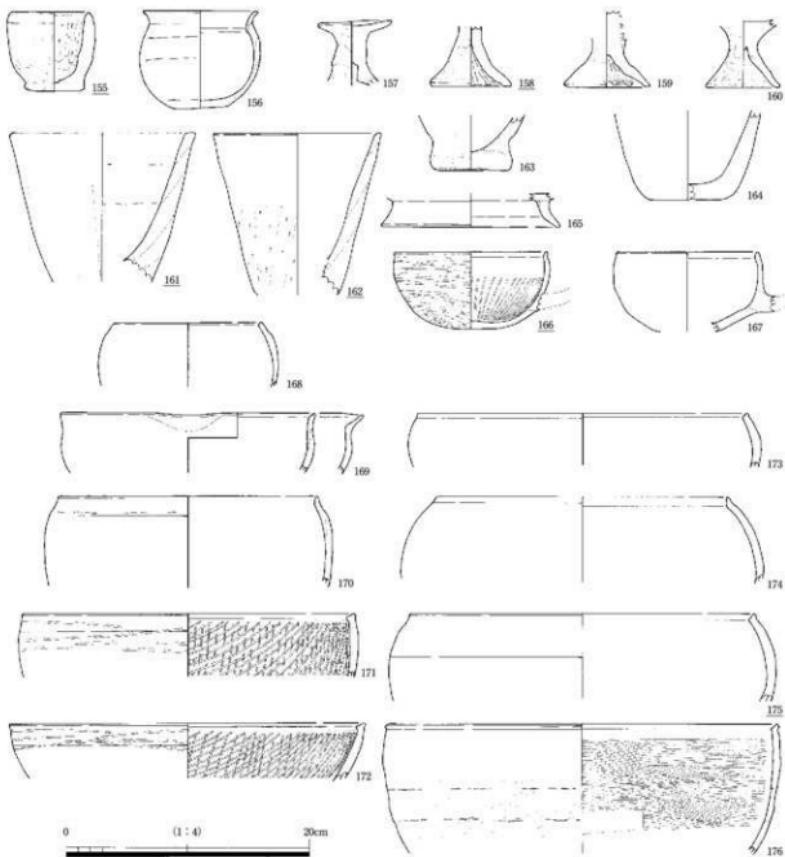


図208 1溝出土遺物実測図(5)

杯を中心とする供膳形態が圧倒的多数を占め、つづいて壺や須恵器甕などの貯蔵形態がこれを補完するものとして加わり、煮沸具である土師器の甕・鍋は極めて少なく、羽釜・瓶に至っては若干数がみいだされるのみという点を指摘できる。この傾向は400溝でも僅かながら看取されたが、当該期における遺跡内の様相が、日常生活を営む一般集落と異なる環境であったことを示しているとも考えられる。

つづいて時期について考えてみたい。まず須恵器の杯に注目した場合、器種としてはHとG双方が出現している。ただし、出土量では前者が後者を大きく上回り、遺物整理段階でつまみを意図的に抽出したが、図化した以外その数は多くはない。また、その形状は後出段階の典型的な宝珠形とはならず、つまみ状となることで盛期のものとは異なっている。さらに、法量と形態については、前者である杯H口縁部や受部の径が、25のように10cm程度に矮小化したしたものも一部には存在するが、過半数は11cmから12cm台のもので占められ、回転切り放ちのまま仕上げられる製品の数も多くはない。後者となる杯Gの口・受部径については、10cm前後の製品で占められ、形状の知れるものでは天井部も高い。

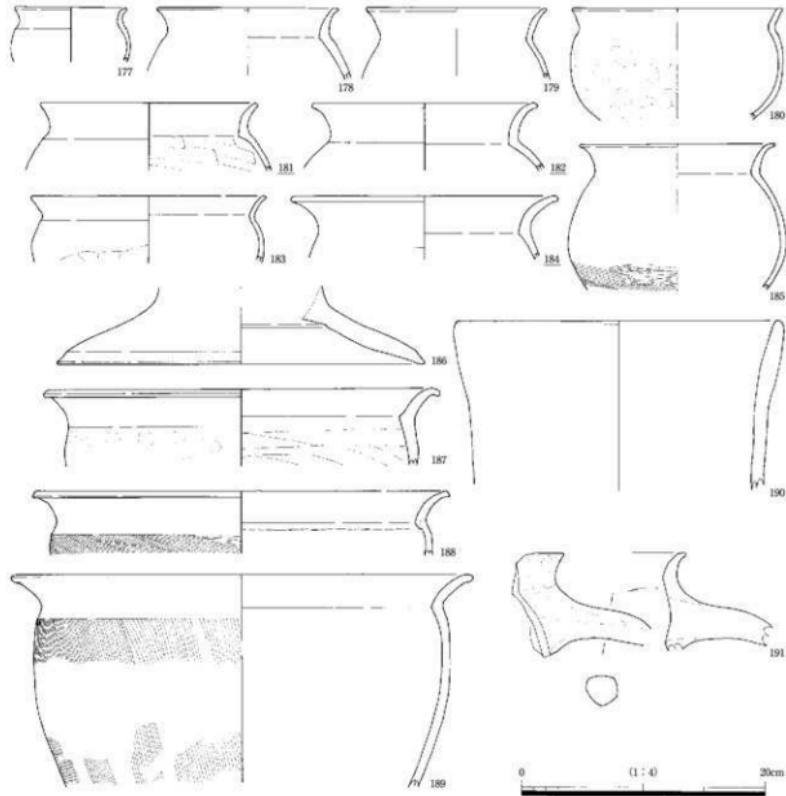


図209 1溝出土遺物実測図(6)

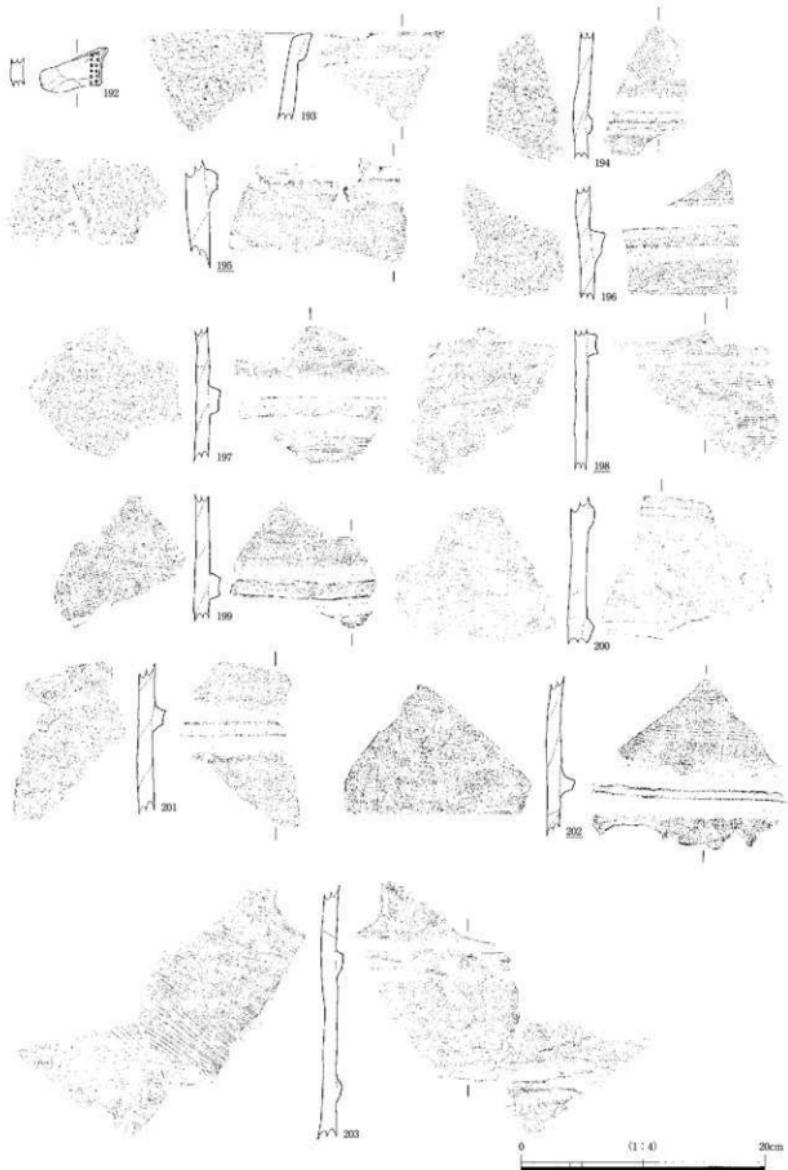


圖210 1溝出土遺物實測圖 (7)

他の器種については、低脚高杯が出現している一方、小形化や透かしの形散化が進行してはいるが、長脚2段透かしの高杯が存在することが注目され、このほかにも、平瓶や捏鉢が一定量含まれること、体部を櫛排列点紋で加飾する壺Kという前時代的器種や要素が看取されることが特徴といえよう。

土師器にみられる特徴は、まず、杯C類に3つの法量分化が認められることが注視される。そして、全体的に径高指数が大きいこと、また、119のように、小形でありながらも、調整に密なヘラケズリとヘラミガキを施すという丁寧な製作技法を用いた製品が存在することに注意しなければならない。この他については、供膳具が多いにも係わらず、皿がみられないのが留意点とも考えられる。

以上のような特徴は、飛鳥I-3段階に最も近い資料的内容を持っているものとみなされる。

つづいて、図210から212は各種の埴輪である。この溝には直接関係しないが、遺跡の環境を知る上で興味深い資料であるため掲載する。

図210-192は焼成や胎土から形象埴輪には相違ないが、器形は特定できない。端部には連続した刺突が施され、これを縫取りとみなすならば、馬形埴輪の鞍背など表現法に共通する。図210-193から203および、図211-204から207は円筒埴輪である。これらは、B種ヨコハケを用い、無黒班焼成の193・195から199・201・202・204の9点、一次調整のナナメハケに二次調整のヨコハケを加え、無黒班焼成となる205・206の2点、一次調整のナナメハケのみで仕上げられ、無黒班焼成となる194・200・203・207の4点の3つに分類される。なお、204・205については、この要素に加え口縁尖帯を付すという特徴を持つ。

上記のような特徴を持つ埴輪を使用する附近の古墳は、1番目がはさみ山古墳や、誉田御廟山古墳外堤、2番目が岡ミサンザイ古墳、3番目については小片のため不明だが、径やタガの形状から類推して後者のもの可能性が高い。

図212-208と209は双方とも朝顔形埴輪である。208はナナメハケで仕上げられ、焼成は有黒班となる。

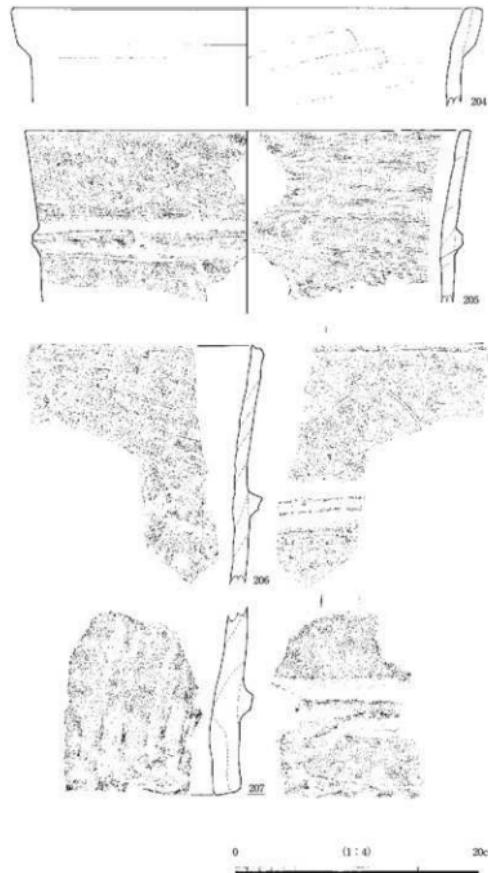


図211 1溝出土遺物実測図(8)

附近で類品を使用する古墳には宮山古墳がある。209は一次調整のナナメハケに二次調整のヨコハケを加え、無黒斑焼成された製品である。器壁は薄く、焼成は硬質で白っぽい黄灰色を呈している。

図258-5は土師質焼成された土鉢の釣手から部にかけての破片で、図259-19は籠の送風管、図260-32は土師質焼成された車輪形を呈する用途不明の土製品で、中央とその4方に円孔を穿つ。

図263-11はサヌカイトの石核、図266-5は煤が付着するなど、被熱痕跡を止める凝灰岩の切石で、表裏面に段状の加工痕が認められる。図269-10と14は砂岩を用材とする粗砥石である。

2溝（図200・201）

調査区西半の中央からやや南で検出された。西から東に流下し、西端は用地際まで拡張したがさらに外へとつづく。規模は長さ15.3m、幅1.3m、深さ0.15mを測り、断面形状は図210中段に示すような偏平でいびつな隅丸の四辺形となる。埋土は粒状構造を混じえた粘土から粘土質シルトである。

出土遺物がないため時期は不明だが、北側3.5mには前述の1溝が所在し、これに沿うように同様の態をなして検出されたことから、両者間に密接な関係があるものとし、これと同時期とみなしたい。

10溝（図200・201・213、図版62-1・63-2、3）

調査区西部中央の崖際で検出された南北溝である。途中1ヵ所途切れ、また、南部を11溝によって失うが、現況での規模は、長さ6.6m、幅1.0m、深さ0.15mから0.2mを測る。断面の形状は図201左下のような隅の丸い逆台形を呈し、埋土は最下層に炭や灰の純層が約0.1m堆積し、その上を黄褐色系のシルトを中心とする土層が覆うという状況であった。このため、生産に関連する遺物が検出されることを予測して注意深く調査を進めたが、図213に示すように煮沸具である小形の甕が多く出土したため、この

可能性を否定せざるを得ない結果となった。

出土遺物には図213に示す土器などがある。このうち1から4は須恵器杯H身、土師器では暗文の滅失したものも多いが、5から8が杯C、9が形態的には杯だが、口径では鉢、10が鍋、そして、11から21は甕で、19以外ハケを用いていないことで地域的特色が表わされている。

これらの遺物は須恵器杯Hの形態や、受部径が10cm前後となる法量的要素、また、7・8の土師器杯Cに施される丁寧な調整法からみて、飛鳥I-2段階に位置づけられる。

11溝（図200・201・214）

調査区西半の中央部から南に向かった位置で検出された。西

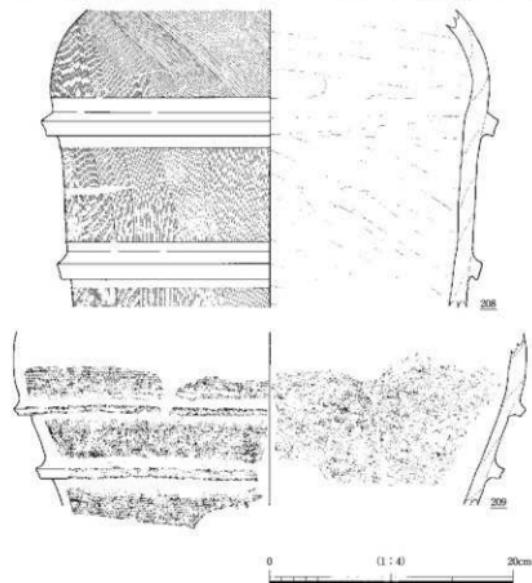


図212 1溝出土遺物実測図(9)

から東方向に流下し、途中、二股に分岐する。西端は拡張部よりさらに西へのび、東端は保存樹木区域に入るため全容を確認できないが、現状での規模は、長さ14.0m、幅は西際で0.4m、分岐点で2.0m、深さ0.1mを測る。断面の形状は図201中段のような皿形を呈し、埋土は粘性を帯びたシルト質の土層からなる。そこからは図214に示す土器などが出土した。1は須恵器杯G身、2は同じく杯H身、3は土師器杯C、4は同甕Aである。なお、5は形態や焼成法から、5世紀代の初期須恵器とみられるが、調査地周辺の歴史的環境を知る上で示唆的であるため掲載した。

これらのうち遺構の時期を推定できる資料に1と2があり、数量的に不安定要素を残すが、杯Gが出現していることや、杯Hのたちあがりが大きいため、飛鳥I-2頃に位置づけられよう。したがって、この段階に遺構が埋没したことが考えられる。

12溝（図200・201・215、図版62-1・63-4）

調査区中央から西に向かった位置で検出された。南方から北方向へ流下し、南端は1溝により、北端は攪乱により損壊され滅失する。西側には先述した10溝がこれに沿うような形で位置している。

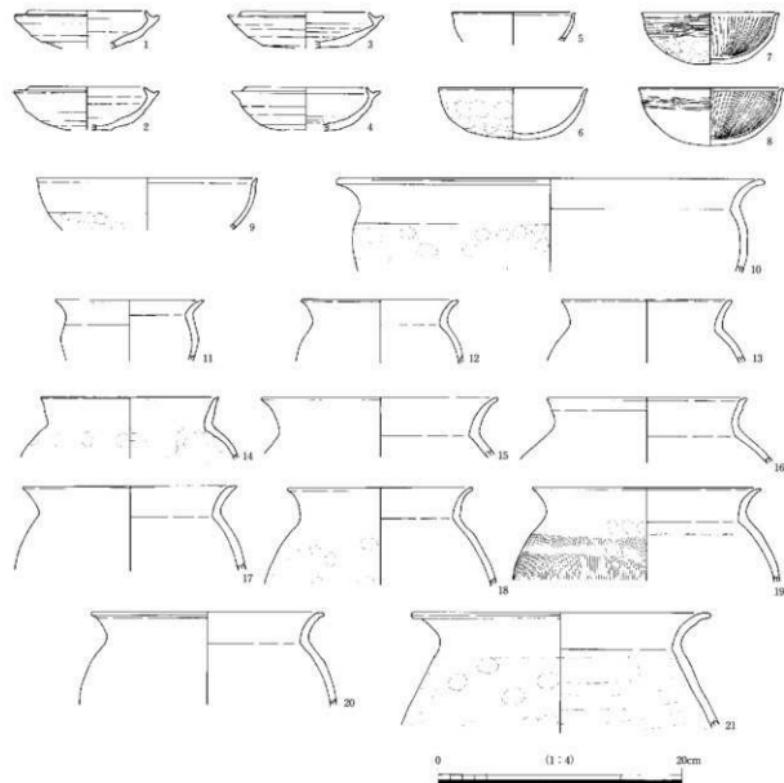


図213 10溝出土遺物実測図

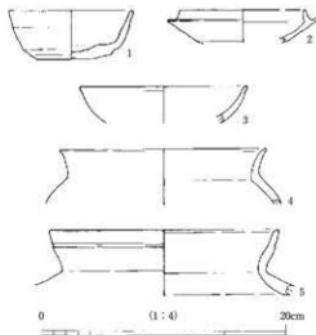


図214 11溝出土遺物実測図

口径や受部径が最低の3でも11cmを凌駕していることから、飛鳥I-2頃に位置づけられ、この年代観は前後関係にある1溝の出土遺物とも整合しており、両者の関係に齟齬をきたさない。なお、このように考えた場合、6の杯Bが問題となる。しかし、1溝の膨大な出土資料の中にこの器種が1点たりとも確認されず、しかも、1溝に先行し杯Gのないこの12溝から唯一これのみが出土することは非常に不可解であるため、混入品とする評価を与えておきたい。

13溝（図200・201）

調査区西端のやや南で検出された。南西から北東に流下し、途中、二股に分岐する。南西部は拡張部よりさらに西へつづき、南端部は擾乱孔により破壊される。現状での規模は、長さ16.0m、幅0.3mから1.0m、深さ0.15mを測る、断面形は図201左下のような隅の丸い逆台形を呈し、埋土は粒状構造を混じ

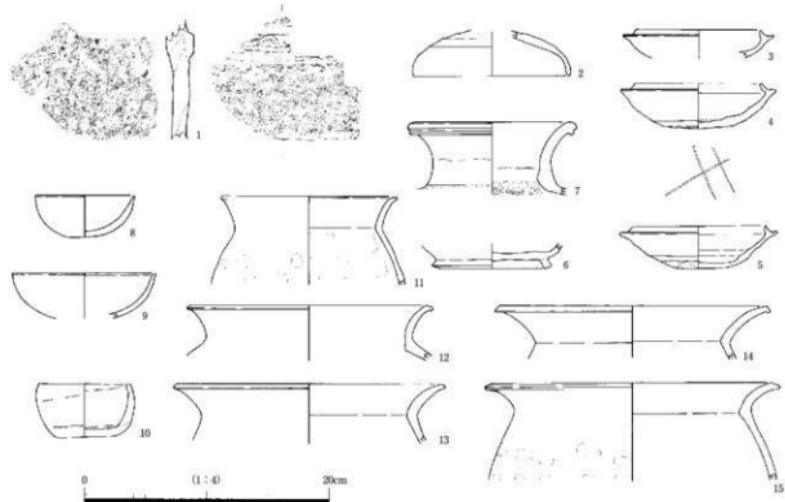


図215 12溝出土遺物実測図

確認できた規模は、長さ20.7m、幅0.4mから1.2m、深さ0.2m弱である。断面の形状は図201下段のような状況で改築されたような態をなす。埋土は粒状構造を混じえた粘性の高いシルトで、ここから図215に示す土器や、図266-3の被熱痕跡を止める凝灰岩切石が出土した。

図215-1は円筒埴輪で、外面にはナナメハケが施される。2から7は須恵器で、2は杯口蓋、3から5は杯口身、6は杯B身、7は横瓶である。8から15は土師器で、8と9は杯C、10はミニチュアの手捏土器、11から15は甌Aで、11と15の外面には指頭圧痕が観察される。

これらのうち遺構の埋没時期を知る手掛かりとなるものに須恵器杯類がある。その中にG形態が含まれないこと、

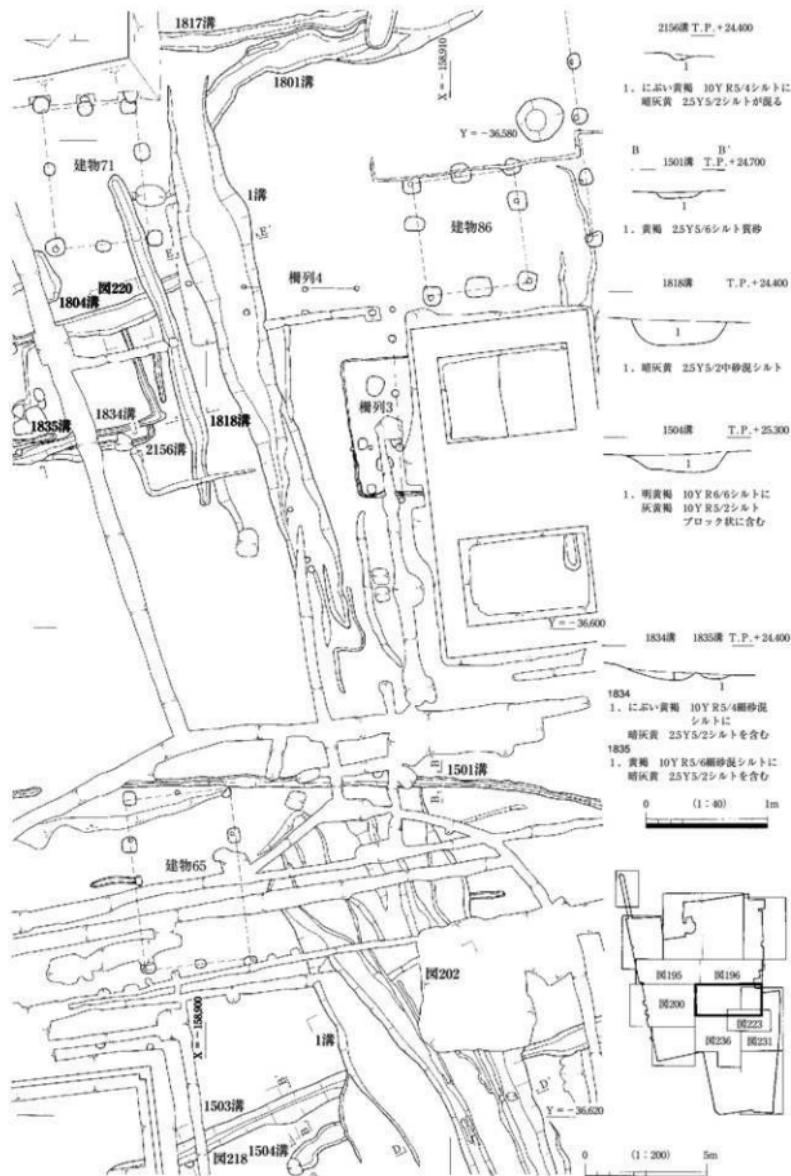


図216 1・1501・1503・1504・1804・1818・1834・1835・2156溝平・断面図

えたシルトの單一層からなる。遺物がないため時期は不明だが、等高線に直交する形となっていることや、途中で分岐することから類推するならば、飛鳥時代の古い段階以前である可能性が高い。

92溝（図200・201）

調査区西半部中央で検出された。北側が保存樹木区域下となり、南側が溝1によって破壊されるため、長さ1.1mを確認したに過ぎない。幅は0.6m、深さ0.15mで、断面形は図201下段のような隅の丸い逆台形となり、埋土は粘性を帯びたシルトの單一層である。出土遺物には図200下に示す須恵器杯口身などがある。形態や法量から飛鳥Iの古い段階に位置づけられ、これ単独ではあるが、重複関係より後出すことが明らかな1溝出土遺物が飛鳥I-3段階であることから、この年代観は支持される。

133溝（図200・201）

調査区西半中央から北によった位置で検出された不定形な溝である。南西から北東に流下し、北東部は擾乱孔により滅失する。現況での長さ4.4m、幅0.8m、深さ0.05mで、断面形は図201右下に示すような偏平で隅の丸い逆台形を呈する。埋土は粒状構造の混じえた粘性の高いシルトの單一層である。

遺物がないため時期は不明だが、傾斜面に平行していることから比較的古い段階のものとみられる。

134溝（図200・201）

前述した133溝の南東部に接し、これに沿うような形で検出された。諸相は前段と同様、南西から北東に流下し、北東部は擾乱孔により滅失する。現状での長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.05mを測り、断面形は偏平な皿形を呈する。埋土は粘性を帯び、粒状構造を混じえたシルトの單一層である。

出土遺物がないため時期は不明だが、133溝と同様の態をなすため、これと同じと考えられる。

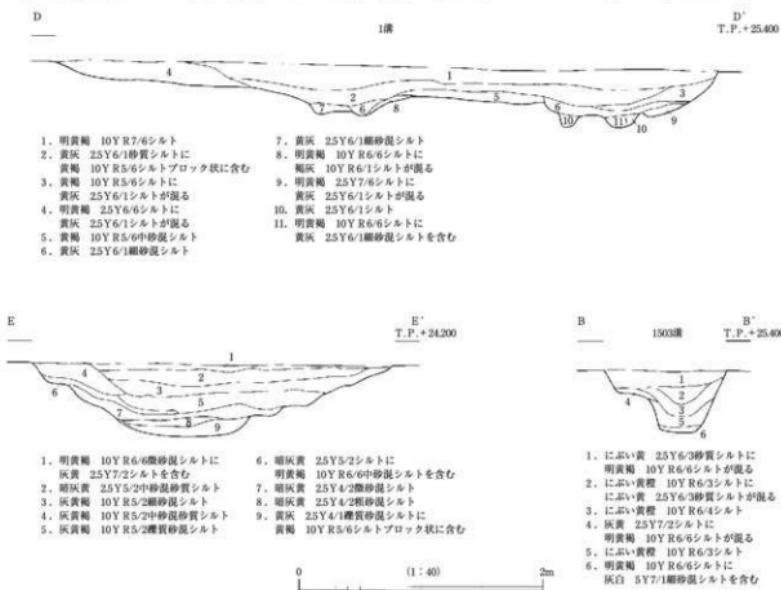


図217 1・1503溝断面図

1503溝（図195・216～219、図版67-1）

調査区中央からやや西で検出された。南東から北西方向へ流下し、北端を1506溝、南端を1溝に伴う段により削平されるため、現況での長さ39.0mとなり、幅0.3mから1.2m、深さ0.5m前後を測る。

なお、これの北西側延長線上には3-1溝が所在し、その位置関係ばかりか、時期や諸相までが近似していることから、本来は一本の溝であったと想定されることは3-1溝の項でも述べた。

断面形は、基本的には図217右下に示すような隅の丸い逆台形を呈し、部分的に図示するような有肩部が形成される。埋土は5層前後に細分されるが、いずれもシルト質が強く、最下層では細砂が観察されたため微弱な水流があったと思われる。

埋土内の中位から下位を中心として、図218や図版67-1に示すような状態で遺物が出土した。その内訳は図219・259・268に示した土器、土製品、使用痕のある石である。土器には図219-1から15に示す須恵器と、16から38に示す土師器がある。須恵器のうち1は鉢A、2は壺、3から6は杯H蓋、7から15は杯H身である。土師器のうち杯は、暗文の遺存するものが少ないと必ずしも正確ではないが、23が確実にC、それ以外の16から30がCかGに分類される。そして、31から33は壺A、34と35は高杯Cとそれらの脚部、36から38は鉢で、後2者はAに分類される。

これらの遺物は、須恵器では杯Hの口径や受部径が11から12cm前後となり、身ではたちあがりの形状が明確に作出されるものが多い。蓋では6のみではあるが、天井部と口縁部の境を凹線で界するものが含まれることや、杯Gが一切含まれないことが特徴で、土師器では23の外面にヘラケズリがみられるここと、暗文を施す例が少ないと、29や30など形態的には杯CⅢでありながら、法量的には鉢Aともみなされるような未分化的折衷要素を兼備することが注目される。このような様相を持つ時期に最も近似するのは飛鳥I-2段階であり、よって、これらの遺物を当該期に位置づけることができる。

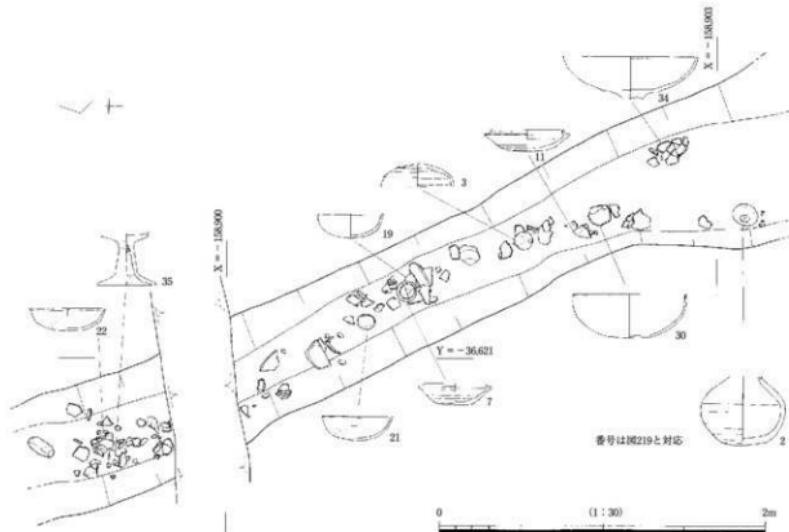


図218 1503溝遺物出土状況図

また、土器以外に土製品や石製品が出土している。図259-22は輪の送風管、図268-13は、使用痕のある石で、細粒質の砂岩を用材とし、表裏面の中央には滑沢がみられる。

1504溝（図216）

調査区中央からやや西で検出された南東から北西方向の溝である。東側約1mには1503溝が隣接し、南部は1溝に伴う段によって削平される。規模は長さ2.5m、幅1.0m、深さ0.15mで、断面形は、図216右に示すような隅の丸い偏平な逆台形を呈す。埋土は粒状構造を混じえたシルトの単一層である。

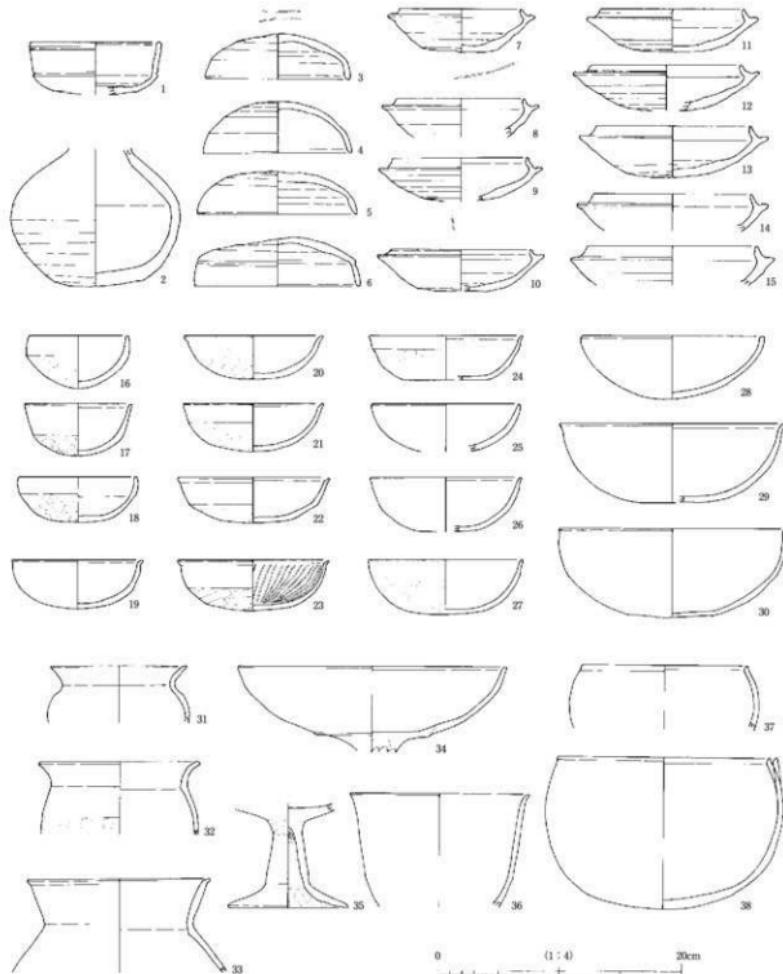


図219 1503溝出土遺物実測図

1804溝（図196・216・220・221、図版72）

調査区中央から東によった位置で検出された。北から南に流下し、南端は攪乱孔により滅失する。規模は長さ11.4m、幅0.3mから1.1m、深さ0.05mから0.4mで、断面形は図196右上のような浅い皿形を呈し、埋土は單一層となる。埋土中からは、図220や図版72に示すような状態で折り重なるようにして円筒埴輪が出土した。その状況は、縦長となった破片の表面を上に向けて2枚ずつ重ね合わせるような状況であり、これを復原した結果、図221のようになった。前面の一部を消失するが、それはすなわち移動式竈であった。その詳細は、円筒埴輪を倒立させ、口縁を裾部とし、破断面を細かく打ち碎くことにより水平に整えて掛口を作出し、透かし孔を煙孔に仕立て、その反対の面を半円形に打ち欠いて焚口とするものであった。実際に供用されたことは、内面の上位や掛口に煤が付着していることから明らかだが、試しに上位から荷重を掛けたところ前面に倒れるため、裾部を固定しなければ実際の使用には堪えないと判明した。なお、埴輪本体はナマハケの施された無黒斑のもので5世紀後葉のものである。

この溝からは上記以外、少量の土器細片が出土したのみで、時期の推定できるものがない。しかしながら、それらから看取される僅かな特徴や、埋土の様相、そして、1溝や、1818溝など重複する遺構出土遺物からみて、飛鳥I-2段階以前のものとすることができる。

また、円筒埴輪を竈に転用した例は、神戸市西区宅原遺跡などでその可能性を持つとされる破片が報告されていたが、ほぼ全形のうかがえる状態にまで復原できたのは本資料がおそらく初見となろう。

1818溝（図216・222）

調査区東半中央より検出された。1溝の北15mで、これに沿うよう西から東へ流下する。規模は長さ14.1m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。断面形は、図216右のような逆鉢形を呈し、埋土はシルト質の強い粒状構造を持つ土層の單一層である。

出土遺物には図222-1と2の土器などがある。1は須恵器杯H身、2は土師器杯Cである。これらは1の受部径が12cm程度となることや、2の外面にヘラケズリが観察されることから、飛鳥I-2段階頃に位置づけられる。これら2者は時期的にも近似しているため互いに関連するものとみなされる。

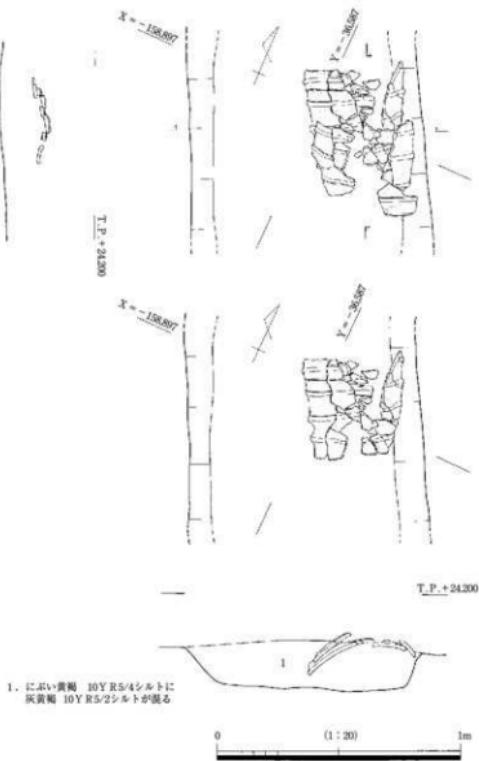


図220 1804溝埴輪転用竈出土状況図

1834溝（図216・222）

調査区東半中央から検出された。北から南へ6.8m向かった部分で東に向かって「L」字形に折れ曲がり、そこから4.0mの地点で1804溝と接し、これに寸断される。

断面の形状は、図216右に示すような浅い皿形を呈し、埋土は細砂質を交えたシルト層単体である。出土遺物には図222-3に示す高杯脚部のほか若干の土器があるが、特徴に欠けるため詳細な時期は特定できない。このため、遺物から時期を限定できないが、埋土や遺構の前後関係などの要素を加味するならば、飛鳥Ⅰ段階の古い部分以前に位置づけられる。

なお、この遺構については、その平面形などから竪穴建物の残骸との予測を立てて当初の掘削に臨んだ。しかし、基底面まで達しても主柱穴や竈など、竪穴に付帯する施設がみいだせなかたため、斜面地形を平坦化するための区画溝と考えるに至った。その附近から前述の埴輪転用窓が検出されているため、水を使用するような施設、あるいは、建物72の作業場的空間であったなどとも推測されよう。

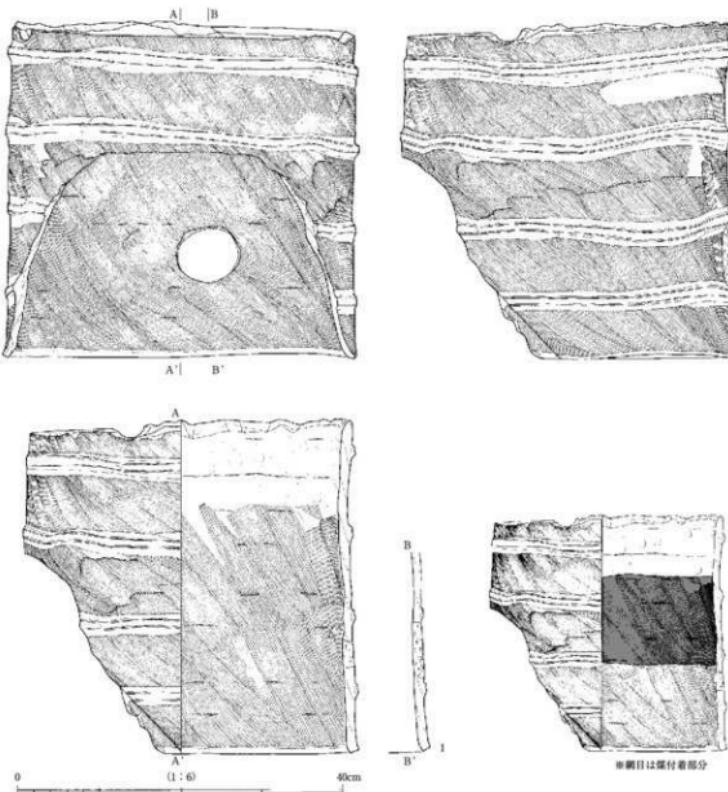


図221 1804溝埴輪転用窓実測図

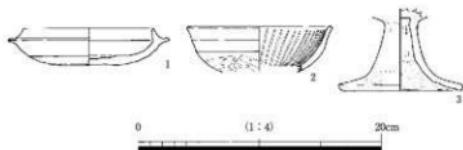


図222 1818・1834溝出土遺物実測図

遺物は出土していないが、このような状況を呈すため、これらと一連の遺構と考えられる。

2156溝（図216）

1834溝南西部に接して検出された。規模は長さ4.8m、幅0.6m、深さ0.05mで、断面形は図216右上のような浅い楕円形を呈す。埋土は粒状構造を持つシルトの単一層である。遺物がないため詳細な時期は不明だが、1834溝と相似形をなしていることから、この溝もそれらと一連のものと考えられる。

921溝（図223）

調査区中央から南東に向かった位置で検出された。方向はやや北に振った西から東である。規模は長さ7.3m、幅0.4m、深さ0.05m強を測る。断面形図223左下のような隅の丸い偏平な逆台形を呈し、埋土

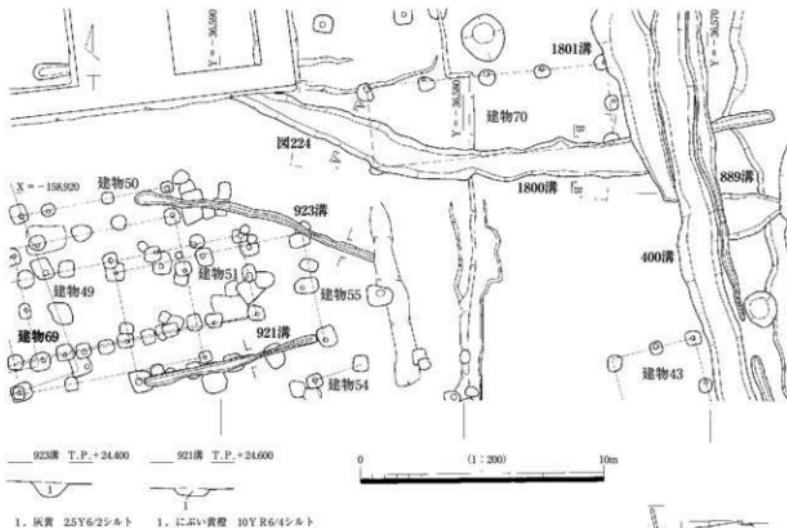


図223 921・923・1800溝平・断面図

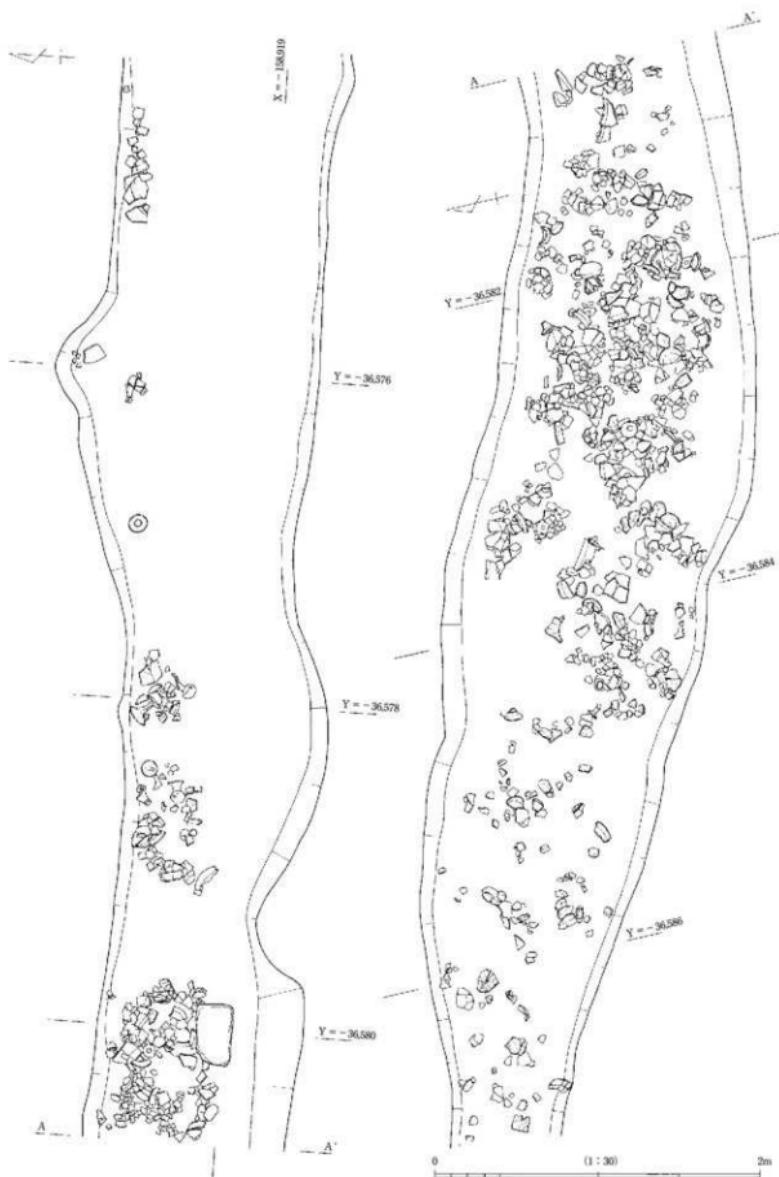


图224 1800溝遺物出土状况图

はシルトの単一層である。遺物が出土していないため時期は不明だが、建物51の南軒柱列と重複して検出されたため、あるいは、これの壁を構築する下部施設や、解体時の痕跡であるのかも知れない。

923 溝（図223）

調査区中央から南東の位置で検出された西から東に流下する溝である。途中、南東側に方向を変え、その末端は攪乱孔によって損壊される。現状での規模は、長さ10.2m、幅0.4m、深さ0.15m前後を測り、断面の形態は、図223左下のような椀形を呈す。埋土はシルトの単一層で、遺物は出土していない。このため、遺物から詳細な時期を知り得ないが、建物55に伴う柱穴掘方の一部を削り取っていることから、少なくとも、この建物の時期である古墳時代後期末葉以降に位置づけることはできる。

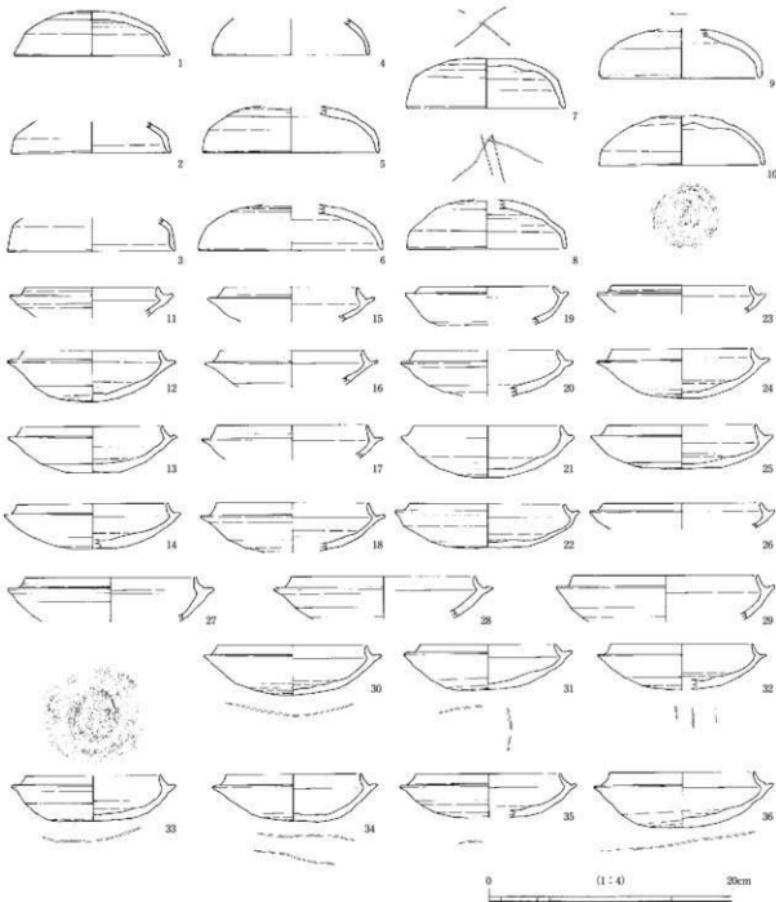


図225 1800溝出土遺物実測図(1)

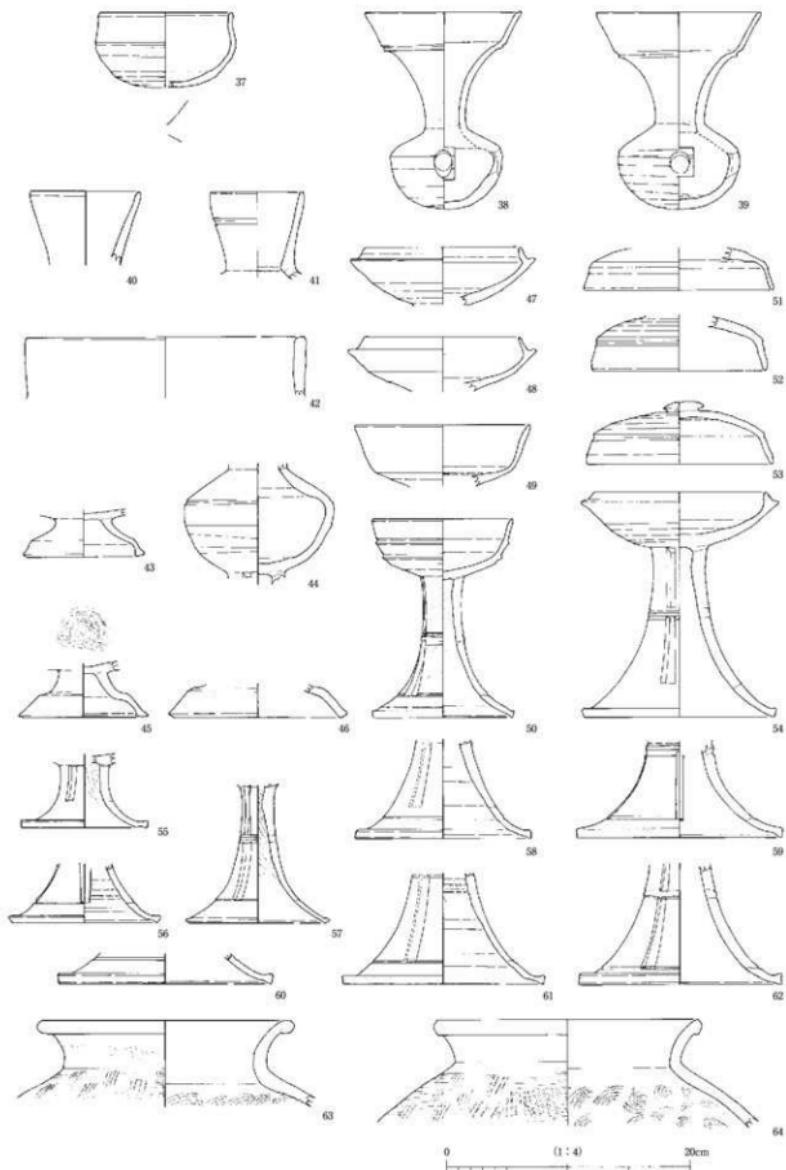


图226 1800件出土物实测图(2)

1800溝（図223～230、図版68）

調査区東半中央からやや南の位置で検出された。西から東へ南に蛇行しながら流下し、末端は開析谷に向かって消滅する。規模は途中、攪乱孔や他の遺構により寸断されるが、長さ31.0m、幅0.4mから1.7m、深さ0.05mから0.3mを測る。断面の形状は図223下位に示すようなもので、厚薄の差はみられるが、基本的には皿形を呈する。埋土は粒状構造を混じえたシルトからなり、その中位を中心として、図224や、図版68のような状態で夥しい量の遺物が出土した。それらは図225から230に図示した土器類を中心とし、図258-16の土製品、図226-9の凝灰岩切石、図270-2の鉄製品からなる。

土器類には図225から226の須恵器、図227から230の土師器や埴輪がある。須恵器のうち図225-1から10は杯口蓋で、10の内面には同心円タタキが観察される。そして、11から36は杯口身で、33の内面にも同心円タタキが認められる。つづいて、図226-37は鉢A、38と39は甌、40と41は平瓶、42は直口壺、43から46は44の壺Kを含む台付壺、47から62は高杯で、このうち、49・50と55は、無蓋と短脚1段透かしとなっている点で他と異なっている。そして、63と64は甌Aである。

土師器類には図227-65の小形高杯、66の鉢を象ったとおぼしき手捏製品、67から70の杯がみられるほか、71から73の壺で、このうち前2者は短脚、後者は長脚となる。74から86は高杯の各部位で、82は

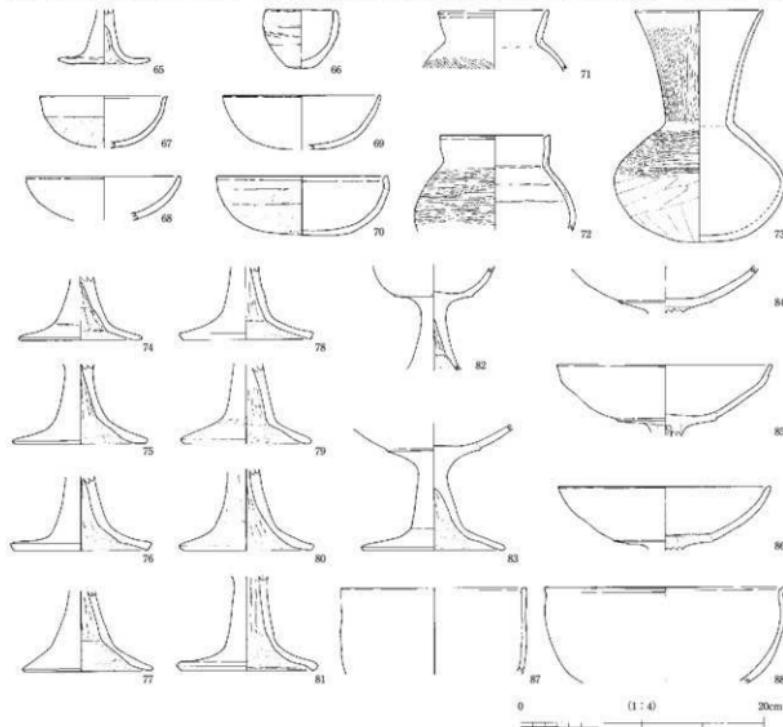


図227 1800溝出土遺物実測図(3)

杯部の形状からみて脚付把手鉢の可能性もある。87と88は鉢で、口縁部が直立するものと、内彎するものがある。図228-89から110および、図229-111から118は壺で、89から110は各種規格に分けられるA形態、111から118はC形態となる。119から122は瓶、また、図230-123はナナメハケで仕上げられた朝顔形埴輪、124と125は、粗い胎土を用いて粗雑に製作された鉢で、後代の製塙土器を想起させ、後者の底面には葉脈の圧痕が観察される。最後に、126から131は鍋で、A形態でほとんどが占められるが、127のみは把手が付されているためB形態に分類される。

これらの土器に注目した場合、まず、須恵器では杯皿のみで占められ、その口・受部径が最小のもの

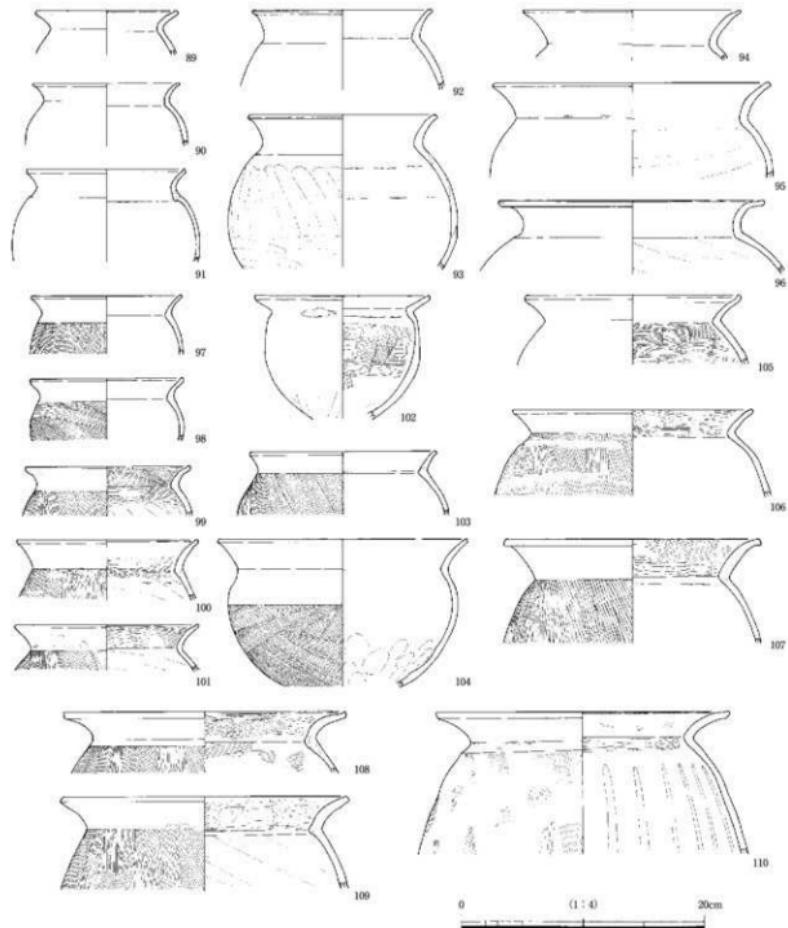


図228 1800溝出土遺物実測図(4)

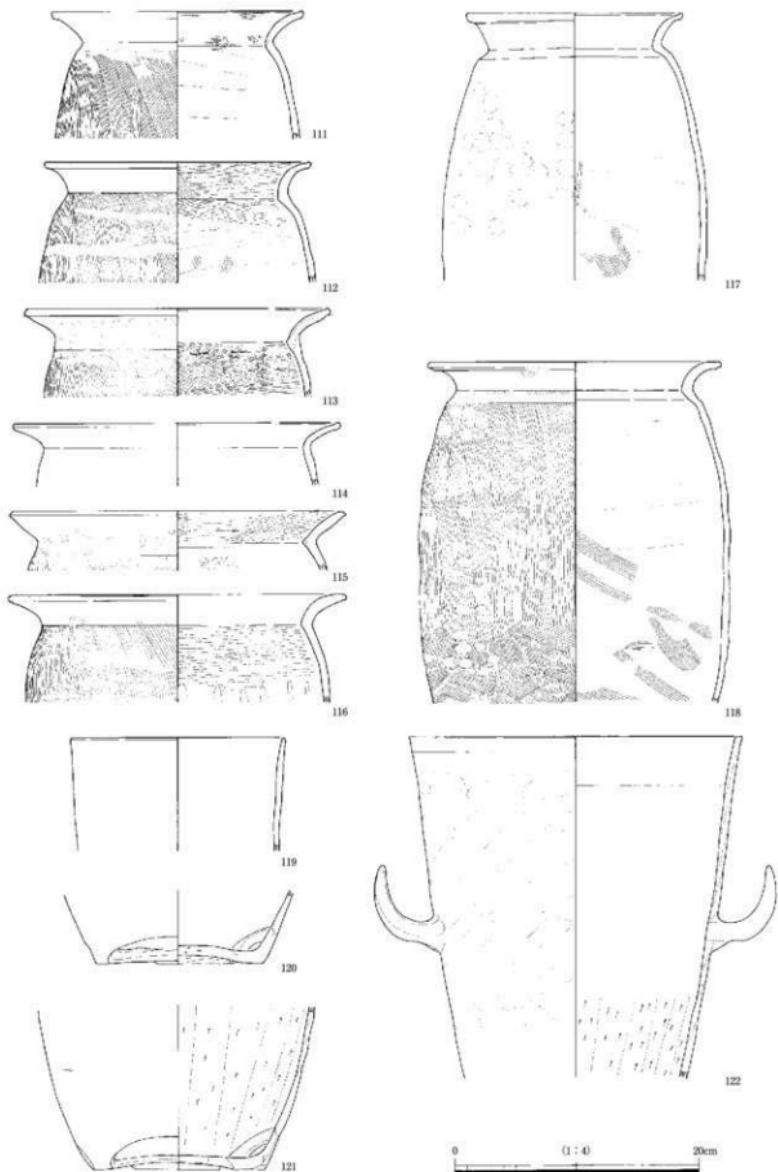


図229 1800溝出土遺物実測図(5)

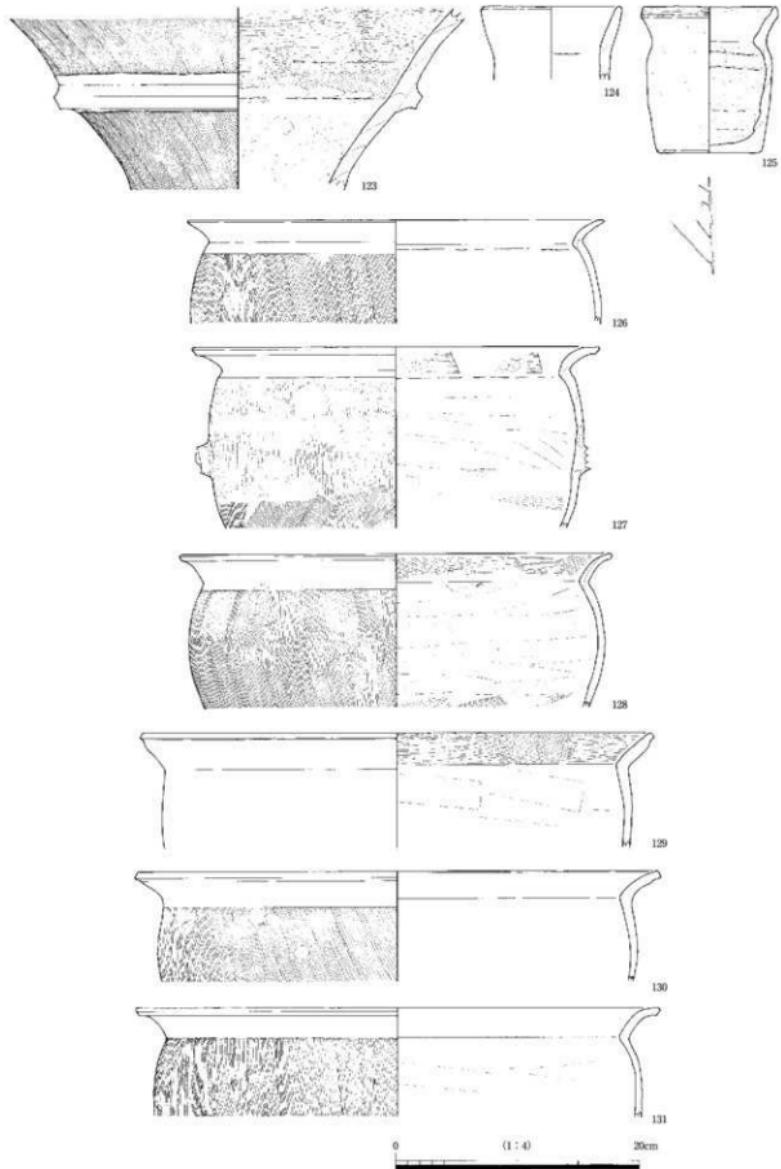


图230 1800年出土遗物实测图(6)

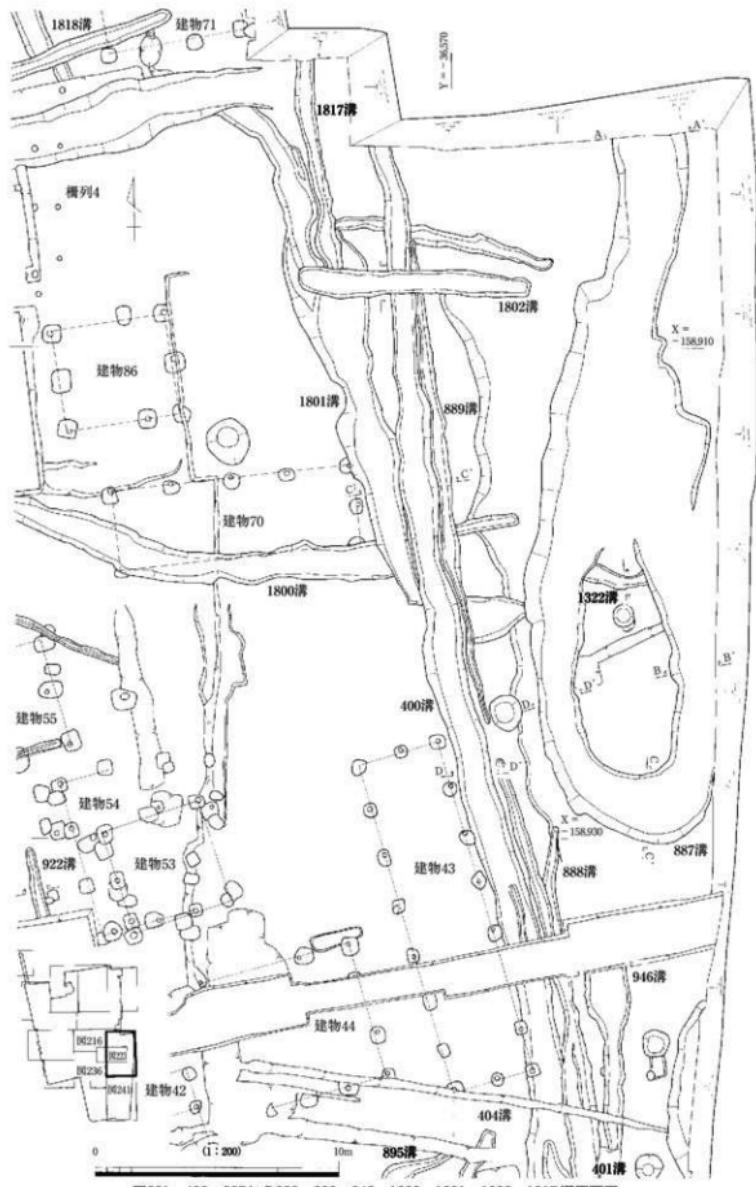


図231 400・887から889・922・946・1322・1801・1802・1817溝平面図

でも12cmを凌駕し、底部も回転切り放ちのままのものがほとんどないこと、23や33のように内面に同芯円タタキが観察されるものの存在が重視され、高杯では、50の杯部外面の突線間に波状紋こそ施されていないが、大形の長脚2段3方透かしが主流を占め、よしんば、55のような短脚でもその透かしが簡略化されることのない点が注視される。一方、前時代的要素を継承する平瓶は小形化し、50の高杯と同様に44の長頸壺では体部にかつてみられた波状紋は省略され、その上位に施された凹線がそのよすがを止めるという点や、それらの脚部である43・44・46は段が退化すると同時に矮小化し、透かし孔も省略されるという新出的様相も看取られる。また、土師器は、杯が非常に少ないと特徴づけられ、ために

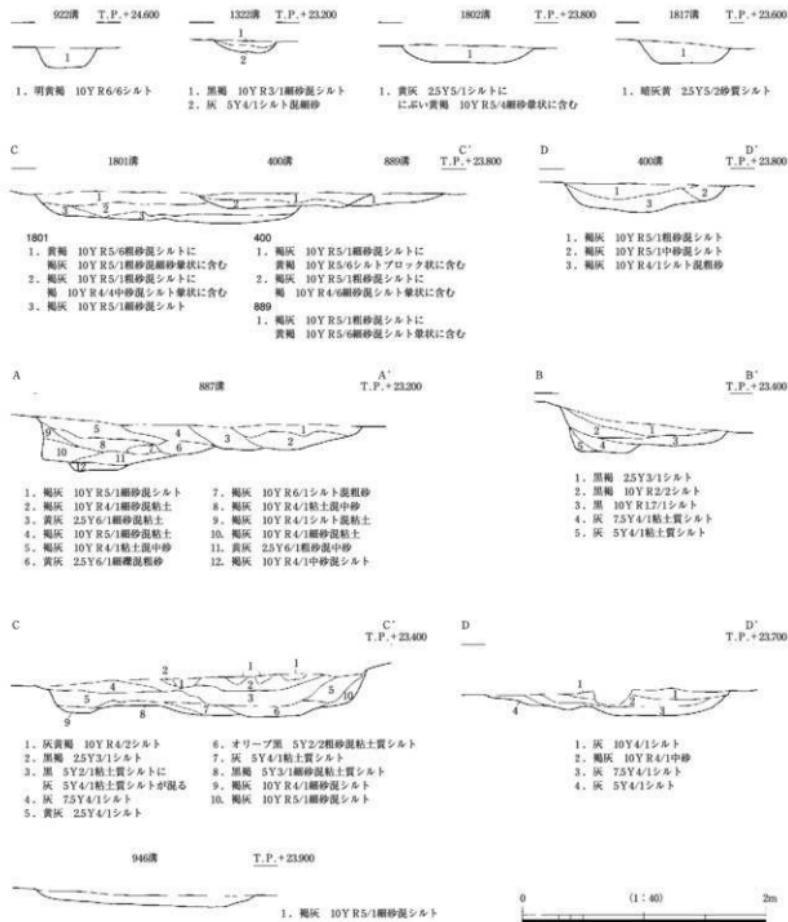


図232 400・887・889・922・946・1322・1801・1802・1817溝断面図

法量分化による型式差も認められない。そして、今回の資料の中では暗文の施されるものは存在せず、胎土は後の段階のような精良なものでない。また、整形技法にケズリやミガキが多用されないことも特色の一つとしてあげられよう。また、煮沸具の調整技法についてもハケの施されるものが非常に多い傾向にあり、後の時代にこの地域を特徴づけるユビオサエの盛行する兆しはみられない。

これらの様相を飛鳥編年と照合した場合、そのI-1段階に近似した様相を持つものとみなされ、溝出土資料であるにもかかわらず、須恵器蓋杯の法量偏差が少ないととも相まって、当該期における南河内地域の具体相を理解する上において、貴重な資料を提示できたものと考えられる。

つづいて、土製品には図258-16がある。多数の小穴を穿った板状のもので用途は不明である。石製品には図266-9がある。直方体を呈する凝灰岩切石で、今回の調査で出土したものの中では最大である。金属器には図270-2がある。半分以上が欠損するが、その形状から曲刃鎌と考えられる。

887溝(図231・232・233、図版66-2・67-2~4)

調査区東半中央からやや南の壁際で検出された。南から北に流下し、北端は調査区外へとつなぐ。また、南部は大きく広がり、その中央には中州状の盛り上がりが検出された。

確認できた規模は、長さ29.0m、幅1.4mから6.6m、深さ0.2mから0.4mを測る。3ヶ所に断面を設定して土層の堆積状況を観察した結果、図232のような状況を呈し、各層準に細繹から細砂を混えたシルトや粘土が観察されたことから、絶えず水の流れるような環境にあったことをうかがわせた。

出土遺物には図233に示す土器などがある。1は須恵器杯口蓋、2と3は同器種身、4は須恵器長脚2段高杯脚部、5から7は古墳時代中期末葉の甕で、5は布留式の系譜を引くものであろう。8はB種ヨコハケを施す円筒埴輪である。このうち、溝の埋没時期を示す資料に1から3がある。法量や形態からみてTK43型式に分類され、この時期以降に土砂の堆積が始まったとみなされる。なお、この時期は、今回の調査で検出される遺構群の形成が一挙に活発化はじめると見られる。

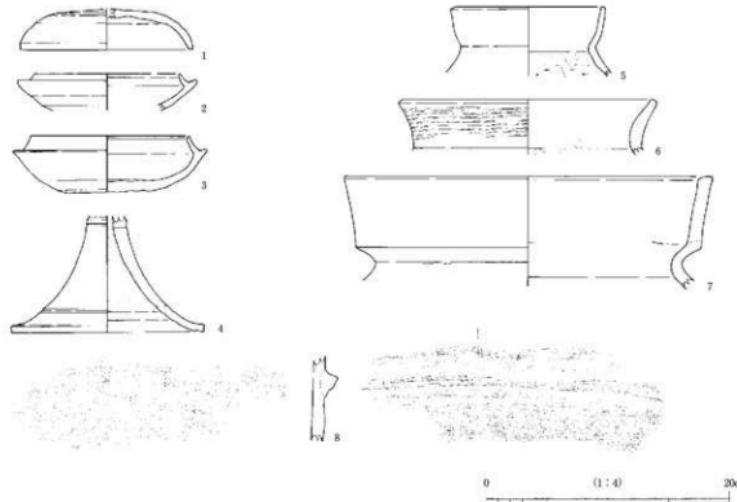


図233 887溝出土遺物実測図

888 溝（図231・234）

調査区東半中央部よりやや南の位置で検出され、北東約1mには前述の887溝が位置する。南部が水路保全地区下になるため全容は不明ながら、現況で長さ4.5m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。

出土遺物には図234-2に示す古墳時代後期末葉から飛鳥時代頃の低脚高杯脚部がある。

889 溝（図231・232、図版64-2）

調査区東半中央からやや南で検出された。その位置から南に所在する401溝延長部の可能性もある。南から北に流下し、途中断続し長さ20.0m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を有す。断面形は図232上段のよ

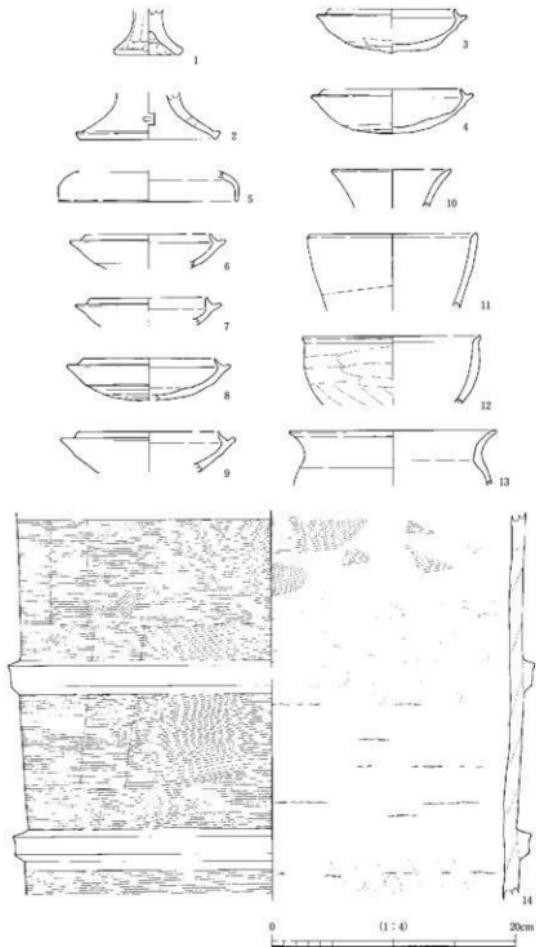


図234 888・946・1801・1802・1817溝出土遺物実測図

うな状態で、西肩を400溝によって失う。埋土は畠状の土塊を混じえたシルトで、遺物はみられない。しかし、400溝より古いため飛鳥II-2段階以前とみなされる。

922 溝（図231・232）

調査区中央から東南に位置する南北溝である。樹木保存地区の下のため南端は不明となり、現状で長さ29m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。

断面形は図232左上のような隅丸の逆台形を呈し、埋土はシルトの単一層である。

位置や主軸からみて建物53・54と関係するともみられるが、遺物がないため詳細は不明である。

946 溝（図231・232・234）

調査区東半から南で検出され、南から北へ流下する。北側は水路保全地区下となり全体は不明だが、現状で、長さ7.5m以上、幅0.5mから1.9m、深さ0.15mを測る。断面形は図232左下のような皿形で、埋土はシルト單一層である。

遺物は図234-1に示す小形高杯の脚部などがある。

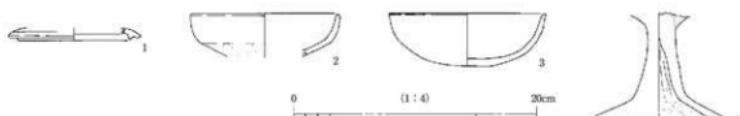
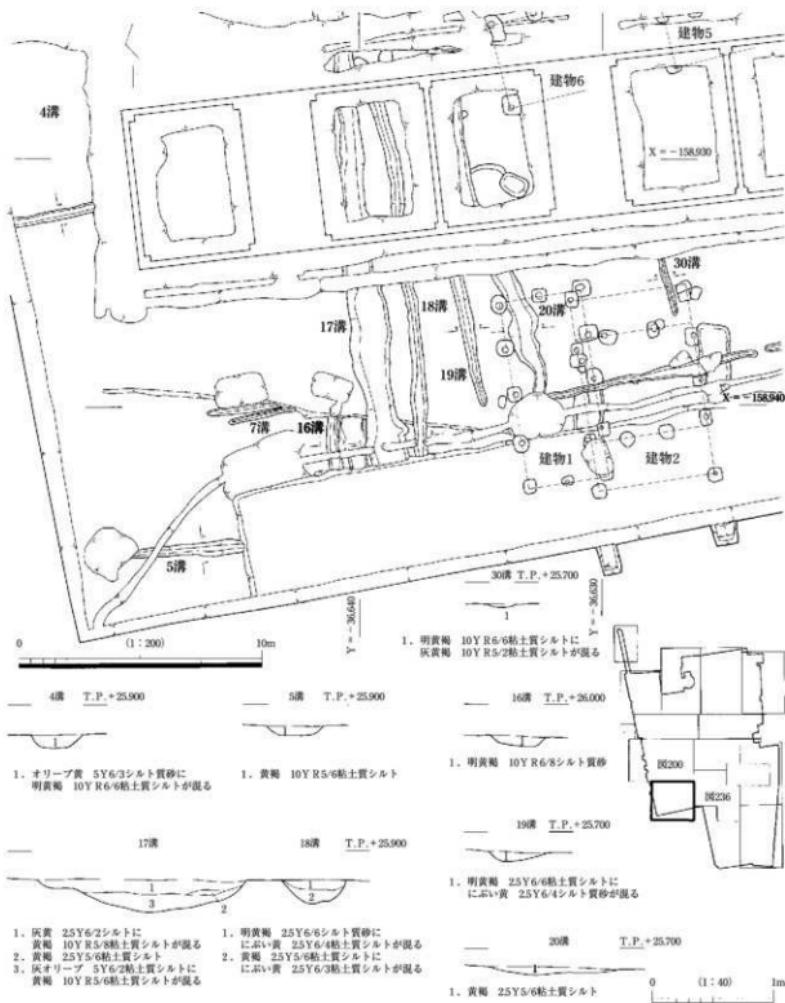


図235 4・5・7・16から20・30溝平・断面および7・18溝出土遺物実測図

1322溝（図231・232）

調査区中央からやや南に向かった位置で検出された。規模は、2.7m、幅0.8m、深さ0.1mで、断面形は図232左上のような皿形を呈し、埋土は細砂からシルトが2層堆積する。出土遺物がないため時期は不明だが、その位置や東西方向となることから、887溝の短接路的な機能を持つとも考えられる。

1801溝（図231・232・234、図版64-2）

調査区東半より少し南に位置し、南から北へ流下する。北部を1溝、南東部を400溝に削り取られ、現状での規模は、長さ22.0m、幅0.8m、深さ0.3mとなる。断面形は図232左上のような偏平な逆台形を呈し、埋土は粗砂から細砂を混じえたシルトを中心とする。出土遺物には図234-5から11の須恵器、12と13の土師器、14の埴輪などのほか、図258-7の土師質焼成された土鈴、図267-6の使用痕のある石がある。このうち、5は杯H蓋、6から9は杯H身、10は壺K、11は捏鉢、12は鉢A、13は甕A、14はB種ヨコハケを施した大形の円筒埴輪である。土器のうち、最も新しいものは6と7の須恵器杯H身で、その法量や形態から飛鳥I-2段頃に位置づけられる。なお、年代観は重複関係にある1溝が飛鳥I-3段階、400溝が同II-2段階であるため、3者の間に相関関係が成立している。

1802溝（図231・232・234）

調査区東半よりやや南で検出された東西方向の溝である。規模は長さ9.6m、幅1.2m、深さ0.15mを測り、断面形は図232上段のような偏平な皿形を呈する。埋土は畳状の態をなした細砂粒を含むシルトからなり、そこから図234-3に示す須恵器杯H身などが出土した。これについては法量や形態から飛鳥I段階に位置づけられようが、重複するとの遺構よりも新しく、また、遺構検出段階でもそれら埋土のかなり上位から認識できること、灰色味の強い埋土であることから、後代の遺構と考えられる。

1817溝（図231・232・234）

調査区東半の壁際に位置する。南から北へ流下し、北端が調査区外、南側が1802溝により破壊されている。現況の規模は長さ8.6m、幅0.9m、深さ0.2m弱を測り、断面形は図232右上のような隅丸の逆台形を呈し、埋土はシルトの單一層である。出土遺物には図234-4に図化した須恵器杯H身がある。形態や法量から飛鳥I-2段階頃に位置づけられるため、溝埋没時期の上限をこの段階に比定できる。

4溝（図235）

調査区南西部で検出された東西方向の溝である。調査区を拡張したが西側を検出できず、東側は擾乱のため滅失する。規模は長さ3.4m、幅0.4m、深さ0.1mで、断面形は図235中段のような椀形を呈し、埋土は粘土や細砂質の強いシルトの單一層である。遺物が出土していないため時期は不明である。

5溝（図235）

調査区南西隅で検出された東西にのびる溝である。両端は擾乱により損壊され、現況での規模は、長さ4.7m、幅0.6m、深さ0.1m弱となる。断面形は皿形を呈し、埋土は粘性を帯びたシルトの單一層である。出土遺物がみられないため、時期などの詳細は不明である。

7溝（図235）

調査区南西に位置する東西溝である。東側を擾乱により失い、長さ2.8mのみを確認した。幅は0.3m、深さ0.05mである。埋土中から図253-1に示す飛鳥時代初め頃の須恵器杯G蓋が出土した。

16溝（図235）

調査区南西部で検出された。擾乱により南北端が損壊され、現状で長さ2.2m、幅0.5m、深さ0.1m弱を測る。断面形と埋土は図235中段のやうなもので、遺物がみられないため時期は不明である。

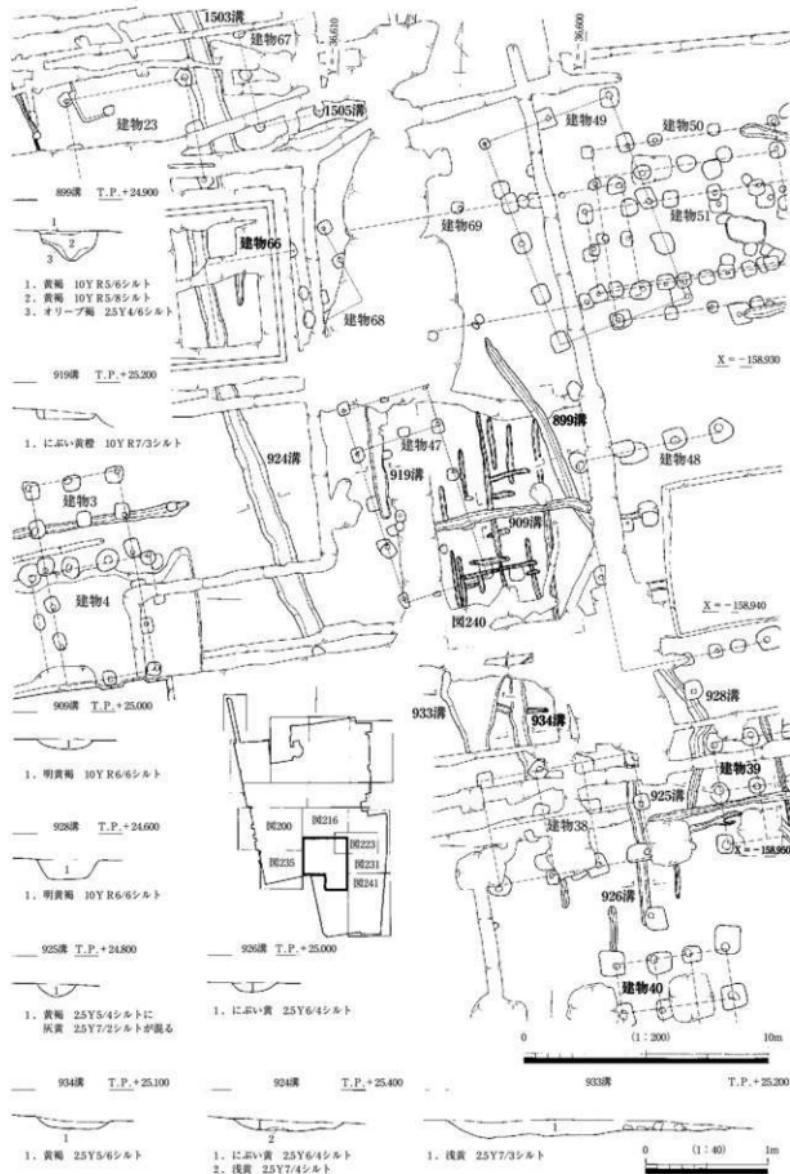


図236 899・909・919・924から926・933・934・1505溝平・断面図

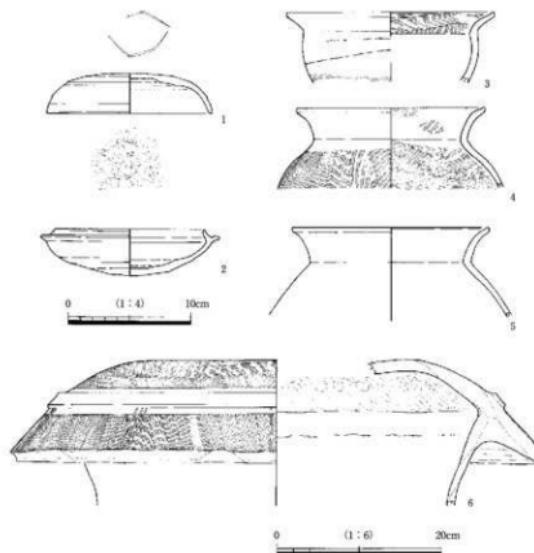


図237 924溝出土遺物実測図

埋土は2分され、そこから同図下段2から4の土器や、図269-9の砥石が出土した。土器は3点とも土師器で、前2者が杯C、後者が高杯であり、これらによって埋没時期が飛鳥時代と判明する。

19溝（図235、図版63-1）

18溝の東約2.5mに位置し、これに沿うように南から北へのびる。北側を擾乱により失うが、現存値は長さ5.5m、幅0.5m、深さ0.1m弱を測る。断面形は同図下段に示すようないびつな皿形を呈し、埋土は砂質の強いシルトの單一層である。出土遺物がないため時期については確定できない。

20溝（図235）

調査区南西部で検出された南北溝である。なかほどで西に向かって蛇行し、北端は擾乱により滅失する。現況では長さ12.6m、幅1.2m、深さ0.05mを測り、断面形は同図下段のような偏平な皿形を呈し、埋土は粒状構造を持つシルトの單一層である。時期の判別可能な遺物は出土しなかった。

30溝（図235）

調査区中央から南西に向かった位置で検出された南北溝である。北側を擾乱により失い、現状で長さ2.4m、幅0.3m、深さ0.05m弱となる。断面形は、同図中段のような偏平な皿形を呈し、埋土は粘性を帶びたシルトの單一層である。出土遺物がほとんどみられないため、時期は特定できない。

899溝（図236）

調査区南半のはば中央で検出された等高線に平行してのびる溝である。擾乱によって分断されるが、南延長線上に928溝が位置し、これと規模や埋土が類似していることから、本来は同一遺構であった可能性が考えられる。検出長は9.0m、幅0.6m、深さ0.25mを測り、928溝を含めた場合には、約21mとなる。断面形は図239左上のような態をなし、埋土は3層に細分されるが、いずれもシルト質の強い土層

17溝（図235、図版63）

調査区南西側に位置する南北溝である。両端を擾乱により失し、途中、分断されるが、総延長22.2mを測る。幅は1.7m、深さ0.35mである。断面形と埋土は図235左下のような様相を呈し、後者は3層に細分される。出土遺物がないため時期などについては不明である。

18溝（図235、図版63）

17溝の東約1mでこれに平行するような形で検出された。南北にのび、両端は擾乱により破壊される。現状での規模は長さ14.6m、幅0.6m、深さ0.2mで、断面形は図235下段のような椀形となる。

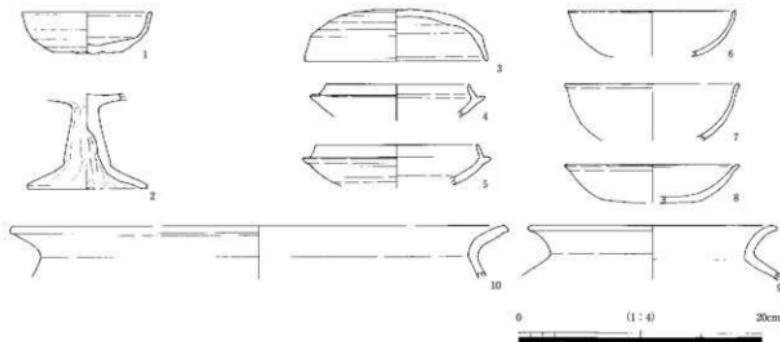


図238 919・924・933・934溝出土遺物実測図

となる。出土遺物のうち図化可能なものはないが、細片ながら古墳時代後期末葉から飛鳥時代初頭頃とおぼしき土器が出土したため、それに近似する時期であると推測される。

909溝（図236）

調査南半のはば中央で検出された。南北方向にのび、北端は899溝、南側は擾乱により削平される。現存値は長さ8.5mで、幅は0.5m、深さ0.1mを測る。断面形は楕円形を呈し、埋土は2種のシルトが混合されたような状態となる。出土遺物がみられないため、時期を知る手掛かりは得られなかった。

919溝（図236・238-10）

調査地南半の中央からやや西側で検出された南北溝である。北端を擾乱で失った現状で、長さ4.6mを測り、幅は0.6m、深さ0.1m弱となる。断面形は隅丸の偏平な逆台形を呈し、埋土はシルトの單一層である。出土遺物には図238-10の土師器がある。大形であることから飛鳥時代の鍋と類推される。

924溝（図236～238、図版66-3・67-5）

調査区南半の中央からやや西に位置する。傾斜に沿いながら南西から北西に向かってのび、両端は擾乱により滅失する。現状の長さは17.4mで、幅は1.2m、深さ0.1m弱となる。断面は図236左下のような形態をなし、埋土はシルトを中心とする土層である。そして、その上面からは建物66の柱穴掘方が穿たれている。出土遺物には図237および、図238-3から5の土器などがある。図237-1・2と、図238

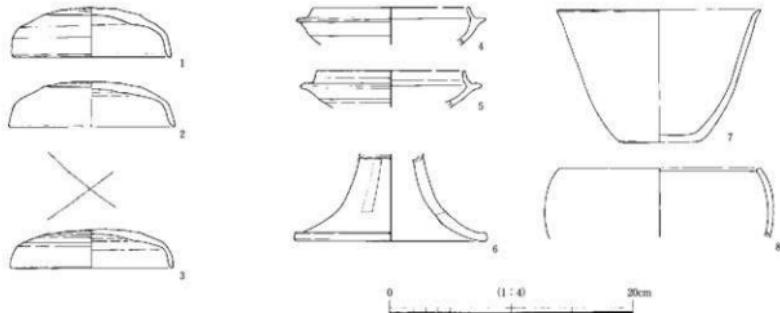


図239 1505溝出土遺物実測図

-3から5は須恵器杯Hで、図238-1と3が蓋、それ以外の3点が身である。図237-3は鍋、4と5は甕A、6は有黒班焼成された蓋形埴輪で、笠部の肋木飾りは省略され、下位の板重ねは線刻表現に略されている。これに近似する蓋形埴輪は、津堂城山古墳出土品の中にみられる。

このうち遺構の埋没時期を考える資料に須恵器がある。その口・受部径に注目するならば、最小の図238-4でも13cmを凌駕し、他は14cm内外となり、図237-1の内面には同心円タタキが観察されるなど古墳時代の様相を色濃く残している。よって、TK43型式から飛鳥I-1段階に位置づけられる。

925溝（図236）

調査区南半中央のやや西で検出された。東西に直線的にのび、規模は長さ7.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。断面形は図236左下のような楕形を呈し、埋土はシルトの單一層で、その一部を建物39柱掘方によって削り取られている。遺物が出土していないため、直接的に時期を知る手立てはないが、溝より新しい建物39より飛鳥I-4段階の土器が出土したため、これよりは以前である。

926溝（図236）

調査区南半中央のやや西で検出され、先述の925溝と合わせて「T」字形をなす。北端を擾乱で失い、現状での規模は長さ6.7m、幅0.4m、深さ0.1m弱となる。断面形は図236左下のような楕形を呈し、埋土はシルトの單一層である。出土遺物がないため時期を特定できないが、溝理土上面から建物38の柱穴が掘り込まれ、そこから飛鳥I-3段階までの土器が出土したため、それ以前とみなされる。

933溝（図236・238）

調査区南半中央のやや西に位置する南北溝である。北側に向かって大きく広がり、両端は擾乱により滅失する。現存規模は、長さ3.4m、幅1.0mから2.4m、深さ0.15m弱で、東側に集中して拳大の礫が集積されていた。断面は図236右下のような形態をなし、埋土はシルトの單一層である。出土遺物には、図238-6から9の土師器杯があり、8のような形態のものを含むため、飛鳥I-1段階に位置づけられる。

934溝（図236・238）

933溝の東に接するような状態で検出された。擾乱により北端を失い、途中、寸断されるが、現状での長さ9.8m、幅1.0m、深さ0.05mを測る。断面形は図236左下に示す偏平な皿形を呈し、埋土はシルトの單一層となる。出土遺物には図238-1の須恵器杯Gと、2の土師器高杯がある。このうち前者は、飛鳥I-3段階頃とみなされ、溝の廃絶時期を推し量れる。

1505溝（図236・図239）

調査区中央からやや南で検出された東西溝で、南肩と両端は擾乱により滅失する。現況での長



図240 901から906・908・910から918溝平面図

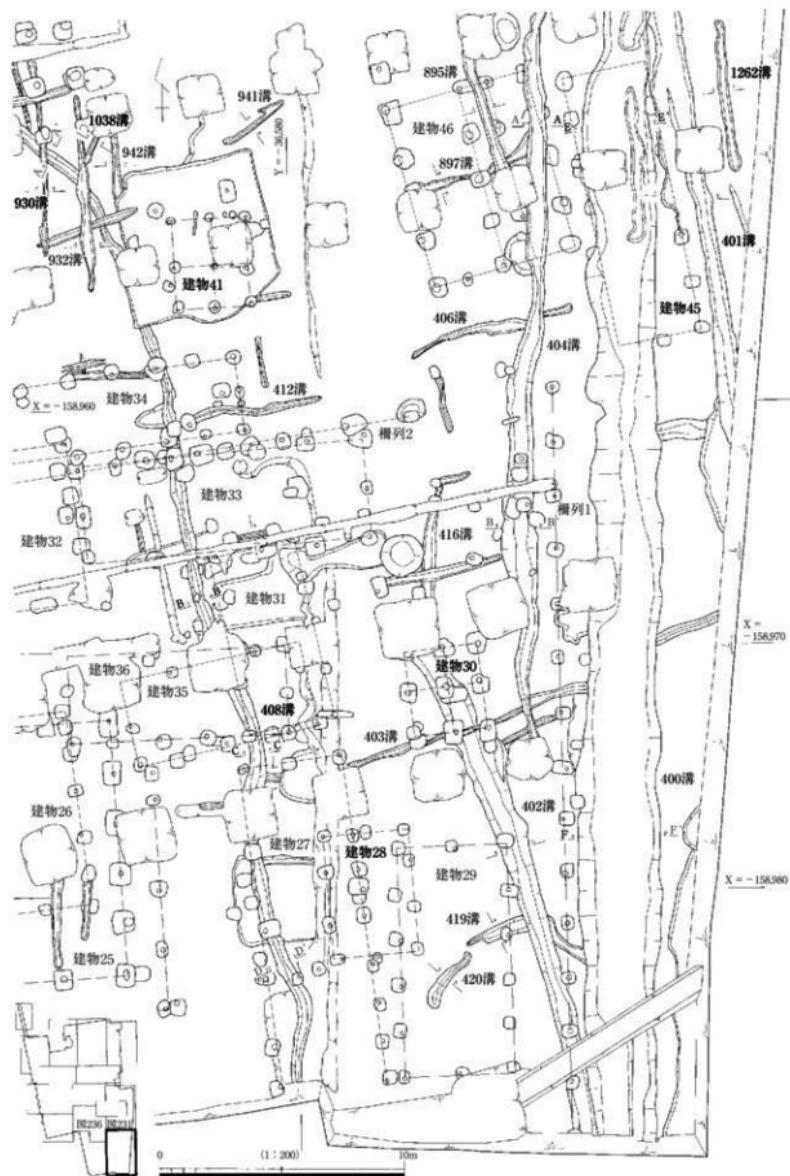


図241 400から404・406・408・412・416・419・420・895・897・930・932・941・942・1038・1262溝平面図

さ3.7m、幅0.9m、深さ0.15mを測り、埋土内からは図239に示す土器などが出土した。これらのうち1から5は須恵器で、1から3は須恵器杯口蓋、4と5は同器種の身、6は長脚2段3方透かしの高杯である。7と8は土器で、それぞれ形態の異なる鉢である。これらの遺物は須恵器杯口の法量やその形態からみて飛鳥I-1段階に位置づけられるものと考えられる。

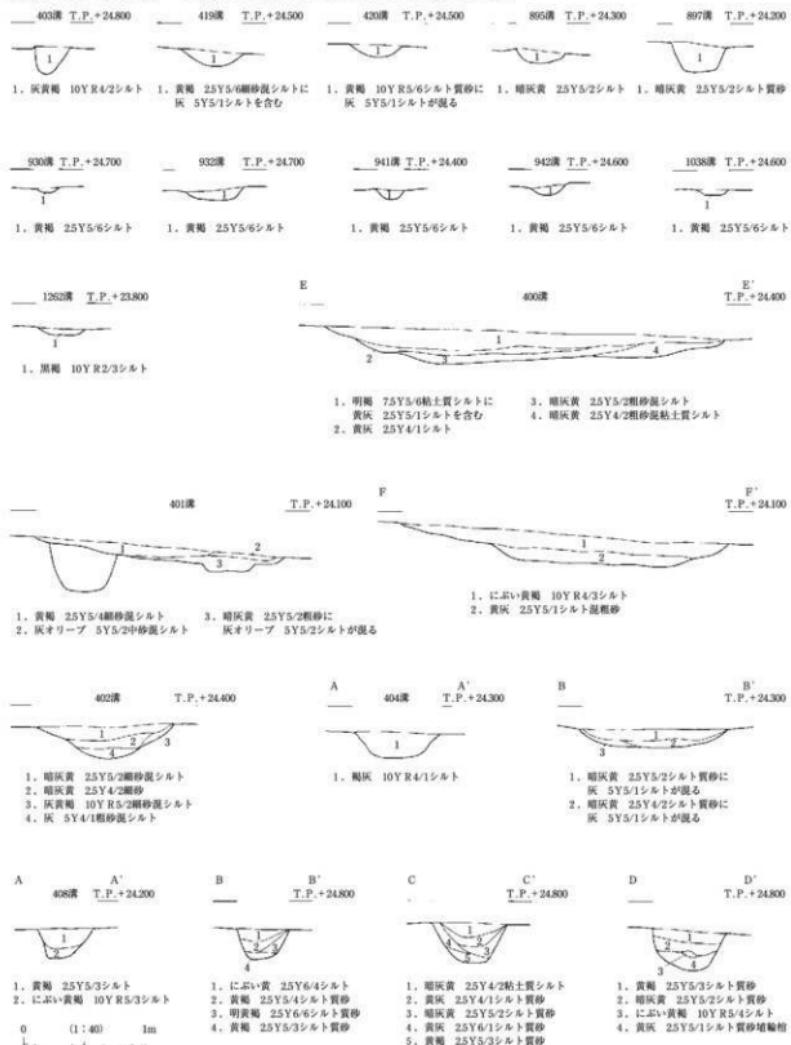


図242 400から404・408・419・420・895・897・930・932・941・942・1038・1262溝断面図

901から906・908・910から918溝（図240）

調査区中央から南で検出された。長短の差と方向の相違はあるが、直線的で、幅と深さがほぼ同規模で、かつ、東西・南北の方向軸が直交する溝を、その形状や埋土から、畝間溝など耕作に関与する一連の遺構と解釈したため一括して報告する。これらの規模は幅0.5m前後、深さ0.05m程度で、断面形は図240下段に示すような浅い皿形を呈す。埋土はほぼ同様のシルトで、重複関係から東西方向のものが後出するようである。時期は土器などが出土していないため判然としないが、埋土の様相や、建物47柱穴上面を横断するものがあることから、飛鳥時代の中でとらえておきたい。なお、この東西には、方向を同じくしてやや規模の大きい919・939溝が存在し、これらも一連として考えるべきかも知れない。

401溝（図241・242・243～245、図版84～3）

調査区南東から検出された溝で南から北へ流下する。南端は調査区外となり、北端は調査区中央附近にまでのびる。検出長は35.6m、幅0.4mから1.3m、深さ0.2mで、図242中段に図示するような浅い皿形を呈する。埋土は数層に細分されるが、大略的には粗砂を主体とする下層と、シルトを主体とする上層とに分される。出土遺物には図243から245のような土器類や、図260～27の長方形様をなした用途不明の土製品のほか、図263～3に掲載する旧石器時代のナイフ形石器が混入していた。

これらのうち、図243～1から22は須恵器で、器種には1の壺蓋、2から6の杯H蓋、7から13の同

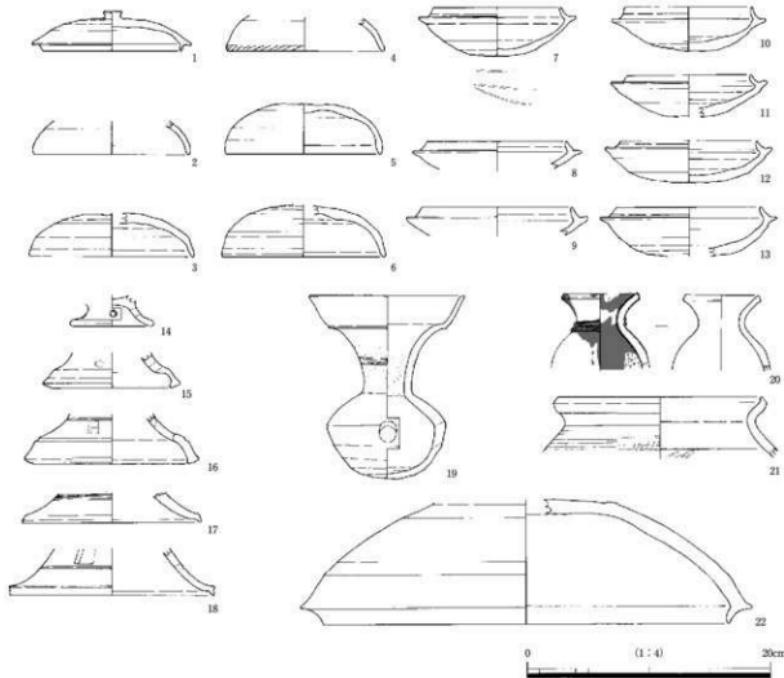


図243 401溝出土遺物実測図〔1〕

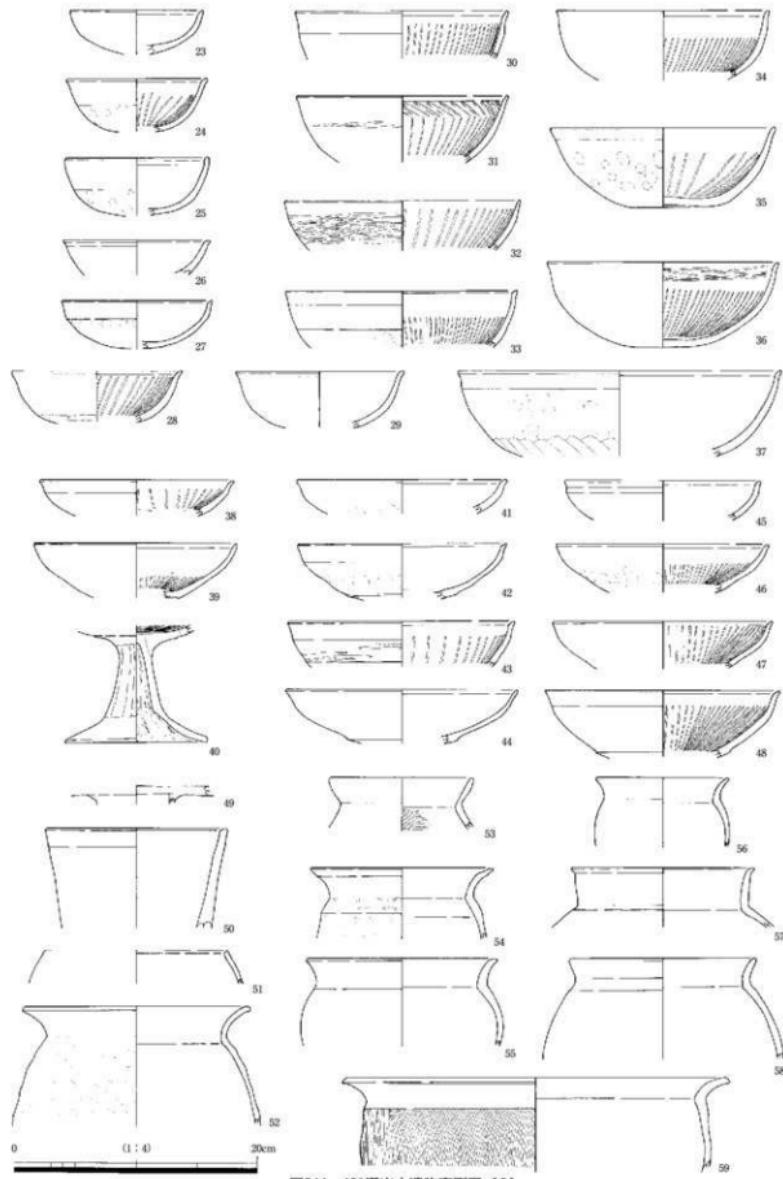


图244 401出土遗物实测图(2)

器種身、14の低脚高杯脚部、16の台付長頸壺脚部、17・18の長脚2段3方透かしの高杯脚部、19の甌、20の壺、21の甌A、22の大形器種に伴う蓋がある。この中でも20は、内面と外面の口縁部から頸部にかけて漆が固着し、頸部には図版84-3のように植物纖維を編んで製作された紐がそれによって固化された状態のまま遺存している。土器自体は、形態や胎土などが陶邑窯製品と大きく異なり、共伴する須恵器の中でも異彩を放っている。ために、漆の容器として他地域から搬入されたものと考えられる。

土師器は、図244に示す38点を図化した。23から36は杯で、23・25・27などがGに分類される以外、Cで占められ、後者は法量などの要素から、24のI、28のII、30から36のIIIに細分される。つづいて、37は鉢A、38から48は高杯Cとそれらの脚部、49は盤など大形器種の脚部、50は今回捏鉢と仮称する製品、51は鉢B、52から58は甌A、59は鍋である。これらの器種構成に注目した場合、隣接する400溝と同様に供膳具が目立ち、煮沸形態のものが少ないと傾向が看取される。

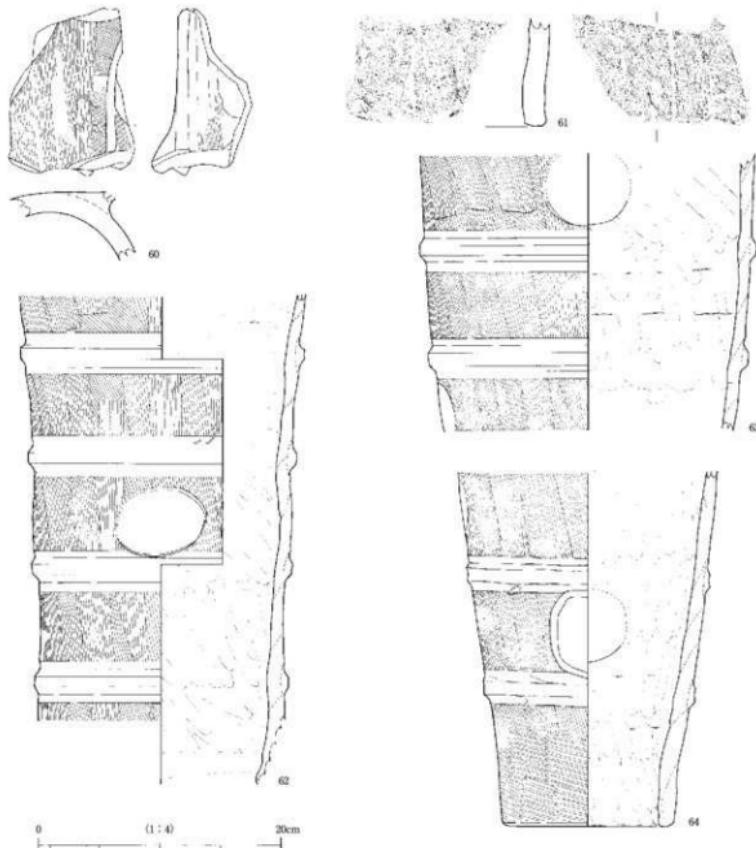


図245 401溝出土遺物実測図(3)

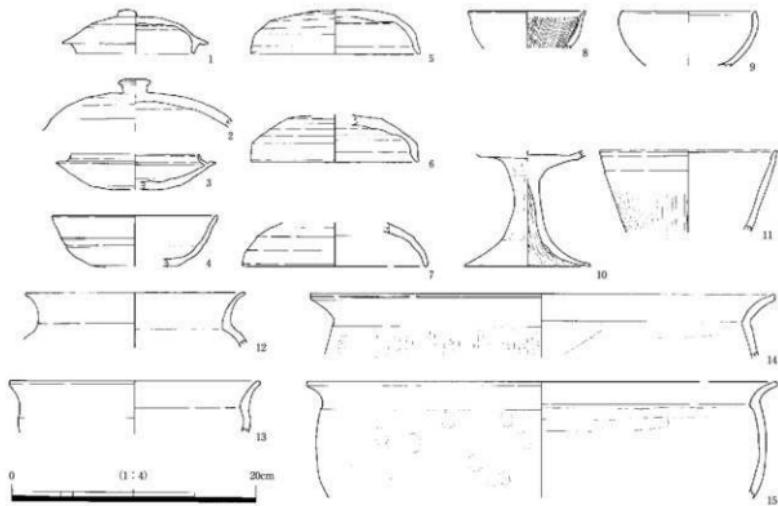


図246 402溝出土遺物実測図

遺物の時期については、須恵器に杯Hの口・受部径が12cm前後となること、杯Gが含まれていないことと、長脚2段高杯や、体部の張った趣が含まれること、土師器では杯Cの法量分化が未成熟なことから飛鳥I - 2段階に最も近い様相を示していると考えられる。

図245には共に出土した埴輪を図化した。60は円筒部に裂皮状の粘土板が付され、これらが下位に広がることから、意須比を表現しているとみなし、人物埴輪の巫女と考えたい。しかし、拂や帯の表現がみられないことに問題も残る。61から64は円筒埴輪で、ナナメハケのみで仕上げられ、無黒焼成となる点で共通する。中でも62と63は、細部にわたる部分まで共通する部分が多い。なお、64の底部調整技法には、図や、図版101-1に示すようにタタキが用いられている。近隣の古墳で同様の調整技法を持つ埴輪は、林1号墳での例が知られているが、これとはその方向が逆転していることで異なっている。

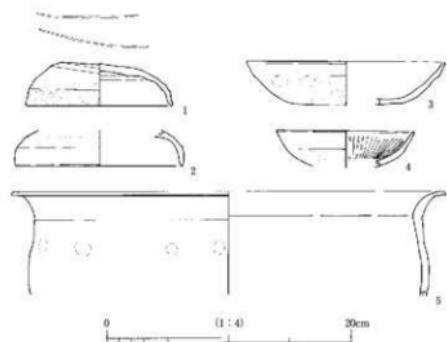


図247 403溝出土遺物実測図

402溝（図241・242・246）

調査区南東隅から北西に向かって流下する。南部は調査区外となり、北端は擾乱により滅失するが、これを隔てて416溝が延長上に位置するため、これと一本であったとも考えられる。現況では、長さ21.0m、幅1.3m、深さ0.25mを測り、断面形は図242下段左のような頂部の丸い偏平な逆三角形状を呈す。埋土は数層に細分されるが、シルトに細砂や粗砂が混じた点では共通する。なお、埋土上面からは建物29や39、そして、柵列1の柱掘方が穿たれている。

出土遺物には、図246に示す土器などがある。これらのうち、1から7は須恵器、8から15は土師器である。須恵器のうち1は壺蓋、2は高杯蓋、3は杯H身、4は鉢A、5から7は杯H蓋である。土師器は8と9が杯C、10が脚部、11が鉢、12と13が甕A、14と15が鍋Aである。これらのうち最も新しい時期を指し示している資料は3と8であり、前者の受部径は12cmに満たず、後者は径高指数が高いという形態的要素を持つことから、飛鳥I-2段階に位置づけられよう。

403溝（図241・242・247）

調査区南東部に位置する溝で、南西から北東に流下する。西端は溝408により損壊され、東はさらに調査区外へとつなぐ。現況で長さ16.5m、幅0.2mから0.5m、深さ0.2m強となる。断面形は図242左上のようなゆがんだ「U」字形である。埋土はシルトの單一層で、上面から建物30を構成する柱穴が掘り込まれている。

出土遺物には図247に示す土器などがある。1と2は須恵器杯H蓋で、1の外面には櫛状工具を用いた擦過痕が観察される。3から5は土師器で、それぞれ、杯のGとC、鍋のAである。これらのうち、形態や法量からみて、最新のものは、飛鳥I段階頃となる。

404溝（図241・242・248・249、図版66-1）

調査区東半の南部を南から北へ流下する。南端を擾乱により失うが、現状での規模は長さ31.7m、幅0.2mから1.5m、深さ0.2mを測り、北部では建物46柱穴の上位を削済する。断面形は図242下段中央のような皿形を呈する。埋土はシルトの單一層からなり、そこから図版66-1に示すような状態で、礫石と共に遺物が出土した。それらのうち図化できた土器を図248と249、サヌカイト製石器を

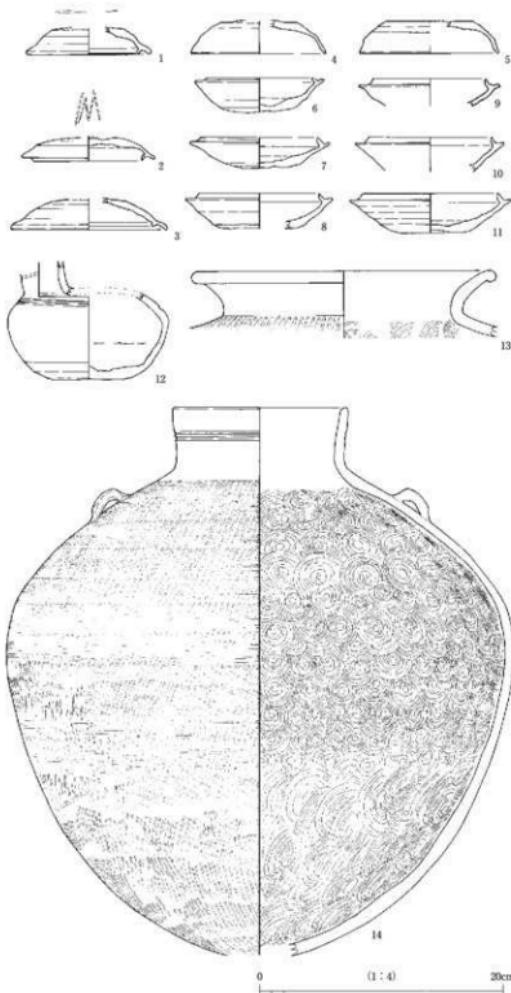


図248 404溝出土遺物実測図(1)

図264-10、凝灰岩切石を266-4に示した。土器には須恵器と土師器がある。前者には図248-1から3の杯G蓋、4と5の杯H蓋、6から11の同器種身、12の平瓶、13の壺A、14の直口双耳壺がある。後者には図249-15から17の杯G、18から23の杯C、24から26の高杯Cとそれらに伴う脚部、27から30の壺A、31の生駒山西麓産胎土を用いた羽釜があり、これは、今回の調査で國化できた希少な1例である。32は脚部、33・34は皿A、35・36は鉢Aである。これらの土器は、須恵器では、杯Hの口・受部径が10cm前後で、それに満たない6を含むこと、杯Gの比率が高いことに加え、かえりの形散化した3のような資料を含むこと、土師器では、杯Cの形態などに古い様相も看取されるが、壺の外面調整にユビオサエが多用されること、口縁に施されるヨコナデにより、体部との境に段が形成されていること、34のような大形の皿が含まれることからみて、飛鳥Ⅲ段階に位置づけられる。なお、この年代観は、他のほとんどの遺構に後続して溝が開墾されたという重複関係より知り得た事実からも首肯される。

406溝（図241・250）

調査区南半中央からやや東に位置する南北溝である。途中、404溝に分断されるが、長さ7.0m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を有する。出土遺物には図250-2の土師器杯Cがある。特徴に欠けるが、偏平な形状となるため飛鳥Ⅲ段階頃とみなすことで、404溝との前後関係とも合致する。

412溝（図241・250）

調査区南半のはば中央で検出され、西から東にやや蛇行しながら流下する。規模は、長さ5.3m、幅0.4m、深さ0.05mである。埋土からは、図250-3に示す土師器杯が出土したが、特徴に欠けるため時期は判別できない。しかし、404溝に先行するため、飛鳥Ⅲ段階以前と考えることはできる。

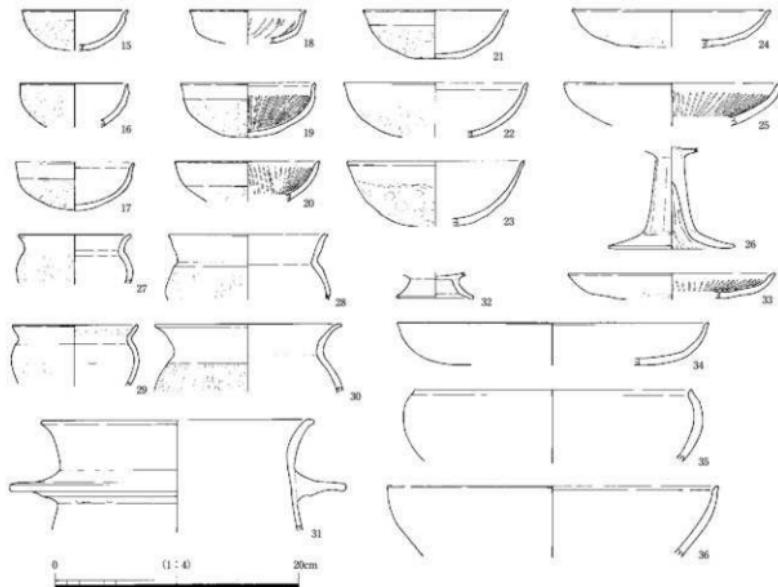


図249 404溝出土遺物実測図(2)

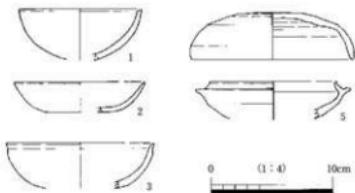


図250 406・412・416・897・932溝出土遺物実測図

416 溝（図241・250）

調査区南半中央からやや東で検出された。南北にのび、互いの位置関係から、402溝に連なる可能性があることは先述した。南部を攪乱のため滅失するが、現状で長さ4.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

出土遺物には、図250-5に示す須恵器杯H身がある。形態や法量より飛鳥I-2段階に位置づけられ、この点でも402溝と共通する要素を指摘できる。

419 溝（図241・242）

調査区南東隅から検出された東西溝である。平面は「へ」の字状を呈し、途中、402溝に寸断されるが、現状で長さ5.5m、幅0.6m、深さ0.1m強を測る。断面形は図241左上のような偏った「U」字形を呈し、埋土はシルトの單一層となる。遺物がみられないため時期は不明ながら、遺構の重複関係より、402溝に先行していることが明らかとなるため、飛鳥I-2段階以前と考えることが可能となる。

420 溝（図241・242）

調査区南東部隅より検出された。位置関係や形状から419溝と一連のものと考えられる。規模は、長さ2.7m、幅0.5m、深さ0.1mを測り、埋土から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

895 溝（図241・242）

調査区の南半部中央から東側で検出された南北溝で、両端を攪乱孔で失う。現状での長さ9.0m、幅0.4mから0.8m、深さ0.5mを測り、断面形は図242上段のような皿形を呈する。埋土はシルトの單一層で、遺物はないが、後出する建物46が飛鳥II段階まであるため、これよりは以前となる。

897 溝（図241・242・250）

調査区南半中央から東で検出された東西溝である。西を建物46柱穴、東を404溝で損壊されるため、現存長5.0mとなり、幅は0.5m、深さ0.2mとなる。断面形は図242右上のような隅丸逆台形を呈し、埋土はシルト質の強い砂である。出土遺物には図250-1に図示した土師器杯がある。詳細は不明だが、重複関係から建物46に先行することが判明しているため、飛鳥II段階以前とみなされる。

930 溝（図241・242）

調査区の南半中央からやや西で検出された。南北にのび、北側は攪乱により消滅する。規模は、長さ8.1m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。断面形は図242上段左のような椀形を呈し、埋土はシルトの單一層である。出土遺物がないため時期は不明だが、重複関係より408溝と建物39の間に形成されたことが判明しているため、その時期である飛鳥I-1段階以降から、I-4段階までの間とみなされる。

932 溝（図241・242・250）

930溝から東約1.5mで検出された南北溝である。攪乱のため北側を滅失し、現存値は長さ8.0m、幅0.2mから0.5m、深さ0.1m弱となる。断面形は図242左上のような皿形を呈し、埋土はシルトの單一層となる。出土遺物には図250-4に須恵器杯H蓋がある。法量や形態の要素より飛鳥I-1段階に位置づけられるが、408溝と建物39とを含めた遺構の前後関係より、これを遡ることはない。

941 溝（図241・242）

1314堅穴建物の北東約0.5mで検出された。北東から南西にのび、長さ3.0m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。断面形は図242上段のような椀形を呈す。埋土はシルトの單一層で、遺物は出土していない。

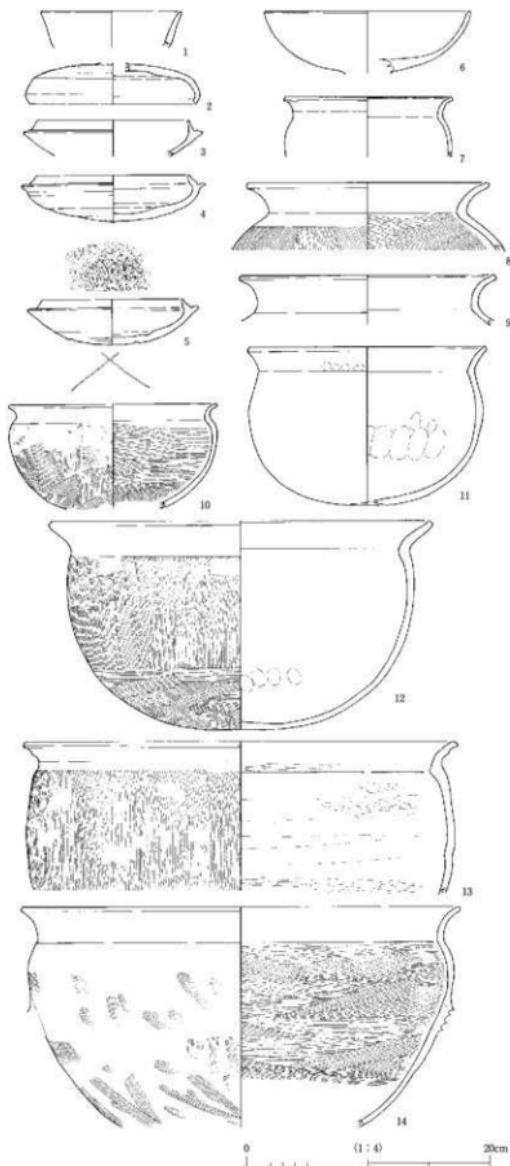


図251 408溝出土遺物実測図

942溝（図241・242）

前述した932溝の東約1mに位置する南北溝で、北端を擾乱孔、南側を1314竪穴建物により損壊され、現状での規模は、長さ2.6m、幅0.3m、深さ0.5mを測る。断面形は図242上段のような皿形で、埋土はシルトの単一層である。

遺物がみられないため時期は不明だが、1314竪穴建物から飛鳥I-1段階の遺物が出土しているため、それ以前に位置づけられる。

1038溝（図241・242）

932溝北東部で検出された。南西から北東にのび、北部を擾乱孔、南側を932溝によって寸断され、現存長1.2m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。断面形は図242上段右のような皿形を呈し、埋土はシルトの単一層である。

出土遺物がないため時期は特定できないが、932溝から飛鳥I-1段階の土器が出土していることから、これ以前となろう。

1262溝（図241・242）

調査区南半の東壁際中央から検出された。南から北へ流下し、長さ6.3m、幅0.5m、深さ0.05m強の規模を有する。

断面の形状は、図242中段左に示すような偏平で隅の丸い逆台形を呈し、埋土はシルトの単一層である。そこから遺物が出土していないため時期は不明だが、西約1mに所在する401溝と方向軸を同じくし、これと平行するような形となっていることから、互いに関連する可能性も考えられる。

408 溝（図 241・242・251）

調査区南半のほぼ中央を傾斜面に沿うようにして南から北へ流下する。南端部は調査区外、北端部は擾乱孔により損壊されるため全容を把握し難いが、長さ42.0mまでを検出し、幅0.7m程度、深さ0.3m前後を測る。断面形は4ヶ所で確認したが、各地点とも図242下段のようなゆがんだ「U」字形を呈し、埋土はいくつかに細分されるが、シルト質を帯びた砂が堆積している点でほとんど共通する。

出土遺物には、図251に示す土器類のほか、図260-31のような板状を呈し多孔を穿つ用途不明の土製品、図267-5のや9のような、板石や砂岩を用いた使用痕のある石などがみられる。

土器には図251-1の縁の口縁部、2の杯H蓋、3から4の同器種身のような須恵器があり、つづいて6の高杯C、7から9の甕A、10から13の鍋A、14の同器種Bに分類される土師器がある。

これらの土器は、須恵器杯Hの口・受部径が最小の5でも13cmを凌駕し、これの内面に同心円タタキが観察されること、土師器に杯類が含まれないこと、調整にハケが多用されていることなど、飛鳥時代以前の古相を色濃く止めていることから、飛鳥I-1段階までの時期に認められる。この年代観は、重複関係にある建物27・31・33・39などが飛鳥I-4段階を上限とする時期の建物であること、その他、同様の関係にあるほとんどの遺構に先んじて開墾されている事実と整合している点でも支持される。

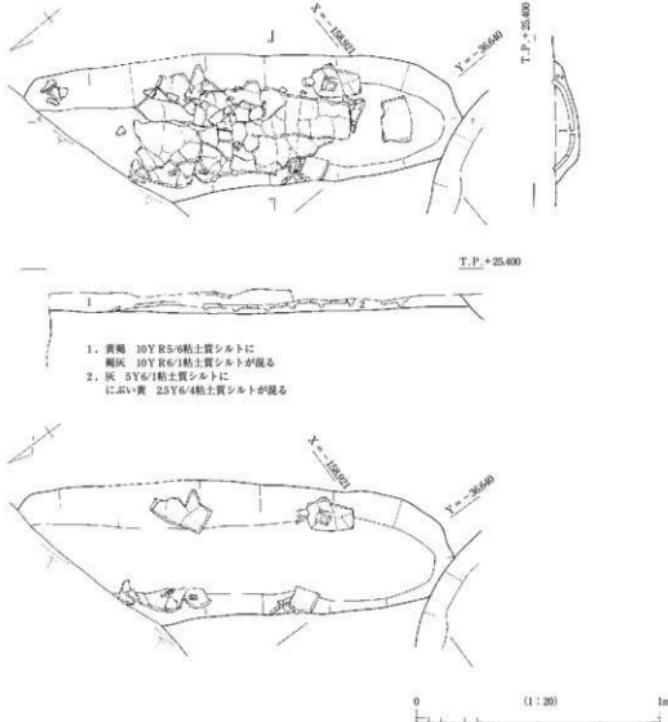


図252 8円筒棺墓（円筒棺1）検出状況および断面図

第9項 円筒棺墓

調査区内東半分の3ヶ所より、埴輪円筒棺や、円筒埴輪を転用した円筒棺墓を3基検出した。これらの分布状況に疎密や規則性は看取されず、また、その構造もおのおの異なっていたが、ほぼ東西に主軸を通すことや、副葬品が添えられていないことでは共通していた。

以下、それら3基の様相について、詳細を述べることとしたい。

8円筒棺墓（円筒棺墓1）〔図252～254、図版69〕

調査区西半の中央から検出された。遺構直上まで攪乱がおよび、機械掘削段階からすでに埴輪が現れはじめ、周囲を精査した結果、図版69-2に示すような状態となった。また、墓壙についても北側を攪乱孔、南西隅を他の遺構によって滅失し、全形を確認できなかった。よって、現状から知り得たのは、北東から南西方向に主軸を持つということに限られ、他は遺存する範囲内で、墓壙の平面形が長梢円形を呈すると考えられること、長径1.8m、短径0.6m、深さ0.1mの規模になることが知れる。

このほか、横位の断面からは、北東側が深く掘削されている状況がうかがえ、縱位からは壙底がほぼ平坦に掘削されていること、北西側をわずかに高くして棺を据えている状況が看取された。

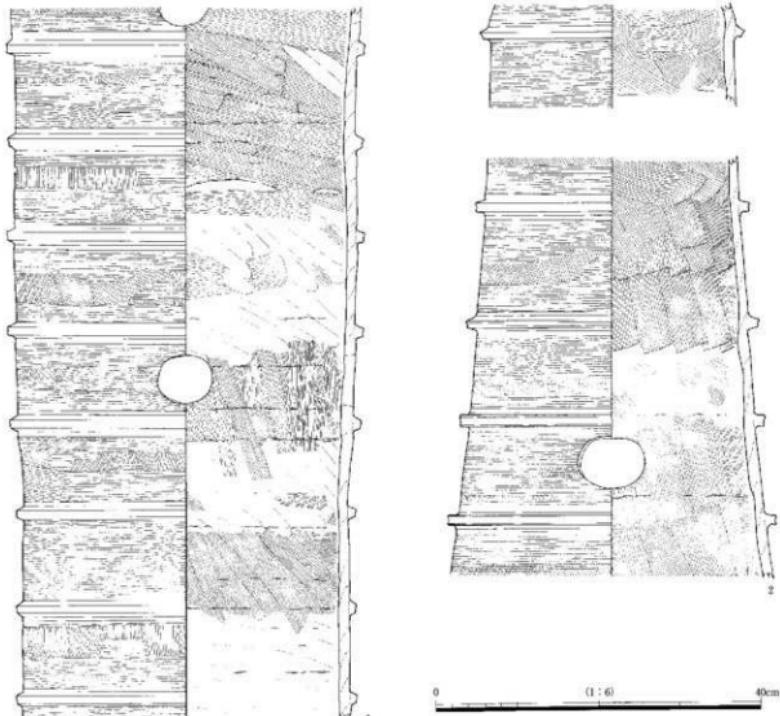


図253 8円筒棺墓（円筒棺1）棺材実測図(1)

埋土からは、壌底附近が粘質を帯びた灰色や黄色の混じえたようなシルトで埋め戻されていること、棺内は下底部に褐色系の粘性の高いシルトが堆積していることを確認すると共に、小口や側面を観察したが、これら以外に小口の閉塞や棺の被覆に用いられたような土層は観察されないことが判明した。

墓壌内に埋置された円筒埴輪棺は、図252上段のような全体の約4分の1が遺存する状態で、前述のように北西側がやや高いため、こちらが頭位となる可能性もある。また、北東部では同じ面を向けた破片が二重になる部分が観察されたことから、棺を入れ子状態で設置した状況を復原できる。

そして、この円筒棺を除去した段階で、同図下位や図版69-3に示すように、内面を上に向かって別個体の円筒埴輪を検出した。これらについては、4方に位置することや、重ね合わせることによって高さの調節を計ったとみられる部分が観察されたため、円筒棺を固定させるための所作と考えられる。

図253には円筒棺を、同254には下位の固定用に使用された円筒埴輪を図示した。253-1は下位の円筒埴輪棺である。上下端を欠損するが、9段8突帯までが遺存し、4段ごとに方向を揃えた円形の透かし孔が穿たれる。外面調整はナナメハケの後、長い単位で断続するヨコハケが施され、焼成は無黒斑である。2はその上位に使用された埴輪円筒棺で、上方ほど径が小さくなり、先端は円頭状に窄まる。調整や焼成などが1に酷似していることから、2点は、本来、同一個体であった可能性もある。

時期については時期判別可能な共伴遺物や、時期の知れる遺構との重複関係がないため不明である。

668 円筒棺墓（円筒棺墓2）【図255・図版70】

調査区南半中央から西に向かった場所に位置する。この遺構も中世以降に大きく削平され、基本層序第2層を除去した段階で、すでに、図版70-2のような状態で円筒棺が露呈する状態であった。

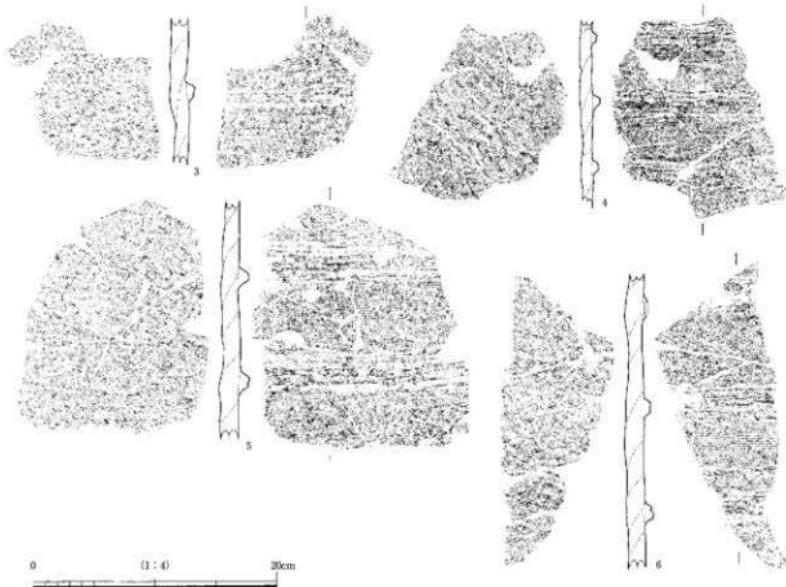
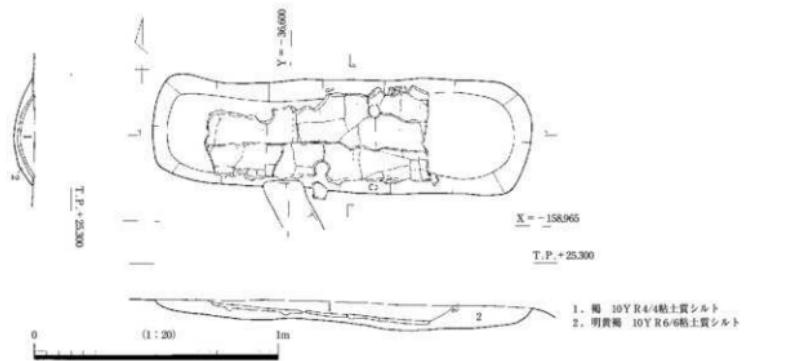


図254 8円筒棺墓（円筒棺1）棺材実測図〔2〕



周囲を精査し、墓壙を探査した結果、主軸を東西に通した平面隅丸長方形を呈する掘方を確認することができた。その規模は、削平の激しい現況で、長さ1.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

断面の形状は、横位が皿形をなし、縦位は壙底にやや起伏を持つ浅い皿形を呈す。

埋土は掘方が明黄褐色シルトの単一層、棺内が粘性の高い褐色シルトの単一層である。

墓壙内には底面に接するようにして棺が埋置され、それは、図255や、図版70-3に示すように、上位約3分の2は失われていたが、下位は、亀裂のみで旧状を止めている状態であった。

そして、高低差に注目した場合、西側がやや高くなっていることから、埋葬時の頭位はそちらの方向であった可能性が考えられる。

埴輪円筒棺本体は、図255-1に図示するような直径45cm弱、遺存長さ90cm余を測るもので、側面には1段の無孔部を介し、方向を直角に違えた円形の透かし孔が5ヶ所確認される。

9段8突帯までが遺存し、外面にはナナメハケの後、長い単位の断続ヨコハケが施され、焼成は無黒斑に仕上げられる。

墓壙からは棺以外に、図や図版に示すような状況で、棺に接して土器器などが出土地した。これらは、焼成や胎土から飛鳥時代とみなされることから、墓自体も当該期となる可能性がある。

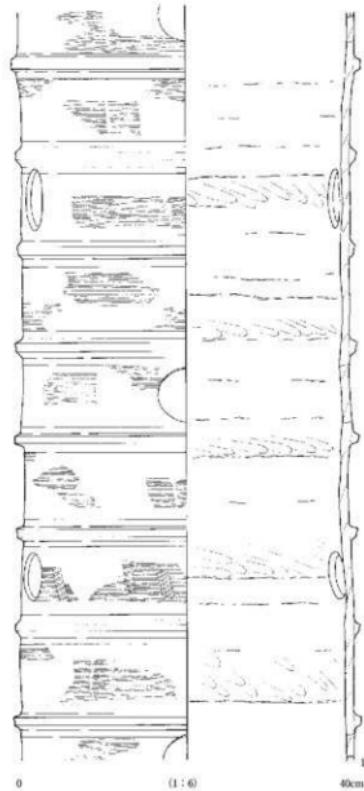


図255 668円筒棺墓(円筒棺墓2)検出状況・断面・棺材実測図

1582溝内円筒棺墓（円筒棺墓3）〔図256・図版71〕

調査区北半の中央からやや北で検出された。1582溝内に2個体の円筒埴輪を埋設していることから円筒棺とみなしたが、以下に記すような疑問点も残る。

検出状況は図256や図版71に示すように、西から東に流下する溝の底面に、互いの口縁を外側にむけた円筒埴輪2個体を横位に埋置するというものであった。その規模は、長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.1m強を測り、東側は図や写真に示すように、土圧のため上位が陥没していた。

なお、双方の底部が接続していたのか、入れ子になっていたのかは、その部分が攪乱によって分断されているため究明できなかったが、使用される埴輪を旧状に復した場合、2点あわせて現況の1.1mとするのは短すぎるくらいがあるため、片方が双方かという問題は除外しても、埋設された当初から基底部を欠損していたと考える方がより理解しやすい。円筒埴輪内の堆積土は2層に細分されるが、その状態は双方向から流入した土砂が自然に堆積したかのようであった。

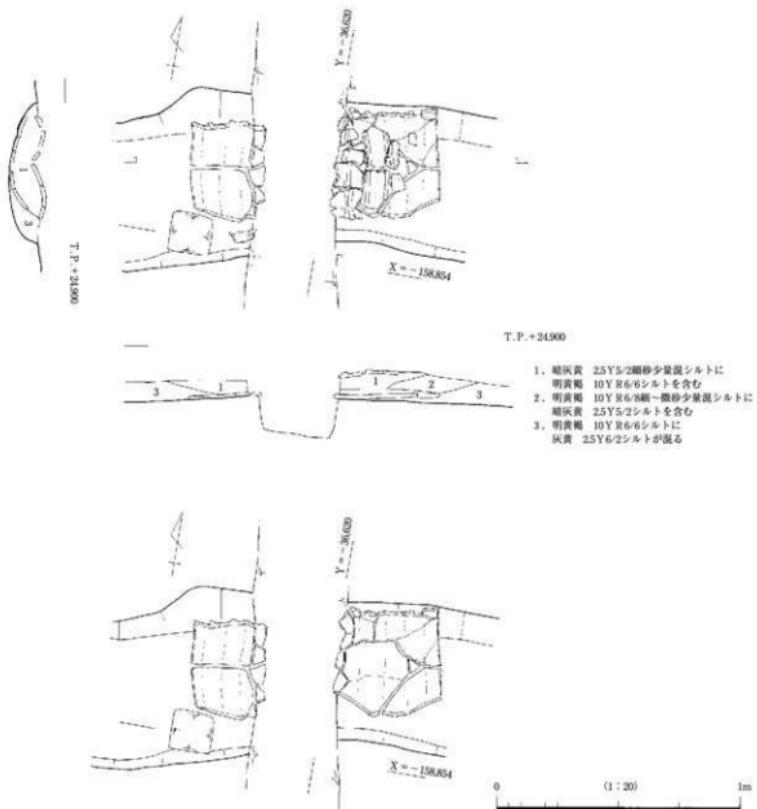


図256 1582溝内円筒棺墓（円筒棺墓3）検出状況および断面図

2点の埴輪を復原すると図257のようになった。このうち1が西側、2が東側に使用されていたものである。双方とも無黒班で、1は外面調整にナナメハケを施し、対向する2ヶ所に「×」の記号が加えられ、一部に赤色顔料が付着している。2は外面調整にナナメハケと断続するヨコハケを併用して仕上げられる。これら2点は、岡ミサンザイ古墳に樹立されているものと共通する要素が多い。

なお、2については、実測図や、図版107に示すように亀裂と共に大きな歪みが認められ、その状況から焼成中に隣接する埴輪が倒れ掛かるなどしてこのような状態となつたとみなされる。

この附近から出土した遺物には同図3の須恵器杯且身がある。小片となっているため、法量的に不确定要素を残すが、形態的要素を含めてその時期を考えた場合には、飛鳥I前半段階頃に位置づけられよう。したがって、これと埴輪との時期差は1世紀以上にもおよぶこととなる。

なお、この遺構については、円筒棺墓とすることに否定的な立場で記述を行ってきた。その第1の要因は、2の短径が20cmに満たず、この中に成人を入れることは無理であるとの疑念を抱くからに他ならない。さらに、大阪府松原市大堀遺跡では、飛鳥時代の溝中より、これと同様の態をなして円筒埴輪が検出されており、それが樋のような埋設管であったということも否定的な見解を探る立場により頗る。

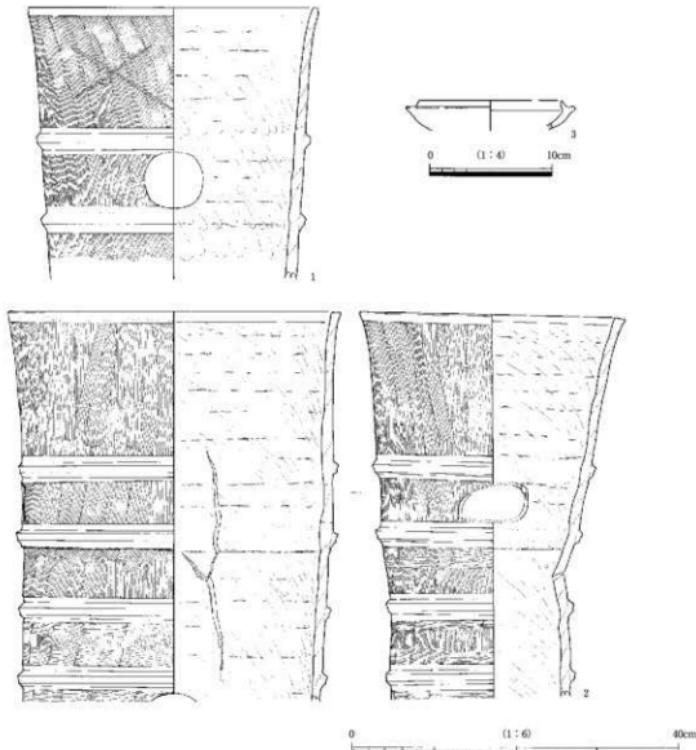


図257 1582満内円筒棺墓（円筒棺墓3）棺材実測図

第3節 土器・土製品

調査区内で検出された遺構や包含層から、各種の土製品や土器が出土した。そのうち、本節では土製品の報告を中心に行い、包含層出土遺物については後節で述べることとした。その理由は、包含層出土遺物がそれを除去した段階で検出される遺構の時期と強い相関関係にあるとみなされるためである。

紡錘車（図258-1・2、図版110-2・3）

2点出土した。双方とも須恵質に焼成されている点では共通しているが、形態には差異がみられる。このうち、1は、建物33を構成する422柱穴掘方から出土し、三角錐状を呈した土塊の中心に、直径0.8cmの円孔を穿っている。半分以上が欠失しているが、直径5.5cm、高さ2.5cmに復原される。

2は60-9g地区の包含層第3層から出土したもので、約半分が遺存する。形状は、断面隅丸方形を呈する土製円盤の中央に、直径1cm弱の円孔を穿つ。これら2点の紡錘車は、共伴遺物より1が飛鳥Ⅲ段階以前、2がおおむね飛鳥Ⅲ段階頃以前に位置づけられる。

土錘（図258-3）

1点検出された。出土地点は8N-9g地区、層準は包含層第5層である。土師質に焼成された製品で、上位を欠損するが、紡錘形を呈するものと復原され、法量は最大径2.8cm、現存長約5.5cm、同じく重量約32.9gを測る。周辺から出土した遺物には初期須恵器から、飛鳥I-1段階以前のものがみられるため、この間のいずれかの時期に帰属するものと考えられる。

土鉤（図258-4～7、図版110-5・6）

4点出土した。すべて土師質に焼成されていることで共通し、形態にはおのおの小差もあるが、大きさや、手捏により成形され、中空部に舌状の釣手部を付している点、紐穴の大きさや形状など、法量や、作出法からみた場合には大同小異である。4は、400溝下層から出土し、釣手から中空部の上端までが遺存する。釣手部には直径約0.5cmの円孔が穿たれている点では他と共通するが、釣手部が厚くなる点で相違する。5は1溝の下層から出土した。釣手部から中空部上半部が遺存し、外面調整はナデによってほとんど消されているがハケが遺存するため、板状工具を用いて成形されたと考えられる。6は60-9e地区の包含層第3層から出土した。釣手から中空部上半の部位が遺存し、表面は釣手部まで丁寧なナデで仕上げられ、その形状も隅丸方形に整えられる。7は1801溝から出土した中空部下半の破片である。下底面には一文字を呈する透かし孔が観察され、全体に粗雑な作りとなっている。

以上は、共に出土した遺物から4が飛鳥II-2段階、5が同I-3段階、6が同III段階以前、7が同I-2段階に位置づけられるため、少なくとも、飛鳥時代前半以前には製作されていたものと考えられる。なお、これらより遺存状況のよい資料が、大阪府羽曳野市茶山遺跡などから出土している。

板状多孔土製品（図258-8～17、図版110-下段）

総数10点出土した。その形状から板状多孔土製品としたが、用途については不明である。いずれも細片であるため全形はうかがえないが、厚さ1cm前後を測り、土師質に焼成されていること、直径0.1cm前後を測る多数の小孔を無作為に穿つことで共通し、さらに、小孔を穿っている面に部分的なハケ調整が観察されること、その反対の面は成型時のままで、調整が施されていない点でも同様の態をなす。仮に小孔の穿たれる面を表、その逆を裏面とするならば、平坦な作業台の上に粘土板を載せ、平滑に整えた後に小孔を穿つという手法により製作されたものと推定される。

この形状に近似する資料にガラス小玉の鋳范が想起されるが、小孔の断面形が漏斗状とならないこと

や、未貫通のものなど孔の形状がまちまちであることや、被熱した様相が看取されないこと、胎土が飛鳥時代の土師器に通有の精良なものが用いられている点においてそれとは異なっている。

これらの時期については、10点中7点が400溝から出土し、他の2点が包含層第2層、残りの1点が1800溝から出土し、400溝出土資料には17のように接合する資料も含まれることから、主体は400溝にあるとみなされる。

よって、その時期は飛鳥II-2段階を中心とするものと考えられる。なお、唯一1800溝から出土した16のみは、その出土地区が画遺構の接点附近である6O-9b地区であることから、本来は400溝に帰属するものである可能性がある。

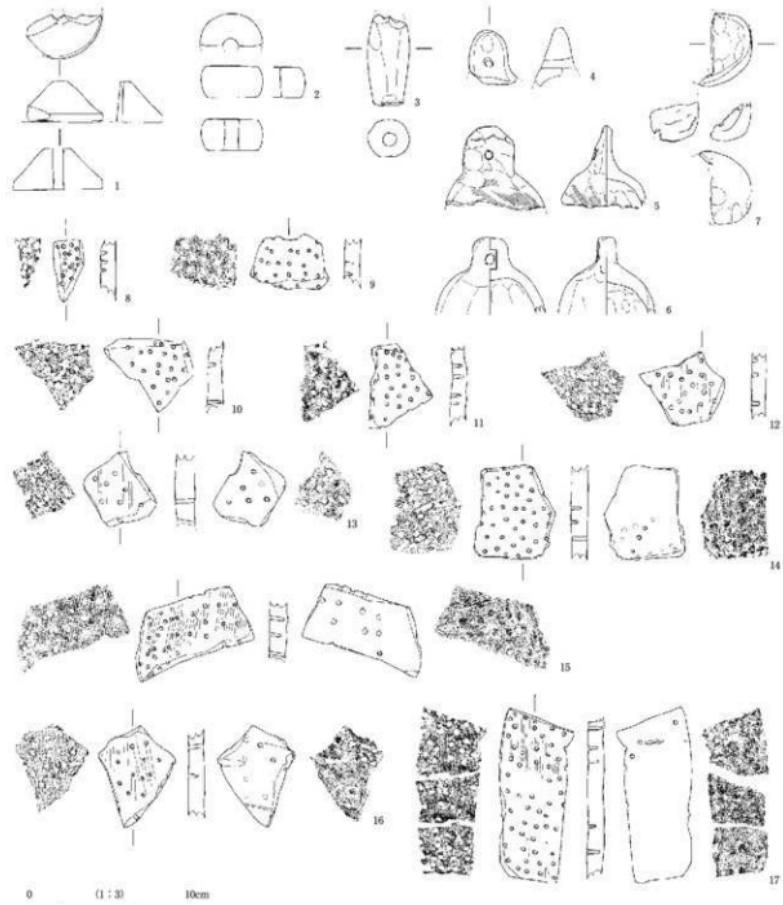


図258 土製品実測図(1)

送風管（図259、図版112・113-1～4）

調査区各所から30点出土した。残存状況や部位により長短や太細はあるが、円孔の直径が2cm前後となる点で共通する。先端部が遺存するものは高熱により溶解し、還元状態となる例が多く、そこから基部にかけての部分も被熱により赤化している。図中ではその状況を前者は濃い網で、後者は淡い網で表現した。これらの出土地は、遺構では1溝が12点と最も多く、つづいて1503溝が6点、163土坑が3点、400溝が2点となり、他は1274柱穴・26井戸・1820落ち込み各1点となる。包含層出土は3点で、うち2点が1溝東端部からの出土である。出土点数の比率は1溝が4割、163土坑が2割を占め、26井戸や包含層の例も、大半は1溝に帰属する可能性があるため、半数近くが1溝に集中することとなる。

また、163土坑では集中して3点が出土し、この他にも図版85-2に示す漆付着土器が出土していることから、何らかの生産に係わる遺構であった可能性も考えられる。

そして、これらを時期別にみた場合、1溝が飛鳥I-3段階、1503溝が同-2段階、163土坑が同-4段階と、飛鳥時代の初めの時期に集中する傾向が看取される。

土製仮面（図260-26、図版111-1・2）

2点出土した。双方とも土師質に焼成され、現状では塗彩などは観察されない。1は舞楽面と推定され、鼻筋から右眉・目・頬が遺存する。表裏面ともナデによって仕上げられ、耳の部分には直径0.8cmの紐掛穴が遺存するが、その周縁に絆擦れの痕跡は認められない。

2は右頬から顎にかけての部位と紐掛穴の一部が遺存する破片で、表面には下から上に向かって未貫通の刺突が多数穿たれ、これに獸毛などを挿入すれば眞面となる。ならば、西域の胡人を表現した可能

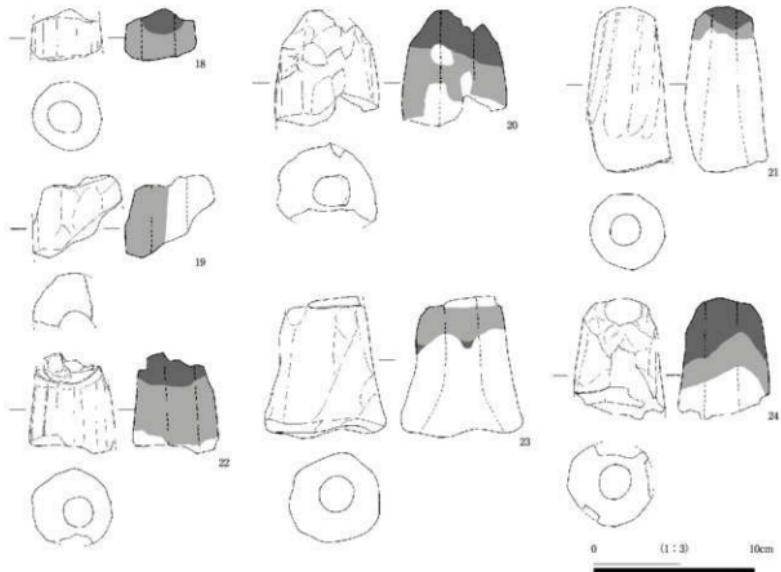


図259 土製品実測図(2)

性が高く、この特徴から伎楽の醉胡王あるいは大孤父の面ともみなされよう。

これら2点は、側面に紐掛穴を持つことでそれと判明するが、下半部を失うため、切頸か否かなど詳細は不明である。また、包含層第3層から出土したため厳密な時期も特定できないが、その主体は飛鳥III段階までに納まるため、この時期となる蓋然性が高いものと考えておきたい。

製塙土器（図版108・109）

若干数を検出した。図版108下段の8点は142戸内から出土したもので、共に出土した土器には飛鳥IVからV段階のものがある。図版109-1と3は149溝から出土し、共伴する遺物には平城V段階頃までのものがみられる。この他、図版109-2は92溝から、同6から11は包含層から出土した。

漆付着土器（図版84・85）

既述したものも含め16点を確認している。出土点数が最も多いのは400溝の7点で、ついで、401溝の4点、そして、建物46の1339柱穴・163土坑・1溝・包含層の1点となる。このように400・401溝に集中する傾向が強く、この2者で全体の7割近くを占める。時期については前者が飛鳥II-2段階、後者が同I-2段階となり、飛鳥時代前半段階に集中している状況が看取される。

この他、図260-27から33を図化したが、29が隅切を持つ平瓦と知れる以外、用途は不明である。

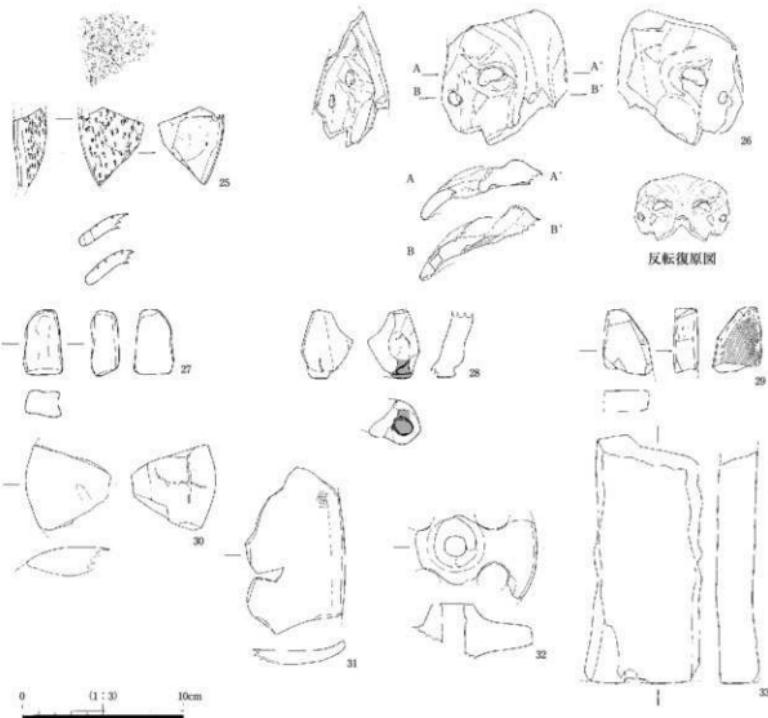


図260 土製品実測図(3)

第4節 石器・石製品

当調査地からはサヌカイト製の剥片を含む石器類を約160点検出した。石器の出土は、地山面と考える黄灰色粘質土層の上面に至る各層から出土している。特に飛鳥時代相当の第3層からの出土が多く、ことに6N・6O区の東側に集中するようにみえるが、旧地形が東へ向かって緩やかに傾斜することによって、後世の整地等により遺物包含層が厚く形成されたことによるものである。地山とされる黄灰色粘質土からは4点の石器が出土地しているが、6・7O区の限られた範囲にかたまっているようである。この付近の黄灰色粘質土の残りがよいことによるものであるが、一番浅い位置で出土した石核（図262-4）から調整剥片（同図-2）が出土した-40cmの位置までに包含されていることになる。しかし、調整剥片の出土状況が直立した状態で出土していることから、生活面の層位については慎重にならざるを得ない。はざみ山遺跡周辺では、地山とされる黄灰色粘質土を挟んだ上下で石器群が確認されているので、当調査地もその一例とみて問題はないと考えられる。

出土した石器類の風化度をみると、風化が浅く弥生時代相当とみられるものが数点あったが、現時点では調査地周辺に弥生時代から縄文時代の遺跡は確認されていないので、これらを無視す

るとほぼ同じ程度の風化度を示しているといえる。出土した石器の内訳は、有舌尖頭器1、石鎌2、ナイフ形石器3、搔器2、削器1、楔形石器1、使用痕のある剥片5、目的剥片（縦長剥片5、横長剥片1）、石核22（縦長剥片石核3、横長剥片石核8、不明1）で、31点を図示した。

図262-1~4は黄灰色粘質土から出土した石器群である。

（1・2）は縦長剥片である。（1）の背面は両側刃方向の打撃による剥離面で構成され、打点部のあたりに縦方向の剥離痕がみられる。（2）の背面にみられる剥離痕は、基本的に両端から縦方向の剥離作業を行っているが、右側の剥離面の上辺に打撃痕がみられ、腹面側でみると両側刃方向からの打撃を行っているが、剥離しきれなかったことがわかる。

（3）は石核である。厚さ1.7cmと薄いが、上端の打面部には同じ個所を意識した打撃痕があるので石核と判断した。石材は粗悪で激しく風化して、剥離面の棱線が読み取りにくいところがある。

（4）は拳大の石材を用いた石核である。打面部は一枚の剥離面でなっている。数度の打撃を加えているが目的剥片を得ることなく打点が後退し、最後に少し外れた位置で打撃を加えているがこれも失敗したようである。

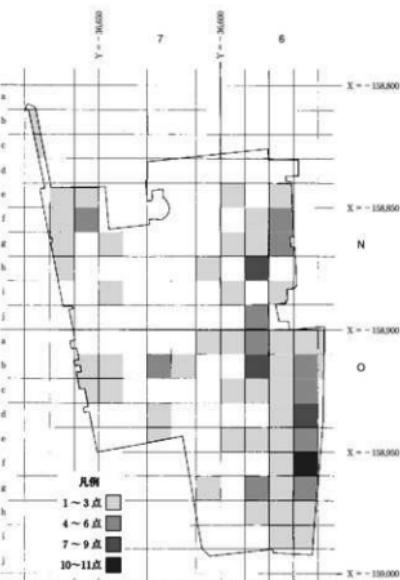


図261 サヌカイト分布図

図263は、包含層から出土した後期旧石器時代に所属するとみられる石器群である。

(1～3)はナイフ形石器である。(2)・(3)は瀬戸内技法の翼状剥片を素材とするような特徴はあるが、厚みがなく、比較的小形になるとみられるので後出的なものである。(4～6)のような石

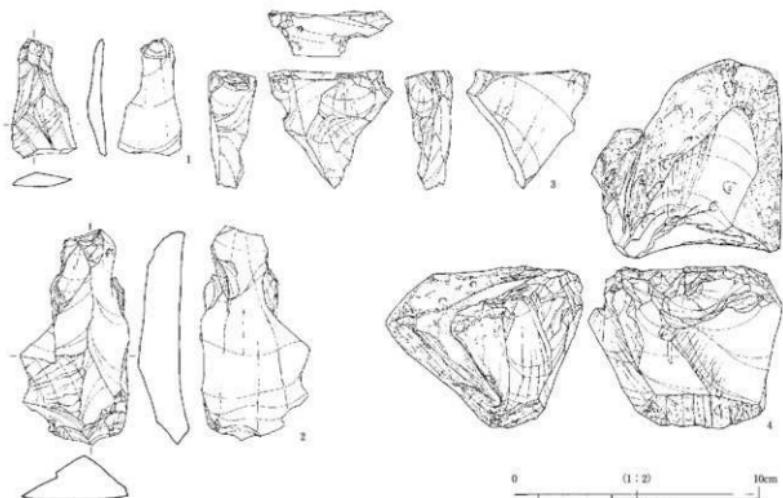


図262 石器実測図(1)

核から取得した剥片を素材としていたと考えられる。(1)のナイフ形石器は、新しい剥離が多いので剥離面を観察しづらいが、両面ともに複数の剥離面で構成されているようである。背部の調整はナイフ形石器に特徴的な一方向から打点部を打ち揃っている。素材剥片には(10)のような剥片が考えられる。

(4～9・11・12)は石核である。(4～8)は、瀬戸内技法による翼状剥片石核に近似するが、瀬戸内技法のように山形に作り出した打点部に打撃を加えるだけでなく、(7)のように剥離面を打点として打撃を加えた技法で、石核の素材は一部に自然面を残す剥片を使用しているが、(5)のように盤状剥片を用いたものもある。これらの石核から得られた剥片が(10)である。

(9)は形態・法量ともに(10)に近似するが、(4)や(6)のような石核の残核と考えられる。

(10・11)は2方向以上から剥離作業を行う石核である。(10)は基本的に打点部を山形に作り出すもので、両短辺と片側長辺の3個所に打撃痕があるが、あまり良好な目的剥片が得られたようには見えない。(11)は長辺の両面が打点部となっている。片方の打点部は山形に作り出しているのに対し、もう一方は自然面に打撃を加えている。この2点の石核は、先述した石核のように打点部を山形に作り出すような要素はあるが縄文時代的な雰囲気もあるので、後述する石器群に含まれるのかもしれない。

図264は包含層出土の縄文時代初頭を中心とした石器である。

(1・2)は凹基式石鏃である。2点ともに400溝の埋土から出土しているが、溝の年代を示すものではない。石器が集中して出土する東端からの出土であるが、近辺からは有舌尖器(3)が包含層から出土し、黄灰色粘質土から出土した石器もこの周辺なので、何等かの因果関係がありそうである。

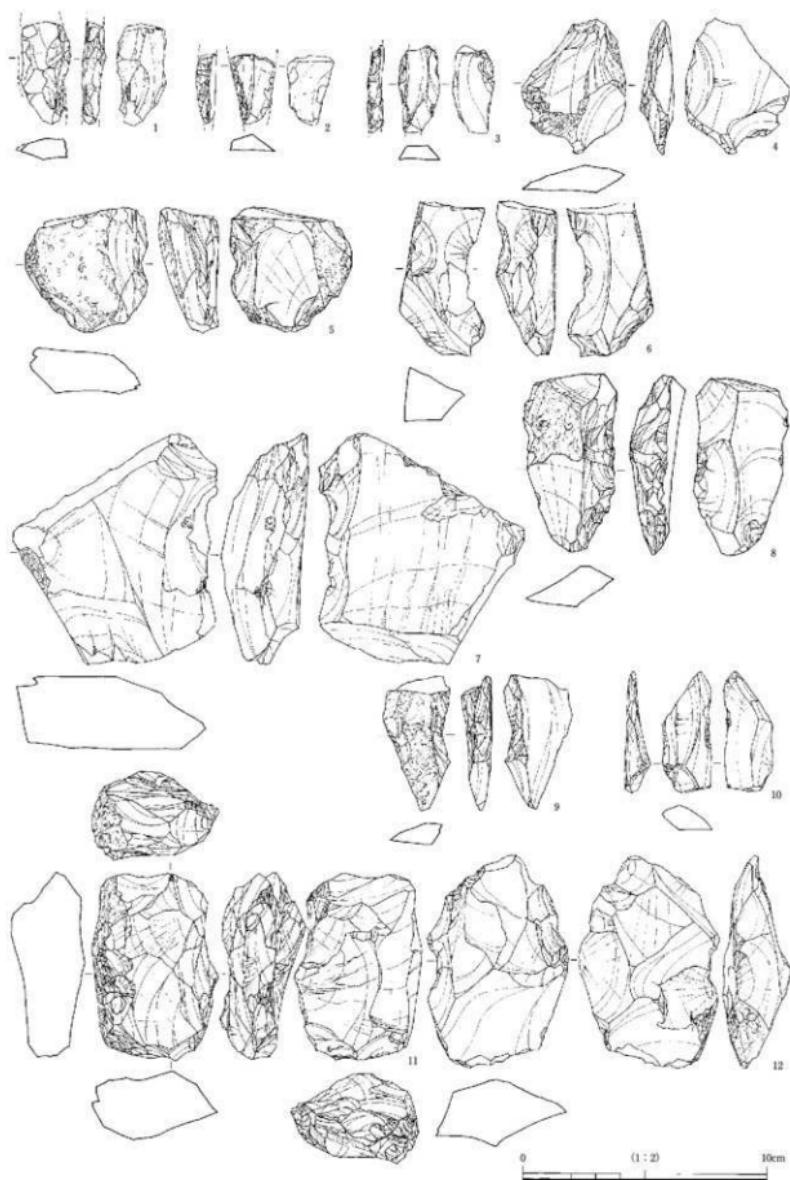


图263 石器实测图(2)

(3) は有舌尖頭器である。全体に細かな押圧剥離調整が施されている。舌部は中心線より若干のずれがあったらしく執拗に調整がなされている。先端部は欠損しているが、側縁にみられる縱方向の剥離はその際にできたものである。

(4・5) は搔器である。腹面側は複数の剥離面で構成され、背面も求心状の調整で断面形は半円形を呈している。刃部の先端には搔器に特有の使用痕がみられる。この他に(8)の自然面の残る剥片を用いた石器も、刃部を片面加工で仕上げているので、搔器かとも考えられるが、搔器に特有の使用痕がみられないでの削器とした。

(6・7・9・10) は使用痕の有る剥片である。使用痕については、どのような状況下で出来たものかわからぬが、搔器のように搔き取るような作業によってできる特徴的な使用痕である。

(9・10) にみられる内済した使用痕は、矢柄の研磨や細い骨に残った肉片を搔き取る等の用途が推定できる。

(11・12) は縱長剥片である。打面部は自然面で、背面には2~3枚の同方向の剥離面がある。打点部は自然面で、(12)のように周囲に自然面が残る点からすると目的剥片として剥離されたとみるよりは、打面調整のために連続して剥離作業を行ったものかもしれない。

(13~15) は石核である。(13) は打点部から剥離作業面を欠損しているのでなんともいえないところはあるが、碎片を用いていると考えられ、剥離作業面は限られるので、細石刃程度のものしか剥離できないのではないだろうか。(14) は縦長剥片石核であるが、厳密には残核である。裏面を構成する複数の剥離面には打点がみあらないので、縦長剥片を得ようとして失敗している面が剥離作業面である。打点部は調整剥離面で、厚さが1.6cmしかないで残核と判断した。(15) は縦長剥片石核であるが、打面部と剥離面の一部を残して破碎している。作業面では縦長剥片を得ようとしているが、剥離作業面の調整を行うべく複数の打撃を加えたところで破碎したようである。

当調査地から出土した石器は、後期旧石器時代のナイフ形石器から縄文時代の有舌尖頭器と時代幅がある。出土状況は、ほとんどのものが後世の包含層からの出土であったが、4点の石器を包含した黄灰色粘質土は、調査区の東半部で地山面として認められているが、西半部は削平されて、粘質土の下の段丘疊層が地山面となる。周辺での旧石器時代に前後する遺物包含層は、この黄灰色粘質土から下位に求められると考えられ、はざみ山遺跡85-7調査区(梨田地点)(1)や翠鳥園遺跡(2)等で黄灰色粘質土と段丘疊層の境目で石器群の広がりを確認している。梨田地点では住居址が検出されているので、後期旧石器時代段階での生活面が黄灰色粘質土の下位にあることは確実視されるようになっている。当調査区ではナイフ形石器が3点出土しているが、包含層出土で原位置を保ったものはなかった。60-7d区で出土しているナイフ形石器(3)は他と比較して無傷な状態であることから、近辺に良好な包含層の存在を窺わせるものである。石核には横長剥片石核と縦長剥片石核とがあるが、ナイフ形石器と供伴関係にあるのは横長剥片石核の一群と考えたい。石核の特徴としては、瀬戸内技法のように打点部を山形に作り出し、後退しながら連続して剥離作業を行うものとは異なって、無作為に見えるような大雑把な打面調整を行い、剥離面の切り合を稜線上を打点とすることが多いが、必ずしも稜線上を打点とはせず、剥離面を打点とするものもある。この石核から作りだされた目的剥片は、3~4cm前後の小形の剥片か、長さがあつても(10)の剥片にみられるような腹面に複数の剥離面のみられるものとなる。このような剥片を素材剥片としているのが(1)のナイフ形石器と思われる。

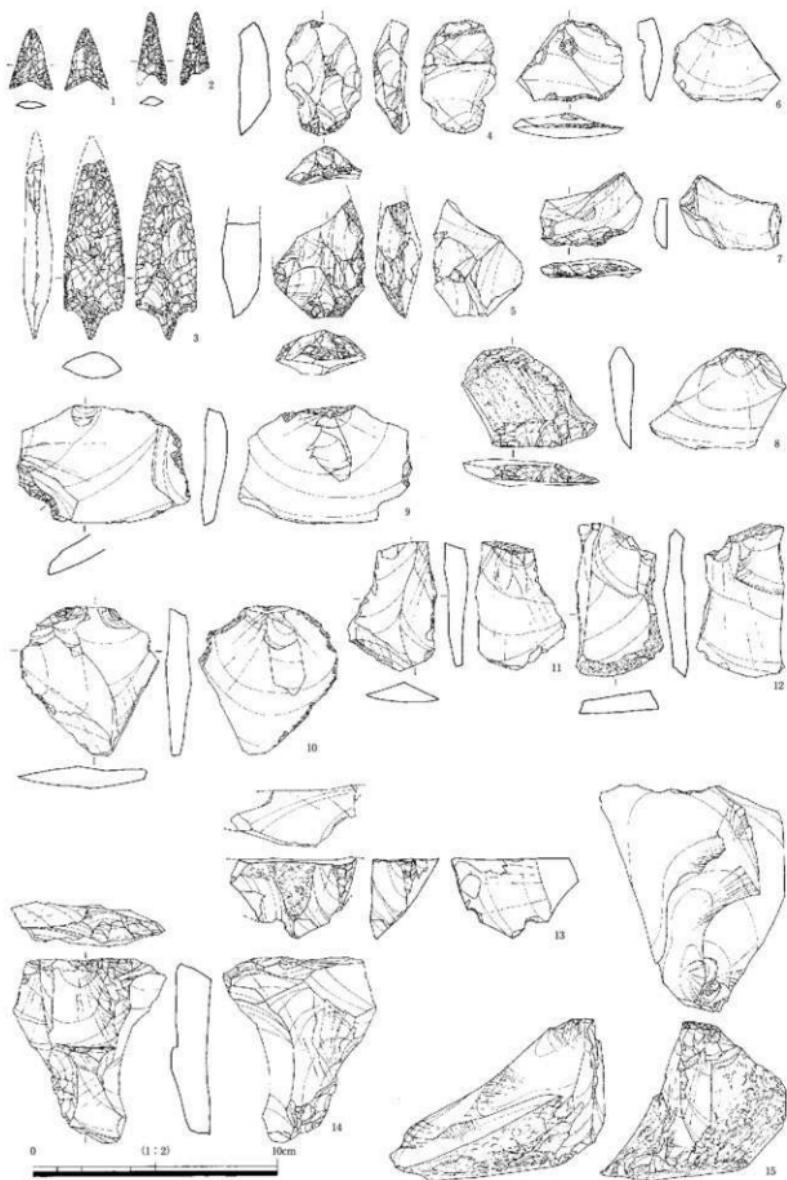


图264 石器实测图(3)

一方の旧石器時代以降縄文時代に至る石器群については、周辺でも生活面とみられる層位が確認されていないのが現状といえる。しかし、これまでに尖頭器を主体とする石器群を出土している遺跡は、青山遺跡（3）、はざみ山遺跡81-6区（4）等がある。青山遺跡では旧石器時代のナイフ形石器も併存していることから疑問視するところがある。はざみ山遺跡81-6区では石器群の広がりとして確認しているが、包含した黄灰色粘質土の広がりが狭い範囲に限られたことで説得力に欠けるところがあった。当調査地においても黄灰色粘質土内から出土した4点の石器の所属時期の特定につながるものはなかつたが、包含層からは有舌尖頭器が出土しているので縄文時代草創期の時期を考えた。

縄文時代草創期相当の定形的な石器としては有舌尖頭器、石錐、縦長剥片、縦長剥片石核等がある。技法的にみて縦長剥片石核としたものの中には、それが残核なのか、剥離作業面を調整したもののか見解の別れるところである。剥離作業面の調整を行っているものは黄灰色粘質土から出土した（4）の石核がそれにあたる。拳大のサスカイトの円礫の一端を打ち抜いて打面としたもので、2151井戸から出土した（5）の石核も同じ技法によるものといえる。これらの石核からは石刃と呼べそうな剥片を連続して剥離しているようである。このような石核に類似したものは、北岡遺跡88-1区の調査で、黄灰色粘質土に包含されて出土している（5）。ここでも出土層位は黄灰色粘質土内にあることになる。生活面としてとらえることはできなかったが、後世の包含層からも石刃状の縦長剥片が出土しているので、一つの文化相に属していたことに違いはなさそうである。このような石核から得た縦長剥片は青山遺跡やはざみ山遺跡81-6区の石刃石錐や小形の尖頭器等の素材として利用されたものと考えられる。

1) 大阪府教育委員会『昭和60年度 はざみ山遺跡発掘調査概要－羽曳野丘陵北縁上遺跡群の調査－』 1986

2) 羽曳野市遺跡調査会・京都大学文学部考古学研究室『旧石器人のアトリエ－羽曳野市翠鳥園遺跡の石器接合資料－』 1995

3) 大阪府教育委員会『南河内における遺跡の調査Ⅰ－旧石器時代基礎資料編Ⅰ－』
(大阪府文化財調査報告書 第38輯) 1990

4) 註3) に同じ。

5) 大阪府教育委員会『南河内遺跡群発掘調査概要Ⅱ』 1989

図 265 から 269 には石製品を掲載した。これらの種類には、図 265 の石製模造品の一つ白玉、266 の凝灰岩切石、267・268 の使用痕のある石、269 の砥石がある。この他、掲載していないが、紅簾片岩や安山岩の板石も散見される。

石製模造品（図 265、図版 110-1）

白玉が 1 点のみ検出された。出土位置は、調査区の中央から北に位置する 1506 溝に重複して確認された農業用排水路である。この溝にはサヌカイト剥片から近代までの遺物が含まれており、これらの中に混入した状態で検出された。

法量は直径 0.6cm、厚さ 0.3cm を測り、その中央には直径 0.2cm 弱の円孔が片側から穿たれている。周縁はやや磨滅するが、多角形状に研磨されている状況がわずかに観察される。

用材は緑灰色を呈し、軟質であることから滑石あるいは緑泥石とみられ、これらの様相から 5 世紀代後半に通有みられる製品であるとみなされる。なお、この遺物は、多数を連ねて使用される事例が多く、このように単体で出土することは稀である。今回の例は一千五百年もの時間差のある溝から出土したことや、軽量であるため移動しやすい条件的要素はあるが、軟質であるにも係わらず比較的旧状を止めていることから、大きく移動したものとは考えられず、また、古市古墳群内に所在するという地理的条件から、周辺においてこれを使用する儀礼が執り行われた可能性もある。

凝灰岩切石（図 266、図版 119-1~6）

各地点の遺構や包含層から大小さまざまなものが多数出土した。その量や分布状況については、一定の法則や傾向の差はみられないため、遺存状態の良好なものや、特徴的なもの 9 点を中心として、全体的な傾向について報告を行う。なお、網を掛けた部分は煤の付着する部位を表している。

形状は、遺存する部位から判断して二者に分類される。一つは長さ 37cm 以上、幅 18cm、厚さ 12cm 前後を測る 4 から 6 の小形、もう一つは、長さ 21cm 以上、幅 21cm、厚さ 15cm の 7 から 9 の大形のもので、遺存部位からみて、3 も大形に含まれよう。また、小形の中には、5 のような両面に段状の加工が加えられた例も存在する。これらのうち、遺存状態がよい資料では、表面に鱗状を呈する研痕が観察され、このことから、手斧などによって平滑に整えられたことがうかがえる。

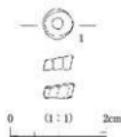
このような形態や加工を施す凝灰岩切石は、飛鳥時代では、寺院の基壇化粧などに用いられる場合が多く、特に 5 は地覆石に類する形状を呈しているが、それらと比較して小形であるばかりか、全体的に幅に対して偏平であるため別の用途が想定される。

その観点からみた場合、図示するように煤の付着や被熱により赤化している例の多いことが注視され、羽曳野市下田池瓦窯のように構架材として凝灰岩切石を用いた例も確認されていることから、窯の構築材などとして使用されたとも考えられよう。

使用痕のある石（図 267・268-11、12、図版 114-1~7、10、13・115-7、8）

線条痕や敲打痕、滑沢を持つものなど、人為的所作の観察されるものを総称した。用材は安山岩や砂岩などが多用され、滑沢を持つものには概して砂岩が用いられる傾向が強い。1 から 7 は安山岩などが使用され、表面には線条痕や擦過痕などが観察される。9・10 は直方体様を呈する砂岩で、9 の表面には平滑面や滑沢が観察される。10 の表面と両側面にも平滑面と滑沢が観察されるが、特に左側面は滑らかで、一部には鈍い光沢を放つ部分も存在する。図 268-11 と 12 は、硬質の砂岩や珪質岩の偏平な円盤で、そのほぼ中央には滑沢が観察される部分的に鈍い光沢を放っている。

これらの用途は各種作業の台石や、擦卸具とも考えられるが、詳細は不明である。



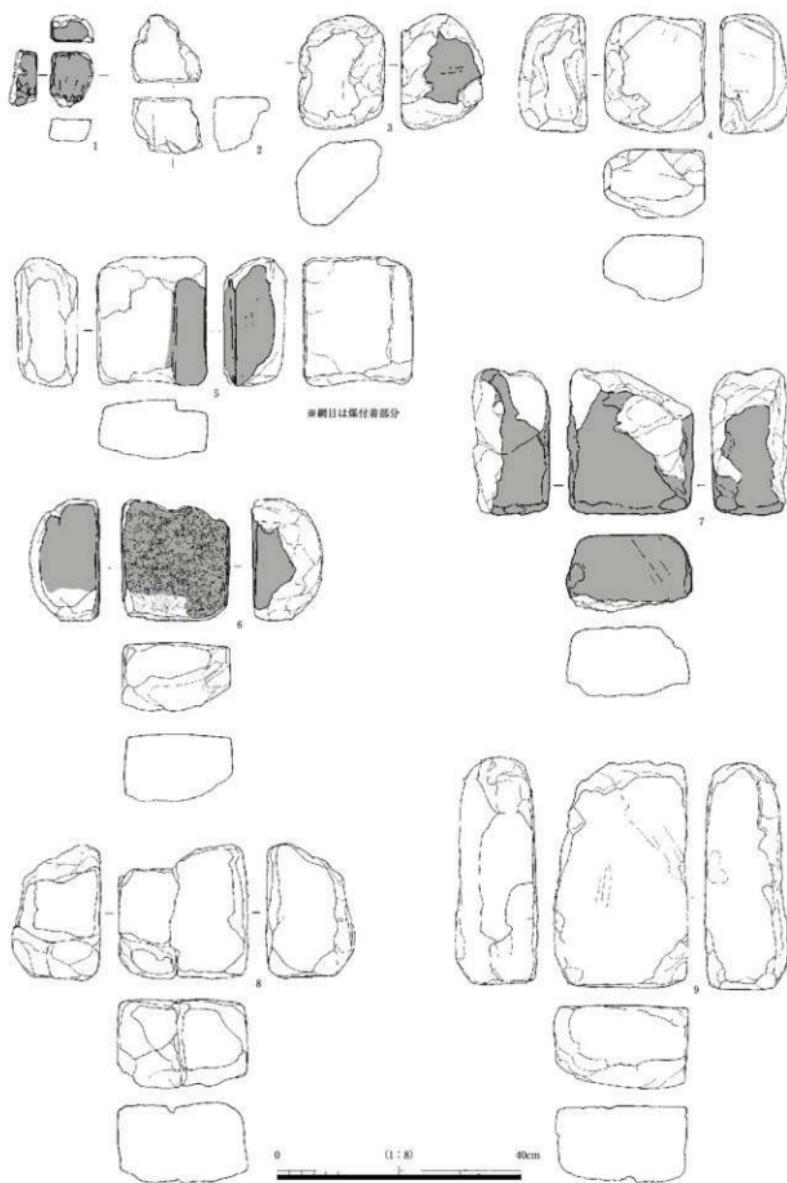
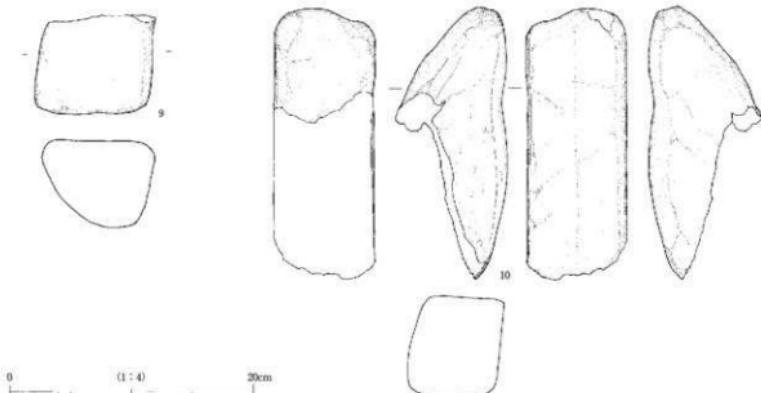
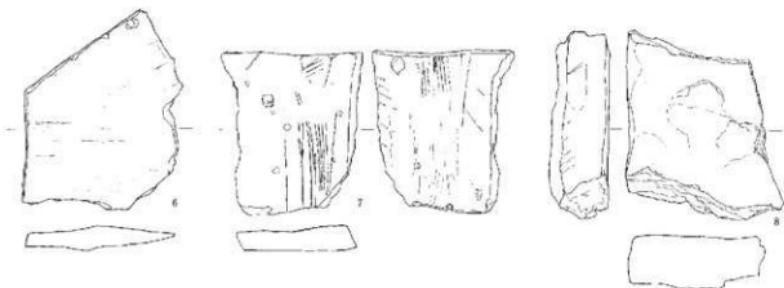
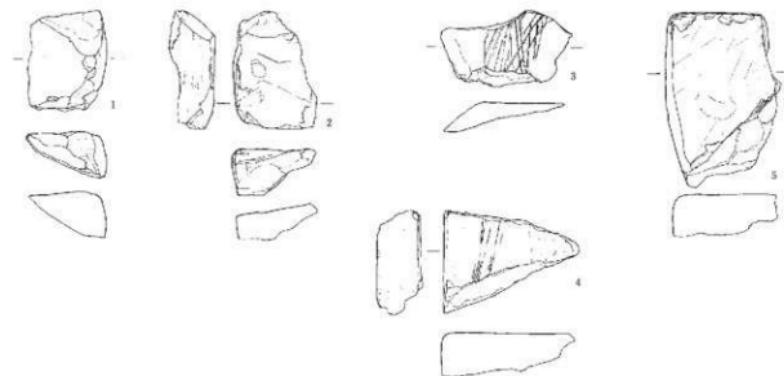


図266 凝灰岩切石実測図



0 (1 : 4) 30cm

図267 使用痕のある石実測図(1)

叩石（図 268 - 13~15、図版 114 - 8・11・12）

3点出土した。いずれも砂岩を用材とする。表裏面や側面に敲打痕が観察されるが、部分的に平滑な部分や滑沢を持つ個所が観察されることから、磨石として使用される場合もあったとみられる。

時期は、出土品に石礫や剥片類など、縄紋時代の資料が含まれるため、当該期のものとなる可能性が高いが、他地域の民俗例では、近代まで使用されている事例もあるため、取り扱いに注意を要する。

凹石（図 268 - 16、図版 114 - 9）

1点が確認された。建物 3 柱穴を構成する 65 柱穴の掘方から出土したもので、用材は砂岩である。表面の平端部には敲打痕が集中し、凹部が形成されている。時期については叩石と同様、縄紋時代となる可能性が最も高いものと考えられるが、直ちにこれに結び付けられるものではない。

砥石（図 269、図版 115 - 1~6）

調査区内の各遺構や包含層より 14 点が出土し、それらすべてを図 269 に示した。用材は凝灰岩質の石材や砂岩でほとんどが占められており、1 点のみ粘板岩を用いたものが確認された。石質からみて前二者は粗砥、後者は中砥に相当するものとみなされるが、この認識は近世以降のものであるため、後者については往時、これで合砥の用をなしていた可能性も考えられる。

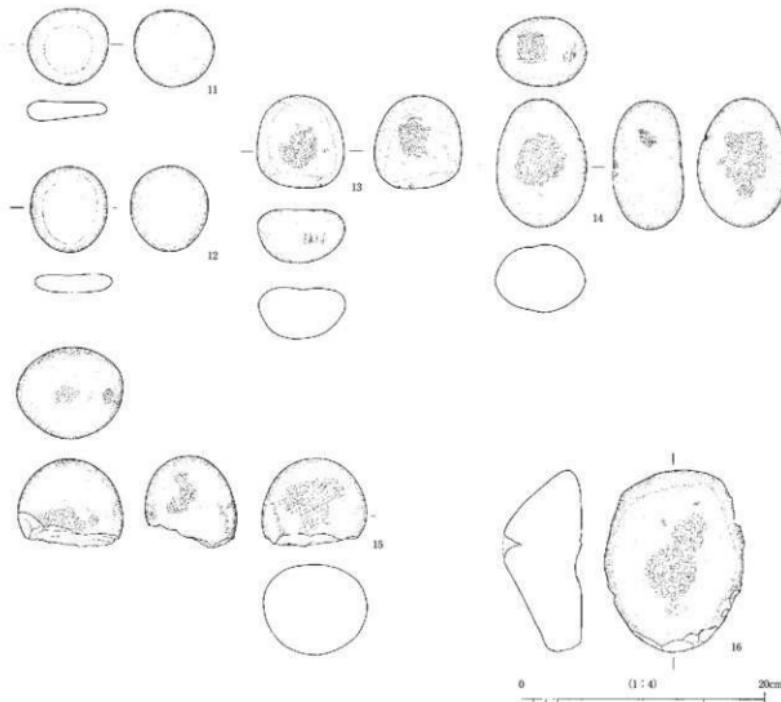


図268 使用痕のある石実測図(2)

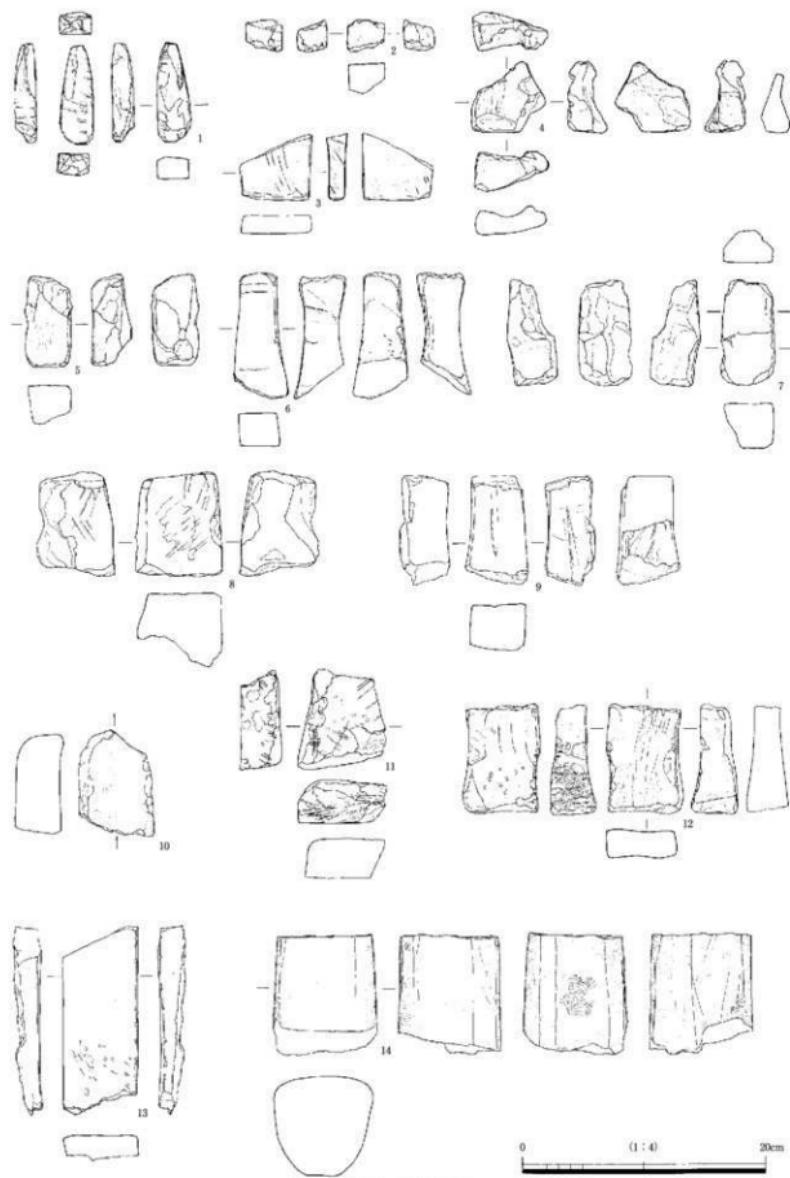


図269 磨石実測図

図269-1は唯一粘板岩を用材とする砥石で、石理に対して平行する2面が最も広く、かつ、よく使用されているが、擦過痕は6面ともに観察される。飛鳥時代の1890号穴建物から出土した。

同図2・4・5・7・8・11は凝灰岩質の石材を使用するもので、材質や色調などは、現在の備水砥あるいは、天草砥石に類似する。これらは、すべて飛鳥時代の遺構や包含層から出土した。

3・18・10・14は砂岩を用材とする。このうち、前3者は青味がかった緑灰色を呈することから和泉砂岩とみられる。他の1点は、細粒質となる点で他者と異なるが、被熱により変色しているため不明である。これらの時期は、中世の2151号戸から出土した3以外、飛鳥時代の遺構や包含層から出土した。

13は25号坑から出土したものである。片岩系の石材を用い、石理に対して平行する面が最も遺存状況がよく、両側面にも擦過痕が観察される。なお、表面の下位には敲打痕も観察される。

第5節 金属製品(図270、図版113-15~17・128)

確認された6点すべてを図化した。このうち3が青銅製である以外鉄を素材とする。これらのうち、遺構出土資料の一部については各論で詳述したため、包含層出土のものを中心として報告を行いたい。

2は1800溝から出土した鉄製曲刃鎌である。欠損部が多く詳細は不明だが、表面には錯着して反転状態となった木の葉の葉脈が明瞭に観察されることから、当時の周辺環境を如実に示している。

3は、1点のみ検出された用途不明の青銅製品である。上位は欠損するが、断面円形を呈する棒状部と、その下端の円盤状を呈する頭部までが遺存する。細部を観察するならば、棒状部の表面は細かい多角形状を呈していることから、鍛打により整形されたと理解される。また、頭部は括れているため、前記の整形法以外に鍔掛けが行われたとみなされる。出土地点は包含層第2層で、これと共に飛鳥時代から中世段階までの遺物出土したため、この資料もその中の何れかの時期に帰属するものと考えられる。

なお、1・4と5・6は建物7・3004号坑、405号戸で詳述しているため、それらを参照されたい。この他、金属器生産に係わる遺物3点を図版113に示す。15は1溝から出土したもので、表面が溶解し、気泡が生成されていることから、鉱滓と考えられる。同遺構からは輪の羽口が多数出土しているため、これに関連する資料と考えられる。

16は401溝から出土した粗い胎土からなる土製品の小片で、表面に溶解した鉱滓状の物質が付着していることから取瓶とみなされる。

17は403溝から出土した磁石に吸着する鉄錫塊である。その形状や様相から椀形滓と考えられる。

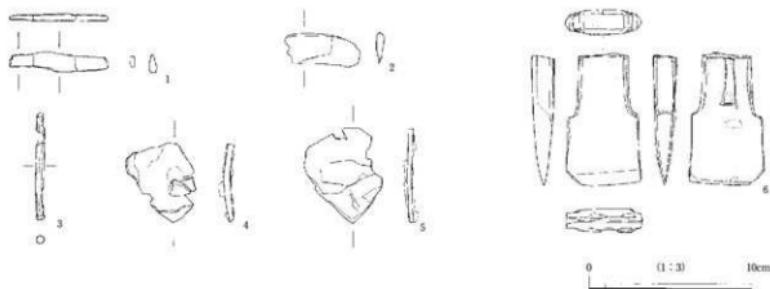


図270 金属製品実測図

第6節 包含層出土遺物

標記の資料については、本来、第3節の土器・土製品の項で詳述すべき所ではあるが、今回検出された遺構が多数の掘立柱建物で占められ、その遺構の性格上時期を知る手掛かりが得られにくいため、地区ごとの出土遺物を検討し、建物の時期を推定する一助とするために別項を設けることとした。

また、近世・近代水路出土遺物については、考古学的には極めて近い時期の溝出土遺物として一括される資料であるが、当遺跡の立地や環境に起因して、旧石器時代以降、中世までの遺物が多量に含まれていたため、これらを包含層と同等に取り扱い、採取すると共に代表的な資料を掲載した。

近世・近代水路出土遺物（図271）

石製品で報告を行った白玉以外に、サスカイト剥片から古墳時代中・後期、飛鳥から奈良、中世、そして、近代の本業瀬戸染付磁器に至るまでの多量の遺物が出土し、図271にそのごく一部を国化した。

1と2は土師器の鉢で、底部を除く破片がまとまって出土した。形態的には1がA、2がBに分類され、表面が磨滅せず、破片も大きいことから、比較的新しい段階に近寄から流入したとみなされる。

3と4は円筒埴輪の破片で、3は窓帶の遺存する体部の破片、4は口縁部の破片で口縁突帯が付される。双方とも窓窓で酸化炎焼成された硬質で無黒斑の製品で、外面には二次調整のB種ヨコハケが施される。また、4の口縁突帯が剥離した部分には、一次調整のナナメハケが観察される。附近で同様の特徴を有する埴輪は、誉田御廟山古墳の外堤などで用いられている。

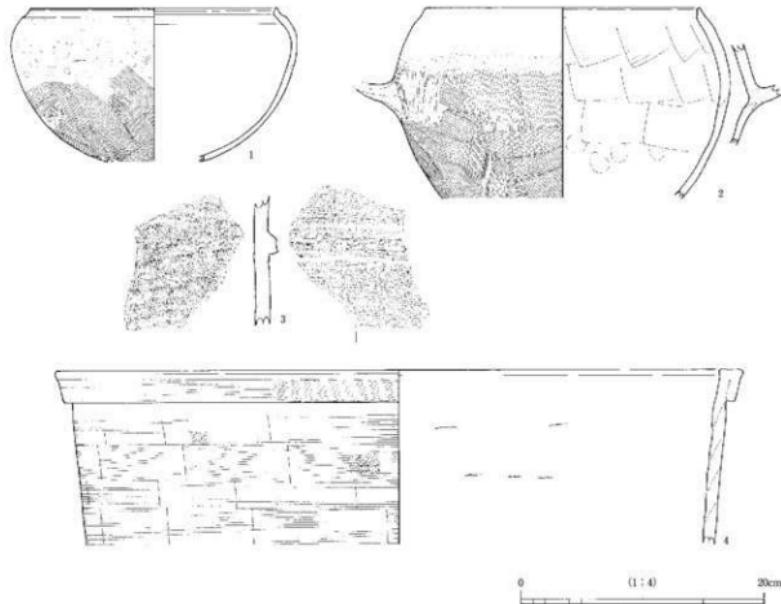


図271 近世・近代水路出土遺物実測図

6 N・6 Oグリッド包含層出土遺物（図272~282）

当組織が測量や遺物の取り上げの基準として設定した第Ⅲ区画の6ラインと7ラインの境と、調査区内で検出される遺構の密集地帯や、包含層の残存範囲が偶然にもほぼ重複するような形となったため、これを援用して遺物の検討を行い、そこから遺構などの時期を知る補助資料とすることを計画した。

そして、これに基づいて作業を進めた結果、当初の目的をおおむね達成できることが判明したため、ここに別項を設けて取り上げ層準ごとに報告を行う。

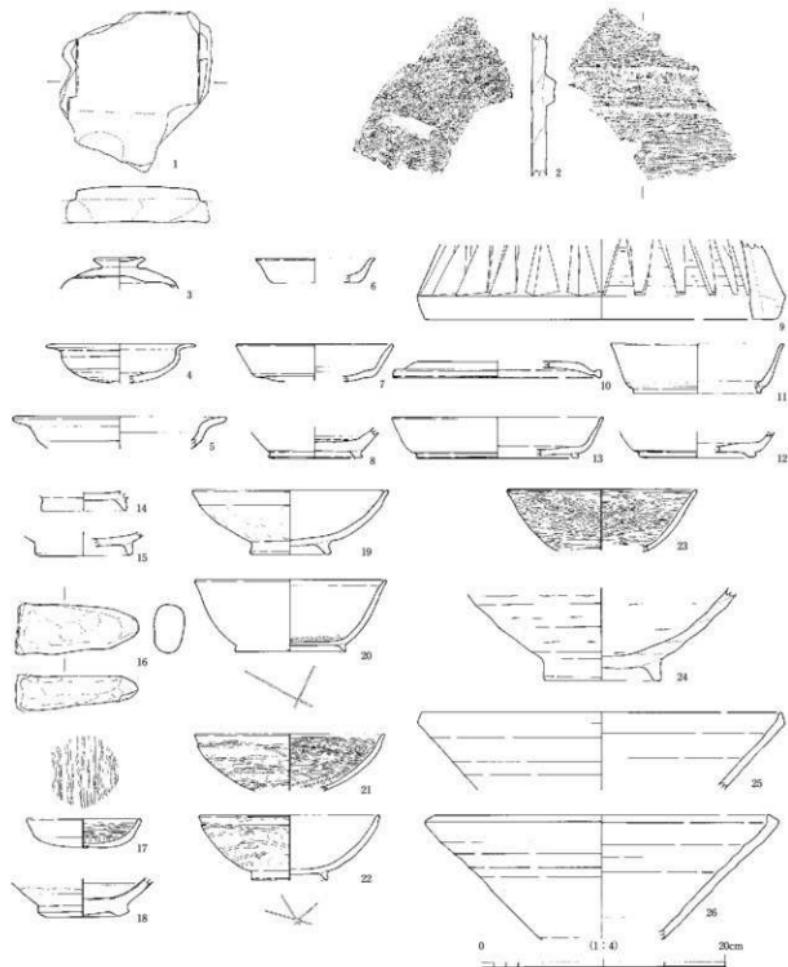


図272 6N・6Oグリッド包含層（2層）出土遺物実測図（1）

第2層出土遺物（図272・273）

古墳時代中期から中世にかけての遺物が出土した。図272-1と2は埴輪で、前者は家形埴輪の壁面とも考えられる。2はB種ヨコハケが施された無黒班の円筒埴輪で、上位にヘラ記号が加えられる。

3から12は須恵器で、3は有蓋短頸壺の蓋、4と5は口縁端部が外反する鉢、6と7は杯A、8は壺の高台、9は非常に大形の蹄脚円面硯脚部、10は杯B蓋、11から13の3点は同器種の身である。

つづいて、14・15は灰釉陶器の椀高台部、16は器種不明の土師器把手、17は瓦器小皿、18は輸入磁器の廈門湾窯系白磁碗IV類-1類、19・20および、23は黒色土器の椀で、前二者がA類、後者がB類に分けられる。そして、21と22は瓦器椀、24は常滑の片口鉢、25と26は東播系須恵器片口鉢である。

図273には瓦類を図化した。図273-27は軒平瓦で、瓦当部には宝珠とおぼしき紋様を中心飾りとし、そこから双方に反転する均整唐草紋が陽出される。28は丸瓦、29から34は平瓦である。凹面の調整は布目圧痕となることすべてが共通し、さらに、模骨痕の有無により、31・34などとそれ以外に細分される。凸面の調整は平行タタキなどの痕跡を丁寧にナデ消す31や34と、繩目タタキとされる他のものとに二分され、前者は内面に模骨痕を持つ資料と呼応する関係となる。これらの遺物は、27を除いて1や2の5世紀後半、6から13の8世紀後半代、14・15・19・20などの9世紀から10世紀代、17・18・24から26の12世紀代後葉から13世紀初頭に分けられ、検出された遺構との間に高い相関関係を持つ。

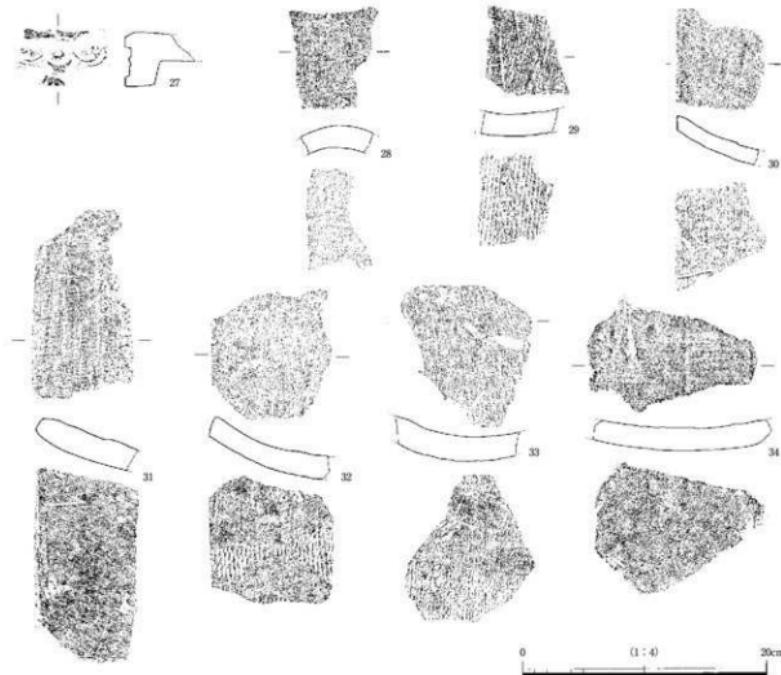


図273 6N・6ログリッド包含層(2層)出土遺物実測図(2)

第3層出土遺物（図274～281）

170点余を図化した。これらのはほとんどは、開析谷の段差部下位に堆積する土層からの出土である。その内容は、図274から277に示す須恵器、図278・279の土師器類、図280・281の埴輪からなる。

土師器類の中には図279～149に示す古墳時代の布留式土器の壺、150の弥生時代V様式の壺、151から154の韓式系土器を含むが、調査地周辺の歴史的環境を知る上で重要なためここに含めた。

須恵器は図274から277に示す118点を図化した。器種には図274～1から19の杯G蓋、20の口縁部が外反する鉢、21から23の杯G身、24の杯B蓋、25・26の湖西窯産「かえり付坏蓋」に酷似する資料、27・28の杯B身、29・30の陶硯がある。

つづいて、図275では31から44が杯H蓋、45から73が杯H身で、これらの中には図275～37・66から73のように各種ヘラ記号を付加したものもみられる。

さらに、図276～74は壺、75は平瓶、76は横瓶、77から79は鉢で、このうち77は杯Aとなる可能性もある。つづく、80から83は捏鉢、84から86は飴、87と88は長頸壺、89・90は1段透かしのみの段階となつた台付壺脚部、91・92は壺体部で、前者は、その形態や胎土からみてこの時期の陶邑産とは考えられないものであるため、漆の付着こそ観察できないが、その容器として搬入された可能性が高い。

さらに、93は脚部であるが、形態からみて壺以外、たとえば鉢などに付されるものであろう。94から97は短頸壺で、口縁部の形態からみて、有蓋と無蓋それぞれ2点ずつに分けられる。

98から113までは高杯で、これらのうち98から101は突線間の紋様を欠失した無蓋高杯の杯部、102から104は高杯蓋、105から109は同器種杯部、112・113はそれらの脚部で、大小の形態差はみられるが、三方透かしである点では共通する。

そして、図277～114から118は、口縁部におのおの種別のみられる壺の口縁部である。

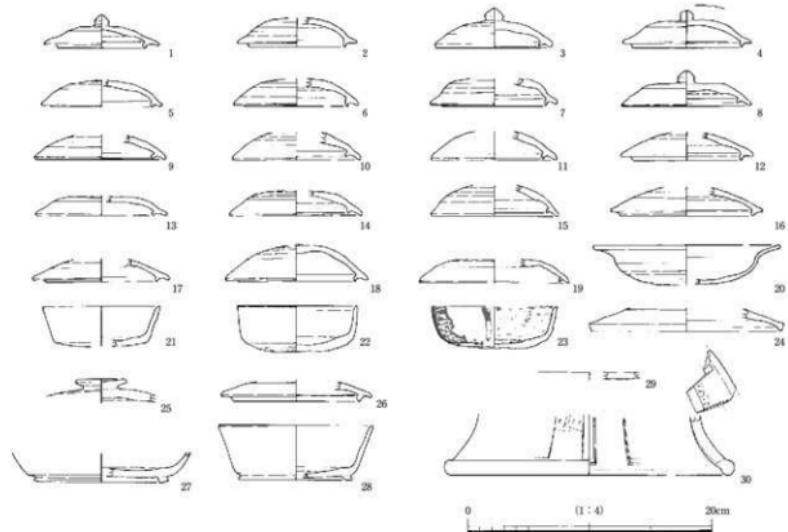


図274 6N・6ログリッド包含層（3層）出土遺物実測図（1）

これらの中で、30の圓足圓面硯脚部は、既述のように形態はもとより細部にわたる部分までが、1890堅穴建物から出土した図112-18に示す陶硯と酷似しており、小片のため互いの復原径や傾きをわずかに考慮するならばこれとほぼ同形となるため、本来、同一個体であったとみなされる。

また、23のように漆の取皿として使用された須恵器も含まれている、当該品について、400溝あるいは401溝に埋積していた類似資料との関連性が強ものと考えられるため、埋没当初はそれらに帰属し

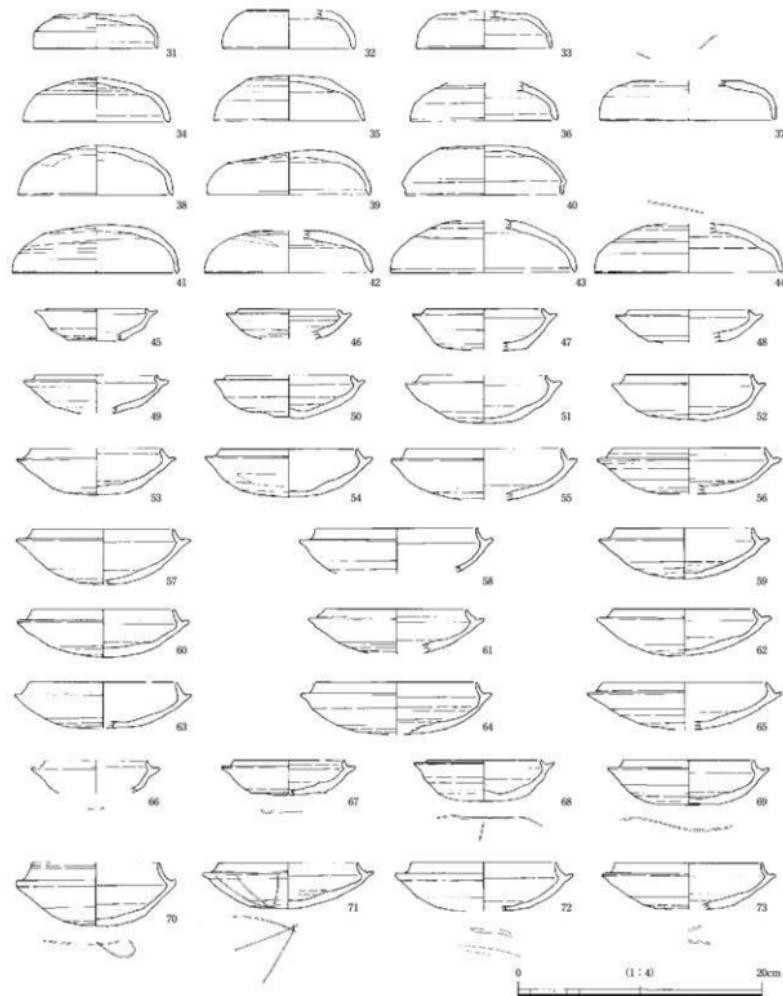


図275 6N・6Oグリッド包含層(3層)出土遺物実測図(2)

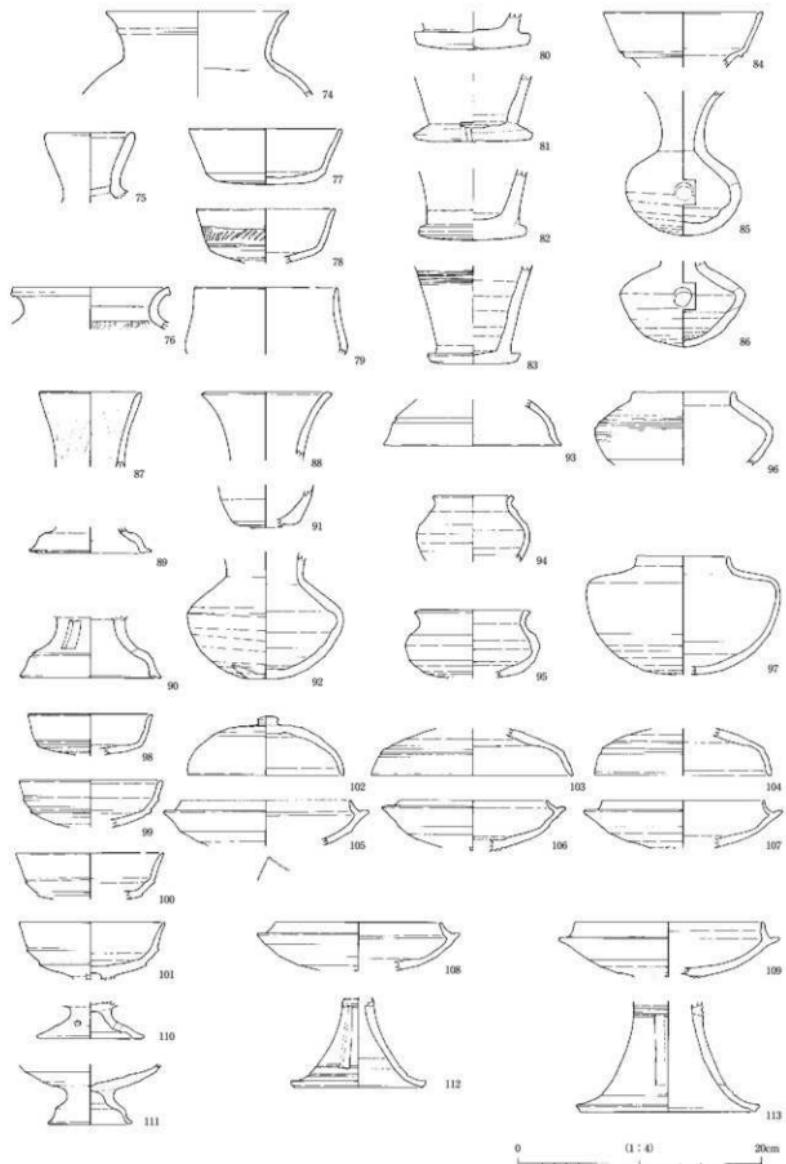


図276 6N・6Oグリッド包含層(3層)出土遺物実測図(3)

ていたものが、後の段階に遊離して包含層第3層に混入した可能性が高いものとみなされる。

なお、74と117は、形態や波状紋の様相、断面紫灰色を呈する焼成法などから類推して初期須恵器と考えられるため、掘立柱建物群などが形成される段階以前の古墳時代中期に帰属するものである。

土師器は図278・279に45点を示した。器種には図278-119の小形高杯、120の直口壺、121から123の捏鉢と仮称する製品、そして、124の口縁が斜めとなり梢円形を呈する器種不明のものがある。

そして、125から127はG、128から136は暗文が明瞭に観察される杯C、137から139は高杯Cと

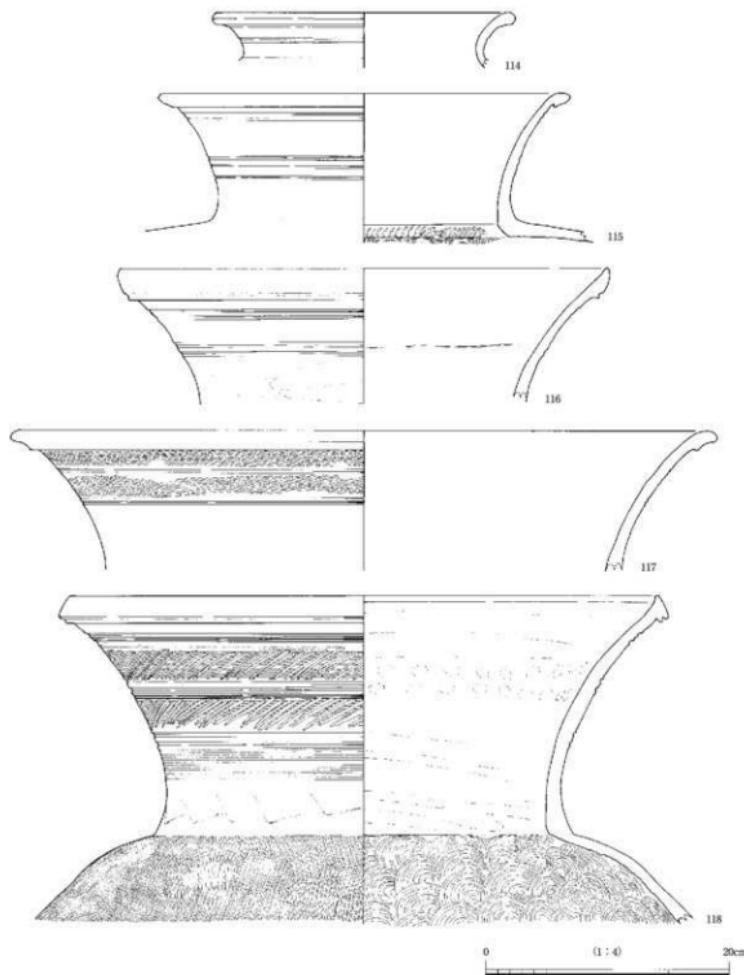


図277 6N・6Oグリッド包含（3層）出土遺物実測図（4）

それらの脚、140から144は皿Aで、施される暗文にはそれぞれ差異がみられる。

つづいて、145・146は鉢B、147・148は鉢A、155から161は壺Aで、外面調整にはハケが用いられる傾向が強い。162は生駒山西麓産の胎土が用いられた羽釜で、今回の調査では若干数を検出したのみで非常に点数が少ない資料である。163は底部以外の部位が遺存する壺である。

このうち、図279-149は当初にも述べた布留式壺の口縁部で、口縁部の内彎度が高くなっていることから、その新しい段階に位置づけられるものである。

150は底部外面が輪台状を呈し、内面に蜘蛛の巣状を呈した断続的なヨコハケが施されることから、弥生時代V様式の壺底部と判明する。今回の調査で唯一検出されたこの段階の資料である。

151は把手で、牛角状を呈していることや、上面に切り込みが入れられるという特徴的な要素から韓式系土器の壺と判明する。また、152から154は格子目タタキが施されていることや、体部下端に帯状のヘラケズリが施されている点において韓式系土器小形平底鉢の特徴をよく表している。うち、153は底面までに格子目タタキが施されている点において変則的といえる。

なお、周辺の調査区で韓式系土器が比較的まとまって出土した調査としては、南約80mで大阪府教育委員会によって行われた78-7調査区での事例が報告されている。

つづいて、上記の古墳時代中・後期に分類される須恵器や土師器などを除外し、最も新しい段階の資料が有する諸様相から時期を推定してみたい。

この中で、まず、注目されるのは杯H、中でも45・46・66の身のように受部の径が9cm前後にまで矮小化し、底部も回転ヘラ切り放ちのままその後の調整が一切施されないという、同形態における型式変化の極相を示す資料が含まれているという点である。

これに対し、杯Gは、それの占める比率が高くはなっているが、受部や口縁部の径が9cm前後を測り、かえりが明瞭に作出される資料を中心とし、また、遺存している資料をみる限りでは、つまみの突出度も高く、天井部が平坦となるものや、器形の偏平化したものが少ないと、受部や口縁部の法量が15cmに達する大形品が、24の1点のみしか含まれていないことをその特徴として上げられる。

また、杯Bも2点出土してはいるが、28は、高台の貼付される位置が、底部と体部の屈曲部附近にまで近接し、すでに飛鳥Vから平城段階に盛行する器形に形態的変容を遂げているため、混入品の可能性が高い。したがって、これを除外すると27の1点のみとなり、たとえこれを最も古く位置づけたとしても、その出現期にまでしか遡らすことができない。

そして、土師器をみた場合には、C類が3形態として明確に分類されること、皿の内面に施される暗文に2段放射線を中心とする各種様式が混用されていることに注目されよう。

よってこれらの土器は、飛鳥II-2段階を中心とし、そのIII段階の一部までを含むものとみなされる。なお、これは最も新しい段階の資料を評価づけた場合での編年感であり、包含層出土遺物の総体としてみた場合には、これ以前の遺物が含まれているということは言を俟たない。

そして、この所見を周辺遺構出土遺物と比較した場合、土師器については、特にI溝でその傾向が顯著であった煮沸具が少ないという器種構成上の特色や、400溝で出土点数の際立っていた大形の皿が出土する割合が目立つことなどから、漆容器の出土と共に包含される遺物の供給源、すなわち、これらが本来帰属していた遺構が近隣に所在している可能性が高いことを暗示しているものと考えられ、また、これを逆説的に解釈するならば、それらが帰属する時期よりあまり遊離した状態でない環境の下で形成された包含層ととらえることも可能である。

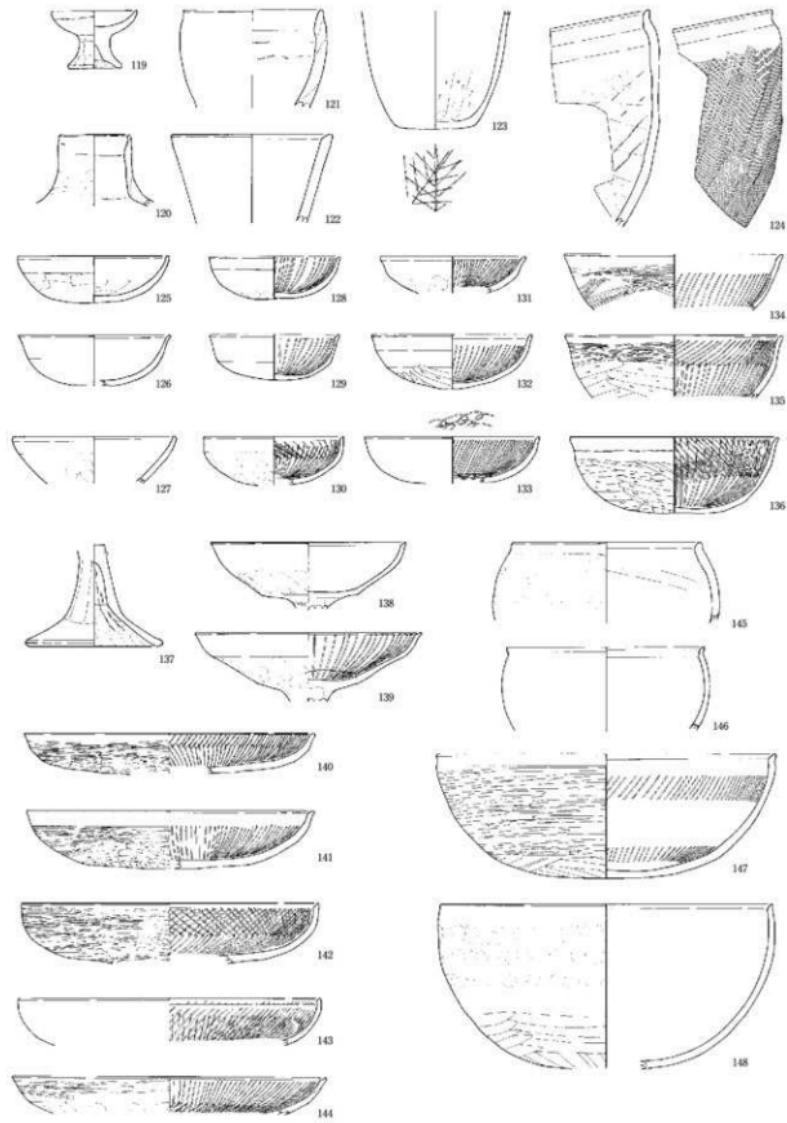


図278 6N・6Oグリッド包含層(3層)出土遺物実測図(5)

0 (1:4) 20cm

これが正鶴を得たものであるならば、段差部下位は飛鳥Ⅲ段階までには平坦な状態となっていたことと、これ以降の遺物が極端に少ないとや、逆に包含層第2層に当段階までの遺物が混入している割合が少ないとから、後世に大きな擾乱を被っていないと考えられるため、東側を中心として検出された掘立柱建物群をはじめとする多数の遺構が、当該期までに帰属するものであることを証明しているもの



図279 6N・6Oグリッド包含層（3層）出土遺物実測図（6）

と論ずることも許されよう。

つづいて、図280と281には、周辺の環境をうかがうことのできる資料として各種の埴輪を示した。

164は遺存する部位の形状や線刻から類推して、輶形埴輪の肩紐部を表現しているものとみられる。

165は板状を呈した破片で、その形状や線刻の様相が縫取りを表現しているものとみなされことから盾形埴輪になるものと考えられる。

166は板状の湾曲した破片で、表面には円形、側面には長方形の刺突が観察されるため、何らかの形象埴輪と考えられるが、小片のため不明である。

167は円筒部に据広がりの粘土板を段状に貼付し、その部分に格子状の線刻を加えていることから、人物や武人形埴輪の帶紐、または、甲冑形埴輪の帶紐から草摺部分を表現しているものと考えられる。

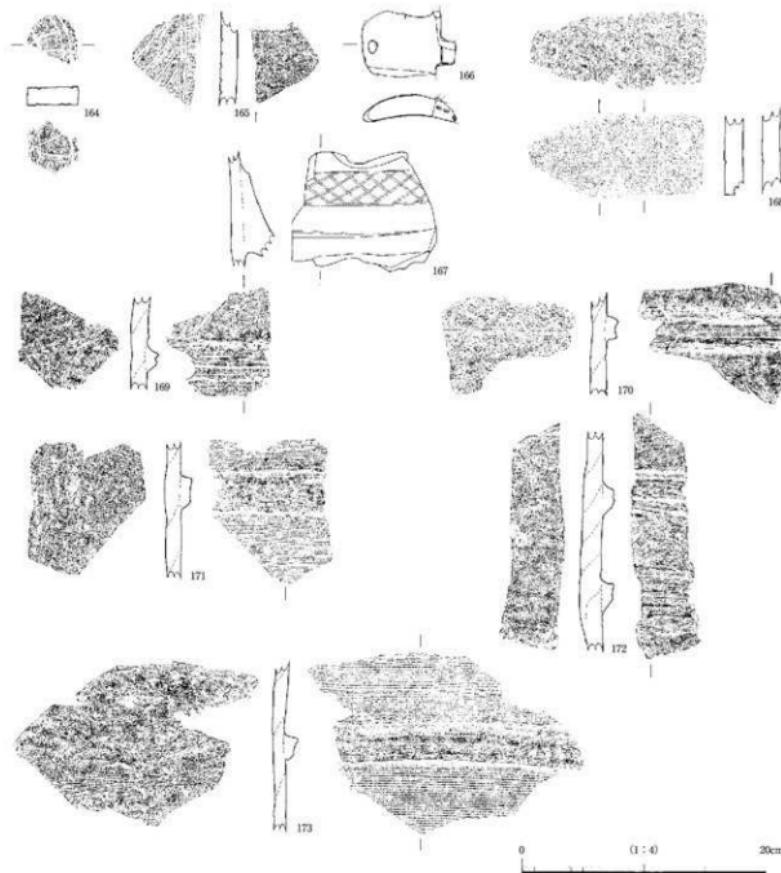


図280 6N・6Oグリッド包含層(3層)出土遺物実測図(7)

168は板状の部位に縦横の簡素な線刻を施している破片で、その様相から、家形埴輪の壇面に柱や窓を表現している、あるいは盾の縫取りを線刻で表しているものとも推定される。

169から173は円筒埴輪である。169はナナメハケの観察される無黒班の製品で、外面には斜め方向に加えられたヘラ記号が断片的に遺存している。

170は細密な横方向のハケ観察される無黒班焼成のもので、外面下端には二条の平行線を斜位に入れヘラ記号としている。

171と173は、B種ヨコハケを施した窯窓焼成の製品で、須恵質の硬質な焼き上がりとなっている。

172は二次調整に単位の長いヨコハケを施し、無黒班焼成とされた製品で、表面に無作為の刺突を加

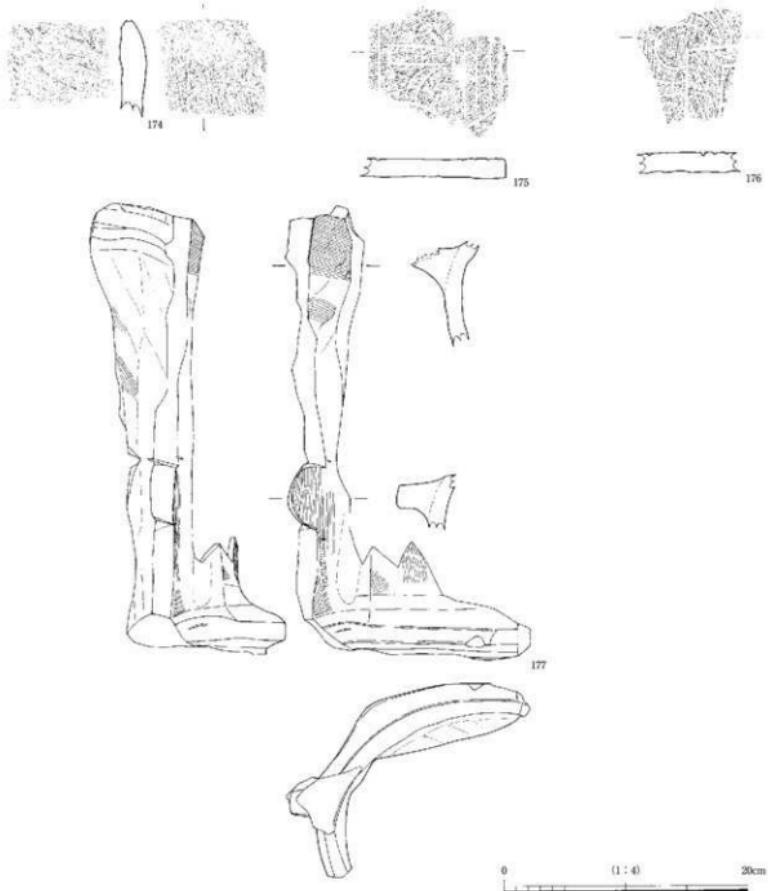


図281 6N・6Oグリッド包含層(3層)出土遺物実測図(8)

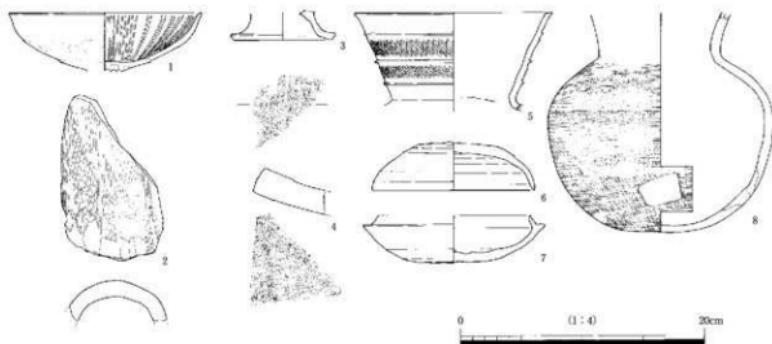


図282 6N・60グリッド包含層(4・5層)出土遺物実測図

えている点において異質といえる。これらの円筒埴輪は、調整などの諸相から、169のみが古墳時代後期にまで下がる要素を持っている。

図281には焼成や調整技法などの諸様相から同一個体と思われる輻形埴輪をまとめて図示した。断片的とはなっているが、旧態を推察することは可能で、このうち、174については、400溝出土遺物として図193-190にすでに報告したものを再録した。

形態は、基本的には梢円形を呈する筒状部に鱗状をなした背板を貼付するもので、矢筒部の下端を底状の突帯で表現し、側縁には半円形を呈した立体的な装飾も付加されている。これ以外の表現や装飾法はすべて線描とされ、その手法により鐵、背負紐を描出すると共に、鱗の周縁に施される装飾を直張紋で表現している。焼成は無黒斑で、硬質に焼き上げられている。これらの特徴を持っていることから、時期については、5世紀後半階に位置づけられる。

第4層出土遺物（図282-1、2）

谷状地形の埋積土から出土した少量の遺物のうち2点を抽出し図化した。1は土師器高杯の杯部のみが遺存する破片で、その形態や暗文の様相から、飛鳥時代の高杯Cと考えられる。2は形象埴輪の破片で、筒形を呈するとみられることや、調整技法などから類推して、動物形埴輪の脚部である可能性が高い。これらによって、この土層が飛鳥時代以降に堆積したことを知ることができる。

第5層出土遺物（図282-3～8）

4層より下位に堆積する谷状地形の埋積土から出土した微量の遺物の中から6点を図示した。3は土師器の皿など大形器種に付随する脚部である。4は平瓦の破片で、表面には模骨痕を伴う布目压痕が観察され、裏面の最終調整には丁寧なナデが施されている。

5は須恵器の直口壺で、その形態や波状紋の描出法、そして焼成法などの諸相からみて、古墳時代中期の初期須恵器と呼称されるものの中でも古い段階に位置づけられる。

6と7はそれぞれ杯Hの蓋と身である。その法量や形態から飛鳥I-1段階に相当するものとみなされる。そして、この時期が調査区内の遺構群が飛躍的に増加はじめる嚆矢の段階であるもある。

8は口縁部の欠損する須恵器の壺である。破片が広域に分散した状態で検出されたが、接合の結果、図示するような状態までに復原することができた。体部下半には焼成後、外面から加熱することによって形成された穿孔が観察されることから、いわゆる供献土器とされたとみなされる。

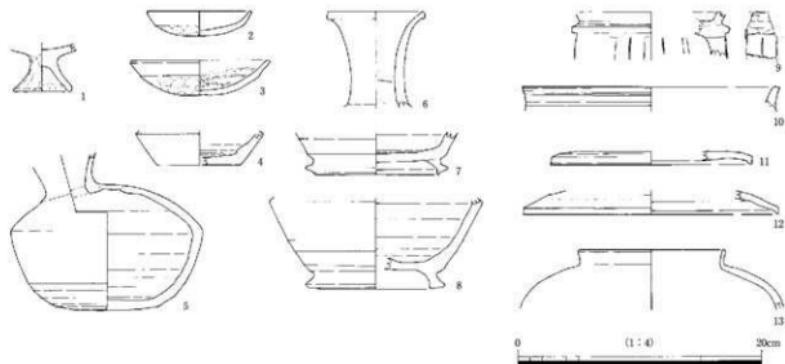


図283 7N・7Oグリッド包含層（2層）出土遺物実測図

7N・7Oグリッド包含層出土遺物（図283・284）

第2層出土遺物（図283、図版86-6、8~10）

飛鳥時代から中世にかけての遺物12点の図と写真4点を掲載した。図283-1は土師器の小形高杯、2と3は瓦器で、器形は2が小皿、3が碗である。

4から12は須恵器である。4と5は平盤で形態に大小の差がみられる。6から8は長頸壺の口縁部や底部の破片である。9と10は陶瓶で、前者は小片となってはいるが、長方形の透かしと、縦位の線刻を交互に配している部位が遺存していることから腹足円面鏡に復原される。後者については外堤部分のみが遺存する破片となっているため、詳細については不明である。つづいて、11は杯B蓋、13は薬壺形を呈することから壺Aに分類される。

これらの遺物は1と5が飛鳥時代、4・6から8および、11から12が8世紀後半、3が13世紀末葉から14世紀初頭に位置づけられる。なお、14世紀代のものには、図版86-10の龍泉窯系青磁杯もある。

そして、図版86には前述のもの以外に6・8・9の須恵器3点を掲載した。これらは、法量や形態から7世紀代の杯類と推定されるが、陶邑産の須恵器とは胎土が大きく異なり、また、中心にまで丁寧な回転ハラケズリが施されているため一見杯Gの蓋とも見紛う。しかし、つまみが付された痕跡やこれの貼付に伴う回転ナダが観察できることからそれとなる可能性は否定される。さらに、ケズリの手法は、連続するものではなく、底部の中心附近のみを別に分けて水平に削り出すという断続的な2工程を経ている。このような作出法を探る事例は陶邑では寡聞にして知れないため、他地域での類例を探究した結果、「かえり付杯蓋」と同様、静岡県湖西窯跡の須恵器杯口で普遍的に用いられている手法であることが判明し、資料を実見して頂いた結果、酷似しているとの所見を得た。特異なつまみを持つ資料は湖西窯跡でも異質であるが、このように普遍にみられる器種が出土したことは重視される。

第3層出土遺物（図284、図版86-7）

飛鳥時代以前の遺物を中心とするが、この地区が後世大きく地形を変更され、局的に包含層が薄くなったことに起因してか、図284-24のような8世紀後半の有段式丸瓦、さらには、図版86-7のような17世紀初頭頃に位置づけられる初期の唐津焼も混在している。

これらのうち、図284-1から16までは須恵器、17から22は土師器、23は埴輪である。須恵器のうち

1は焼成や形態からみて初源期のものとみなされる。2と3は杯Gの蓋で、形状から双方とも飛鳥Ⅲ段階に位置づけられるが、後者の方がより新しい傾向を持つ。4と5は須恵器杯口蓋で、前者は飛鳥時代の前葉頃、後者はその初頭に位置づけられる。6から8は同器種の身で、法量や形態からみて6はその最終末である飛鳥Ⅲ段階に、6と7はその前葉とみなされる。

9と10は陶硯である。9は研面しか遺存していないため詳細を知り得ないが、10については透かしの一部が遺存し、その形状が横広の四辺形ともみられることから、飛鳥時代の所産となる可能性が高い。

11と12は平瓶である。形態に差異はみられるが、双方とも飛鳥時代の範疇でとらえられる。13と14は壺の口縁部と体部である。うち、13は肥大化している点で14より後出的な要素を持つ。15と16は短頸壺で、15は灰白色で緻密な胎土を持つ点で異質である。今回の調査で同様のものが数点みられた。

17から22は土師器である。器種には17から18のそれぞれ法量差を持つ3点の杯C、20のような高杯のそれと思われる脚部、21の小形の壺A、22のような今回捏鉢と仮称した製品がみられる。

23はナナメハケが施された無黒班焼成の円筒埴輪で、外面には弓状をなすヘラ記号が施されている。

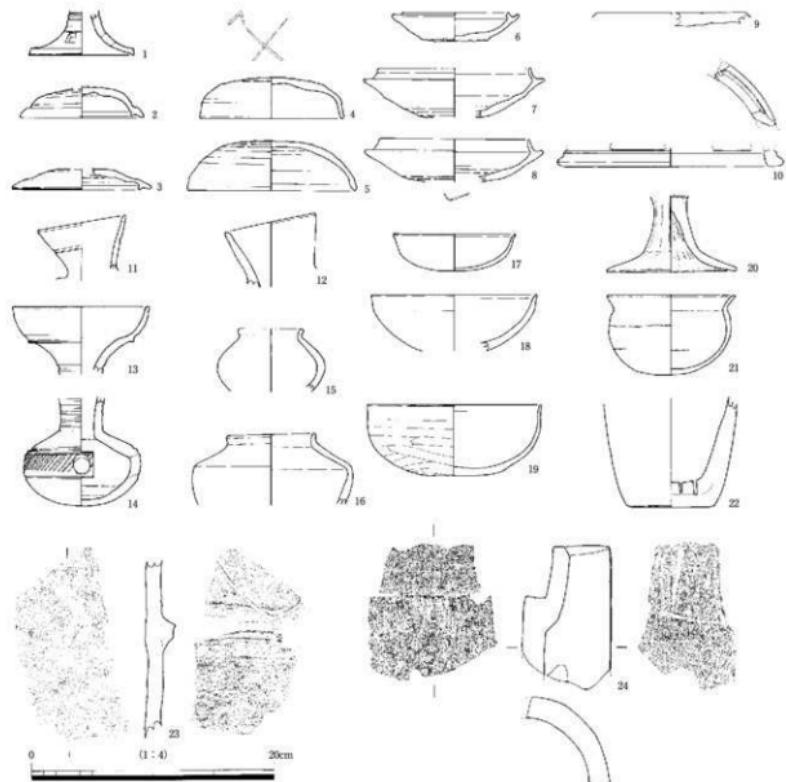


図284 7N・7Oグリッド包含層（3層）出土遺物実測図

第V章 総 括

以上、今回のはざみ山遺跡の調査で得られた調査成果について述べてきた。検出された遺構や遺物の主たるものは飛鳥時代のものであったが、それ以外にも旧石器時代から中世にわたるあまたの知見が得られた。これらについて今一度、古い時代から総評を行い調査の総括としたい。

まず、旧石器時代では、周辺の調査でその後期段階に相当する多数の石器や遺構が検出されているため、これの存在を予測して確認に努めた。その結果、ナイフ形石器や、石核が僅かながら得られたが、すべてが後世の包含層などに混入した状態であった。ナイフ形石器は、サスカイトの縦長剥片を素材とし、背部の打点を一方向から除去する点で国府型ナイフ形石器に類似した技法が用いられているが、これと比較して小形であることや、瀬戸内技法に通有的な剥片採取段階の打点を山形に調整するという規範を逸脱するものがあることから、その一群の中でも新しい段階に位置づけられる。

つづく縄文時代では、遺構や土器は検出されなかったが、基盤層よりサスカイトの縦長剥片と石核4点が出土し、これ以外にも、後世の包含層から有茎尖頭器や石鏃、本来の帰属時期を明確にはできない叩石や凹石が出土した。4点のサスカイトについては、基盤層を構成する黄灰色粘質土から出土したため、縦横無尽に遺構面を破壊していた擾乱孔を下層確認トレンチの代用として活用し、でき得る限り段丘疊層まで掘削を行って調査に遺漏のないよう努めたが、これら以外は検出できなかった。また、それらの中に、縦位の状態で埋没していた剥片が存在したことから、この層自体の堆積状況にも疑問点が残るため、縄文時代の遺構が検出される可能性については慎重とならざるを得ない状況であった。

そして、弥生時代では、風化の状態からこの時代に帰属されると思われるサスカイトの剥片や、V様式の甕底部片1点が出土したが、いずれも後世の包含層からのもので、量も非常に少ないため、この事実のみを以って、弥生時代に人間の活動があったとみなすことはできないと考えられる。

さらに、古墳時代では、津堂城山古墳に樹立されるような蓋形埴輪が飛鳥時代の924溝から出土したもの、これ以外に古墳時代前中期から中期初頭の資料は確認されなかった。中期段階では、調査区東南部の調査区際の開析谷内に、945・947・1059井戸の井戸が近接して開鑿されていた。これらはいずれも素掘りで、出土した土師器からみて須恵器出現前後段階の時期に比定され、住居など生活関連遺構こそ検出されなかったが、ヒトの活動があった証左として貴重な成果が得られた。そして、散発的に出土した初期須恵器や韓式系土器も、本来はこの段階の遺構や包含層に伴っていたと考えられる。なお、後世の包含層や遺構内より、臼玉1点をはじめ、この段階以後後期にかけての各種埴輪が普遍的に出土することも、古市古墳群内に位置する当調査区の立地的環境を如実に示す様相といえる。

そして、古墳時代後期末葉から飛鳥時代にかけては、非常に活発な活動がみられるようになる。その活動により形成された遺構群は、遺構相互の重複関係や出土する遺物などからみて、最低5時期以上にわたって形成されつけたものと考えられ、以下に代表的なものを示しそれらをみていく。

その1つは、3-1溝やそれから分岐する溝群、そして、408・1503・1800溝をはじめ、調査区内の地形に沿うようにして平行あるいは直交する溝群と掘立柱建物群からなる時期である。

建物群は調査区南西部に群在する建物1から4と、調査区東半中央部に所在する建物70から73・75・86の一群とに大きく分けられ、建物8や65や、1314・1502の両竪穴建物もこの一群に属する。

これらは、その重複関係などからさらに2時期に細分され、その時期については、出土遺物などから

みてTK43型式段階から飛鳥I - 2段階頃に位置づけられる。

2つ目は調査区中央から南半にかけて検出された建物38から40・48の時期である。これらは柱筋を描えた総柱建物と大形建物からなり、すべてが焼失している点でも共時性がうかがえる。また、これと柱筋を描えて建物37が所在しているため、これも同時期の可能性が高い。そして、北側には、ほぼ同時期の遺物を伴う総柱建物の建物23が所在し、さらに、これに柱筋を描えるようにして建物5・6が東西に並んでいる。そして、この南東には先の建物48に類似する平面形態を持つ建物49も存在する。

これら9棟の建物は、飛鳥I後半段階を中心とする段階のもので、一体として「コ」の字形の建物配列をなしていることから、同時性が非常に高いものとみなされる。また、出土する遺物から西側で検出された26・1060井戸や1溝がこれらとほぼ同時期であり、後者については、その位置や轍状の細い溝が検出されたことから、これらの北側を区画する目的や物資移送経路として供されたとも考えられ、反対の南側に設けられた柵列2は、総柱建物を画するものであることも考えられる。なお、建物46は埋土内に焼土が混じっているため、これらの建物が焼失した後、程なくして構築されたとも考えられる。

3つ目は建物23・34・43・45・51・68の6棟を中心とする時期である。これらは狭長な建物で構成されることを特徴としており、その時期は溝400との重複関係より飛鳥II - 2段階以前の建物43・45と、飛鳥III段階前後の建物27・35・51とに細分される。あるいは溝の開鑿を契機として建て替えられた可能性も考えられよう。400溝から出土した大量の遺物の大半はこの段階後期の遺構群から廃棄されたものと考えられる。なお、405井戸は後期の段階に伴う可能性が高い。

4つ目は調査区南部で検出された四面廂を伴う建物25を中心とする段階である。方向軸からみて、これに伴うものとして、建物では29・30・33があり、建物52もその可能性がある。また、柵列1や404溝もこれと一連のものであろう。そして、北側には1890堅穴建物が構築される。これらの時期については、出土した土器などから飛鳥III段階とみなされるが、少なくとも3つ目の後期段階よりは新しいものである。なお、この段階では400溝下層はほぼ埋没し、その窪みに上層が堆積しつつある段階であることが、1890堅穴建物と400溝から出土した陶硯が合致したことによって証明される。

5つ目の段階は調査区北西部と南西部の2ヶ所に分散して遺構群が形成される段階である。北東部の一群は、142井戸が開鑿される前後によりさらに二分され、それより以前に建物18が構築されていることは確かだが、それ以降のものについては奈良時代のものが多いため確定できない。南西部の建物群については建物24・57・58などがみられるが、削平のため詳細は明らかにできない。そして、これらの時期については、142井戸から出土した遺物を基準として飛鳥V段階の前後を想定している。

遺構と共に、遺物にも注目すべきものが多くある。その1つは先に記した142井戸の枠材に転用された準構造船の船底部である。船を内陸部のこのような場所で用いるのは異質とも思えるが、西側は古市大溝渠の東側幹線が位置し、これを介せばその移動は比較的たやすい。しかし、それは、西側幹線と一本に繋がっていることや、高鷲中之島遺跡の北方に所在する段差を越えることが前提であり、これらを無批判とすることは避けて通れない推論である。

つづいて、405井戸から飛鳥III段階の土器と共に、斎弔や船形木製品という祭祀具が出土したことが上げられる。これらの祭祀具は中央に準拠する内容を持っていることから、ここに居を構えた集団が、早い段階からこのような祭祀形態を導入している点で注目される。

また、多数の陶硯が出土したことでも重視される。中でも堅穴建物から一括で出土した6点もの陶硯片は、このような事例のない現段階において重要な資料を提示すると共に、獸脚円面硯という、当時、最

も格式が高く都城など限られた場所でしか出土例のないものまでを含んでいることで特異性が際立つ。

そして、須恵器では静岡県湖西古窯跡の製品と思われる杯類の出土が注視される。これを認識する契機となったのは、つまみが異様に大きな蓋であったが、整理途上の段階で杯身にもそれとみなされる製品が含まれていることが判明した。これらについては小片であることなどの事由により理化学的分析を差し控えたが、都城以外で出土することは極めて珍しく、今後追及しなければならない課題となった。

さらに、これと共に各地から搬入された漆容器の存在にも注意が注がれる。これが出土した事実は各地から集積された貢納物の一部がこの地にもたらされたことを示しており、その経路が問題となろう。

加えて、土製仮面が2点出土したことでも特筆される。当該期の類例としては最古級で、その1つは植毛を加えれば髭の密生した状態となり、ソグド人を想起させる例も含まれていた。これらは、「日本書紀」の欽明十五（554）年、百濟から楽人4名が来日した、また、推古二十（612）年、百濟人味摩之が吳樂舞を広めたという記載を具体的に証左するものとしてその持つ意味は非常に大きい。

以上の様相から、遺物の内容は、從来から指摘されてきた官衙とみなす見解に傾こう。しかしながら、検出された遺構群は、大形の四面廂建物を含むとはいえそれは南北棟で、東西棟建物を中心として南面に開く「コ」の字形の配置とはなっていない。また、倉庫群を伴っているものの、床面積はほとんどが25m²以下であることから、正倉としては小規模な感は否めない。そして、多数の陶磚が出土してはいるが、墨書きを持つ遺物はみられないというように、遺物の内容が國際的・中央的であるにも係わらず、建物の配置や倉庫の規模が豪族居宅に近いという状況から、その候補としては周辺に盤踞した渡来系氏族の可能性が高いとの意見に賛意を表したい。ただし、遺物の内容から工房を伴っていたとみられること、豪族居宅の建物や倉を評価とする場合もあることから、これを兼ねていた可能性は否定しない。

以後、奈良時代を迎えると、調査区北西部に遺構が集中するようになる。この時期の建物としては、土器が埋納されていたため廃絶時期が確定された建物22をはじめ、これに後出する建物21、そして、これらとほぼ同時期とみなされる建物17・19・20・24が確認される。そして、これらの建物の西側に所在する144溝や148・149溝もこの時代に包括され、これらの中には互いに重複するものや、時期差のあるものが存在するため、より詳細な時期については平城Ⅱ段階からV段階までの間と考えておきたい。

なお、当該期の遺物に伴って蹄脚円面鏡の破片も出土した。復原径29cmに達する大形品で、その大きさが權威を象徴するという考えに拠るならば、この時期にも周辺に相当な力を持った人物が存在していたことを示しているものといえ、剛廟寺の檀越集團も視野に入れなければならない。

平安時代では、前期においては散発的ではあるが、調査区北部に建物などの遺構が形成されている。建物80・81や3004土坑などがそれで、出土する土器からみて10世紀代を中心とするものであろう。後期では、建物や井戸などが検出され、前者には非常に大形の建物78をはじめとして、建物82・85が北東部において検出され、調査区東半部の開析谷内には、415・1805・1910・2151井戸が開鑿されている。井戸の中には曲物を転用して枠材とするものもみられ、また、この時期と考えられる欄列3・4や、瓦器碗を埋納した1316ピットも検出され、当該期の遺構分布範囲が広いことを示している。

鎌倉時代以降には、条里地割の坪境を画すると思われる7001溝や1506溝を検出した。包含層第2層の分布状況から、開析谷の東肩を直線的に変更したのもこの時期とみなされ、附近が居住地から農耕地へと変貌を遂げた状況が看取される。これ以降、昭和30年頃までこの景観は大きな変化がなかったが、その後、宅地開発の波が押し寄せ、現在みられるような状況を呈すこととなった。

以上、非常に冗長となつたが、今回のはざみ山遺跡の発掘調査で得られた成果の総括を終えたい。

- 観 察 表 -

凡 例

- ・法量の単位はセンチメートルである。
- ・法量の（ ）は復原値を表す。
- ・同じく〔 〕は残存値を表す。
- ・輥轆の回転方向は上から見た場合を表す。
- ・重量はグラムである。
- ・木器の法量は l = 長さ、 w = 幅、 h = 厚さを表す。
- ・空欄は上位に記載された項目と同一であることを表す。

表10 出土遺物観察表 [1]

番号	地区	遺物番号	種類	層位	備考	種別	器種	法 葉		色調	特徴
								(1) #	(2) #		
13 -1	70-3e	50	柱穴		建物2 柱孔	須恵器	杯身	(11.9)	(2.3)	N-79白	ヘラ記号
2	70-4d-4e	73	柱穴		建物2	須恵器	杯身	11.4	(2.6)	N-59白	
3						上部器	杯	(15.8)	(4.6)	SYR5-4C-325-6-小筒	
4	70-3d	49	柱穴		建物2	須恵器	瓶又は舞臺高杯	(9.7)	(4.2)	7.5V6-19A	右回り
5	70-4d	43	柱穴		建物1	須恵器	高杯		(3.7)	N-69白	脚径(12.0)
6	70-4d	33	柱穴		建物1	須恵器	壺形			10Y3S-1脚灰	須恵質
15 -1	70-3d-3e	66	柱穴		建物3	須恵器	杯身	(10.1)	(2.0)	N-89白	
2	70-3d	53	柱穴		建物3	須恵器	杯身	(11.3)	(2.5)	5M4-1脚灰	
3	70-3d	55	柱穴		建物3	須恵器	杯身	(10.7)	(2.5)	5M4-1脚青灰	ヘラ記号
4	70-3d	56	柱穴		建物3	須恵器	瓶	(12.0)	(5.6)	5M5-1脚灰	右回り
5						須恵器	瓶	(12.8)	(2.5)	5P9D-1脚青灰	右回り
6						須恵器	瓶	(15.2)	(2.8)	7.5V6-19A	右回り
17 -1	73-1	70-2d	69	柱穴	建物4	須恵器	杯身	(13.7)	(3.9)	N-78白	右回り ヘラ記号
2	70-3d	68	柱穴		建物4	粗陶	杯身		(8.3)	SYR6-8B	底径4.8
18 -1	70-3e	108	柱穴		建物5	須恵器	杯身	(13.7)	(3.5)	N-69白	右回り
25 -1	78-7b	153	柱穴		建物14	須恵器	杯身	(15.2)	(2.0)	N-69白	右回り
27 -1	76-6	78g	柱穴		建物16	須恵器	壺形	8.6	2.2	N-69白	右回り ヘラ記号
2	78-7g	224	柱穴		建物16	土師器	壺形	(20.9)	(3.2)	SYR6-6B	
28 -1	78-7f	128	柱穴		建物17	土師器	壺形	(14.4)	(4.9)	SYR6-6B	
30 -1	78-7-708	209	柱穴		建物19	土師器	杯	(12.6)	(3.1)	2.5V6-6盤	
31 -1	78-7f	217	柱穴		建物20	須恵器	杯身	(15.7)	(2.8)	N-78白	右回り
2	78-7f	236	柱穴		建物20	土師器	壺形	(19.6)	(7.0)	SYR6-29白	
33 -1	78-7e	209	柱穴		建物21	須恵器	杯身	(15.3)	(1.8)	N-78白	右回り
2						須恵器	杯身	(14.1)	4.0	N-89白	高台傾10.1
3						須恵器	杯身	(15.5)	(2.2)	N-78白	右回り
4						土師器	鉢	(26.5)	(5.6)	7.5V6-6盤	
5	78-8e	213	柱穴		建物21	須恵器	杯身	(14.2)	(3.8)	N-78白	右回り
6	78-7e	210	柱穴		建物21	須恵器	杯身	(12.3)	(4.0)	5P9D-1脚青灰	右回り
7						土師器	杯	(17.6)	(2.9)	10Y8S-19E	
34 -1	78-8f	195	柱穴		建物22	須恵器	杯身	(16.1)	(2.0)	N-78白	
2	90-5					土師器	杯身	11.2	11.2	2.5V6-6盤	
36 -4	70-3b	135	柱穴		建物23	須恵器	杯身	(11.5)	(3.6)	5P9D-1脚青灰	右回り
2	70-3c	104	柱穴		建物23	粗陶	杯身	(11.6)	(3.9)	10M6G-1脚灰	
39 -1	60-9d	446	柱穴		建物25	須恵器	杯身	(9.2)	(1.6)	N-59白	
40 -4	60-10h	452	柱穴		建物26	粗陶	須恵器	(12.8)	3.9	N-69白	右回り ヘラ起号
2	60-9h	459	柱穴		建物26	須恵器	杯身	(10.8)	(2.1)	N-59白	
42 -4	60-8i	483	柱穴		建物27	須恵器	壺形	(11.8)	3.6	N-69白	右回り ヘラ記号
2	60-7g	769	柱穴		建物27	須恵器	壺形	(14.4)	(1.0)	N-49白	
3	60-9h	621	柱穴		建物27	土師器	杯	(9.9)	(3.1)	2.5V6-8B-小筒	
4	60-8h	1383	柱穴		建物27後段	土師器	杯	(13.0)	(4.1)	SYR4-32-5-2-小筒	
5	60-9h	757	柱穴		建物27	土師器	瓶	(21.9)	(11.1)	2.5Y6S-6H-6周	
6						土師器	瓶	(26.8)	(13.1)	SYR6-6B	
46 -1	60-8h	466	柱穴		建物29	須恵器	杯身	9.1	2.8	N-59白	右回り
2	60-8h	469	柱穴		建物29	須恵器	杯身	(9.6)	(2.3)	N-59白	右回り
3						土師器	杯	(10.0)	(2.4)	10Y8S-1脚灰	
4	60-8h	466	柱穴		建物29	土師器	杯	(10.1)	(3.8)	2.5Y5-8H-6周	
5	60-8h	474	柱穴		建物29	土師器	鉢	(29.8)	(5.7)	SYR4-6-小筒	
6	60-8g	496	柱穴		建物30	須恵器	杯身	(10.1)	(1.9)	N-59白	右回り
7	60-8h	493	柱穴		建物30	須恵器	高臺高杯	(9.1)	(3.1)	N-69白	クロコ左回り
8	60-8h	494	柱穴		建物30	須恵器	杯	(11.8)	(2.5)	N-59白	右回り
9	87-2	60-8h	495	柱穴	建物30	土師器	杯	9.9	3.6	2.5Y4-8-小筒	
10	60-8h	489	柱穴		建物30	土師器	杯	(12.9)	(4.7)	SYR6-41-5-1-小筒	
11	60-8h	496	柱穴		建物30	土師器	二ニチュア	(6.6)	3.2	SYR5-5H-6周	
12						土師器	高杯	(15.4)	(3.4)	7.5V6-4-1-5-1-小筒	
47 -4	60-8g	656	柱穴		建物31	須恵器	杯身	(9.5)	(2.2)	N-49白	右回り
2	60-9g	624	柱穴		建物31	土師器	杯身	(15.6)	(3.6)	SYR4-6H-6周	
3	87-7	60-8h	780	柱穴	建物31	土師器	杯	7.8	4.8	7.5V6-1脚灰	
4						土師器	壺形	(12.4)	(6.1)	10Y8S-6周	
30 -1	60-8g	651	柱穴		建物33	須恵器	杯身	(11.4)	(3.1)	SP9D-1脚青灰	
2	60-9g	577	柱穴		建物33	須恵器	杯身	(12.2)	(3.8)	N-78白	
3	60-9g	422	柱穴		建物33	須恵器	杯身	(11.4)	(2.4)	N-59白	右回り
4						須恵器	杯身	(11.8)	(3.5)	N-59白	
5						須恵器	杯身	(11.4)	(4.2)	N-59白	
6						須恵器	杯身	(10.4)	3.5	5P9D-1脚青灰	右回り
7						土師器	高杯	(14.2)	12.8	2.5Y6-8H-6周	
8						土師器	鉢	(14.2)	(1.9)	2.5Y6-8H-6周	
9						土師器	杯	(11.0)	(3.9)	5YR5-6H-6周	
10	60-8g	634	柱穴		建物33	土師器	杯	(12.8)	(6.0)	SYR4-41-5-1-小筒	
11						土師器	杯	(12.8)	(6.0)	2.5Y6-6H-6周	
12						土師器	高杯	(14.8)	(4.4)	2.5Y6-6H-6周	
13	60-9g	584	柱穴		建物34	須恵器	高臺	(7.6)	8.4	N-49白	
14	60-9g	565	柱穴		建物34	須恵器	杯身	(11.8)	(2.6)	SP9D-1脚青灰	
15	60-9g	564	柱穴		建物34	須恵器	杯身	(14.4)	(2.4)	2.5Y6-6H-6周	
16	60-9g	523	柱穴		建物34	須恵器	高杯	(8.0)	2.5Y6-8H-6周		
51 -1	60-9g	828	柱穴		建物34	須恵器	高臺	7.6	8.4	N-49白	
2	60-9g	529	柱穴		建物34	須恵器	杯身	(11.8)	(2.6)	SP9D-1脚青灰	
3	60-9g	646	柱穴		建物34	土師器	杯	(11.6)	(3.3)	7.5V6-7H-6周	
4						土師器	杯	(13.8)	(4.8)	10Y7S-3C-5-1-小筒+黃斑	
57 -1	60-10e	956	柱穴		建物38	須恵器	杯身	(10.4)	(3.0)	N-59白	

表11 出土遺物観察表(2)

番号	地名	遺物 番号	種類 種類	部位	備考	種別	器種	法 番		色調	特徴	
								上位	下位			
57 -2	60 -10e	983	柱穴		建物39 柱頭	須志部	舟身	(9.8) (3.3)	5PB5-1青灰	右回り ヘラ記号		
3	60 -10e	981	柱穴		建物39	須志部	頭	(13.6) (3.5)	5Y2-1墨			
59 -4	60 -10f	1017	柱穴		建物40	須志部	舟身	(11.6) (2.5)	N - 6R			
2 97 -2					建物40 柱頭	須志部	頭	23.2 (27.3)	10YR7-21:5-5:黄橙			
61 -1	60 -9e	996	柱穴		建物42	須志部	舟身	(12.6) (3.5)	5PB4-1船青灰	右回り		
64 -1	60 -7f	1114	柱穴		建物45	須志部	舟身	(12.9) (3.1)	N - 6R	右回り		
2	60 -7e	1109	柱穴		建物45	須志部	高杯	(3.0) N - 6R		脚注(7.0)		
65 -1	60 -8f	1345	柱穴		建物46	須志部	舟身	(11.9) (2.7)	7.5Y2-7:6橙			
2	60 -8e	1340	柱穴		建物46	須志部	舟身	(3.4) (3.7)	5PB6-1青灰	脚注(9.6)		
3 84 -2	60 -8e	1330	柱穴		建物46	須志部	頭	(6.2) (5.2)	7.5Y7-1:6白	成形6.2 製付する		
71 -1	60 -10e	1117	柱穴		建物50	須志部	舟身	(8.0) (2.1)	N - 5R	右回り		
2					須志部	高舟垂	頭	(15.6) (3.4)	N - 6R			
3	60 -10b	1521	柱穴		建物50	須志部	舟身	(8.9) (3.3)	7.5YB6-3:5:5:小黒	右回り		
4					上脚部	頭	頭	(32.8) (11.0)	10YR6-29:黄褐			
72 -1	60 -10c	1136	柱穴		建物51	須志部	舟身	7.2 (2.8)	N - 6R	右回り ヘラ記号		
2	60 -10c	1364	柱穴		建物51	須志部	高舟垂	(11.2) (3.8)	N - 30R6	右回り		
74 -3	60 -8e	1280	柱穴		建物53	須志部	舟身	(14.6) (3.7)	5PB4-1船青灰	右回り		
2	60 -8e	1234	柱穴		建物53	須志部	頭	(24.4) (4.8)	N - 6R	右回り		
75 -4	60 -9d	1248	柱穴		建物54	須志部	舟身	(11.8) (4.0)	N - 6R	右回り		
77 -1	60 -9c	1296	柱穴		建物55	須志部	舟身	(13.6) (2.3)	N - 6R	右回り		
2					須志部	高舟垂	頭	(15.8) (2.6)	N - 5R	右回り		
3					須志部	高杯	頭	(15.4) (4.6)	N - 6R	右回り		
4	60 -10c	894	柱穴		建物55	須志部	舟身	(13.0) (3.7)	N - 5R	右回り		
5	60 -9c	1232	柱穴		建物55 柱頭	須志部	高舟垂	(14.8) (4.2)	N - 6R	右回り		
6	60 -9c,10c	1303	柱穴		建物55	須志部	舟身	(12.4) (4.3)	N - 5R	右回り		
79 -4	70 -1j	597	柱穴		建物58	上脚部	頭	(11.8) (1.9)	5YR5-6青馬			
2	70 -1l	703	柱穴		建物58	上脚部	舟身	(10.6) (4.9)	5YR5-14:5-5:歩期			
81 -1	60 -10g	584	柱穴		建物60	須志部	舟身	(8.4) (2.2)	N - 5R			
2	60 -9g	579	柱穴		建物60	須志部	舟身	(12.6) (3.0)	N - 6R	右回り		
3	60 -10g	1378	柱穴		建物60	須志部	舟身	(11.0) (2.3)	5Y6-1:6R			
4	60 -10g	519	柱穴		建物60 上脚部	舟身	頭	(14.4) (3.1)	10YR7-3:1:6-5:黄橙			
5	60 -10g	1380	柱穴		建物60	舟身	舟身	(3.5) (3.5)	2.5Y8-5:6青馬	底付(7.0)		
83 -1	78 -1g	1325	柱穴		建物61	須志部	舟身	(12.5) (2.1)	APB3-1船青灰	右回り		
2	60 -10b	1520	柱穴		建物61	上脚部	舟身	(11.6) (4.2)	5YR4-6:6:黒			
3	78 -1g	1512	柱穴		建物61	上脚部	舟身	(11.6) (4.2)	5YR5-6青馬			
85 -1	78 -2h	1567	柱穴		建物63	須志部	舟身	(10.1) (5.7)	N - 6R	右回り		
87 -1	70 -1a	1593	柱穴		建物65	須志部	舟身	(12.0) (2.2)	5PB4-1船青灰			
93 -1	68 -8j	1915	柱穴		建物71	須志部	舟身	(12.8) (3.5)	N - 6R	右回り ヘラ記号		
95 -1	68 -9c	1862	柱穴		建物73	須志部	無蓋高杯	(12.8) (2.1)	N - 6R			
2	68 -9c	1864	柱穴		建物73	須志部	舟身	(3.5) N - 6R		脚注(17.5)		
101 -1	68 -9f	2027	柱穴		建物78	黑色上蓋	頭	(1.6) (10YR7-3:1:6-5:黄橙)	高台脚(7.0)			
102 -1	68 -8d	1994	柱穴		建物80	黑色上蓋	頭	(1.3) (5YR5-6青馬)	A型 高台脚(7.0)			
106 -1	68 -9b	1813	柱穴		建物86	須志部	舟身	(12.2) (2.6)	N - 30R6			
2	68 -9b	1814	柱穴		建物86	須志部	舟身	(12.6) (3.2)	N - 5R			
3	68 -9b	1815	柱穴		建物86	須志部	舟身	(12.6) (3.4)	2.5Y7-2:6 黃			
4	68 -9a	1811	柱穴		建物86	須志部	舟身	(20.4) (4.1)	N - 6R			
107 -1	68 -9f	1314	壁穴建物		須志部	舟身	舟身	(12.1) (3.7)	5PB4-1船青灰	右回り		
2	68 -10a	1502	壁穴建物		上脚部	高杯	舟身	(17.8) (4.9)	2.5Y8-5:6青馬			
108 -1	68 -10a	1502	壁穴建物		須志部	舟身	舟身	(14.2) (3.4)	N - 6R	右回り		
2					須志部	舟身	舟身	(14.1) (3.6)	N - 5R	右回り		
3					須志部	舟身	舟身	(12.3) (3.6)	2.5Y7-2:6 黃	右回り		
4					上脚部	高杯	舟身	(17.8) (4.8)	5YR4-6:6:黒			
111 -1	68 -10g	1800	壁穴建物		須志部	舟身	舟身	(9.2) (2.7)	5PB7-1青馬			
2					須志部	舟身	舟身	(9.2) (3.1)	5PB5-1青灰			
3					須志部	舟身	舟身	(23.6) (10.8)	5Y6-1R			
4					須志部	頭	頭	(20.6) (7.2)	3Y7-3:6白			
5					上脚部	1ムチュア	頭	(7.4) (3.7)	5YR5-4C-5:5-6:歩期			
6 87 -1					上脚部	舟身	頭	(10.9) (3.5)	10YR7-2:1:6-5:黄橙			
7					上脚部	舟身	頭	(11.8) (3.1)	7.5YB6-3:6青黃			
8					上脚部	舟身	頭	(13.0) (4.1)	10Y4-6:6			
9					上脚部	舟身	舟身	(18.0) (5.0)	5YR7-6:6			
10					上脚部	高杯	舟身	(17.8) (4.8)	2.5Y8-4:6青馬			
11					上脚部	高杯	舟身	(6.0) (5YR4-4C-5:5-6:歩期)				
12					上脚部	高杯	頭	(16.7) (1.0)	7.5YB6-1青			
13					上脚部	頭	頭	(23.8) (3.3)	2.5YB4-6:6:黒			
14					上脚部	頭	頭	(28.2) (13.6)	5YR6-6:6			
15					上脚部	頭	頭	(34.0) (15.9)	5YR4-6:6:黒			
112 -16	63 -2				單輪	円筒			10YR5-3:6:黄			
17	82 -2				須志部	圓筒足圓頭	頭			脚注(16.5)		
18	83 -3				須志部	圓筒足圓頭	頭			研磨(12.0)		
19	4				須志部	圓筒足圓頭	頭			脚注(19.7)		
20	5				須志部	圓筒足圓頭	頭			研磨(15.0) 備前		
21	82 -1				6輪	須志部	圓筒足圓頭	舟身	16.7 (6.9) 5R6-1青灰	脚注(20.7) 研磨(12.7) ヘラ描沈泥		
115 -1	60 -7g	511	柱穴		輪列1	上脚部	舟身	(10.9) (3.6)	5YR6-6:6			
2	60 -7i	502	柱穴		輪列1	上脚部	舟身	(18.8) (5.0)	N - 8R6:6			
3	60 -9e	558	柱穴		輪列2	上脚部	舟身	(12.2) (3.6)	10YR7-3:6:黄			

表12 出土遺物觀察表(3)

番 号	地 区	遺 墓 番号 類別	層 位	備 考	種 別	器 様	法 形		色 調	特 徵
							(1) H	(2) W		
118 -1	70 -50	26 片刃			劍	上加蓋 小形面	(8.0)	(4.4)	10YR8-3浅黃	
2 87 -10	7N -60				劍	上加蓋 扁	11.8	4.1	10YR7/31:5a・黃	
3	70 -50				劍	頭	(13.7)	(5.5)	N -5%	
4 87 -8	70 -50				劍內	上加蓋 扁	9.4	4.1	2.5YR5.6明赤褐	
5 87 -3					劍內	上加蓋 扁	10.2	2.9	5YR4-8a・黃	
6					劍內	上加蓋 扁	(7.2)	(3.7)	5YR6-6a	
7 94 -1					劍內	上加蓋 鋒	(11.2)	8.0	5YR8-3淡棕	
8 103 -1					劍內	上加蓋 鋒	(48.5)	5YR7-6棕		
120 -1 125 -3	7N -60	142 片刃			舟	舟口件上段舟	木製品	舟口件	I = (55.0) w = (28) h = (1.4)	灰
2	125 -1				舟	舟口件上段舟	木製品	舟口件	I = (90.4) w = (34.0) h = (2.2)	灰
3 125 -4					舟	舟口件上段舟	木製品	舟口件	I = (57.0) w = (39.0) h = (2.4)	灰
4 125 -2					舟	舟口件上段舟	木製品	舟口件	I = (89.0) w = (40.0) h = (2.4)	灰
121 -5 123 -1					舟	舟口件下段舟	木製品	舟口件	I = (205.0) w = (85.0) h = (3.5)	灰
122 -6 124 -1					舟	舟口件下段舟	木製品	舟口件	I = (225.5) w = (84.0) h = (12.0)	灰
123 -4					劍	頭	頭	(7.6)	(1.1) N -4%	
2					劍	頭	頭	(1.6)	N -6%	
3					劍	頭	頭	(2.2)	N -6%	
4					劍	頭	頭	(1.9)	10Y7/10a白	高台律(9.8)
5					劍	頭	頭	(2.0)	N -6%	高台律(13.0)
6					劍	頭	頭	(13.4)	(3.5) N -6%	
7					劍	頭	頭	(18.4)	(4.2) N -5%	
8					劍	長指垂	頭	(8.6)	N -7%白	
9					劍	頭	頭	(12.3)	(3.2) 5YR4-31c・5a・青	
10 91 -2					劍	頭	頭	(16.6)	4.1 5YR4-6a・褐	高台律(12.0)
11					劍	頭	頭	(18.8)	(2.0) 5YR5-6明赤褐	
12					劍	頭	頭	(16.4)	(5.8) 7.5YR4-29a褐	
13					劍	頭	頭	(17.4)	10YR7.21:2a・黃	
14					劍	頭	頭	(18.9)	(4.7) 2.5Y8-29a白	
15					劍	頭	頭	(12.8)	(1.6) N -5%	
16					劍	頭	頭	(23.2)	(2.0) 7.5YR4-29a褐	
17					劍	頭	頭	(14.0)	(6.5) 7.5YR5-31:2a・5a・褐	
18					劍	頭	頭	(17.6)	(2.5) 2.5Y6-31c・5a・青	
19 94 -8					劍	頭	頭	(14.0)	12.9 7.5YR2-11褐	
20 95 -4					劍	頭	頭	(17.0)	14.2 10YR3-1明褐	
21					劍	頭	頭	(17.5)	(7.6) 5YR4-29a褐	
22					劍	頭	頭	18.7	(15.3) 10YR2-1黑	
23					劍	頭	頭	(19.4)	(11.2) 2.5Y5-24a灰青	
24 95 -3					劍	頭	頭	(18.4)	18.5 2.5Y6-31:5a・青	
25					劍	頭	頭	(22.4)	(4.5) 10YR6-31:5a・黃	
125 -4 127 -3 60 -7b	405 片刃				木製品	舟口件	I = (254.0) w = (62.5) h = (8.0)		灰	
126 -2 127 -2					木製品	舟口件	I = (256.0) w = (62.5) h = (8.0)		灰	
3 126 -3					木製品	舟口件	I = (260.5) w = (60.0) h = (9.0)		灰	
127 -4 4					木製品	舟口件	I = (265.5) w = (52.0) h = (5.0)		灰	
128 -5 125 -6					木製品	舟口件	I = (35.4) w = (15.1) h = (2.5)		灰	
6 7					木製品	舟口件	I = (42.8) w = (17.7) h = (4.5)		灰	
7 125 -5					木製品	舟口件	I = (33.4) w = (15.0) h = (4.1)		灰	
129 -1 78 -5					下劍	劍內	頭	頭	8.8 (4.0) N -7%白	右側0
2 76 -7					下劍	劍內	頭	頭	10.0 2.9 5Y7/10a白	右側0
3 76 -8					上劍	劍內	頭	(10.2)	3.0 N -7%白	右側0
4 77 -10					下劍	劍內	頭	12.1 5.3 5Y5-10a	高台律5.6 右側0	
5 77 -9					下劍	劍內	頭	(13.2)	4.5 5Y5-1青灰	高台律7.5 右側0
6					下劍	劍內	頭	N -4%		
7					上劍	劍內	頭	(9.4)	(4.3) N -5%	
8					上劍	劍內	頭	7.3	(10.5) 7.5Y8-19a白	右側0
9 80 -5					上劍	劍內	頭	(12.8)	5Y4-18a青灰	右側0
10					上劍	劍內	頭	(5.9)	5Y4-18a青灰	右側7.5 右側0
11					上劍	劍內	頭	19.4	(33.3) 10Y5-10a	
130 -12 87 -9					下劍	劍內	上加蓋	8.5	3.7 2.5Y4-1青灰	
13 87 -6					下劍	劍內	上加蓋	9.8	3.5 2.5Y5-1青灰	
14 87 -4					下劍	劍內	上加蓋	10.8	3.3 2.5Y5-2青灰	
15 87 -5					下劍	劍內	上加蓋	12.6	3.5 2.5Y5-2青灰	
16					下劍	劍內	上加蓋	(10.3)	(4.4) 2.5Y5-1青灰	
17 88 -1					下劍	劍內	上加蓋	10.4	3.5 10YR7/21c・5a・黃	
18 2					下劍	劍內	上加蓋	12.0	3.5 2.5Y5-1青灰	
19					下劍	劍內	上加蓋	(9.7)	(3.0) 10YR8-29a白	
20 88 -3					下劍	劍內	上加蓋	10.0	3.4 7.5YR6-41c・5a・黃	
21					下劍	劍內	上加蓋	(11.1)	(2.9) 10YR7/21c・5a・黃	
22 88 -4					下劍	劍內	上加蓋	11.9	3.7 10YR5-29a・黃	
23					下劍	劍內	上加蓋	13.3	(4.6) 7.5YR6-29a白	

表13 出土遺物観察表(4)

番号	地区	遺物	層位	参考	種別	器種	法身		色調	特徴
							番号	種類	口径	器底
130-24	88-5		下層	砂内	土陶器	杯	16.0	4.7	10YR5-31-45・黄褐色	
25			下層	砂内	土陶器	杯	15.9	(3.6)	10YR6-29-45・黄褐色	
26	88-7		下層	砂内	土陶器	杯	16.4	5.9	75YR6-4赤褐色	
27	88-6		中層	砂内	土陶器	杯	15.0	4.3	10YR6-31-45・黄褐色	
28	88-8		下層	砂内	土陶器	杯	17.8	(5.8)	10YR6-29-45	
29	89-4		下層	砂内	土陶器	杯	17.0	6.7	75YR6-41-45・橙	
30	91-7		下層	砂内	土陶器	皿	20.0	4.3	10YR6-31-45・黄褐色	
31			下層	砂内	土陶器	鉢	19.2	(8.7)	75YR7-2赤褐色	
32	89-6		下層	砂内	土陶器	小形鉢	10.8	4.6	5YR6-41-45・橙	
33			下層	砂内	土陶器	高杯	(6.7)	75YR5-31-45・褐		脚付10.2
34			下層	砂内	土陶器	碗	13.0	(13.2)	25Y3-1褐色	
131-35	94-2		下層	砂内	土陶器	小形皿	7.3	6.1	10YR6-31-45・黄褐色	
36	3		下層	砂内	土陶器	小形皿	7.4	6.7	5YR7-6	
37			下層	砂内	土陶器	甕	(5.5)	5YR4-41-45・赤褐色		脚付
38			下層	砂内	土陶器	甕	(6.3)	10YR3-31-45		脚付
39	95-2		下層	砂内	土陶器	甕	12.0	16.4	10YR6-31-45・黄褐色	
40			下層	砂内	土陶器	甕	(7.1)	75YR6-41-45・橙		脚付
41			下層	砂内	土陶器	甕	11.4	(6.7)	10YR6-29-45・黄褐色	
42			下層	砂内	土陶器	甕	15.4	(11.9)	10YR5-29-45・黄褐色	
43			下層	砂内	土陶器	甕	12.4	(15.4)	5YR6-41-45・小瓶	
44	95-6		下層	砂内	土陶器	甕	16.6	17.7	10YR7-31-45・黄褐色	
45			下層	砂内	土陶器	甕	16.0	(5.1)	5YR6-31-45・橙	
46	95-4		下層	砂内	土陶器	甕	15.0	15.4	10YR6-31-45・黄褐色	
47	5		下層	砂内	土陶器	甕	15.6	16.0	10YR6-41-45・黄褐色	
48			下層	砂内	土陶器	甕	18.1	(14.2)	25Y5-29-45・黄褐色	
132-49	96-2		下層	砂内	土陶器	甕	13.6	19.9	25YR6-8	
50	96-1		下層	砂内	土陶器	直口甕	15.0	22.1	10YR7-31-45・黄褐色	
51	96-3		下層	砂内	土陶器	甕	19.6	28.1	5YR6-41-45・橙	
52	4		下層	砂内	土陶器	甕	(24.5)	5YR6-41-45・橙		脚付
53	5		下層	砂内	土陶器	甕	15.2	24.7	25Y5-1褐色	
54	6		下層	砂内	土陶器	甕	18.0	29.4	5YR6-41-45・橙	
133-55	111-3		下層	砂内	土製品	牛円形		7.5YR4-4		
56	102-1		下層	砂内	土製品	圓筒		25Y6-31-45・黄		
57	2		下層	砂内	土製品	圓筒		3YR6-6		
58	3		下層	砂内	土製品	圓筒	(49.0)	(13.8)	75YR7-41-45・橙	
134-59	120-1		中層	砂内	木製品	盒		1-10w=1.2 h=0.2		ヒノキ
60	2		下層	砂内	木製品	盒	1-9.8w=1.3h =0.2			ヒノキ
61	3		下層	砂内	木製品	盒	1-(11.2)w=1.1h=0.3			ヒノキ
62	4		中層	砂内	木製品	盒	1-12.4w=1.0h=0.2			ヒノキ
63	120-5 121		下層	砂内	木製品	船形	1-26.1w=4.4h=2.6			ヒノキ
135-1	60-8g	415	井口		瓦器	碗	(15.0)	5.4	N-30	高台付(4.6)
137-1	60-7e	945	井口		土陶器	甕	(8.4)	(3.6)	5YR6-8	
2					土陶器	高杯	(15.4)	(6.3)	25Y7-29-45	
3					土陶器	高杯	(7.4)	5YR5-6	明木漆	脚付10.4
4					土陶器	高杯	(8.0)	5YR5-41-45・赤褐色		
5	93-7				土陶器	甕	13.8	20.7	75YR7-31-45・橙	
6	93-6				土陶器	甕	14.0	20.5	5YR6-6	
7					土陶器	甕	(15.0)	(4.7)	10YR7-31-45・黄褐色	
8					土陶器	甕	(16.2)	(7.2)	25Y6-29-45	
9					土陶器	甕	(15.2)	(14.1)	10YR7-31-45・黄褐色	
10					土陶器	甕	12.5	(14.4)	5YR6-6	
138-1	60-7d	967	井口		土陶器	甕	(12.6)	(3.9)	10YR6-31-45・黄褐色	
2					土陶器	甕	(13.0)	(4.2)	25YR5-41-45・橙	
139-1	60-7c	1059	井口		土陶器	甕	17.6	(19.5)	10YR6-41-45・黄褐色	
140-1	73-2	60-7c	1060	井口	粗毛器	盒	13.4	4.5	5YR7-19-11	右回り
2	89-3				土陶器	杯	(12.4)	4.1	10YR7-31-45・黄褐色	
3	92-1				土陶器	二重コップ	(7.8)	3.5	25YR5-9明木漆	右回り
4					土陶器	高杯	(9.4)	5YR6-6		底付(10.2)
5					土陶器	甕	(14.1)	10YR7-21-45・黄褐色		
142-1	97-4	60-8b	1805	井口	土陶器	小瓶	9.4	1.2	25Y7-19-6	
2			最下層	砂内	土陶器	中瓶	(16.0)	2.8	5Y7-19-6	
3				井戸中段1段目	木製品	函物	(43.8)	14.8		ヒノキ
4				井戸中段2段目	木製品	函物	(41.7)	(14.0)		ヒノキ
143-1	6N-8c	1910	井口		木製品	黑色上蓋	(14.6)	5.7	10YR3-1黒	高台付6.6
2				井戸中段1段目	木製品	函物	(40.0)	(17.0)		ヒノキ
145-1	6N-8c	2151	井口	上層	土陶器	小瓶	(8.6)	1.6	75YR6-41-45・橙	
2			上層	砂内	土陶器	小瓶	8.4	1.5	25Y6-29-45	
3			上層	砂内	土陶器	小瓶	(19.2)	1.4	10YR5-31-45・黄褐色	
4	97-5	6N-8c	上層	土陶器	小瓶	9.6	1.5	10YR6-29-45・黄褐色		
5			上層	砂内	土陶器	小瓶	9.5	1.6	25YR6-41-45・橙	
6			上層	砂内	土陶器	小瓶	(10.2)	1.3	25YR7-29-45・黄褐色	
7			上層	砂内	土陶器	小瓶	(10.4)	1.3	10YR5-31-45・黄褐色	
8			上層	砂内	土陶器	中瓶	(12.7)	(23)	10YR7-31-45・黄褐色	
9			上層	砂内	土陶器	高杯	14.2	2.6	25Y4-19-6	
10			上層	砂内	土陶器	中瓶	(13.6)	(21)	10YR4-29-45・黄褐色	

表14 出土遺物觀察表(5)

番号	地区	遺種 多量 種類	形狀	備考	種別	器種	計量		色調	特徴
							(1) H cm	(2) W cm		
145 -11			上縁		土器	中組	(14.8)	(2.6)	10YR5-1黒褐色	
12 97 -6			上縁		土器	中組	(14.5)	2.2	10YR6-31C.5v.黄褐色	
13			上縁		土器	中組	(15.6)	(2.2)	10YR6-31C.5v.黄褐色	
14 99 -7			上縁		土器	小陶	8.2	3.3	N-2黒	高台付4.1
15			上縁		土器	組	(9.2)	(2.2)	10R6-41C.5v.赤褐色	
16			上縁		土器	組	9.0	(2.0)	2.5Y7/19C.赤	
17			上縁		土器	組	(10.2)	2.3	N-4黒	
18			上縁		土器	板			(1.9) N-2黒	高台付5.2
19	6N -9e		上縁		土器	板			(2.3) N-2黒	高台付6.0
20	6N -8e		上縁		土器	板			(2.4) N-2黒	高台付(5.2)
21			上縁		土器	板	(14.6)	(4.2)	N-4黒	
22	6N -9e		上縁		土器	板	(14.8)	(4.5)	N-2黒	
23	6N -8e		上縁		土器	板	(14.8)	(3.9)	N-2黒	
24			上縁		土器	板	(15.6)	(4.2)	N-380.4K	
25			上縁		土器	板	(15.6)	(4.8)	N-2黒	
26			上縁		土器	板	(13.8)	(4.8)	N-2黒	
27			上縁		土器	板	(14.6)	(4.2)	N-2黒	
28			上縁		土器	板	(14.4)	(4.0)	N-2黒	
29			上縁		土器	板	(15.4)	(4.5)	N-380.4K	
30			上縁		土器	板	(15.4)	(4.8)	7.5YR5-1黒褐色	
31			上縁		土器	板	(15.4)	(3.2)	N-2黒	
32			上縁		土器	板	(15.6)	(4.7)	N-380.4K	
33	6N -8d		下縁		土器	板	(15.6)	(4.4)	N-2黒	
34	6N -9e		上縁		土器	板	(16.0)	(3.6)	N-380.4K	
35	6N -8e		上縁		土器	板	(15.6)	(4.1)	N-4黒	
36			上縁		土器	板	(14.4)	5.5	N-2黒	高台付(4.2)
37			上縁		土器	板	(15.6)	5.4	N-2黒	高台付5.0
38			上縁		土器	板	(15.6)	5.3	N-4黒	高台付5.4
39			上縁		土器	板	(14.8)	6.1	N-2黒	高台付(5.8)
40 99 -10			上縁		土器	板	15.6	5.3	N-2黒	高台付6.0
41			上縁		土器	板	(14.6)	5.4	N-2黒	高台付5.4
42 100 -1			上縁		土器	板	15.2	5.4	N-2黒	高台付5.0
43 99 -9			上縁		土器	板	15.6	5.7	N-2黒	高台付5.6
44 99 -8			上縁		土器	板	15.4	5.6	N-380.4K	高台付5.6
45 100 -2			上縁		土器	板	15.6	5.7	N-380.4K	高台付5.8
46 -3			上縁		土器	板	16.0	6.1	N-2黒	高台付5.3
146 -47	6N -9e		上縁		白磁	板		(2.3)	2.5Y7/8.1黒白	
48 108 -1	6N -8e		上縁		白磁	板		(2.4)	2.5Y7/7.1明キリーブ	高台付5.8
49			上縁		吸塵器	亞鉛		(3.3)	N-58	
50 108 -3			上縁		土器	羽茎	(24.6)	(7.7)	7.5YR6-41C.5v.4K	瓶形1.0
51	6N -8d		下縫		土器	小組	(9.0)	(1.6)	2.5YR6-28C.黒	
52 97 -7			下縫		土器	小組	10.2	1.5	10YR6-28A.黄褐色	
53	6N -8e		下縫		土器	小組	(10.0)	1.3	7.5YR7/1明キリーブ	
54			下縫		土器	小組	(10.2)	2.0	3.5Y6-28A.リーブ	
55			下縫		土器	小組	(9.2)	1.5	2.5Y6-28C.黒	
56	6N -8d		下縫		土器	小組	(10.4)	2.4	10YR6-31C.5v.4K	
57			下縫		土器	中組	(13.8)	(2.6)	10YR3-1黒褐色	
58			下縫		土器	中組	(13.2)	(3.2)	7.5YR2-1黒	
59			下縫		土器	中組	(14.8)	(2.5)	10YR6-28C.黒	
60 99 -5			下縫		土器	小組	9.4	2.4	N-380.4K	
61			下縫		土器	組		(3.5)	N-380.4K	高台付5.6
62	6N -8e		下縫		土器	組	(15.2)	(5.0)	N-2黒	
63 100 -4			下縫		土器	組	15.9	5.9	N-380.4K	高台付6.2
64			下縫		土器	組	(16.6)	5.5	N-2黒	高台付(6.2)
65 100 -5			下縫		土器	組	15.3	5.9	3.5Y-136	高台付6.3
66 100 -7	6N -8d		下縫		土器	組	15.6	5.8	N-2黒	高台付6.2
67 -8 6N -8e			下縫		土器	組	15.0	7.0	N-2黒	高台付5.4
147 48 108 -7	6N -8d		下縫		瓦				10YR7/4C.5v.4K	黄褐色
69 108 -4			下縫		瓦				7.5YR6-31C.5v.4K	黒
70 108 -2	6N -8e		上縁		瓦				10YR6-31C.5v.4K	黄褐色
71 108 -5			上縁		瓦				10YR5-1黒褐色	
148 -72			上縁		竹製品	狀況竹製品	1 = (11.2) w = (2.2) h = (0.6)			
73			上縁		木製品	棒状木製品	1 = (12.0) w = (4.2) h = (1.1)			マツ科
74 122 -7			上縁		木製品	管	1 = (23.6) w = (0.7) h = (0.4)			スギ
75			上縁		木製品	有孔板状木製品	1 = (32.1) w = (1.3) h = (0.4)			ヒノキ
76 122 -1			上縁		木製品	管	1 = (12.4) w = (2.8) h = (2.6)			スギ
77 122 -8			上縁		木製品	板	3.9			タコガキ
78 9			上縁		木製品	板	4.0			タコガキ
79			下縫		木製品	板	1 = 13.2 w = 0.6			ヒノキ
80 122 -6			下縫		木製品	曲物	1 = (20.1) w = (0.9)			ヒノキ
81 122 -2			下縫		木製品	曲物	(19.4) (13.5)			ヒノキ
82			下縫		木製品	曲物	23.5 (6.2)			ヒノキ
150 -1	70 -44.4e	23 土坑		鐵忠器	杯-甌	10.7 (3.3)	N-58			

表15 出土遺物観察表(6)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	参考	種別	器種	法身		色調	特徴
							口径	器高		
150 -2					丸盤	碗	(1.8)	25Y2-1黒	高台律(5.8)	
3	70 -4d	25	土坑		箱形器	杯身	(9.2)	(3.5)	N-7灰白	
4 74 -2					箱形器	杯身	11.5	3.5	5B7-1明青灰	右回り
5	70 -4d	21	土坑		箱形器	杯身	(11.8)	(3.4)	10Y6-1灰	
6	78 -7g	141	土坑		箱形器	杯	(11.8)	(4.0)	N-7灰白	
7 89 -1					上縁器	杯	14.0	3.2	5YR4-4に赤い赤面	
8					上縁器	杯	(14.6)	3.3	5YR4-6本器	
9	70 -6n	14	土坑		上縁器	杯	(10.6)	4.3	25Y8T-6黒	
10					上縁器	杯	(13.2)	4.3	3YR7-4に赤い橙	
11	70 -6b				上縁器	碗	(18.4)	(4.6)	25YR6-6橙	
151 -1	70 -3d	24	土坑		箱形器	杯蓋	(12.0)	(3.5)	N-7灰白	
2					箱形器	杯蓋	(12.0)	(4.1)	N-7灰白	右回り
3					箱形器	杯蓋	(12.2)	4.1	3B5A-5青灰	右回り ハラ記号
4					箱形器	高杯	(17.0)	(2.5)	N-7灰白	
5 92 -6					上縁器	把手付鉢	13.0	8.3	5YR6-8橙	
6 94 -4					上縁器	手	(12.7)	12.1	5YR7-4に赤い橙	
153 -1	78 -7f	150	土坑		箱形器	杯蓋	(9.8)	1.8	5P9E-1青灰	
2	78 -6f	143	土坑		箱形器	杯蓋	(15.8)	(1.7)	5P9E-1青灰	
3	78 -7g	163	土坑		箱形器	杯身	(10.5)	(3.2)	N-7灰白	ハラ記号
4					箱形器	杯身	(11.0)	(3.1)	N-7灰白	
5					箱形器	杯身	(11.5)	(2.9)	N-7灰白	右回り
6					箱形器	平底	(6.6)	(4.7)	N-7灰白	
7 94 -5					上縁器	小形器	(10.2)	8.3	25YR6-6橙	
8	78 -8e	170	土坑		箱形器	杯蓋	(10.0)	2.5	N-8灰白	
9					箱形器	杯蓋	(14.2)	3.8	N-7灰白	右回り
10 76 -9					箱形器	杯蓋	14.4	3.4	N-8灰白	右回り
11					箱形器	杯	(2.3)	N-8灰白	高台律(7.4)	
12					上縁器	杯身	(26.4)	9.8	5YR8-3赤橙	
155 -1	60 -7g	609	土坑		上縁器	小瓶	(10.0)	1.3	5YR6-6橙	
2					上縁器	高杯	(16.0)	(3.1)	5YR5-8明赤面	
3					上縁器	杯	(16.6)	4.5	5YR6-6橙	
4					上縁器	瓶	(23.4)	(2.9)	5YR5-6明赤面	
5					上縁器	瓶	(15.4)	(8.3)	5YR6-6橙	
6					上縁器	瓶	(17.8)	(4.5)	5YR6-8橙	
7					箱形器	杯蓋	(8.2)	(2.3)	N-6灰	右回り
8					箱形器	杯身	(9.0)	2.9	5Y6-1灰	左回り
9					箱形器	杯身	(8.4)	(2.2)	N-7灰白	右回り
10					箱形器	要	(25.2)	(8.2)	N-6灰	
11					箱形器	要	(38.4)	(16.2)	N-3灰灰	
158 -1	6N -10j	1839	土坑		箱形器	杯蓋	(10.8)	(3.5)	10Y6-1灰	右回り ハラ記号
2	60 -9c	1293	土坑		箱形器	杯蓋	(14.5)	3.8	25YR7-1灰白	右回り
3	6N -9h	1857	土坑		箱形器	瓶	(12.1)	(4.3)	5P9E-1青灰	右回り
4					箱形器	杯身	(10.6)	(3.1)	N-6灰	右回り
5	60 -9c	1272	土坑		上縁器	高杯	(6.5)	5YR4-8本器	脚印9.8	
160 -1	77 -8	6N -9g	1878	土坑	箱形器	杯	9.9	4.6	10Y7-1灰白	
2	73 -3				箱形器	杯蓋	11.0	4.7	5P4-4暗青灰	右回り
3					箱形器	杯	(20.3)	(4.2)	5P9E-1青灰	右回り
4 89 -5					上縁器	杯	10.2	4.2	25YR4-6赤面	
5					上縁器	杯	(16.4)	(4.5)	5YR4-6本器	
6					上縁器	杯	(12.0)	(4.5)	5YR5-4に赤い赤面	
7					上縁器	杯	(16.3)	(5.0)	5YR5-6明赤面	
8					上縁器	杯	(13.6)	(2.6)	5YR6-6橙	
9					上縁器	高杯	(16.0)	(5.0)	5YR4-4に赤い赤面	
10 91 -10					上縁器	高杯	(15.8)	11.5	7.5YR7-6黒	脚印9.7
11					上縁器	要	(13.4)	(6.0)	5YR4-4に赤い赤面	
12					上縁器	要	(14.4)	(6.1)	25YR5-8赤面	
13					上縁器	要	(14.2)	(8.9)	5YR5-6明赤面	
14					上縁器	要	(23.8)	(9.0)	25YR4-8赤面	
15					上縁器	滴	(33.2)	(15.5)	5YR6-8橙	
163 -1	6N -10d	3004	土坑		上縁器	小瓶	(9.4)	(0.9)	7.5YR8-3赤青	
2					上縁器	小瓶	(9.4)	(1.0)	10Y7-2.3に赤い黄緑	
3 97 -8					上縁器	小瓶	9.4	1.6	7.5YR3-2黒	
4					上縁器	小瓶	(10.0)	1.4	25Y7-3赤青	
5 97 -10					上縁器	小瓶	10.2	2.3	25Y6-3に赤い黄	
6					上縁器	中瓶	(11.6)	(1.7)	5YR6-6橙	
7 97 -11					上縁器	高杯	9.2	2.4	10Y7-2.3に赤い黄緑	
8					上縁器	高杯	9.4	(2.1)	7.5YR3-1黒	
9 97 -12					上縁器	高杯	9.4	2.2	10Y8-2.3赤	
10					上縁器	高杯	(9.8)	(2.1)	5YR6-4に赤い黄緑	
11					上縁器	小瓶	(8.8)	1.6	7.5YR7-3に赤い黄緑	
12					上縁器	小瓶	(10.6)	2.9	10Y7-2黒	
13					上縁器	小瓶	(9.0)	(1.6)	5YR7-3に赤い黄緑	
14					上縁器	小瓶	9.2	1.7	10Y8-2.3に赤い黄緑	
15 98 -3					上縁器	小瓶	9.2	2.2	7.5YR8-3に赤い黄緑	
16					上縁器	小瓶	(9.6)	(2.1)	5YR8-3に赤い黄緑	
17					上縁器	小瓶	(9.6)	(2.1)	10Y7-2.3に赤い黄緑	

表16 出土遺物観察表(7)

番号	地区	遺種 番号	層位	備考	種別	器種	法 葉		色調	特徴	
							(1) #	(2) #			
163 -18					土加器	小皿	(10.0)	2.0	10YR2/21.5%・黄橙		
19					土加器	中皿	(10.4)	2.0	7.5YR2/31.5%・棕		
20 98 -2					土加器	小皿	9.0	1.9	10YR8/3浅黃褐色		
21 97 -9					土加器	小皿	9.2	1.7	10YR2/21.5%・黄橙		
22 98 -1					土加器	小皿	9.2	1.6	7.5YR2/31.5%・棕		
23					土加器	小皿	(9.6)	(1.5)	10YR2/31.5%・黄橙		
24					土加器	小皿	(9.8)	1.8	10YR8/3浅黃褐色		
25 98 -4					土加器	小皿	10.2	2.1	10YR2/31.5%・黄橙		
26					土加器	中皿	(10.4)	(2.0)	7.5YR6/41.5%・棕		
27					土加器	小皿	(8.4)	2.0	7.5YR7/31.5%・棕		
28 98 -8					土加器	小皿	8.6	1.4	7.5YR4/1黑褐		
29 98 -5					土加器	小皿	9.2	2.4	10YR2/1黑		
30 6					土加器	小皿	9.4	2.3	5YR6/3%・棕・褐		
31					土加器	小皿	(9.8)	(1.6)	7.5YR3/1黑褐		
32 98 -7					土加器	小皿	9.9	2.4	2.5Y7/2%・黄		
33 98 -12					土加器	杯	(12.0)	3.1	10YR6/2%・黄橙		
34					土加器	杯	(13.4)	(3.0)	2.5Y7/3%・黄		
35 98 -9					土加器	杯	14.0	4.2	7.5YR7/2%・黑褐		
36					土加器	瓶	(15.0)	(3.4)	10YR6/21.5%・黄橙		
37 98 -14					土加器	瓶	14.0	5.2	10YR2/1黑	高台付6.2	
38					土加器	瓶	(13.6)	(4.4)	7.5YR7/2明褐色		
39					土加器	瓶	(1.3)	10YR9/2%・白	高台付5.8		
40					土加器	瓶	(2.3)	5YR5.6%・赤褐	高台付6.0		
41					土加器	瓶	(1.8)	2.5YR6/41.5%・棕	高台付8.0		
42					土加器	瓶	(1.6)	7.5YR3/2%・黑褐	高台付7.4		
43 99 -1					黑色土器	小碗	(9.4)	3.6	2.5YR6/6棕	A類高台付(4.2)	
44					黑色土器	瓶	(1.2)	10YR2/1黑	A類 高台付6.2		
45					黑色土器	瓶	(14.0)	(4.9)	2.5Y2/1黑	A類	
46 99 -2					黑色土器	瓶	14.0	5.4	10YR2/21.5%・黄橙	A類 高台付6.6	
47					黑色土器	瓶	(1.5)	10YR2/1黑	A類高台付(7.0)		
48 99 -3					黑色土器	瓶	15.0	5.9	7.5YR4/2%・黑褐	A類 高台付6.2	
49 98 -15					土加器	二ニチニア	(9.4)	3.6	2.5YR6/6棕		
50 16					土加器	二ニチニア	(2.4)	2.0	10YR2/1黑		
51 17					土加器	二ニチニア	(4.2)	2.9	7.5YR5/31.5%・褐		
164 -1	6N -9d	3005	土坑		土加器	瓶	(10.6)	2.5	10YR2/21.5%・黄橙		
2					土加器	瓶	(15.4)	6.0	N -2黑	目鑑高台付(6.2)	
165 4 -77 -4	7N -6e	147	落ち込み		組合器	杯	(8.6)	3.3	N -6黑		
2					組合器	杯	(14.6)	(2.1)	N -6黑		
3					組合器	杯	(15.4)	(1.4)	N -6黑		
4					土加器	瓶	(18.0)	(2.4)	7.5YR6/8%・褐		
5					土加器	瓶	(15.6)	(3.4)	2.5YR4/6%・赤		
6					土加器	瓶	(14.4)	(3.6)	5YR4/8%・褐		
7					瓦	瓦			10YR3/1黑褐		
166 -1	6O -8g	417	落ち込み		組合器	杯	(13.4)	(3.7)	N -6黑	右回り	
2					組合器	瓶	(12.2)	(3.6)	N -5黑		
3					組合器	瓶	(13.6)	(3.6)	N -5黑	右回り	
4					組合器	杯身	(13.2)	(3.6)	N -4黑	右回り	
5					組合器	杯身	(13.4)	(4.0)	2.5YR7/2明褐色		
6					組合器	高杯	(14.4)	(3.8)	N -4黑		
7					土加器	杯	(10.6)	4.1	7.5YR7/31.5%・棕		
8					土加器	杯	(15.0)	(5.6)	7.5YR6/31.5%・褐		
9					土加器	瓶	(14.8)	(5.5)	2.5YR3/6明褐色		
10					土加器	高杯	(6.7)	5YR5/6%・赤褐	脚修(10.4)		
11 93 -2					土加器	瓶	(18.6)	(9.7)	2.5YR4/8%・赤褐		
12					土加器	瓶	(12.6)	(5.7)	5YR6/6棕		
13					土加器	瓶	(15.8)	(7.6)	5YR5/4%・赤・赤褐		
14 97 -4					土加器	瓶	(15.0)	(16.5)	3.5YR6/41.5%・棕		
15					土加器	瓶	(22.8)	(10.5)	5YR5/41.5%・赤・赤褐		
16					土加器	瓶	(19.2)	(3.4)	5YR6/6棕		
17					土加器	瓶	(21.0)	(7.5)	7.5YR4/2%・褐		
167 -1	6O -9g	418	落ち込み		土加器	杯	(11.2)	(3.6)	3YR7/8%		
2					土加器	杯	(14.6)	(2.6)	N -5黑		
3					土加器	瓶	(16.6)	(3.6)	5YR5/8%・赤・赤褐		
168 -1	6N -9h	1820	落ち込み		土加器	杯	(11.0)	(4.3)	2.5YR7/8%・赤褐		
2					土加器	杯	(11.2)	(4.2)	5YR5/6%・赤褐		
3					土加器	高杯	(17.0)	(5.8)	5YR5/6%・赤褐		
4					土加器	杯	(16.8)	(6.4)	7.5YR6/6棕		
5					組合器	杯蓋	(12.2)	(3.4)	5PRA4/1端青灰	右回り	
6					組合器	杯蓋	(12.8)	(3.0)	N -4黑	右回り △記号	
7					組合器	杯口	10.1	3.5	N -5黑	右回り	
8					組合器	杯身	(10.2)	3.4	5P9R6/4%・青灰	左回り	
9					組合器	杯身	(10.2)	(3.5)	N -5黑	右回り	
10					組合器	高杯	(11.4)	(3.5)	N -2黑		
11					組合器	杯身	(11.6)	4.1	5P9R6/4%・青灰	△記号	
12					組合器	脚付	(29.0)	10.3	7.5YR6/1%・青灰	脚修(19.0) 右回り	
169 -1	98 -11	6N -8d	1906	落ち込み	土加器	小皿	9.8	2.0	10YR8/3浅黃褐色		
2					瓦器	瓶	(2.1)	N -2黑	高台付6.6		
3					瓦器	瓶	(14.8)	(3.7)	N -4黑		
4					瓦器	瓶	(3.3)	N -2黑	高台付(5.0)		

表17 出土遺物観察表(8)

番号	地区	遺物	部位	備考	種別	器種	法		色調	特徴
							口径	器高		
169 -5					丸形容器	碗	(15.0)	(4.1)	N-30灰灰	
6					上部器	涙跡	(14.0)	7.5YR6/21.45V-7周	高台付7.5	
7					丸形容器	丸	(9.0)		5YR6/19K	
170 -1	60-4H	1316	ビニール		上部器	小瓶	(9.0)	(1.7)	10YR7/21.45V-7周	高台付5.6
2	60-4H				上部器	小瓶	9.6	1.7	5YR7/41.45V-7周	
3	100-9				丸形容器	碗	15.4	5.4	N-40K	高台付6.3
4	10				丸形容器	碗	15.6	5.9	N-30灰灰	高台付5.6
171 -1	60-10e	1989	柱穴		上部器	小瓶	(9.4)	2.8	2.5YR5-8灰	
2	60-9h	2079	柱穴		丸形容器	皿	(9.8)	(1.7)	N-30灰灰	
3	98-43	60-9e	1961	柱穴	上部器	碗	(11.8)	3.4	5YR6/6灰	高台付(5.7)
4	60-9c	2067	柱穴		黑色上蓋	碗	(14.6)	(5.1)	2.5YR5-6灰赤褐色	A類
5	60-8f	1856	柱穴		丸形容器	碗	(15.4)	(4.2)	N-29K	
6					丸形容器	碗	14.6	5.4	N-29K	高台付5.6
7	60-9g	870	柱穴		頭部器	身	(10.0)	(1.8)	5P9E-1青灰	右回り
8					上部器	杯	(11.8)	(3.3)	5YR5-6灰赤褐色	
9					頭部器	碗	(12.3)	(3.8)	10YR6-19K	右回り
10	60-9c	1290	柱穴		頭部器	碗	(14.2)	(3.3)	N-59K	右回り
11					頭部器	身	(16.1)	(4.5)	N-59K	右回り
12	60-10g	580	柱穴		頭部器	碗	(13.8)	(3.8)	N-49K	右回り
13					頭部器	身	(11.8)	(3.7)	5P9E-1青灰	右回り
14	78-4e	171	柱穴		上部器	杯	(11.4)	(3.0)	5YR6-8灰	右回り
15					上部器	杯	(13.8)	4.6	10YR6/29.63	
16	60-9c	1288	柱穴		頭部器	蓋	(14.4)	(2.7)	N-39K	右回り
17					頭部器	身	(11.8)	(3.2)	10YR6-19K	右回り
18	60-9g	647	柱穴		上部器	碗		(2.1)	2.5YR5-6明赤褐色	
19					上部器	蓋				
20					上部器	蓋	(10.8)	(4.1)	5YR5-6明赤褐色	
21	60-9f	823	柱穴		上部器	蓋	(18.6)	(5.7)	2.5YR4-8赤褐色	
22	60-7f	1128	柱穴		頭部器	碗	(8.9)	(2.3)	N-59K	右回り ハラ記号
23	60-8g	614	柱穴		頭部器	碗	(10.6)	(2.1)	N-89K白	右回り ハラ記号
24	60-8g	867	柱穴		頭部器	身	(12.0)	3.3	N-59K	
25	60-9c	1309	柱穴		頭部器	身	(10.5)	3.3	N-69K	右回り
26	60-9c	1269	柱穴		頭部器	身	(13.0)	(3.5)	N-59K	右回り
27	70-31	599	柱穴		頭部器	身	(14.8)	(4.0)	N-69K	右回り
28	60-9g	1937	柱穴		頭部器	身	(9.6)	(2.3)	N-69K	
29	60-10j	1824	柱穴		頭部器	身	(10.3)	3.6		右回り ハラ記号
30	60-9h	994	柱穴		頭部器	身	(10.7)	(2.3)	N-49K	右回り
31	60-9c	1252	柱穴		頭部器	身	(11.0)	(1.9)	N-69K	
32	60-9c	1264	柱穴		頭部器	身	(11.4)	(3.6)	N-39K	右回り
33	60-9c	1310	柱穴		頭部器	身	(13.2)	4.3	5P9E-14暗青色	右回り ハラ記号
34	60-8f	639	柱穴		頭部器	身	(13.6)	4.5	N-69K	右回り
35	89-42	60-10e	2089	柱穴	上部器	杯	(11.6)	(3.3)	7.5YR6/4に近い橙	
36	60-9d	1261	柱穴		上部器	杯	(12.4)	3.7	2.5YR5-6明赤褐色	
37	60-9g	560	柱穴		上部器	杯	(14.8)	(3.5)	5YR5-6明赤褐色	
38	60-7d	1108	柱穴		上部器	杯	(13.8)	(7.5)	5YR5-8明赤褐色	
176 -1	78-4h	3-1	漆	上位	頭部器	身	(9.8)	3.9	N-69K	右回り
2	78-4g				頭部器	身	(10.4)	4.1	10BG4-1暗青色	
3	78-4e			上位	頭部器	碗	(12.0)	(4.7)	5BG6-1青色	
4					頭部器	身	(15.0)	(10.7)	N-89K白	
5	78-5f			上位	頭部器	身	(9.0)	(18.9)	N-69K	左回り
6	78-4g			上位	頭部器	身		(5.7)	5BG7-1明青色	
7	78-4e			上位	頭部器	身	(13.0)	(6.3)	10YR6-19K	
8	78-5d			上位	頭部器	身	(52.6)	(19.5)	N-69K	
177 -9	81-5	78-4f		上位	頭部器	身	22.2	44.2	N-59K	左回り
10	6			上位	頭部器	身	21.8	47.8	N-89K白	
178 -11	78-4g			上位	上部器	杯	(9.4)	(4.4)	5YR5-6暗	
12					上部器	杯	(10.2)	4.4	5YR5-6暗	
13					上部器	杯	(18.3)	6.1	2.5YR5-6明赤褐色	
14	78-4e			上位	上部器	杯	(32.0)	(7.0)	5YR5-8明赤褐色	
15					上部器	二チニア	(5.6)	10YR5-2白	脚注6.1	
16					上部器	高杯	(7.0)	5YR5-6暗	脚注10.0	
17	91-8	78-4e		上位	上部器	高杯	(15.8)	(6.5)	5YR5-6暗	
18					上部器	白有跡	(3.7)	7.5YR6-6暗	脚注(10.8)	
19					上部器	身	(17.6)	(5.8)	5YR5-6暗	
20	78-4g				上部器	小形器	(10.2)	(4.2)	5YR4-8暗	
21	78-4e			上位	上部器	身	(14.0)	(4.6)	5YR5-6暗	
22					上部器	身	(14.2)	(5.7)	5YR5-6明赤褐色	
23					上部器	長脚型	(24.3)	(26.0)	5YR5-6暗	
24					上部器	円底	(33.2)	(27.5)	7.5YR5-6毛黄荷	
179 -4	74-6	78-7h	229	漆	頭部器	身	9.2	3.4	N-59K	右回り ハラ記号
2	78-7f	144	漆		頭部器	身	(13.4)	3.8	5P9E-1青	
3	78-4g	3-4	漆		上部器	二チニア	(4.6)	5YR5-6暗	脚注6.5	
4	78-7h	3-2	漆		上部器	身	(15.9)	(5.8)	5YR5-6暗	
5					上部器	身	(13)	N-89K白		
180 -1	78-6e	188	漆		頭部器	身	(10.8)	2.9	5G8-1黒	
2	78-4g				頭部器	身	(14.4)	(2.0)	N-69K	
3					上部器	身	(18.6)	(2.4)	N-79K白	右回り
4	78-4f				上部器	身	(21.3)	(1.4)	5G5-1青	右回り
5					上部器	身	(24)	5G5-1青	高台付(8.9)	

表18 出土遺物觀察表(9)

番号	地区	遺物 番号	遺物 種類	形狀	備考	種別	器種	法量		色調	特徴
								計量	器高		
180 -7	TN -6g					土加器	杯身	(1.4)	N -794白	高台律(10.9)右回り	
8						組合器	杯	(2.7)	10HGT-1明青灰	高台律(9.0)	
9	TN -6f					組合器	杯身	(2.5)	N -794白	高台律(11.8)右回り	
10						組合器	杯身	(10.9)	3.8 5HGT-1青灰	高台律(7.5)右回り	
11 77 -42						組合器	杯身	(12.6)	4.2 5HGT-1青灰	高台律(9.3)右回り	
12 77 -41						組合器	杯身	(19.1)	6.0 5HGT-1青灰	高台律(13.1)右回り	
13						組合器	皿	(15.0)	(2.3) N -6灰		
14						組合器	皿	(19.8)	(2.4) N -794	右回り	
15						組合器	皿	(3.2)	10HGT-1明青灰	高台律(5.9)	
16	TN -6e					組合器	皿	(2.2)	N -894白	高台律(9.7)	
17	TN -6f					組合器	平盤	(10.4)	(2.4) 10HGT-1明灰	右回り	
18						組合器	圓盤	(6.8)	8.6 N -894白	高台律(7.1)右回り	
19 80 -4						組合器	圓盤	(9.2)	6.5 5HGT-1青灰	高台律(12.8)右回り	
20 81 -2						組合器	平盤	(10.9)	10.9 N -794白	右回り	
21						組合器	盃台	(36.8)	(3.5) N -794白	左回り	
22						組合器	盃	(49.6)	(38.9) 10HGT-1青灰		
23						土加器	盃	(2.5)	5YR6-6灰		
24	TN -6g					土加器	盃	(1.9)	3YR6-6灰		
25						組合器	盃	(1.9)	7.5YR6-8灰		
26						土加器	杯	(12.6)	(3.0) 3YR6-4L5灰-6中周		
27	TN -6f					土加器	杯	(18.0)	(4.0) 3YR6-6灰		
28						土加器	杯	(18.8)	(4.5) 3YR6-6灰		
29	TN -6e					土加器	杯	(19.0)	(3.3) 3YR6-6灰		
30	TN -6f					土加器	盃	(10.8)	(3.6) 3YR6-6灰		
31						土加器	盃	(11.0)	(5.2) 2.5YR6-6明赤端		
32						土加器	盃	(18.6)	(8.4) 3YR6-6灰		
33						土加器	盃	(34.6)	(8.5) 5YR7-6灰		
34						土加器	盃	(45.6)	(8.2) 3YR6-6灰		
181 -1	TN -6g	149 漢				組合器	盃	(8.0)	(2.7) 5P9GT-1明青灰		
2	TN -6e					組合器	杯蓋	(15.0)	(0.9) 5HGT-1明青灰	右回り	
3	TN -6f					組合器	杯身	(14.0)	4.6 5HGT-1明青灰	高台律(9.2)	
4 78 -4						組合器	杯身	(20.4)	6.0 5HGT-1明青灰	高台律14.0	
5						組合器	盃	(8.1)	N -794白		
6						組合器	円筒座	(7.2)	N -794白	脚絆(10.2)	
7						組合器	盃	(18.0)	(6.3) N -794白		
8	TN -6e					組合器	盃	(22.0)	(5.0) N -794白		
9	TN -6f					土加器	高杯	(5.1)	2.5YR6-8灰		
10						土加器	三ニチユア	(2.1)	3YR6-6灰		
11						土加器	三ニチユア	(3.2)	7.5YR6-6灰	脚絆3.0	
12	TN -6e					土加器	三ニチユア	(3.4)	2.5YR6-8灰	脚絆(5.0)	
13						土加器	盃	(29.8)	(4.7) 3YR5-8明赤端		
14	TN -6f					瓦	平瓦		7.5YR6-6灰		
15	TN -6e					瓦	瓦		7.5YR6-6灰		
183 -1	TN -3d	3000 漢				土加器	鉢	(6.0)	2.5YR5-4L5灰-6中周		
2	TN -3d	3001 漢				土加器	鉢	(7.6)	6.2 2.5YR5-4L5灰-6中周		
3						組合器	杯蓋	(11.6)	(3.6) 7.5YR7-1白		
4						組合器	杯身	(10.0)	(3.2) N -6灰	右回り	
5						土加器	高杯	(17.0)	(6.2) 2.5YR5-6明赤端		
6						土加器	高杯	(5.9)	3YR5-4L5灰-6中周	脚絆10.4	
185 -1	TN -1g	1508 漢				埴輪	円筒	(6.0)	10YR7-2L5灰-6中周	脚絆30.0	
2						組合器	杯身	(10.6)	3.3 N -5灰		
3						組合器	杯身	(10.2)	(3.0) N -4灰		
4						組合器	直口壺	(11.2)	(5.9) 5P9GT-1青灰		
5	78 -1g	1511 漢				土加器	盃	(15.0)	(4.3) 3YR4-6明赤端		
6						土加器	杯	(13.2)	(3.7) 2.5YR5-8明赤端		
7 94 -6 6S -9g	1876 漢					土加器	三ニチユア	(5.6)	2.5YR5-8明赤端	脚絆7.0	
186 -1	6S -9c	3096 漢				土加器	盃	(10.2)	7.5YR6-6L5灰-6中周		
187 -4 76 -10 60 -7f	400 漢			F型		土加器	杯	(15.6)	6.8 3YR6-4L5灰-6中周		
2	60 -7h			F型		組合器	杯蓋	(10.0)	(2.4) 5P9GT-1青灰	右回り	
3	60 -7i			F型		組合器	杯蓋	(7.8)	(2.0) 5P9GT-1青灰	右回り	
4				F型		組合器	杯蓋	(9.6)	(1.9) N -5灰	右回り	
5 76 -11 60 -7g				F型		組合器	杯蓋	(8.0)	(1.0) 5P9GT-1青灰	右回り	
6	60 -7i			F型		組合器	杯蓋	(10.2)	2.9 N -794白	右回り	
7				F型		組合器	杯蓋	(10.4)	(2.2) N -5灰	右回り	
8	6S -9c			F型		組合器	杯蓋	(9.4)	(2.5) N -6灰		
9 76 -12 60 -7j				F型		組合器	杯蓋	(11.0)	(2.3) N -5灰		
10	60 -7h			F型		組合器	杯蓋	(8.0)	3.1 5P9GT-1青灰	右回り	
11	60 -7g			F型		組合器	杯蓋	(9.4)	2.8 N -5灰	右回り	
12	60 -7i			F型		組合器	杯蓋	(10.5)	3.0 N -6灰	右回り	
13	60 -7l			F型		組合器	杯蓋	(11.4)	3.5 N -5灰	右回り ハラ記号	
14 77 -5 60 -7j				F型		組合器	杯蓋	(12.4)	(2.3) N -4灰		
15				F型		組合器	杯蓋	(8.9)	3.0 5P9GT-1青灰	右回り ハラ記号	
16	60 -7g			F型		組合器	杯蓋	(8.6)	3.4 5P9GT-1青灰		
17	60 -7i			F型		組合器	杯蓋	(9.8)	(3.6) 5HGT-1青灰	右回り	
18				F型		組合器	杯蓋	(10.0)	(3.6) 5P9GT-1青灰	左回り	
19 77 -6 60 -7i				F型		組合器	杯蓋	(10.0)	4.4 N -4灰	右回り	
20 7 60 -7h				F型		組合器	杯蓋	(10.4)	(4.4) N -4灰	右回り	
21	60 -7i			F型		組合器	杯蓋	(11.0)	3.1 5HGT-1青灰	右回り	

表19 出土遺物観察表(10)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	部位	備考	種別	器種	法規		色調	特徴
								口径	器高		
187 -22		60-8g		下層		鉢形器	杯	[10.8]	(2.2)	N-59K	
23		60-7b		上層		鉢形器	杯	[11.0]	(2.6)	N-59K	
24		60-8h		下層		鉢形器	杯	11.2	4.0	N-59K	ヘラ記号
25		60-7e		下層		鉢形器	杯	[11.8]	(3.3)	5P95-1青灰	
26		60-7d		下層		鉢形器	杯	[12.0]	(3.3)	N-49K	
27		60-7f		下層		鉢形器	杯	[12.5]	(3.7)	5B96-1青灰	右回り
28		60-7g		下層		鉢形器	杯	[7.8]	2.8	5B96-1青灰	右回り
29		60-7i		上層		鉢形器	杯	[11.2]	(2.8)	N-49K	
30				上層		鉢形器	杯	[8.6]	3.0	5PB4-1暗青灰	
31		60-7l		上層		鉢形器	杯	[8.0]	3.1	10GYS8-1明緑灰	ヘラ記号
32	84 -1			下層		鉢形器	杯	9.7	(2.9)	5P97-1紫灰	斜付上唇
33				下層		鉢形器	杯	[9.5]	3.3	5P5-1紫灰	
34		60-7j		上層		鉢形器	杯	[9.0]	(3.1)	N-59K	
35		60-7k		下層		鉢形器	杯	[9.6]	2.8	10BKG-1青灰	右回り
36				下層		鉢形器	杯	[9.3]	2.9	5B96-1青灰	ヘラ記号
37		60-7e		下層		鉢形器	杯	[9.0]	(2.8)	N-49K	右回り
38		60-7l		上層		鉢形器	杯	[10.0]	(3.2)	N-89K白	右回り
39				上層		鉢形器	杯	[10.4]	(4.2)	5PB4-1暗青灰	右回り
40		60-7h		上層		鉢形器	杯	[10.6]	(2.6)	N-59K	右回り
41		60-8e		下層		鉢形器	杯	[10.8]	(3.4)	N-49K	ヘラ記号
42		60-7i		上層		鉢形器	杯	[10.8]	(2.4)	N-59K	
43		60-8e		下層		鉢形器	杯	[10.8]	(3.1)	N-59K	
44		60-7g		下層		鉢形器	杯	[10.4]	3.3	N-59K	
45		60-7i		上層		鉢形器	杯	[11.2]	3.6	5PB6-1青灰	
46				下層		鉢形器	杯	[11.2]	3.9	5B5-1青灰	右回り ヘラ記号
47		60-7i		上層		鉢形器	杯	[11.8]	4.8	N-69K	
48				上層		鉢形器	杯	[11.4]	(5.5)	N-69K	
49		60-7e		上層		鉢形器	杯	[14.6]	(4.7)	N-59K	右回り
50		60-7i		上層		鉢形器	杯	[14.4]	4.5	N-59K	
51		60-7e		下層		鉢形器	無蓋高杯	[16.4]	(4.5)	N-59K	ヘラ記号
52		60-7g		下層		鉢形器	高杯	[9.3]	N-79K白	脚付(9.8)	
53		60-7e		上層		鉢形器	高杯	[3.6]	3.5	5V3-19K	脚付(13.4)
54		60-8h		下層		鉢形器	高杯	[7.5]	N-69K	脚付(8.2)	
55		60-7e		上層		鉢形器	無蓋高杯	[2.6]	N-69K	脚付(6.2)	
56		60-7i		下層		鉢形器	無蓋高杯	[3.2]	5B6-1青灰	高台付(8.0)	
57		60-8c		下層		鉢形器	無蓋高杯	[12.0]	6.5	N-59K	脚付(7.2) ヘラ記号
58		60-7i		上層		鉢形器	台形器	[3.7]	N-89K白	高台付(9.8)	
59		60-8f		上層		鉢形器	無蓋高杯	[4.7]	N-69K	高台付(6.6)	
188 -60		60-7e		下層		鉢形器	長持垂耳	[10.2]	(2.5)	N-69K	
61	80 -1	60-7g		上層		鉢形器	平底	[10.7]	3.5	N-79K白	右回り
62		60-7h		上層		鉢形器	平底	[6.4]	(5.2)	N-59K	
63		60-7i		下層		鉢形器	平底	[7.8]	(6.0)		
64	78 -2	60-7i		上層		鉢形器	瓶	[22.0]	2.7	N-59K	右回り
65	79 -4	60-7g		下層		鉢形器	瓶	[8.0]	5PB6-1青灰		
66		60-7i		上層		鉢形器	瓶	[11.8]	(2.8)	N-69K	
67		60-7i		上層		鉢形器	瓶	[10.0]	(4.2)	N-69K	右回り
68		60-7b		上層		鉢形器	直筒瓶	[7.4]	5.5	5PB6-1青灰	
69	80 -2	60-8g		上層		鉢形器	直筒瓶	7.2	8.6	N-49K	右回り
70		60-7c		下層		鉢形器	瓶	[6.8]	(5.4)	N-39K	
71		60-7d		下層		鉢形器	直口瓶	[7.6]	(4.1)	5V4-19K	左回り
72		60-7i		上層		鉢形器	長持垂耳	[9.6]	(4.5)	5PB3-1暗青灰	
73		60-7h		上層		鉢形器	台形長持垂耳	[9.7]	N-59K	二方透かし	
74		60-7i		上層		鉢形器	台形長持垂耳	[2.7]	5PB6-1青灰	脚付(10.4)	
75		60-7e		下層		鉢形器	瓶	[12.0]	(4.2)	N-69K	
76		60-7b		下層		鉢形器	直口瓶	[14.6]	(7.7)	5B6-1青灰	
77		60-7v		下層		鉢形器	瓶	[14.8]	(3.0)	N-79K白	
78		60-7g		上層		鉢形器	瓶	[18.8]	(6.5)	N-89K白	
79				上層		鉢形器	瓶	[22.0]	(4.7)	5PB6-1暗青灰	
80		60-7i		上層		鉢形器	瓶	[23.6]	(3.7)	N-69K	
81		60-7i		下層		鉢形器	瓶	[23.4]	(6.7)	5PB5-1紫灰	ヘラ記号
82		60-7i		下層		鉢形器	瓶	[25.6]	(6.1)	10YR4-1陶瓶	
83				下層		鉢形器	瓶	[19.8]	(8.4)	N-59K	ヘラ記号
84		60-7g		下層		鉢形器	瓶	[22.6]	(5.0)	5B7-1暗青灰	
85		60-8c		下層		鉢形器	瓶	[19.4]	(8.5)	N-69K	
86		60-7g		下層		鉢形器	瓶	[28.4]	(13.3)	N-79K白	
87		60-8g		上層		鉢形器	瓶	[34.2]	(4.9)	2.5V4-19K	
88		60-7i		下層		鉢形器	瓶	[38.0]	(7.9)	N-79K白	
189 -89		60-8g		下層		土器	杯	[8.6]	2.9	5PB5-4C-5A-中輪	
90		60-7g		上層		土器	杯	[9.3]	(2.9)	5VB6-6櫛	
91		60-7h		上層		土器	杯	[9.0]	(3.3)	7.5V87-4C-5A-櫛	
92		60-7i		上層		土器	杯	[9.6]	3.6	7.5V87-4櫛	
93		60-7g		上層		土器	杯	[10.2]	3.0	10YR8-29K白	
94		60-7h		上層		土器	杯	[10.2]	3.3	10YR7-31C-5A-黃砂	
95		60-7i		上層		土器	杯	[10.4]	(2.9)	5VR4-6櫛	
96	89 -8	60-8h		下層		土器	杯	[10.3]	4.3	5VB6-6櫛	
97		60-7g		下層		土器	杯	[10.8]	(3.2)	2.5V85-6櫛	
98		60-7i		上層		土器	杯	[11.0]	(3.5)	3YR8-4櫛	
99		60-7g		上層		土器	杯	[11.3]	(3.7)	7.5V88-3櫛	
100		60-7i		上層		土器	杯	[11.2]	(3.6)	7.5V87-4C-5A-櫛	

表20 出土遺物観察表 (11)

番号	地 区	遺 墓 番号	層 位 類別	備 考	種 別	器 物	法 葉		色 調	特 徴
							(1) #	(2) #		
189 -101	6N -8		下層		土加器	杯	(11.4)	(4.0)	2.5YR5-6明赤褐色	
102	6N -8i		上層		土加器	杯	(11.8)	(3.4)	5YR4-8赤褐色	
103	6O -7g		上層		土加器	杯	(12.0)	(3.6)	10YR8-3灰黃褐色	
104			上層		土加器	杯	(12.1)	(3.3)	10YR8-1B(白)	
105			上層		土加器	杯	(12.7)	(2.8)	2.5YR8-29(白)	
106	6N -8		下層		土加器	杯	(12.8)	(3.4)	2.5YR5-6明赤褐色	
107	6N -8i		上層		土加器	杯	(12.2)	(4.5)	5YR5-8赤褐色	
108	6N -8		下層		土加器	杯	(15.3)	(5.1)	5YR5-6赤褐色	
109	6O -7i		上層		土加器	杯	(15.8)	(4.5)	7.5YR7-4Iに4.5v+棕	
110	6N -8i		下層		土加器	杯	(15.6)	(4.5)	2.5YR5-8明赤褐色	
111	6N -8		下層		土加器	杯	(15.4)	(4.6)	5YR4-6赤褐色	
112	6O -7i		下層		土加器	杯	(16.0)	(4.8)	2.5YR5-6明赤褐色	
113	6N -8g		下層		土加器	杯	(17.4)	(3.1)	2.5YR5-6明赤褐色	
114	6O -7i		上層		土加器	杯	(16.8)	(5.8)	2.5YR5-8明赤褐色	
115	6N -8i		下層		土加器	杯	(17.2)	(4.8)	5YR5-6赤褐色	
116	6N -8i		下層		土加器	杯	(18.4)	(4.7)	5YR4-6赤褐色	
117	6N -8i		下層		土加器	杯	(18.4)	(5.0)	2.5YR5-8明赤褐色	
118	6N -8		下層		土加器	杯	(19.0)	(5.0)	2.5YR4-8赤褐色	
119	6O -7i		下層		土加器	白口盤	(4.3)	10YR8-1B(白)	脚付(11.4)	
190 -120			下層		土加器	皿	(21.5)	3.7	2.5Y8-4I赤褐色	
121	6O -7i		上層		土加器	皿	(22.6)	(4.3)	10YR8-2M(黄褐色)	
122	6O -7g		上層		土加器	皿	(24.3)	(2.9)	10YR7-2Iに5v+黄褐色	
123 91 -3			上層		土加器	皿	(24.0)	3.3	10YR8-2B(白)	木の蓋底
124	6O -7i		上層		土加器	皿	(24.6)	3.3	7.5YR8-1B(黄褐色)	
125 91 -4	6O -7i		上層		土加器	皿	(24.6)	3.8	2.5YR8-2B(白)	
126	6N -8i		下層		土加器	皿	(21.8)	(3.8)	2.5YR5-8明赤褐色	
127 91 -5	6O -7i		上層		土加器	皿	(24.0)	3.6	10YR5-2B(黄褐色)	
128	6O -7g		下層		土加器	皿	(24.7)	(3.5)	10YR6-2M(黄褐色)	
129	6O -7i		上層		土加器	皿	(24.7)	(3.7)	7.5YR6-4Iに4.5v+棕	
130			上層		土加器	皿	(19.8)	(2.8)	5YR5-6赤褐色	
131	6O -7i		下層		土加器	皿	(24.7)	(3.5)	10YR8-2M(白)	
132	6O -7g		上層		土加器	皿	(21.2)	2.7	10YR8-1B(白)	
133 91 -6	6O -7i		上層		土加器	皿	(22.3)	3.8	10YR7-2Iに4.5v+黄褐色	
134	6O -7g		下層		土加器	皿	(22.5)	2.3	5YR6-8赤褐色	
135	6O -7i		上層		土加器	皿	(25.0)	4.0	7.5YR7-4Iに4.5v+棕	
190 -136 92 -2	6O -7g		上層		土加器	二ニチュア	6.2	2.6	5YR6-6赤褐色	
137	6N -8i		下層		土加器	二ニチュア	(7.8)	(3.7)	10YR7-2Iに4.5v+供給	
138	6O -7i		下層		土加器	二ニチュア	(7.6)	(4.0)	10YR8-2B(白)	
139	6N -8d		下層		土加器	直口皿	(9.6)	(6.0)	7.5YR7-4Iに4.5v+棕	
140	6O -7g		下層		土加器	直口皿	(8.6)	3.8	5YR6-8赤褐色	
141	6N -8g		下層		土加器	直口皿	(3.8)	2.5YR5-8明赤褐色	脚付4.8	
142 92 -3			上層		土加器	二ニチュア	(4.4)	3YR4-6赤褐色	脚付5.2	
143	6O -7d		上層		土加器	高杯	(19.8)	(3.2)	5YR6-4赤褐色	
144	6N -8		下層		土加器	高杯	(18.2)	(4.7)	5YR5-6赤褐色	
145	6N -8i		上層		土加器	高杯	(5.4)	2.5Y5-5I(黄灰)	脚付9.9	
146	6O -7g		上層		土加器	高杯	(6.2)	7.5YR8-4I灰黃褐色	脚付10.2	
147	6O -7i		上層		土加器	高杯	(6.5)	10YR7-2Iに4.5v+黄褐色	脚付(9.8)	
148	6O -7g		上層		土加器	高杯	(8.0)	7.5YR7-6棕	脚付9.0	
149	6O -7i		上層		土加器	高杯	(5.9)	10YR8-3Iに4.5v+黄褐色	脚付10.5	
150	6O -7g		下層		土加器	高杯	(8.3)	10YR8-1B(白)	脚付10.0	
151	6O -7i		上層		土加器	高杯	(7.7)	7.5YR7-3Iに4.5v+棕	脚付9.4	
152	6O -7i		下層		土加器	沙汰	(1.8)		灰褐色(5.6)	
153	6N -8d		下層		土加器	沙汰	(3.9)	7.5YR2-1黑	灰褐色(7.0)	
154	6O -7g		下層		土加器	沙汰	(8.8)	2.5YR6-6棕	灰褐色(5.0)	
155	6N -8d		上層		土加器	沙汰	(10.6)	(6.7)	5YR4-6赤褐色	
156	6N -8g		下層		土加器	沙汰	(20.8)	(8.8)	7.5YR6-3Iに4.5v+褐	
157	6N -8		下層		土加器	片口鉢	(16.0)	(9.2)	7.5YR4-3褐	
158	6N -8i		下層		土加器	鉢	(16.4)	(7.3)	5YR4-6赤褐色	
159	6O -7i		上層		土加器	鉢	(24.6)	(7.4)	10YR8-3灰黃褐色	
160	6O -7h		上層		土加器	鉢	(22.8)	(11.1)	7.5YR7-6棕	
161	6N -8i		下層		筒式土器	平底鉢			7.5YR3-1灰褐色	
192 -162	6O -7g		上層		土加器	直口皿	(9.0)	(6.1)	2.5YR7-2B(黄)	
163	6N -8		下層		土加器	直口皿	(9.8)	(3.0)	3YR4-4Iに4.5v+赤褐色	
164			下層		土加器	直口皿	(11.2)	(5.4)	10YR3-1I(黄)	
165	6N -8f		上層		土加器	直口皿	(12.0)	(5.2)	10YR6-2M(黄褐色)	
166	6N -8		下層		土加器	直口皿	(13.6)	(4.2)	5YR4-6赤褐色	
167	6O -7g		上層		土加器	直口皿	(7.5)	10YR8-2B(白)		
168			上層		土加器	直口皿	(12.2)	(6.4)	10YR7-4Iに4.5v+黄褐色	
169	6N -8g		下層		土加器	直口皿	(13.4)	(5.5)	5YR4-4Iに4.5v+赤褐色	
170	6O -7i		下層		土加器	直口皿	(13.2)	(5.0)	5YR6-6赤褐色	
171	6O -7i		上層		土加器	直口皿	(14.6)	(4.2)	7.5YR6-4Iに4.5v+棕	
172	6N -8g		下層		土加器	直口皿	(14.6)	(5.0)	10YR6-2M(黄褐色)	
173	6N -8f		上層		土加器	直口皿	(13.8)	13.8	10YR6-2M(黄褐色)	
174			上層		土加器	直口皿	(15.6)	(5.9)	10YR5-2M(黄褐色)	
175	6O -7g		上層		土加器	直口皿	(16.6)	(4.3)	10YR8-3灰黃褐色	
176	6O -7i		上層		土加器	直口皿	(16.0)	(4.2)	5YR5-6赤褐色	
177	6N -8i		下層		土加器	直口皿	(17.4)	(3.9)	2.5YR5-6明赤褐色	
178	6O -7g		上層		土加器	直口皿	(17.4)	(5.3)	7.5YR8-4I灰黃褐色	
179	6N -8i		上層		土加器	直口皿	(18.8)	(4.1)	10YR7-3Iに4.5v+黄褐色	

表21 出土遺物観察表(12)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	層位	備考	種別	器種	法		色調	特徴
								口径	器高		
192 -180	60 -7c			下層		土器器	甕	(18.8)	(6.1)	5YR5/41-55・小粒	
181	6N -8g			下層		土器器	甕	(21.4)	(3.8)	7.5YR5/29・褐	
182				下層		土器器	甕	(23.4)	(7.0)	5YR6-6橙	
183	6N -8i			最下層		土器器	甕	(22.2)	(7.6)	5YR5-6明赤陶	
184	60 -7i			下層		土器器	甕	(26.8)	(6.2)	7.5YR6-8褐	
185				上層		土器器	甕	(23.4)	(8.1)	10YR8/1灰白	
186	60 -7j			上層		土器器	甕	(13.3)	2.5YR6-6橙		底径5.0
187	60 -7g			上層		土器器	甕	35.3	(5.7)	7.5YR7-6褐	
188				下層		土器器	甕	(37.6)	(9.0)	5YR6-6橙	
193 -189	6N -8h			下層		土器器	瓦			2.5V2/1黑	
190	60 -7l			下層	281-1741(背周數)	輪船	輪船			7.5YR8/29・白	
191	60 -7l			上層		輪船	輪船			7.5YR7-31-55・橙	
192				上層		輪船	輪船			5YR6-8橙	
194 -193	6N -8			下層		輪船	輪船			2.5V4/31-55・赤陶	底忠異
194	60 -7v			下層		輪船	輪船			2.5V2/2-3輪船赤陶	底忠異
195	60 -7g			上層		輪船	輪船	37.6	(30.5)	7.5YR7-6橙	
195 -1	7N -4	151	漆			組合器	杯	(9.4)	(2.5)	N -50K	
2						組合器	杯身	(2.5)	N -50K	高台徑(12.0)	
3	7N -4k					組合器	杯身	(9.5)	10YR7-19・白		
198 -1	70 -2a	1501	漆			組合器	手瓶	(10.6)	(2.7)	10YR6-19K	右回り
2						土器器	高杯			(7.7)	2.5YR5-8明赤陶
3	6N -9b	1819	漆			組合器	甕	(14.5)	(3.1)	N -60K	右回り
4	6N -9b	1821	漆			組合器	甕	(11.6)	2.5	5P5/1-5灰	右回り
5						土器器	高杯	(15.5)	(4.5)	5YR6-6橙	
6	7N -3	6N -9j	1848	漆		組合器	甕	(9.5)	5Y5/19	右回り	
7						土器器	杯	(16.5)	(5.4)	5YR5-6明赤陶	
8						土器器	杯	(28.4)	(6.9)	5YR5/41-55・赤陶	
9	6N -10k	1948	漆			瓦器	瓦	(14.8)	3.9	N -30K灰	高台徑(2.9)
10	100 -6					瓦器	瓦	(15.7)	3.7	N -25K	高台徑(3.5)
199 -1	6N -10k	1506	漆	下層		土器器	小瓶	(10.2)	(2.1)	10YR7-41-55・黃澄	
2	7N -11					土器器	中瓶	(15.8)	(3.0)	7.5YR7-6褐	
3	6N -9b			下層		瓦器	瓦	(15.0)	(4.4)	N -25K	
4	6N -10k			上層		瓦器	瓦	(2.8)	N -25K	高台徑(5.6)	
5	6N -9b			下層		瓦器	瓦	(4.2)	N -25K	高台徑(6.4)	
6	6N -10k			下層		土器器	台付瓶	(2.8)	2.5YR7-41-55・橙	輪徑(13.1)	
7				上層		土器器	瓶子			5YR4-6水瓶	
8				下層		土器器	計畫	(18.6)	(5.3)	5YR6-6橙	
9	7N -25					陶器	陶器	(29.0)	(7.0)	2.5V1/1灰	常滑
10	6N -10k			下層		陶器	甕	(45.6)	(6.0)	N -30K灰	新美
11				上層		瓦器	瓦			5Y6/19	
12				上層		瓦器	瓦			5YR5/41-55・赤陶	
13				上層		瓦器	瓦			5Y7/1灰白	
14				上層		瓦器	瓦			5YR5-6明赤陶	
15				下層		瓦器	瓦			5YR5-6赤陶	
16	6N -9b			下層		瓦器	瓦			10YR8/1黒陶	
200 -1	7N -3	70 -4b	92	漆		組合器	杯身	10.1	3.6	N -79K白	左回り
204 -1	60 -30a	1	漆	下層		組合器	杯蓋	(1.4)	N -6K		
2	70 -1a					組合器	杯蓋	(2.1)	N -50K	右回り	
3	6N -9k			下層		組合器	杯蓋	(10.0)	(1.5)	N -6K	右回り
4	70 -4b					組合器	杯蓋	(10.2)	(2.3)	N -6K	
5	60 -9a			下層		組合器	杯蓋	(9.4)	(2.7)	N -60K	右回り
6	60 -30a					組合器	杯蓋	(9.6)	(2.9)	N -50K	
7	77 -3	70 -2a				組合器	杯蓋	10.0	2.8	N -79K白	右回り
8	70 -5b			下層		組合器	杯身	(10.2)	(3.2)	N -50K	右回り ハラ記号
9	70 -3a					組合器	杯身	(10.6)	3.2	5Y7/19・白	右回り ハラ記号
10	70 -1a					組合器	杯身	(11.2)	(3.4)	7.5Y7/1灰白	右回り
11	60 -2a			下層		組合器	杯蓋	(11.4)	(2.9)	N -60K	右回り
12				下層		組合器	杯蓋	(11.8)	(3.4)	N -60K	右回り
13	70 -4b					組合器	杯蓋	(12.6)	(2.5)	N -60K	右回り
14	60 -30a					組合器	杯蓋	(12.2)	(3.3)	N -60K	右回り
15	70 -1a					組合器	杯蓋	(12.4)	(3.6)	10YR6/1青灰	右回り
16	70 -2a, b			上層		組合器	杯蓋	(12.6)	(3.8)	N -60K	
17	70 -2b					組合器	杯蓋	(12.8)	(2.0)	N -79K白	右回り
18	60 -30a			下層		組合器	杯蓋	(12.7)	3.7	N -60K	右回り
19						組合器	杯蓋	(13.1)	(2.9)	N -60K	右回り
20	73 -4			下層		組合器	杯蓋	12.9	4.0	N -60K	右回り
21	5			下層		組合器	杯身	13.0	3.4	N -50K	右回り
22				下層		組合器	杯蓋	(11.6)	(3.8)	N -80K白	ハラ記号
23	70 -5b					組合器	杯蓋	(12.4)	(3.6)	N -50K	右回り ハラ記号
24	70 -3b					組合器	杯蓋	(12.4)	(3.8)	N -40K	右回り ハラ記号
25	74 -4	70 -2a				組合器	杯身	8.7	2.9	N -50K	右回り
26	6N -9j			下層		組合器	杯身	10.0	(3.1)	N -60K	右回り
27	60 -9a			上層		組合器	杯身	(10.4)	(2.2)	N -60K	右回り
28				下層		組合器	杯身	(10.5)	3.5	10YR6/1青灰	右回り
29	70 -3b					組合器	杯身	(10.8)	(2.8)	5YR4/1青灰	
30	70 -3a			下層		組合器	杯身	(10.9)	(2.8)	N -60K	左回り
31	60 -9a			下層		組合器	杯身	(12.4)	(2.2)	N -60K	右回り
32				下層		組合器	杯身	(12.5)	(2.6)	5Y5/1青灰	
33	74 -5	70 -4b				組合器	杯身	9.5	3.5	N -60K	右回り ハラ記号

表22 出土遺物觀察表 (13)

番号	地区	遺種 多品種類	層次	備考	種別	器種	法量		色調	特徴
							計	基面		
204	34	74 - 7	7N - 5a		須恵器	杯身	10.1	3.3	N - 69%	ヘラ記号
35	8	70 - 2a2b	上層		須恵器	杯身	9.0	3.1	N - 69%	ヘラ記号
36		60 - 9a	下層		須恵器	杯身	(10.4)	(3.3)	N - 69%	右回り
37	74 - 9	70 - 2a			須恵器	杯身	9.9	3.4	N - 58%	右回り
38		6N - 8			須恵器	杯身	(10.2)	(3.3)	N - 78%白	右回り
39		70 - 2b			須恵器	杯身	(10.4)	(3.6)	N - 58%	右回り
40		70 - 2a2b	上層		須恵器	杯身	(10.6)	3.1	N - 49%	
41		70 - 2a			須恵器	杯身	(10.8)	(3.0)	N - 69%	右回り
42		70 - 4b	下層		須恵器	杯身	(11.2)	(3.4)	5P96-1青灰	右回り
43		60 - 10a	下層		須恵器	杯身	(12.2)	3.6	N - 58%	右回り
44		60 - 9a	下層		須恵器	杯身	(10.6)	(3.5)	5M66-1青灰	右回り ヘラ記号
45			下層		須恵器	杯身	(11.4)	3.2	N - 78%白	右回り ヘラ記号
46	74 - 10	60 - 10a	下層		須恵器	杯身	11.5	3.7	N - 58%	右回り ヘラ記号
47		70 - 6c	上層		須恵器	杯身	(9.8)	3.1	5P97-1明青灰	右回り
48	74 - 11	70 - 2a			須恵器	杯身	9.8	3.5	N - 58%	右回り
49	12	70 - 1a			須恵器	杯身	10.2	3.6	N - 69%	右回り
50		70 - 2b			須恵器	杯身	(10.4)	(3.6)	N - 69%	右回り
51		70 - 6b			須恵器	杯身	(10.8)	(3.7)	N - 58%	右回り
52	75 - 4	60 - 10a			須恵器	杯身	10.8	4.3	N - 49%	
53			下層		須恵器	杯身	(11.4)	(3.9)	N - 49%	
54		70 - 5b	下層		須恵器	杯身	(10.4)	(3.8)	N - 58%	右回り ヘラ記号
55		70 - 2b	下層		須恵器	杯身	(10.3)	(3.6)	N - 58%	右回り ヘラ記号
56		60 - 10a	下層		須恵器	杯身	(11.0)	(3.8)	N - 49%	右回り ヘラ記号
205	-	6N - 10a			須恵器	無蓋高杯	(11.8)	(3.5)	N - 58%	ヘラ記号
58		70 - 1a			須恵器	高杯少	(2.2)		N - 78%白	脚径(9.8) 右回り
59		60 - 9a	下層		須恵器	高杯	(5.1)		N - 78%白	脚径(8.8) 右回り
60		70 - 2a			須恵器	無蓋高杯	11.6	(2.6)	N - 78%白	右回り
61	28 - 6	60 - 9a	上層		須恵器	無蓋高杯	11.8	6.4	10M66-1青灰	脚径(3)
62		70 - 3b			須恵器	高杯	(4.7)		N - 69%	脚径(5.8)
63		70 - 5b	下層		須恵器	高杯垂	(1.6)		N - 69%	右回り
64		60 - 10a	下層		須恵器	高杯垂	(12.2)	(3.5)	N - 38%白	右回り
65	28 - 3				須恵器	高杯垂	15.1	4.5	N - 49%	右回り
66		60 - 9a	上層		須恵器	高杯垂	15.0	3.4	N - 69%	右回り
67		60 - 10a			須恵器	高杯	(14.6)	(3.0)	N - 49%	
68		70 - 3b			須恵器	高杯	(10.0)		N - 29%	脚径(10.6) 二段二方透かし
69		7N - 5a			須恵器	高杯	(9.2)		7.5Y6-19K	脚径(11.3) 右回り
70		60 - 9a	上層		須恵器	高杯	(3.1)		7.5G7-1明青灰	脚径(11.4) 左回り
71		60 - 10a	F層		須恵器	高杯	(14.7)		N - 69%	脚径(11.8) 二段二方透かし
72			下層		須恵器	高杯	(2.1)		N - 58%	右回り 脚径(13.8)
73		70 - 5b	F層		須恵器	高杯	(1.7)		N - 38%白	右回り
74		6N - 9j	F層		須恵器	瓶	(12.8)	(4.0)	10Y4-19c	
75		6N - 10a			須恵器	瓶	(13.4)	(8.0)	N - 69%	
76		70 - 4b	F層		須恵器	瓶	(27.6)	(11.6)	N - 49%	
77	80 - 6	7N - 5a			須恵器	長颈瓶	(11.2)		N - 58%	右回り
78	7	60 - 10a	F層		須恵器	長颈瓶	(16.0)		N - 58%	右回り
79		70 - 2b			須恵器	長颈瓶	(6.6)		N - 69%	右回り
80					須恵器	長颈瓶	(10.0)		5P96-1青灰	右回り
81					須恵器	瓶	(9.6)		N - 49%	右回り
82					須恵器	長颈瓶	(8.8)		N - 38%白	右回り
83	81 - 1	70 - 6b			須恵器	白付長颈瓶	(11.6)		N - 78%白	右回り
84		70 - 2a			須恵器	白付长颈瓶	(3.7)		N - 38%白	脚径(10.4)
85					須恵器	白付長颈瓶	(2.6)		N - 49%	脚径(11.0) 右回り
86					須恵器	白付长颈瓶	(3.2)		N - 69%	脚径(12.8) 右回り
87					須恵器	白付长颈瓶	(3.2)		5P96-1青灰	脚径(9.4) 四方透かし
88		70 - 2b			須恵器	白付长颈瓶	(5.1)		N - 49%	脚径(13.2) 右回り 三方透かし
206	89	70 - 1a			須恵器	平瓶	6.2	(6.0)	N - 58%	右回り
90		6N - 10a			須恵器	平瓶	(6.2)	(6.5)	N - 49%	
91		70 - 4b	F層		須恵器	平瓶	7.3	(6.0)	N - 49%	
92		70 - 2a			須恵器	平瓶	(8.0)	(3.7)	7.5Y6-19K	
93		60 - 9a	上層		須恵器	平瓶	(13.0)	(6.8)	N - 69%	右回り
94		70 - 2a			須恵器	平瓶	(2.4)		N - 58%	底律(8.2)
95		6N - 9j	F層		須恵器	平瓶	(5.5)		N - 49%	底律(7.4)
96		6N - 10a			須恵器	平瓶	(7.0)		N - 28%白	底律(8.2)
97	81 - 4	70 - 4b			須恵器	平瓶	8.0	14.8	5YR5-8明赤鶏	底律(9.2)
98		60 - 9a			須恵器	網柄	(11.8)	(8.5)	N - 28%白	左回り
99		6N - 9j			須恵器	網柄	(10.2)	(4.0)	7.5T7-19K白	右回り
100		60 - 10a	F層		須恵器	网	(12.5)	(4.3)	N - 58%	右回り
101					須恵器	网	(16.4)	(4.7)	N - 58%	右回り
102		70 - 3b			須恵器	器口	(27.8)	(6.8)	N - 58%	
103		60 - 9a	上層		須恵器	器口	(18.8)	(5.7)	10G4-1断頭灰	
104		70 - 3b			須恵器	器口	(23.2)	(5.5)	N - 58%	
105					須恵器	器口	(25.6)	(5.4)	5P96-1青灰	左回り
106		70 - 4b			須恵器	器口	(19.6)	(5.9)	5P97-1明青灰	
107		60 - 10a			須恵器	器口	26.2	(5.2)	5Y7-19K白	
108		6N - 9j			須恵器	器口	(20.6)	(9.6)	N - 69%	
207	109	60 - 9a	上層		土師器	杯	(10.6)	(3.1)	5YR8-4断根	

表23 出土遺物観察表(14)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	層位	備考	種別	器種	法長		色調	特徴
								口径	器高		
200	-110	70-2a				土器	杯	(11.2)	(2.8)	5YR6-6号	
111	89-11	60-10a		下層		土器	杯	10.4	4.3	7.5YR6-4浅黃色	
112		70-4b				土器	杯	(11.6)	4.2	2.5YR6-6号	
113		60-4j		下層		土器	杯	(11.0)	(2.6)	2.5YR5-5明赤褐色	
114		60-10a				土器	杯	(10.8)	3.6	5YR6-6号	
115	89-7	70-5a				土器	杯	11.2	3.8	2.5YR5-5明赤褐色	
116		70-2a				土器	杯	(11.4)	(4.1)	5YR5-6号	
117		60-10a				土器	杯	(11.8)	(3.9)	7.5YR6-6号	
118		70-2a,2b		上層		土器	杯	(11.6)	(4.5)	5YR6-4C,5A,5B	
119	89-12	60-10a		下層		土器	杯	(11.2)	5.0	7.5YR3-3黒褐色	
120	89-9	70-2a				土器	杯	11.8	4.9	2.5YR5-5明赤褐色	
121		60-10a		下層		土器	杯	(12.5)	(4.1)	5YR5-6号	
122						土器	杯	(12.6)	(4.3)	5YR4-6号	
123	89-10			下層		土器	杯	12.4	4.8	2.5YR4-6号	
124				下層		土器	杯	(12.6)	(2.5)	2.5YR5-5明赤褐色	
125				下層		土器	杯	(12.8)	(3.5)	5YR4-6号	
126	90-1			下層		土器	杯	(12.8)	(4.5)	2.5YR5-5明赤褐色	
127		70-4c		上層		土器	杯	(14.1)	5.6	5YR4-8号	
128		60-10a		下層		土器	杯	(13.0)	(3.4)	2.5YR5-5明赤褐色	
129				下層		土器	杯	(13.6)	4.1	5YR5-6号	
130		70-2a				土器	杯	(16.0)	(3.6)	7.5YR7-4C,5A,5B	
131		60-9a		下層		土器	杯	(16.2)	(3.7)	7.5YR7-31,45,5D	
132		60-10a		下層		土器	杯	(17.1)	(5.8)	7.5YR5-5明赤褐色	
133		60-9a		下層		土器	杯	(17.3)	(4.5)	5YR5-6号	
134		70-2a				土器	杯	(18.3)	(3.7)	5YR6-6号	
135						土器	杯	(17.6)	(5.1)	7.5YR2-1号	
136		70-2a,2b		上層		土器	杯	(18.0)	6.2	10YR2-31,45,5A,5B	
137		70-4a				土器	杯	(17.5)	(6.1)	2.5YR5-5明赤褐色	
138		70-2a		下層		土器	皿	(18.6)	(3.8)	5YR6-6号	
139		60-30a				土器	皿				
140		70-4c		上層		土器	高杯	15.2	(5.2)	5YR4-6号	
141		60-9a		上層		土器	高杯	(15.0)	(3.5)	10YR8-3浅黃色	
142		60-30a		下層		土器	高杯	(17.4)	(2.7)	7.5YR7-4C,5A,5B	
143	90-9	70-2a				土器	高杯	16.2	(5.9)	5YR5-6号	
144		70-5b		下層		土器	高杯	16.5	(4.3)	2.5YR4-4C,5A,5B	
145		60-30a		下層		土器	高杯	(17.2)	(11.9)	7.5YR7-4C,5A,5B	
146				下層		土器	高杯	(17.2)	(5.8)	2.5YR5-5明赤褐色	
147				下層		土器	高杯	18.0	(5.0)	7.5YR7-4C,5A,5B	
148						土器	高杯	(5.2)	5YR6-6号		
149		70-2a				土器	高杯	(6.3)	5YR5-6号		
150		60-9a		下層		土器	高杯	(7.1)	3YR8-3淡褐色		
151		60-10a		下層		土器	高杯	(7.8)	5YR6-6号		
152		70-5c		上層		土器	高杯	(8.7)	5YR6-6号		
153		70-2a				土器	高杯	(7.4)	2.5YR5-5明赤褐色		
154		60-10a				土器	高杯	8.3	5YR6-6号		
208	-155	92-4	60-9a	下層		土器	1.ニチユア	6.4	6.1	5YR8-3淡褐色	底挫3.7
156	94-7	70-2b				土器	小口瓶	8.8	7.9	5YR5-4C,5A,5B	底挫10.2
157						土器	1.ニチユア	(6.0)	(5.3)	7.5YR7-4C,5A,5B	底挫10.0
158		60-9j		下層		土器	1.ニチユア				
159		70-5a				土器	1.ニチユア	(6.2)	10YR8-29,黃褐色		
160		70-2a,2b		上層		土器	1.ニチユア				
161	93-3	70-4b		下層		土器	1.ニチユア	(14.4)	(12.2)	5YR6-8号	
162		60-10a		下層		土器	1.ニチユア	13.4	(13.2)	10YR8-3浅黃色	
163		70-2a				土器	1.ニチユア				
164		70-3b				土器	1.ニチユア	(4.5)	2.5YR6-6号		
165		70-3a				土器	1.ニチユア	(7.3)	5YR6-8号		
166	92-7	60-30a		下層		土器	1.ニチユア	(2.2)	10YR4-34,5A,5B		
167		70-2a				土器	1.ニチユア	(12.4)	6.3	5YR4-8号	
168		70-3a				土器	1.ニチユア	(11.4)	(6.5)	5YR5-6号	
169		60-9a		上層		土器	1.ニチユア	(11.8)	(5.2)	7.5YR6-6号	
170		70-3a				土器	1.ニチユア	(10.4)	(5.0)	5YR6-8号	
171		60-10a				土器	1.ニチユア	(21.0)	(7.3)	2.5YR5-6号	
172						土器	1.ニチユア	(27.0)	(5.1)	10YR2-21,45,5A,5B	
173		70-5c		上層		土器	1.ニチユア	(29.0)	(4.7)	10YR7-31,45,5A,5B	
174				上層		土器	1.ニチユア	(26.8)	(4.4)	5YR5-4C,5A,5B	
175		60-10a		下層		土器	1.ニチユア	(23.6)	(7.0)	5YR5-6号	
176		60-9a		上層		土器	1.ニチユア	(28.0)	(7.1)	5YR5-4C,5A,5B	
209	177	70-4b				土器	小形甕	(9.5)	(4.3)	5YR5-8明赤褐色	
178		70-4c		上層		土器	甕	(14.0)	(5.8)	2.5YR5-5明赤褐色	
179		60-10a				土器	甕	(15.0)	(5.7)	5YR4-8号	
180		60-9a				土器	甕	(17.0)	(9.1)	5YR6-6号	
181		60-10b		下層		土器	甕	(17.4)	(5.5)	5YR6-6号	
182		60-9a		下層		土器	甕	(18.0)	(5.5)	5YR6-6号	
183						土器	甕	(19.0)	(5.5)	5YR6-6号	
184		60-9j				土器	甕	(21.4)	(5.1)	7.5YR8-4浅黃色	
185		70-2a				土器	甕	(15.8)	(11.9)	5YR7-4C,5A,5B	
186		70-2b				土器	甕	(6.3)	10YR8-29,白		
187		60-9a		上層		土器	甕	(31.2)	(6.2)	7.5YR7-6号	

表24 出土遺物觀察表 (15)

番号	地 区	遺 墓	層 次	備 考	種 別	器 物	法 量		色 滴	特 性	
							(cm)	器 物			
209 - 188	70 - 6c		上層		土加器	鉢	(33.4)	(5.2)	10YR 7/21.5G5.黃橙		
189	6N - 10a				土加器	鉢	(36.5)	(17.3)	7.5Y3/3.3M白		
190	70 - 2a2b		上層		土加器	鉢	(26.2)	(13.8)	2.5YR 8/4.8赤		
191	70 - 3a				土加器	鉢			5YR 5.8H赤		
210 - 192	70 - 3b				土加器	形似			7.5YR 7/4.1H5.4橙		
193	70 - 4b				土加器	円筒			5YR 6.6		
194	70 - 6b				土加器	円筒			5YR 5.4L5.5H水	娘忠質	
195	70 - 3a		下層		土加器	円筒			5YR 7.6		
196	70 - 1a				土加器	円筒			5R 1.1H5.4H	娘忠質	
197	70 - 2a				土加器	円筒			5YR 5.2H2.8	娘忠質	
198	6N - 8		下層		土加器	円筒			5YR 5.4L5.5H水	娘忠質	
199	70 - 2a				土加器	円筒			5YR 5.4L5.5H水	娘忠質	
200	70 - 2a2b		上層		土加器	円筒			5YR 6.6	娘忠質	
201	70 - 2a				土加器	円筒			7.5YR 2.2H水	娘忠質	
202	6N - 9		下層		土加器	円筒			7.5YR 8.4H黃橙		
203	60 - 9a		上層		土加器	円筒			7.5YR 7/4.1H5.4橙	娘忠質	
211 - 204	70 - 3b				土加器	円筒	(38.6)	(8.0)	2.5YR 3.1L4.5H水	娘忠質	
205	60 - 9a		上層		土加器	円筒	(35.0)	(14.1)	2.5YR 6.2H水	娘忠質	
206	70 - 5c		上層		土加器	円筒			7.5YR 4.1H5.4H	娘忠質	
207	6N - 9c		下層		土加器	円筒			5YR 6.6		
212 - 208			下層		土加器	卵形			(24.3)	5YR 6.6	
209			下層		土加器	卵形			(14.2)	7.5YR 7/3.1H5.4H水	娘忠質
213 - 1	70 - 6a	10 清	下層		娘忠器	棒身	(9.6)	(3.1)	N - 7W白		
2			下層		娘忠器	棒身	(9.3)	(3.5)	N - 7W白		
3			下層		娘忠器	棒身	(10.3)	(2.9)	N - 7W白		
4			F層		娘忠器	棒身	(10.0)	(3.5)	N - 7W白		
5			F層		土加器	棒	(10.0)	(2.4)	7.5YR 7.6		
6	90 - 2		F層		土加器	棒	12.0	4.2	2.5YR 7.6		
7	3		F層		土加器	棒	11.0	4.2	5YR 6.6		
8	4		F層		土加器	棒	11.8	4.7	5YR 6.6		
9			F層		土加器	棒	(18.0)	(4.2)	7.5YR 7.6		
10			F層		土加器	鉢	(35.2)	(7.7)	5YR 8.3H		
11			F層		土加器	鉢	(12.0)	(5.0)	7.5YR 8.3H		
12			F層		土加器	鉢	(12.8)	(5.2)	5YR 7.4L5.5H		
13			F層		土加器	鉢	(13.8)	(5.1)	10YR 8.2H		
14			F層		土加器	鉢	(14.6)	(5.0)	5YR 6.6		
15			F層		土加器	鉢	(19.2)	(4.9)	2.5YR 8.3H		
16			F層		土加器	鉢	(16.0)	(5.2)	5YR 6.6		
17			F層		土加器	鉢	(17.3)	(6.9)	5YR 6.6		
18			F層		土加器	鉢	(15.0)	(8.0)	5YR 6.6		
19			F層		土加器	鉢	(18.6)	(7.7)	5YR 7.4L5.5H		
20			F層		土加器	鉢	(18.8)	(7.7)	5YR 6.6		
21			F層		土加器	鉢	(23.8)	(9.4)	5YR 6.6		
214 - 1	70 - 5b	11 清			娘忠器	棒身	(10.0)	(4.0)	10YR 7.1H青灰		
2	70 - 6b				娘忠器	棒身	(10.2)	(2.7)	5R 6.1H青灰		
3	70 - 5b				土加器	棒	(13.6)	(3.0)	10YR 8.2H		
4					土加器	棒	(16.8)	(4.5)	10YR 8.3H		
5	70 - 6b				娘忠器	直口	(18.7)	(5.3)	N - 8W白		
215 - 1	70 - 6b	12 清			土加器	円筒			7.5YR 4.1H	娘忠質	
2	7N - 6				娘忠器	棒	(12.6)	(3.7)	5YR 7.1H	左回り	
3					娘忠器	棒身	(10.1)	(2.3)	N - 7W白	右回り	
4	70 - 6a				娘忠器	棒身	(10.7)	(3.6)	N - 7W白	右回り	
5	75 - 2	7N - 6			娘忠器	棒身	10.8	3.4	2.5GY 6.1オーバー灰	右回り	
6	70 - 6a				娘忠器	棒身			(2.1)	N - 8W青灰	
7					娘忠器	棒板	(12.6)	(5.9)	5R 6.1H	高台跡	
8	90 - 5	7N - 6			土加器	棒	8.0	4.4	5YR 6.6		
9	70 - 6a				土加器	棒	(11.6)	(3.7)	5YR 6.6		
10	90 - 4	7N - 6			土加器	棒	7.4	4.3	5YR 8.3H		
11	7N - 6				土加器	棒	(14.2)	(7.2)	5YR 7.6		
12	7N - 6				土加器	棒	(19.0)	(4.5)	2.5YR 8.3H		
13					土加器	棒	(21.6)	(4.9)	7.5YR 7.4L5.5H		
14					土加器	棒	(21.8)	(4.3)	2.5YR 8.3H		
15					土加器	棒	(23.0)	(8.0)	5YR 6.6		
219 - 1	70 - 2b	1503 清			娘忠器	棒	(10.4)	(4.2)	5P95.1青灰	右回り	
2	70 - 1b				娘忠器	棒			(11.3)	7.5YR 7.1H	
3	73 - 6				娘忠器	棒	11.6	3.7	5P95.1青灰	右回り	
4	70 - 3a				娘忠器	棒	(12.0)	(4.2)	N - 6W	右回り	
5	73 - 7	70 - 2b			娘忠器	棒	(13.0)	(3.5)	N - 5W	右回り	
6	8				娘忠器	棒	13.4	3.9	5P95.1青灰	右回り	
7	75 - 3	70 - 4b			娘忠器	棒	9.8	3.5	5R 6.1H	ヘラ記号	
8	70 - 3a				娘忠器	棒身	(10.4)	(3.1)	2.5YR 7.1H		
9	70 - 2b				娘忠器	棒身	(11.0)	(3.5)	5P95.1青灰	ヘラ記号	
10	70 - 4b				娘忠器	棒身	(11.4)	(4.4)	N - 5W	右回り	
11					娘忠器	棒身	(11.6)	(3.5)	N - 4W		
12	70 - 2b				娘忠器	棒身	(12.2)	(3.7)	N - 6W	右回り	
13	25 - 4	70 - 2b2c			娘忠器	棒身	12.6	4.2	N - 3W		
14	70 - 2b				娘忠器	棒身	(12.6)	(3.6)	N - 5W		
15	70 - 4a				娘忠器	棒身	(13.8)	(3.2)	10YR 7.1H	右回り	
16	90 - 6	70 - 2a			土加器	棒	7.9	4.3	7.5YR 7.3L4.5H		

表25 出土遺物観察表(16)

番号	地区	遺物	部位	備考	種別	器種	法		色調	特徴
							目	件		
219 -17		70 -3a			上部器	杯	(8.6)	42	5YR6-6橙	
18					上部器	杯	(9.4)	37	10YR7-3黄橙	
19 -90 -7	70 -1b				上部器	杯	10.6	39	25YR5-8中黃粉	
20 -8	70 -3a				上部器	杯	11.2	35	5YR6-6橙	
21 -9	70 -1b				上部器	杯	11.4	36	5YR6-6橙	
22		70 -1a			上部器	杯	(12.2)	37	25YR5-8明赤褐色	
23					上部器	杯	(12.2)	41	10YR8-6淡黃橙	
24		70 -1b			上部器	杯	(12.4)	36	7.5YR8-8淡黃橙	
25		70 -2b			上部器	杯	(12.0)	38	5YR4-4C-5.5A-6小周	
26		70 -1a			上部器	杯	(12.2)	(4.4)	5YR7-4C-5.5A-6	
27		70 -2b			上部器	杯	(12.6)	4.4	5YR5-6中赤褐色	
28		70 -2b-2c			上部器	杯	(14.8)	5.1	5YR4-4C-5.5A-6小周	
29		70 -3a			上部器	杯	(18.2)	6.4	5YR6-6	
30		70 -1b			上部器	杯	(18.4)	7.2	5YR7-6橙	
31		70 -2b			上部器	兜	(11.0)	(4.6)	5YR3-3M赤褐色	
32		70 -3a			上部器	兜	(12.0)	(6.0)	25YR5-6中赤褐色	
33		70 -1a			上部器	兜	(14.8)	(7.6)	25YR4-6-6周	
34		70 -1b			上部器	高杯	(21.8)	(7.0)	5YR5-6中赤褐色	
35		70 -1a			上部器	高杯	(8.5)	25YR5-6橙	脚付(9.8)	
36		70 -2b			上部器	鉢	(14.6)	(9.2)	5YR5-6中赤褐色	
37		70 -1b			上部器	鉢	(13.0)	(5.2)	25YR5-8明赤褐色	
38		70 -2b-2c			上部器	鉢	(17.6)	12.4	25YR5-8明赤褐色	
103 -2										
223 -1	68 -9	1804 青			埴輪軸用埴	埴輪	円筒	44.0	406	10YR8-6浅黃橙
104										
105										
222 -1	68 -4b	1818 青			埴輪	輪身	10.6	3.0	5YR4-4M暗青灰	
2					埴輪	杯	11.6	(3.7)	5YR6-6橙	
3	68 -4b	1834 青			埴輪	高杯	(6.0)	5YR6-6	脚付9.8	
225 -1	60 -9b	1800 青			埴輪	高蓋	(12.6)	3.6	N-6.6	左回り
2					埴輪	高蓋	(12.9)	(2.5)	5Y6-13	右回り
3					埴輪	高蓋	(13.6)	(2.7)	N-5.6	左回り
4					埴輪	高蓋	(12.6)	(3.0)	N-5.6	右回り
5					埴輪	高蓋	(14.2)	(3.8)	N-3.8	右回り
6					埴輪	高蓋	(14.8)	(3.7)	5Y6-13	右回り
7 -73 -9					埴輪	低蓋	12.8	4.0	N-5.6	左回り ヘラ記号
8					埴輪	低蓋	(12.8)	(4.0)	N-5.6	右回り ヘラ記号
9					埴輪	低蓋	(12.8)	(4.0)	N-5.6	右回り ヘラ記号
10 -73 -10					埴輪	低蓋	13.2	4.0	N-5.6	右回り
11		60 -4b			埴輪	輪身	(10.8)	(2.4)	5YR5-1青灰	
12		60 -9b			埴輪	輪身	(11.0)	4.2	N-5.6	右回り
13					埴輪	輪身	(11.4)	3.7	N-5.6	右回り
14					埴輪	輪身	(12.2)	3.6	N-5.6	右回り
15					埴輪	輪身	(10.8)	(2.8)	N-6.6	右回り
16					埴輪	輪身	(11.6)	(2.9)	N-4.9	右回り
17					埴輪	輪身	(12.2)	(2.7)	N-5.6	
18					埴輪	輪身	(12.3)	(3.9)	N-5.6	右回り
19					埴輪	輪身	(10.9)	(3.2)	N-7.9	白
20					埴輪	輪身	(11.6)	(3.7)	N-6.6	右回り
21					埴輪	輪身	(12.0)	4.3	N-6.6	右回り
22					埴輪	輪身	(12.6)	3.6	N-6.6	右回り
23					埴輪	輪身	(11.2)	(2.2)	7.5Y8-19白	右回り
24					埴輪	輪身	11.4	4.0	N-6.6	右回り
25					埴輪	輪身	(12.0)	3.6	N-2.9	右回り
26					埴輪	輪身	(12.8)	(2.1)	N-6.6	右回り
27					埴輪	輪身	(13.8)	(3.6)	5Y6-19	右回り
28					埴輪	輪身	(14.8)	(3.4)	N-6.6	右回り
29					埴輪	輪身	(15.0)	(3.7)	N-7.9	白
30 -75 -5					埴輪	輪身	12.0	4.1	N-5.6	右回り ヘラ記号
31 -6					埴輪	輪身	10.9	3.7	N-6.6	右回り ヘラ記号
32					埴輪	輪身	(11.6)	(3.7)	N-5.6	右回り ヘラ記号
33 -75 -7					埴輪	輪身	11.0	3.7	N-6.6	右回り ヘラ記号
34 -8					埴輪	輪身	11.0	3.9	N-5.6	右回り ヘラ記号
35					埴輪	輪身	(11.8)	(3.6)	N-5.6	右回り ヘラ記号
36 -75 -9					埴輪	輪身	11.8	4.5	10Y6-19	右回り ヘラ記号
226 -37					埴輪	輪身	(10.6)	(6.1)	N-5.6	右回り ヘラ記号
38 -79 -6	60 -4b				埴輪	鉢	12.5	16.0	N-6.6	右回り
39 -79 -5					埴輪	鉢	13.5	16.1	N-5.6	右回り
40 -60 -9b					埴輪	手鏡又は提瓶	(8.6)	(6.0)	N-6.6	右回り
41					埴輪	提瓶	7.4	(7.2)	N-5.6	左回り
42					埴輪	直腹垂耳	(22.6)	(4.9)	N-7.9	白
43					埴輪	高杯	(3.9)	25Y7-19白	脚付8.6 右回り	
44 -60 -8b					埴輪	台付直腹垂耳	(9.9)	N-3.8	N-5.6	右回り
45 -60 -9b					埴輪	台付垂耳	(4.6)	N-6.6	脚付10.4 右回り	
46					埴輪	台付鏡又は高杯	(2.7)	N-6.6	脚付(13.5) 左回り	
47					埴輪	高杯	(12.6)	(4.7)	N-6.6	右回り
48					埴輪	高杯	(12.6)	(4.3)	N-5.6	右回り 透かしの一部 遺存数は不明
49					埴輪	高杯	(14.2)	(5.0)	N-4.9	右回り

表26 出土遺物觀察表 [17]

番 号	地 区	遺 墓 番号	層 位	備 考	種 別	器 物	法 葉		色 滴	特 微
							(1) #	(2) 形態		
226 -50 78 -8					須志器	高杯	(11.4)	16.1	N -58%	脚径(11.2) 右回り 三方透かし
51					須志器	高杯垂	(15.4)	(3.4)	N -58%	左回り
52					須志器	高杯垂	(14.0)	(4.4)	N -68%	右回り
53 78 -4					須志器	高杯垂	15.0	5.1	N -48%	左回り ハラ記号
54 78 -7 60 -80					須志器	高杯	14.0	18.3	10Y7/19C白	脚径15.4 三方透かし
55			60 -90		須志器	高杯?	(6.1)		N -68%	脚径(10.2) 右回り 三方透かし
56					須志器	高杯	(4.8)		SY6-19%	脚径15.8 四方透かし
57					須志器	高杯	(11.3)		N -48%	脚径(11.0) 右回り 三方透かし
58					須志器	高杯	(8.0)		N -48%	脚径14.2 右回り
59					須志器	高杯	(7.9)		SY3-19%	脚径16.6 四方透かし
60			60 -80		須志器	高杯	(2.5)		N -48%	脚径(17.2) 右回り
61			60 -90		須志器	高杯	(9.0)		N -38%	脚径(16.2) 右回り
62			60 -80		須志器	高杯	(9.8)		N -38%	脚径(16.6) 右回り 三方透かし
63			60 -90		須志器	垂	(10.0)	(7.6)	SPH2-2青黒	
64					須志器	垂	(21.2)	(8.8)	SY8-19%	
227 65					土師器	ミニチュア	(4.4)		SY8E-6厚	脚径7.4
66					土師器	ミニチュア	(5.4)	(4.8)	7.5Y1-3周	
67					土師器	杯	(10.2)	(4.2)	SY8S-9白赤褐	
68					土師器	杯	(12.4)	(4.6)	SY8S-9白赤褐	
69					土師器	杯	(12.6)	(4.5)	2.5Y8S-8明赤褐	
70 90 -10					土師器	杯	13.8	(4.8)	2.5Y8S-8明赤褐	
71					土師器	瓶掛垂	(8.8)	(5.0)	SY4-8.8周	
72					土師器	瓶掛垂	8.7	(7.8)	2.5Y8E-8赤褐	
73 93 -4					土師器	直口壺	10.4	18.9	2.5Y8S-8明赤褐	
74			60 -80		土師器	高杯	(3.2)		SY8S-9白赤褐	脚径9.6
75			60 -90		土師器	高杯	(6.5)		SY8S-9白赤褐	脚径10.6
76					土師器	高杯	(6.0)		SY8S-9白赤褐	脚径10.8
77					土師器	高杯	(6.6)		SY8S-9白赤褐	脚径10.0
78			60 -80		土師器	高杯	(5.9)		SY8S-41.45.5-9周	脚径(10.4)
79			60 -90		土師器	高杯	(6.5)		SY8S-9白赤褐	脚径10.2
80			60 -80		土師器	高杯	(6.7)		SY8E-6厚	脚径10.4
81			60 -90		土師器	高杯	(7.7)		SY4-6.6周	脚径(10.8)
82					土師器	高杯	(8.5)		SY8E-6厚	
83 91 -11					土師器	高杯	(10.2)		SY8S-9白赤褐	脚径(11.4)
84			60 -80		土師器	高杯	(3.8)		SY8S-9白赤褐	
85			60 -90		土師器	高杯	(17.4)	(5.8)	SY8E-6厚	
86			60 -80		土師器	高杯	17.2	(5.1)	7.5Y8T-41.45.5-9周	
87			60 -90		土師器	井	(15.0)	(7.0)	SYR4-6.6周	
88					土師器	井	(19.6)	(7.8)	7.5Y8S-6灰黃褐	
228 89					土師器	垂	(11.2)	(3.6)	2.5Y8S-8明赤褐	
90					土師器	垂	(12.0)	(5.1)	7.5Y8T-2.5周	
91					土師器	垂	(12.8)	(7.5)	7.5Y8E-3周	
92					土師器	垂	(14.6)	(6.5)	7.5Y8S-31.45.5-9周	
93					土師器	垂	15.0	(12.6)	7.5Y8S-41.45.5-9周	
94					土師器	垂	(17.6)	(4.1)	SY8E-6厚	
95			60 -80		土師器	垂	22.3	(7.7)	10Y8-2M灰	
96			60 -90		土師器	垂	(21.4)	(6.5)	SY8S-9白赤褐	
97					土師器	垂	(12.2)	(4.8)	7.5Y8L-2.5周	
98					土師器	垂	(12.4)	(5.1)	7.5Y8S-31.45.5-9周	
99					土師器	垂	(13.2)	(4.0)	2.5Y8S-6明赤褐	
100					土師器	垂	(14.6)	(5.0)	7.5Y8E-29周	
101					土師器	垂	(14.8)	(3.9)	SYR4-41.45.5-9周	
102					土師器	垂	(14.2)	(10.1)	7.5Y8S-38周	
103					土師器	垂	(15.0)	(5.2)	SY8S-9白赤褐	
104					土師器	垂	(20.2)	(12.1)	7.5Y8S-41.45.5-9周	
105					土師器	垂	(17.4)	(5.6)	SY8S-41.45.5-9周	
106					土師器	垂	(19.4)	(7.1)	SY8S-9白赤褐	
107					土師器	垂	(20.6)	(6.5)	SYR4-6.6周	
108					土師器	垂	(22.6)	(5.0)	SYR4-41.45.5-9周	
109					土師器	垂	(23.2)	(7.5)	SYR4-41.45.5-9周	
110					土師器	垂	23.8	(11.6)	SY8S-9白赤褐	
229 111					土師器	垂	30.2	(10.3)	2.5Y8E-8赤褐	
112					土師器	垂	(21.6)	(9.8)	7.5Y8E-2.5周	
113					土師器	垂	(24.6)	(7.2)	SY8S-9白赤褐	
114					土師器	垂	(26.4)	(5.1)	2.5Y8S-8明赤褐	
115					土師器	垂	(26.8)	(4.8)	2.5Y8S-6明赤褐	
116					土師器	垂	(25.4)	(8.9)	SY8E-6周	
117 97 -3					土師器	垂	17.6	(21.8)	SY8S-9白赤褐	
118					土師器	垂	(23.6)	(28.0)	2.5Y8S-41.45.5-9周	
119					土師器	瓶	(17.3)	(9.3)	SY8E-8周	
120					土師器	瓶	(6.0)		SY8S-9白赤褐	底径12.0
121					土師器	瓶	(13.3)		2.5Y8E-8周	底径14.0
122					土師器	瓶	(27.2)	(28.0)	SY8E-6周	
230 -123			60 -80		埴輪	倒錐形		(14.8)	SYR4-6赤褐	

表27 出土遺物観察表(18)

番号	地区	遺物	部位	備考	種別	器種	法		色調	特徴	
							番号	種類	性質		
230	124	109-5	60-96		上部器	鋸齒土器	(11.1)	(6.0)	10YR5-4浅黄橙		
125	92-5				上部器	平底壺	(10.6)	11.8	7.5YR4-4褐		
126					上部器	鍋	(34.0)	(8.5)	5YR5-6明赤陶		
127		60-4b			上部器	鍋	(33.3)	(14.8)	7.5YR5-4C灰・褐		
128		60-9b			上部器	鍋	(34.8)	(12.5)	5YR5-6		
129					上部器	鍋	(41.6)	(9.5)	2.5YR4-8赤陶		
130					上部器	鍋	(42.4)	(9.0)	5YR5-8明赤陶		
131					上部器	鍋	(42.8)	(9.0)	2.5YR5-8褐		
233	-1	60-7c	887	漆	上層	刷毛器	杯	(14.0)	N-50K	右回り	
2					下層	刷毛器	杯	(11.8)	(3.0)	5YR5-1青灰	
3	75-12	60-4b			下層	刷毛器	杯	13.3	4.7	N-40K	
4		60-7c				刷毛器	高杯	(9.5)	5P94-1暗青灰	輪径(15.6) 右回り二方透かし	
5		60-7b				上部器	甕	(12.0)	(5.7)	7.5YR5-4C灰・褐	
6		60-7c			下層	上部器	甕	(20.2)	(4.5)	10YR5-2H黄褐	
7					下層	上部器	甕	(29.8)	(9.2)	10YR5-2H黄褐	
8					上層	刷毛器	円筒		10YR7-2C灰・褐		
234	-1	60-7d	986	漆		上部器	1ニチュア	(3.7)	7.5YR5-4C灰・褐	輪径(5.0)	
2		60-7d	888	漆		刷毛器	台形脚又は高杯	(3.8)	N-50K	輪径(11.0) 四方透かし	
3	75-10	60-8a	1882	漆		刷毛器	杯	10.3	3.5	7.5Y6-1H	
4	11	60-8a	1817	漆		刷毛器	杯	11.2	3.6	10Y6-1H	
5		60-4b	1801	漆	下層	刷毛器	甕	(14.0)	(2.5)	N-40K	
6						刷毛器	杯	(10.2)	(2.8)	5P94-1暗青灰	
7						刷毛器	杯	(9.6)	(2.3)	10BG4-1暗青灰	
8		60-8a				刷毛器	杯	(10.8)	(3.4)	5P95-1青灰	
9		60-8b				刷毛器	杯	(11.0)	(3.3)	5P95-1H青灰	
10		60-8a				刷毛器	長脚甕	(9.6)	(3.1)	N-30H	
11						刷毛器	鉢	(13.6)	(6.2)	7.5YR6-1H	
12		60-8b			下層	上部器	鉢	(14.4)	(5.6)	5YR5-6	
13		60-8a				上部器	甕	(16.8)	(4.5)	2.5YR4-2H	
14						刷毛器	円筒	(32.2)	2.5YR5-1H赤陶		
235	-1	70-5e	7	漆		刷毛器	杯	(9.0)	(1.0)	N-60K	
2		70-4c	18	漆		上部器	杯	(12.0)	(3.5)	5YR5-8H	
3	90-11					上部器	高杯	12.7	4.3	2.5Y8-3H	
4						上部器	杯	(8.7)	5YR7-4C灰・褐	輪径10.4	
237	-1	70-2d	924	漆		刷毛器	杯	(12.4)	3.8	N-40K	
2	76-1					刷毛器	杯	12.2	3.8	N-40K	
3						上部器	鉢	(16.8)	(5.7)	5YR4-8赤陶	
4						上部器	甕	(15.2)	(6.8)	5YR5-6明赤陶	
5						上部器	甕	(18.0)	(7.3)	5YR5-6明赤陶	
6	101-2					刷毛器	長形	(18.0)	2.5Y8-4H		
238	-1	70-1e	934	漆		刷毛器	杯	(10.4)	3.4	5P95-1青灰	
2						上部器	高杯	(7.7)	5YR7-6	輪径9.6	
3	70-2d	924	漆			刷毛器	杯	(14.8)	4.2	10Y5-1H	
4						刷毛器	杯	(11.6)	(2.7)	N-79白	
5						刷毛器	杯	(12.2)	(3.3)	N-60K	
6	70-1e	933	漆			上部器	杯	(13.6)	(3.7)	5YR6-6	
7						上部器	杯	(14.2)	(4.6)	2.5YR5-1H赤陶	
8						上部器	甕	(14.2)	(3.1)	5YR6-6	
9						上部器	甕	(19.0)	(4.4)	5YR7-3C灰・白	
10		70-1d	919	漆		上部器	甕	(40.2)	(4.3)	2.5YR4-8赤陶	
239	-1	73-11	70-2c	1505	漆	刷毛器	杯	(12.8)	(3.7)	5YR5-1H	
2	12					刷毛器	杯	(13.4)	3.7	5P94-1青灰	
3						刷毛器	杯	(13.2)	3.3	N-30H	
4						刷毛器	杯	(12.6)	(3.0)	5P95-1H	
5						刷毛器	杯	(12.0)	(3.0)	5P95-1H	
6						刷毛器	高杯			輪径(15.6) 三方透かし	
7						上部器	平底鉢	(16.6)	10.8	5YR5-6明赤陶	
8						上部器	鉢	(16.4)	(5.7)	5YR5-6赤陶	
243	-1	77-3	60-7e	401	漆	下層	刷毛器	杯	11.2	3.3	N-40K
2						刷毛器	杯	(12.6)	(2.7)	N-60K	
3		60-7f			下層	刷毛器	杯	(13.4)	(3.5)	2.5YR3-1暗オーブ	
4						刷毛器	杯	(12.8)	(2.8)	N-50K	
5		60-7e				刷毛器	杯	12.6	4.1	N-79白	
6		60-7d				刷毛器	杯	(13.2)	(4.1)	N-60K	
7		60-7i				刷毛器	杯	(10.4)	4.0	5YR4-1H赤陶	
8		60-7d				刷毛器	杯	(11.4)	(2.2)	N-40K	
9		60-7e				刷毛器	杯	(12.2)	(2.3)	N-50K	
10		60-7d				刷毛器	杯	(10.4)	3.6	N-40K	
11		60-7f				刷毛器	杯	(10.2)	(3.4)	N-50K	
12		60-7e				刷毛器	杯	(11.0)	3.4	N-50K	
13		60-7i				刷毛器	杯	(11.8)	(4.0)	N-50K	
14		60-7e				刷毛器	高杯			輪径(16.6) 二方透かし	
15						刷毛器	高杯			輪径(9.6)	
16						刷毛器	長脚甕	(4.1)	5P94-1青灰	輪径(12.6)	
17		60-7d				刷毛器	高杯	2.4	N-30H	輪径(14.6)	
18		60-7e				刷毛器	高杯	(3.8)	N-60K	輪径(16.6)	

表28 出土遺物觀察表 (19)

番号	地区	遺物種類	形狀	備考	種別	器種	法量		色調	特徴	
							CH	器高			
243-19	79-2	60-7t	上端	頭部	圓	(126)	14.9	N-68%	右回り		
20	84-3	60-7e	下端	頭部	圓	(5.9)	(6.2)	N-68%	左回り	漆付土器	
21			上端	頭部	圓	(16.6)	(5.6)	7.5YR7.1/9白			
22		60-7e	下端	頭部	圓	(33.3)	(10.2)	10YR6.1/1a	右回り		
244-23	60-7t		上端	頭部	棒	(10.8)	(3.6)	5YR4.6-6a-鵝			
24	60-7e		上端	頭部	棒	(11.4)	(4.3)	5YR4.6-6a-鵝			
25			上端	頭部	棒	(11.5)	(4.3)	5YR4.6-6a-鵝			
26	60-7t		下端	頭部	棒	(11.8)	(2.9)	5YR5.0明赤鵝			
27	60-7e		下端	頭部	棒	(12.2)	(4.0)	5YR4.4/5.5-6a-鵝			
28			下端	頭部	棒	(13.8)	(4.2)	7.5YR2.3/8鵝			
29			下端	頭部	棒	(13.6)	(4.6)	2.5Y4.8a-鵝			
30			下端	頭部	棒	(17.2)	(4.0)	7.5YR7.3/12.5a-鵝			
31	60-7t		下端	頭部	棒	(17.2)	(5.6)	5YR4.6-6a-鵝			
32	60-7e		下端	頭部	棒	(18.1)	(4.1)	5YR6.4/5.5-6a-鵝			
33			下端	頭部	棒	(18.8)	(4.7)	5YR4.6-6a-鵝			
34			下端	頭部	棒	(17.2)	(5.6)	2.5YR5.0明赤鵝			
35	60-7t		下端	頭部	棒	(18.2)	(6.5)	5YR5.0明赤鵝			
36	60-7e		下端	頭部	棒	(18.8)	(7.0)	5YR7.6鵝			
37	60-7t		下端	頭部	棒	(26.2)	(7.0)	7.5YR2.1/1a			
38			下端	頭部	棒	(15.8)	(2.9)	2.5YR3.6明赤鵝			
39	60-7e		下端	頭部	棒	(16.1)	(4.4)	5YR5.0明赤鵝			
40			上端	頭部	棒	(9.6)	(5.6)	5YR4.6-6a-鵝	脚付1.4		
41			上端	頭部	棒	(17.0)	(2.7)	5YR4.6-6a-鵝			
42			下端	頭部	棒	(17.0)	(4.6)	7.5YR7.3/12.5a-鵝			
43			下端	頭部	棒	(18.4)	(3.7)	5YR6.6鵝			
44			下端	頭部	棒	(18.8)	(4.4)	2.5YR1.6赤鵝			
45			下端	頭部	棒	(15.8)	(3.2)	10YR2.3/12.5a-鵝			
46	60-7t		下端	頭部	棒	(17.2)	(3.9)	7.5YR6.4/12.5a-鵝			
47	60-7e		下端	頭部	棒	(17.8)	(3.8)	10YR2.3/12.5a-鵝			
48	60-7t		下端	頭部	棒	(19.0)	(4.9)	7.5YR3.4/12.5a-鵝			
49	60-7e		上端	頭部	鵝		(4.4)	5YR4.6-6a-鵝			
50			下端	頭部	鵝	(14.6)	(8.1)	2.5Y5.2/6a-鵝			
51			下端	頭部	鵝	(14.8)	(2.7)	2.5YR5.6明赤鵝			
52			下端	頭部	鵝	(18.0)	(0.7)	2.5YR8.8赤鵝			
53			下端	頭部	鵝	(11.6)	(4.3)	10YR2.2/12.5a-鵝			
54	60-7t		下端	頭部	鵝	(14.8)	(5.8)	7.5YR4.2/6鵝			
55	60-7d		下端	頭部	鵝	(15.4)	(7.1)	7.5YR3.4/12.5a-鵝			
56	60-7e		下端	頭部	鵝	(10.6)	(5.6)	5YR4.3/2.5a-6a-鵝			
57	60-7t		下端	頭部	鵝	(14.8)	(4.8)	5YR6.6鵝			
58	60-7d		上端	頭部	鵝	(15.0)	(8.2)	10YR2.3/12.5a-鵝			
59	60-7e		上端	頭部	鵝	(30.8)	(7.7)	5YR3.6赤鵝			
245-60	60-7t		下端	輪轂	人字形			7.5YR7.4/12.5a-鵝			
61	60-7e		上端	輪轂	円筒			7.5YR7.2/明赤			
62			上端	輪轂	円筒		(40.1)	10YR8.4赤黃斑			
63			上端	輪轂	円筒		(22.8)	7.5YR7.6鵝			
64	101-1		下端	輪轂	円筒		(29.0)	10YR8.4赤黃斑	底付13.0		
246-1	60-8t	402	廣	頭部	圓	(9.6)	3.5	N-78白			
2				頭部	高杯垂	(4.2)	N-68%				
3				頭部	棒	(10.4)	(2.9)	N-68%		つまみ付2.6	
4				頭部	鵝	(13.4)	(4.1)	N-78白			
5				頭部	棒	(13.8)	3.6	N-68%	右回り		
6				頭部	棒	(13.6)	(3.8)	2.5Y6.19白	右回り		
7				頭部	棒	(15.0)	(3.6)	N-78白			
8				頭部	棒	(9.6)	(3.1)	7.5YR7.6鵝			
9				頭部	棒	(10.8)	(4.4)	3YR7.8鵝			
10				頭部	棒	(9.4)	(3YR7.8鵝)			脚付10.4	
11				頭部	棒	(14.4)	(6.6)	3YR6.8鵝			
12	60-7t			頭部	棒	(17.8)	(4.4)	2.5YR8.6鵝			
13	60-8t			頭部	棒	(20.4)	(4.2)	3YR6.8鵝			
14				頭部	棒	(38.0)	(5.2)	3YR6.8鵝			
15				頭部	鵝	(38.4)	(9.5)	10YR8.3赤黃斑			
247-1	74-4	60-7g	403	廣	頭部	鵝	(12.0)	3.5	N-68%	右回り ハラ記号	
2		60-7h		頭部	鵝	(13.6)	(2.9)	N-68%	右回り		
3				頭部	棒	(16.0)	(3.5)	5YR6.8鵝			
4		60-9h		頭部	棒	(11.6)	(3.0)	3YR6.6鵝			
5				頭部	鵝	(35.0)	(8.5)	3YR6.4/2.5a-鵝			
248-1	60-7e	404	廣	頭部	鵝	(8.2)	(2.2)	2.5YR3.1赤鵝	右回り ハラ記号		
2	77-2	60-8t		頭部	鵝	(8.8)	(2.0)	5Y6.19白	右回り ハラ記号		
3		60-7e		頭部	棒	(10.4)	(2.6)	N-78白			
4		60-7t		頭部	棒	(11.0)	(2.7)	N-68%	右回り		
5				頭部	鵝	(11.4)	(2.6)	N-68%	右回り		
6				頭部	鵝	(10.6)	(2.7)	N-68%			
7		60-8t		頭部	鵝	(9.6)	(2.5)	N-68%	右回り		
8		60-8t		頭部	鵝	(9.8)	(2.0)	N-68%	左回り		
9		60-7t		頭部	鵝	(9.2)	(2.2)	N-68%			
10				頭部	鵝	(10.0)	(2.8)	10Y7.19白			
11		60-8t		頭部	鵝	(11.0)	(3.0)	10Y6.19白			
12	81-3	60-7t		頭部	平底		(0.7)	N-58%	底付5.7 右回り		
13		60-7e		頭部	鵝	(23.6)	(5.1)	N-68%			

表29 出土遺物観察表(20)

番号	地区	遺物 番号	種類 組別	参考	種別	器種	法 直		色 調	特徴	
							口径	器高			
248-14	81-7				馬鹿器	直口双耳瓶	14.0	(44.8)	10YR8-13H白		
249-15		60-7f			土師器	杯	(8.6)	(3.3)	75YR6-6橙		
16					土師器	杯	(8.8)	(3.5)	75YR7-6橙		
17	90-12	60-8g			土師器	杯	(9.6)	3.9	5YR5-8明赤褐		
18		60-8h			土師器	杯	(9.4)	(2.7)	25YR5-9明赤褐		
19	91-1	60-8g			土師器	杯	11.0	4.4	5YR6-8橙		
20		60-7e			土師器	杯	(11.6)	(3.3)	25Y7-3浅黃		
21		60-7f			土師器	杯	(11.8)	4.9	5YR7-6橙		
22		60-7e			土師器	杯	(15.0)	(4.4)	75YR6-6橙		
23		60-7f			土師器	杯	(14.4)	(5.3)	5YR6-6橙		
24					土師器	瓶	(16.0)	(3.1)	5YR7-6橙		
25		60-8g			土師器	高杯	(17.5)	(3.5)	75YR6-6橙		
26		60-8f			土師器	高杯	(18.3)	5YR6-8橙		脚付(10.2)	
27		60-7e			土師器	甕	(9.2)	(4.0)	5YR6-8橙		
28					土師器	甕	(13.0)	(5.3)	25YR6-6橙		
29		60-7f			土師器	甕	(10.2)	(5.0)	10YR8-3浅黃褐		
30					土師器	甕	(14.9)	(5.5)	5YR6-6橙		
31					土師器	甕	(22.0)	(9.1)	75YR5-4L-6H-甕		
32		60-8g			土師器	行付又付甕	(2.3)	5YR6-8橙		脚付6.2	
33		60-7e			土師器	甕	(16.8)	(2.0)	75YR5-4L-6H-甕		
34					土師器	甕	(25.4)	(3.5)	5YR5-6明赤褐		
35					土師器	甕	(22.6)	(5.9)	5YR6-6橙		
36					土師器	甕	(27.0)	(5.7)	75YR7-4L-6H-甕		
250-1	60-8f	897	甕		土師器	甕	(10.0)	(4.1)	5YR4-6H-甕		
2	60-8f	496	甕		土師器	甕	(10.6)	(2.5)	25YR4-8H-甕		
3	60-8g	412	甕		土師器	甕	(12.0)	(3.7)	5YR7-6橙		
4	60-9f	932	甕		馬鹿器	缸蓋	(12.2)	3.8	10Y5-1H白	右回り	
5	60-8g	416	甕		馬鹿器	缸身	(10.2)	(3.0)	75Y5-1H白		
251-1	60-9h	408	甕		馬鹿器	甕	(11.4)	(2.9)	N-5H白		
2	60-9h	408	甕		馬鹿器	甕	(13.6)	(3.3)	5YR4-1H青白	右回り	
3	60-9h				馬鹿器	缸身	(12.2)	(2.9)	N-6H白		
4	60-9h				馬鹿器	缸身	(12.4)	3.8	N-6H白	右回り	
5	60-9h				馬鹿器	缸身	(11.4)	3.7	N-5H白	ハラ記号	
6					土師器	高杯	(16.8)	(5.3)	10YR5-6H白		
7	60-9h				土師器	甕	(13.4)	(4.9)	25YR4-6H-甕		
8	60-9h				土師器	甕	(19.6)	(5.6)	25YR4-6H-甕		
9	60-9h				土師器	甕	(20.6)	(4.1)	5YR5-6明赤褐		
10					土師器	甕	(17.0)	(8.5)	5YR5-4L-6H-甕		
11	92-8	60-9h			土師器	甕	(19.2)	(2.9)	75YR7-4L-6H-甕		
12		60-9h			土師器	甕	(30.8)	(1.7)	5YR4-3L-5H-甕		
13		60-9h			土師器	甕	(34.8)	(12.5)	25YR4-6H-甕		
14		60-9h			土師器	甕	(35.8)	(18.0)	5YR4-6H-甕		
252-1	106-3	70-4c	8	円筒相付	埴輪	円筒相	(84.6)	75YR7-6H			
2	106-1				埴輪	円筒相	(66.8)	25YR6-6橙			
254-3					埴輪	円筒		5YR4-6H-甕			
4					埴輪	円筒		5YR4-6H-甕			
5					埴輪	円筒		5YR4-6H-甕			
6					埴輪	円筒		5YR4-6H-甕			
255-1	106-4	70-110g	668	土壙	円筒相付2	埴輪	円筒相	42.0	(91.8)	5YR6-8橙	
257-1	106-2	78-23f	1582	甕	円筒相付3	埴輪	円筒	(36.0)	(33.7)	10YR8-4浅黃褐	ハラ記号
2	107-1				埴輪	円筒	(41.0)	(48.5)	25YR5-3L-5H-赤褐		
3					埴輪	円筒	(32.7)	(48.0)	25YR5-3L-5H-赤褐		
258-1	110-2	60-8g	422	柱穴	馬鹿器	缸蓋	(11.6)	(2.4)	N-6H白	右回り	
2	3	60-8g			馬鹿器	缸蓋	5.5	2.5	N-8H白		
3		60-8g			馬鹿器	缸蓋	3.8	1.9	50G7-1H青白		
4	110-4	60-8g	400	甕	土師器	上縁		(3.4)	5YR7-6H		
5		60-10a	1	甕	土師器	上縁		(5.0)	5YR4-6H-甕		
6	110-5	60-9h		3縫	土師器	上縁		(4.3)	25YR5-9H-赤褐		
7	6	60-8b	1801	甕	土師器	上縁		(4.5)	5YR6-8H		
8	7	60-7g	400	甕	土師器	不明土製品			25YR5-9H-赤褐		
9	110-10	60-7h	400	甕	土師器	不明土製品			25YR4-6H-甕		
10	110-13	60-7e	400	甕	土師器	不明土製品			25YR4-6H-甕		
11	110-11	60-7h	400	甕	土師器	不明土製品			25YR4-6H-甕		
12	110-9	60-7b		2縫	土師器	不明土製品			5YR5-4L-5H-赤褐		
13	110-8	60-9h		2縫	土師器	不明土製品			25YR4-6H-甕		
14	110-14	60-7e	400	甕	土師器	不明土製品			25YR5-9H-赤褐		
15	15	60-7h	400	甕	土師器	不明土製品			25YR5-9H-赤褐		
16	110-12	60-9h	1800	甕	土師器	不明土製品			25YR5-9H-赤褐		
17	110-16	60-7f	400	甕	土師器	不明土製品			25YR5-9H-赤褐		
259-18	112-3	60-7e	1274	柱穴	埴輪	埴輪1	(2.1)	(3.2)	5YR4-6H-甕		
19	112-2	70-3a	1	甕	埴輪	埴輪1	(2.0)	(5.1)	25YR5-6H-赤褐		
20	112-4	70-5b	26	井口	埴輪	埴輪1	(1.8)	(7.2)	25YR5-6H-赤褐		
21	112-6	60-8h	1820	高ち込み	埴輪	埴輪1	(1.8)	(10.2)	25YR5-9H-赤褐		
22	112-1	70-1a	1503	甕	埴輪	埴輪1	(1.8)	(6.2)	25YR5-2H-赤褐		
23	108-6	60-8e	2551	井口	埴輪	埴輪1	(5.5)	(8.8)	25Y5-2H-赤褐		
24	112-5	60-8d	400	甕	埴輪	埴輪1	(2.2)	(7.5)	5YR4-4L-5H-赤褐		
200-25	111-2	60-8j	3	3縫	土師器	土師器面			25YR7-6H		
26	111-1	60-9c	3縫		土師器	土師器面			5YR6-6H		

表30 出土遺物觀察表 (21)

番号	地 区	遺 墓	層 次	備 考	種 別	器 物	法 量		色 調	特 性
							計	基		
260-27	111-6	6N-8d	400	溝	上層	土師器	不明土製品	$1 = (4.0 \text{ w}^2 / (24) h) + (1.7)$	2.5YR6-8明赤褐色	
28	111-5	6N-7e	401	溝	下層	土師器	不明土製品		2.5YR6-8赤褐色	
29	111-7	7N-8S-8e			2層	土師器	不明土製品		N-38%	
30	111-8	6O-9e			3層	土師器	円盤狀土製品		3YR5-6明赤褐色	
31	111-4	6O-9e	408	溝		土師器	不明土製品		2.5YR6-8赤褐色	
32	111-9	7O-2a	1	溝		土師器	不明土製品		3YR6-6赤褐色	
33		6O-10d			3層	土師器	不明板狀土製品		7.5YR6-6橙	
262-4	117-2	6O-9g			41器3		調片			
2	117-3	7O-8	598	柱穴			調片			
3	117-4	7O-3e	59	柱穴		建物3	石核			
4	116-8	6O-10e			右5-4		石核			
203-1	118-5	7N-4f			1層		ナイフ形石器			
2	118-3	7N-5f					ナイフ形石器			
3	118-4	6O-7d	401	溝	上層		ナイフ形石器			
4	116-4	6N-10e	1506	溝	下層		石核			
5		6O-8g	634	柱穴		建物33	石核			
6		6O-7f	409	溝	下層		石核			
7	116-7	6O-7b			2層		石核			
8	116-5	6O-8f			3層		石核			
9		6N-9e			3層		石核			
10		6O-7g	400	溝	上層		調片			
11		7O-3o	1	溝			石核			
12		6O-7h			5層		石核			
264-1		6O-7g	400	溝	下層		石核			
2	118-2	6N-8g	400	溝	上層		石核			
3	118-6	6O-7b			4層		有茎尖頭器			
4	118-7	6O-7d			3層		器皿			
5		6N-9e			3層		器皿			
6	118-1	6O-7d			3層		調片			
7		6N-9e			3層		調片			
8	118-8	6O-7g	400	溝	下層		刮器			
9		6N-8f			2層		調片			
10		6O-7e	404	溝			調片			
11	116-3	6O-7a			3層		調片			
12	116-5	6O-7g	400	溝	下層		調片			
13	116-2	6O-9e			2層		石核			
14	116-6	6O-9u			3層		石核			
15	116-9	6N-8e	2151	井戸	上層		石核			
265-1	110-4	6N-8e				近世近代	石製瓶造品	口玉		
266-1		6O-9g			3層		石製品	望石		
2		6O-7f	400	溝	下層		石製品	礫灰岩		
3		7O-6a	12	溝			石製品	礫灰岩		
4	119-1	6O-8f	404	溝			石製品	礫灰岩		
5	119-3	7N-5u	1	溝			石製品	礫灰岩		
6	119-2	6O-9u			3層		石製品	礫灰岩		
7	119-5	7O-2c	1636	柱穴		建物23	石製品	礫灰岩		
8	119-4	6O-8g	568	柱穴		建物33	石製品	礫灰岩		
9	119-6	6O-9b	1800	溝			石製品	礫灰岩		
267-1		7N-7g	163	上坡			石製品	砾石		
2	114-4	6N-8g	400	溝	上層		石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
3	114-1	6N-8j			3層下段		石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
4	114-5	6O-8f			3層		石製品	砾石		(砂岩)
5	114-3	6O-9b	408	溝			石製品	砾石		(砂岩)
6	114-6	6O-8b	1801	溝			石製品	使用痕のある砾石		(安山岩)
7	114-2	6O-8e			3層		石製品	使用痕のある砾石		
8	114-7	6O-7e			3層		石製品	使用痕のある砾石		
9	114-13	6O-9b	408	溝			石製品	使用痕のある砾石		(砂岩)
10	114-10	6O-8f			3層		石製品	使用痕のある砾石		(砂岩)
268-41	115-7	6O-7g	400	溝	上層		石製品	使用痕のある砾石		(砂岩)
12	115-8		400	溝	下層		石製品	使用痕のある砾石		(砂岩)
13	114-8	7O-2b-2c	1503	溝			石製品	西石-即石		(砂岩)
14	114-11	6O-9b			2層		石製品	即石		
15	114-12	6O-10g	333	柱穴		建物34	石製品	即石		(砂岩)
16	111-9	7O-2d	65	柱穴		建物3	石製品	即石		(砂岩)
269-1	115-9	6N-10g	1890	豎穴建物			石製品	砾石		中砾(粘板岩)
2	115-2	7O-3a			3層		石製品	砾石		粗石
3		6N-8e	2151	井戸	上層		石製品	砾石		(砂岩)
4	115-1	7N-7h	153	柱穴		建物14	石製品	砾石		粗砾(凝灰岩質)
5	115-3	6O-9g	418	落ち込み			石製品	砾石		粗砾(凝灰岩質)
6	115-5	6O-7f	400	溝	上層		石製品	砾石		粗砾(凝灰岩質)
7	115-4	6O-9g			3層		石製品	砾石		
8	115-6	7O-3d	68	柱穴		建物4-柱頭	石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
9		7O-4c	18	溝			石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
10		7O-4c	1	溝			石製品	砾石		粗砾(砂岩)
11		7N-7g	154	柱穴		建物14	石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
12		6O-7h	405	井戸	下層	碑上内	石製品	砾石		粗砾(和泉砂岩)
13	115-10	7O-4d	25	土塁			石製品	砾石		粗砾(細粒質砂岩)
14		7O-2a	1	溝			石製品	砾石		粗砾(細粒質砂岩)

表31 出土遺物観察表(22)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	参考	種別	器種	法長		色調	特徴
							口径	器高		
270-4	128-3	70-3a	78	柱穴	建物7	瓦製品	刀子	8.1 (7.1) w= (0.4)		
2	128-2	60-96	1800	高		瓦製品	曲刃鑿	1=(4.6) h=(5.9) b=(0.5)		
3	128-6	60-7b		2層		青銅製品	錐形青銅製品	1=(4.8) w=(4.2) b=(0.3)		
4	128-4	6N-10d	3004	土坑		瓦製品		1=(5.7) w=(4.4) h=(0.3)		
5	128-5	3004	土坑			瓦製品		1=(5.7) w=(4.4) h=(0.3)		
6	128-1	60-7b	405	井戸	下層	砂内	袋状瓦斧			
271-1	6N-8c	水路		近世近代	上部器	鉢	10.0 (12.5)	5YR5-6明赤陶		
2	60-8b	水路			上部器	把手付鉢	12.4 (15.6)	25YR5-8暗赤陶		
3	6N-8c	水路		近世近代	把手	円筒		25YR5-6赤陶		
4	6N-8c	水路		近世近代	把手	円筒	(55.8) (14.3)	5YR4-1黒陶		
272-1	60-7b		2層		把手	把手 (束?)		10Y3B-7浅黄褐		
2	60-9c		2層		把手	円筒		25YR5-4C灰・赤褐		
3	60-7g		2層		把手	円筒	(2.5)	5H9E-1青褐	右回り	
4	60-8a		2層		把手	杯身	(12.2) (3.2)	N-69K	右回り	
5	60-9c		2層		把手	杯	(16.9) (2.6)	N-59K	右回り	
6	60-7b		2層		把手	杯	(9.2) (2.1)	N-80K白	右回り	
7			2層		把手	杯身	(12.8) (3.0)	N-59K		
8	60-7f				把手	束	(2.5)	N-79K白	高台形(6.2)	
9	83-14	60-7b	2層		把手	把手凹面鏡	(6.5)	N-79K白	輪径(29.0)	
15	60-7a	3層			把手					
10	60-9c		2層		把手	杯	(16.8) (1.3)	N-59K	高台形(10.4) 右回り	
11	6N-8F		2層		把手	杯身	(13.9) 4.1	N-69K	高台形(9.6) 右回り	
12	60-7b		2層		把手	把手	(8.4)	N-59K	右回り	
13	60-7a		2層		把手	把手	(17.1) 3.4	N-59K	高台形(13.1)	
14	6N-9F		2層		把手	把手	(1.6)	N-89K白	高台形6.8 左回り	
15	60-8F		3層		把手	把手	(2.0)	N-89K白	高台形(7.3) 右回り	
16	60-7b		2層		把手	把手		25Y5-1黒		
17	99-6	6N-8G	2層		把手	把手	9.2	2.4 N-49K		
18	60-7g		2層		把手	把手	(3.1)	5YR8-18白	高台形(5.9) 左回り	
19	6N-10a		2層		把手	把手	(15.8) 5.2	25YR5-4C灰・赤褐	高台形(6.3)	
20	99-4	6N-9d	2層		黒色上器	把手	(15.5) 5.9	10Y3F-4C灰・黄褐	A類 高台形8.9 ヘラ記号	
21	6N-8d		2層		瓦器	瓦	(15.3) (4.6)	N-59K		
22	6N-8j		2層		瓦器	瓦	(14.6) 5.3	N-29K	高台形(6.0) ヘラ記号	
23	6N-8d		2層		黑色上器	瓦	(15.3) (5.0)	N-29K	高台	
24	6N-10a		2層		上部器	瓦	(7.6) 7.5YR7-3C灰・橙	高台形(9.4)		
25	6N-10b		3層		把手	瓦片	(29.4) (6.2)	N-59K		
26	6N-8d		2層		把手	瓦片	27.2 (10.1)	N-69K	左回り	
273-27	60-8g		2層		瓦	斜瓦		10Y7-19白		
28	60-9b		2層		瓦	丸瓦		10Y2E2-3黑		
29	6N-9f		2層		瓦	平瓦		10Y5-19K		
30	6N-8F		2層		瓦	平瓦		5Y7-19A白		
31	6N-8d		2層		瓦	平瓦		10Y8/7-3C灰・黄褐		
32	60-7b		2層		瓦	平瓦		10Y4/4-19灰		
33	6N-9F		2層		瓦	平瓦		10Y6-19K		
34	60-7b		2層		瓦	平瓦		10Y16/1-19灰		
274-1	60-8g		3層		把手	把手	(7.0) 2.7	5PBS-1青灰	右回り	
2			3層		把手	把手	(7.8) (2.3)	N-69K		
3	60-7i		3層		把手	把手	9.3	3.2 N-69K	右回り	
4	60-8g		3層		把手	把手	7.9	3.0 5PBF-1明青灰	右回り ヘラ記号	
5	60-9f		3層		把手	把手	(8.6) (2.2)	N-59K		
6	60-8g		3層		把手	把手	(8.4) (2.2)	N-49K		
7			3層		把手	把手	(8.4) (2.2)	5PBS-1青灰		
8	60-8f		3層		把手	把手	(10.4) 2.9	N-59K	左回り	
9	60-10j		3層		把手	把手	(10.4) (2.0)	N-69K		
10	60-9f		3層		把手	把手	(10.1) (2.2)	5PBF-1明青灰	右回り	
11	60-9c		3層		把手	把手	(10.2) (2.3)	N-59K	右回り	
12	60-8d		3層		把手	把手	(8.8) (2.2)	N-59K	右回り	
13	60-8f		3層		把手	把手	(10.4) (1.6)	N-49K	右回り	
14	60-7i		3層		把手	把手	(10.8) (2.0)	5BBS-1青灰	右回り	
15	60-8g		3層		把手	把手	(10.2) (2.5)	N-39K	右回り	
16	60-9c		3層		把手	把手	(10.8) (2.3)	10Y7-19白	右回り	
17	60-8f		3層		把手	把手	(9.0) (1.8)	N-59K		
18	60-8g		3層		把手	把手	9.4	(29) N-69K	右回り	
19	60-9f		3層		把手	把手	(12.2) (1.9)	N-59K	右回り	
20	60-9c		3層		把手	把手	(15.2) (2.8)	5PBF-1青灰	右回り	
21	60-7g		3層		把手	把手	(9.4) (3.2)	N-59K	右回り	
22	60-9g		3層		把手	把手	9.6	37 7.5YR-19白	右回り	
23	85-1	60-7i	3層		把手	把手	10.0	3.4 5B4/1青灰	左回り 漆付付手器	
24	6N-8F		3層		把手	把手	(15.6) (1.8)	N-89K白	右回り	
25	60-7i		3層		把手	把手	(1.7)	N-89K白	右回り	
26			3層		把手	把手	(10.2) (1.5)	N-89K白		
27	6N-8F		3層		把手	把手	(12.4) (4.4)	N-39K	高台形(9.2)	
28	60-6a		3層		把手	把手	(12.4) (4.4)	N-39K	高台形(9.2)	
29	83-8	60-7b	3層		把手	把手	N-79K白	研磨(8.3)		

表32 出土遺物觀察表 (23)

番 号	地 区	遺 墓 番号	層 位 階級	備 考	種 别	器 物	法 葉		色 調	特 徵
							日付	葉面		
274 -30	83 -13	6N -8g	3層		須志器	圓足碗	(4.9)	5P7/1明青灰	輪徑(23.0) 研磨徑(16.0)右回り	
275 -31		6N -8g	3層		須志器	杯	(10.0)	2.8	N -28	右回り
32		60 -9c	3層		須志器	杯	(10.6)	(3.1) 5P9/5/1明青灰	右回り	
33		60 -7g	3層		須志器	杯	(10.9)	(3.0) N -68	右回り	
34		60 -9c	3層		須志器	杯	(11.8)	4.7 N -58	右回り	
35		6N -9c	3層下段		須志器	杯	(12.2)	3.7 N -48	左回り	
36		60 -9c	3層		須志器	杯	(11.8)	(3.1) N -48	右回り	
37			3層		須志器	杯	(14.2)	(3.2) N -68	右回り ヘラ記号	
38		60 -7i	3層		須志器	杯	12.5	4.0 N -58	右回り	
39		60 -9c	3層		須志器	杯	13.2	3.6 N -68	右回り	
40		60 -8g	3層		須志器	杯?	(12.7)	3.8 N -58	右回り	
41		60 -9c	3層		須志器	杯	13.4	3.9 10Y7/1赤白	右回り	
42		60 -9c	3層		須志器	杯	(13.6)	(3.4) N -68	右回り	
43		60 -9c	3層		須志器	杯	(15.4)	(4.2) 2.5Y6/1黄灰	右回り	
44			3層		須志器	杯	(15.2)	(4.0) N -68	右回り ヘラ記号	
45		60 -9c	3層		須志器	杯?	(8.1)	2.6 5P9/5/1青灰		
46		60 -9c	3層		須志器	杯?	(8.2)	(2.4) 5P9/6/1青灰		
47			3層		須志器	杯?	9.5	(3.4) N -58		
48		60 -8f	3層		須志器	杯?	(9.8)	(2.6) N -58	右回り	
49		60 -9g	3層		須志器	杯?	(9.8)	(3.1) 5P9/5/1青灰		
50			3層		須志器	杯?	10.2	3.3 5P9/6/1青灰		
51		6N -8j	3層		須志器	杯?	10.2	3.9 5P9/4/1暗青灰	右回り	
52	76 -2	60 -9c	3層		須志器	杯	10.3	3.6 N -58	右回り	
53		60 -8d	3層		須志器	杯	(10.6)	3.8 5P9/6/1青灰	右回り	
54		60 -9c	3層		須志器	杯	(11.1)	3.9 10Y8/1赤白	右回り	
55		60 -9c	3層		須志器	杯?	(12.8)	(4.2) N -68		
56			3層		須志器	杯?	(12.4)	(3.7) 5P9/4/1暗青灰		
57		60 -9c	3層		須志器	杯?	(11.5)	(4.5) 5P9/6/1青灰	右回り	
58		60 -9c	3層		須志器	杯	(13.2)	(3.6) 5P9/6/1青灰	右回り	
59	76 -3	60 -9c	3層		須志器	杯?	11.2	4.1 N -58	右回り	
60	4		3層		須志器	杯?	11.4	3.9 5P9/5/1青灰	右回り	
61			3層		須志器	杯?	(11.5)	(3.6) N -58	右回り	
62			3層		須志器	杯?	(11.4)	3.8 N -58	右回り	
63			3層		須志器	杯?	(11.9)	(3.6) 3M4/1暗青灰	右回り	
64		60 -9c	3層		須志器	杯?	(13.2)	(4.2) 5P9/5/1青灰	右回り	
65		60 -9c	3層		須志器	杯?	(13.2)	(3.8) N -58		
66		60 -9c	3層		須志器	杯?	(8.9)	(2.6) N -68	右回り ヘラ記号	
67		60 -7i	3層		須志器	杯?	(9.6)	2.8 N -58	右回り ヘラ記号	
68		60 -9c	3層		須志器	杯?	(9.4)	3.3 5P9/4/1暗青灰	ヘラ記号	
69		60 -9d	3層		須志器	杯?	(10.6)	3.5 5P9/5/1青灰	右回り ヘラ記号	
70		60 -9c	3層		須志器	杯?	10.2	3.1 7.5Y6/1暗	ヘラ記号	
71	76 -5	60 -9c	3層		須志器	杯	11.3	3.7 5P9/5/1青灰	右回り ヘラ記号	
72			3層		須志器	杯	(11.8)	(3.9) N -38	右回り ヘラ記号	
73		60 -9c	3層		須志器	杯	11.9	(3.8) N -58	右回り ヘラ記号	
276 -74		6N -8f	3層5層		須志器	杯?	(14.8)	(6.9) 5P9/4/1暗青灰	左回り	
75		60 -9c	3層		須志器	平瓶	7.0	(6.3) N -58		
76		60 -8d	3層		須志器	瓶?	(12.6)	(3.4) 5P9/6/1青灰	右回り	
77		6N -9c	3層		須志器	酒井杯	(12.3)	4.6 7.5Y6/1暗白	右回り	
78	79 -4	60 -9c	3層		須志器	鉢	11.2	(4.4) N -48	右回り	
79		60 -7e	3層下段		須志器	鉢	(11.5)	(5.5) N -68		
80		60 -8a	3層		須志器	鉢	(3.0)	N -68	底付9.1	
81		60 -9c	3層		須志器	鉢		2.5GY3/1暗オリーブ		
82		6N -8j	3層		須志器	鉢		(5.5) 黒底9.8 右回り		
83		60 -9a	3層		須志器	鉢		(5.8) 5P9/4/1暗青灰	底付9.7 右回り	
84		60 -10e	3層		須志器	皿		(8.1) N -58	底付(7.4) 右回り	
85		60 -7d	3層下段		須志器	皿		(11.7) N -48	右回り	
86		60 -9c	3層		須志器	皿		(7.0) N -68	右回り	
87		60 -9c	3層		須志器	長脚皿	(8.2)	(6.4) N -48	右回り	
88		60 -9c	3層		須志器	長脚皿	(9.8)	(5.5) N -58		
89		60 -9c	3層		須志器	白付皿	(8.2)	(2.1) N -28	右回り	
90		60 -8g	3層		須志器	白付長脚皿	(5.0)	N -79白		
91		60 -9c	2層		須志器	串	(3.4)	N -38		
92		60 -8d	3層		須志器	串	(10.3)	N -78白	右回り ヘラ記号	
93		60 -9c	3層		須志器	台付串	(3.7)	N -58	輪径(14.4)	
94		60 -9c	3層		須志器	短脚皿	(6.4)	(5.4) 5P9/7/1明青灰		
95		60 -9c	3層		須志器	短脚皿	(8.4)	(5.5) 10Y7/1赤白		
96		6N -10a	3層		須志器	短脚皿	(8.1)	(6.0) N -48		
97	80 -3	60 -9c	3層		須志器	短脚皿	(7.4)	(6.6) N -71暗	右回り	
98		60 -8f	3層		須志器	無蓋高杯	(10.0)	(3.3) N -58	右回り	
99		60 -9c	3層		須志器	無蓋高杯	(11.6)	(3.8) N -58		
100		60 -9c	3層		須志器	無蓋高杯	(12.0)	(3.7) 10Y6/1暗	底付9.0 右回り	
101		60 -10j	3層		須志器	高杯	11.7	(4.7) N -48	右回り	
102		60 -9a	3層		須志器	高杯	12.6	4.8 5P9/5/1青灰	右回り	
103		60 -9c	3層		須志器	高杯	(16.4)	(3.8) N -58	右回り	
104		60 -9b	3層		須志器	高杯	(14.2)	(3.8) N -68	右回り	
105		60 -9a	3層		須志器	高杯	(13.8)	(3.7) N -68	右回り ヘラ記号	

表33 出土遺物観察表(24)

番号	地区	遺物 番号	種類 種類	部位	備考	種別	器種	法		色調	特徴
								口径	器高		
276	106	60-4c	3号		鉢形	高杯	(11.9)	(4.1)	N-50K	右回り	
107		60-4a	3号		鉢形	高杯	(13.2)	(3.9)	N-50K	右回り	
108		60-4x	3号		鉢形	高杯	(13.4)	(3.9)	SPHS-1青白	右回り	
109		60-4f	3号		鉢形	高杯	(15.2)	(4.4)	N-50K	右回り 二方透かし	
110		60-2i	3号		鉢形	高杯	(3.0)	10Y5-19K	輪御6.2	右回り	
111		60-4j	3号		鉢形	高杯	(4.9)	N-79K白	輪御6.6	右回り	
112		60-4e	3号		鉢形	高杯	(7.3)	10Y6-19K	輪御(10.4)		
113			3号		鉢形	高杯	(9.0)	N-50K	輪御(14.2)		
277	114	60-9a	3号下位		鉢形	甕	(24.0)	(4.5)	N-50K		
115		60-7g	3号		鉢形	甕	(32.8)	(7.2)	10Y4-19K		
116		60-9x	3号		鉢形	甕	(39.8)	(11.1)	50H4-19K青白	左回り	
117		60-7g	3号		鉢形	甕	(56.8)	(11.5)	N-50K		
118		60-9e	3号		鉢形	甕	(48.2)	(26.8)	N-50K	左回り	
278	119	60-8a	3号		土師器	小形高杯	(7.0)	4.7	5YR8-6燈		
120		60-9f	3号		土師器	直口瓶	(5.6)	(5.8)	5YR6-6A輪		
121		60-8e	3号		土師器	呑器	(11.2)	(8.0)	5YR6-6燈		
122		60-8g	3号		土師器	呑器	(13.0)	(7.2)	25YR5-9B未規		
123		60-6b	3号		土師器	呑器	(19.6)	5YR5-9B未規	底径(6.6)		
124		60-9d	3号		土師器	呑器	(17.0)	5YR5-9B未規			
125		60-7c	3号下位		土師器	杯	12.2	3.8	5YR6-4C-A輪		
126		60-9d	3号		土師器	杯	(12.2)	(4.1)	5YR6-6A輪		
127		60-7c	3号下位		土師器	杯	(13.2)	(3.8)	10Y7-3C-A輪		
128		60-71	3号		土師器	杯	10.6	3.5	7.5YR6-3C-A輪		
129		60-7g-8g	3号		土師器	杯	10.4	3.7	7.5YR6-3C-A輪		
130		60-71	3号		土師器	杯	(11.2)	(3.9)	10Y7-2C-A輪		
131		60-7g-8g	3号		土師器	杯	(12.0)	(3.0)	25YR4-6B輪		
132		60-9a	3号		土師器	杯	13.2	4.5	7.5YR8-6A浅黄		
133		60-10	3号		土師器	杯	(14.1)	(3.8)	10Y7-2C-A輪		
134		60-8j	3号下位		土師器	杯	(17.7)	(4.6)	25YR4-6B輪		
135			3号下位		土師器	杯	(17.7)	(5.1)	7.5YR5-6B輪		
136		60-9e	3号		土師器	杯	16.9	6.7	5YR5-6B未規		
137		60-9b	3号		土師器	高杯	(8.2)	5YR4-6B輪	輪御(10.6)		
138		60-9e	3号		土師器	高杯	15.9	(5.4)	25YR5-8B未規		
139		60-8g	3号		土師器	高杯	(18.4)	(5.6)	25YR5-6B未規		
140		60-10	3号		土師器	瓶	(23.5)	(3.3)	25YR5-6B未規		
141		60-7g	3号		土師器	瓶	(23.2)	(4.7)	5YR6-6燈		
142		60-10	3号		土師器	瓶	(24.1)	(4.9)	7.5YR7-4C-A輪		
143		60-71	3号		土師器	瓶	(24.4)	(3.8)	5YR5-6B未規		
144			3号		土師器	瓶	(25.5)	(3.1)	5YR4-6B輪		
145		60-10a	3号		土師器	片口鋤	(15.2)	(6.6)	7.5YR7-4C-A輪		
146		60-9b	3号		土師器	鋤	(16.0)	(6.8)	7.5YR7-6輪		
147		60-30c	3号		土師器	鋤	(2.6)	10.3	5YR5-6B未規		
148		60-9c	3号		土師器	鋤	(2.0)	(13.5)	5YR6-6燈		
279	149	60-8g	3号		土師器	甕	(14.8)	(4.8)	10Y7-2C-A輪		
150		60-28	3号		生土上器	甕	(23)	10Y7-2C-A輪	底径5.3		
151		60-9a	3号		鉢形系土器	瓶			5YR6-6燈		
152		60-9g	3号		鉢形系土器	小形平底鋤又は 垂手部			5YR6-6燈		
153		60-8j	3号		鉢形系土器	平底鋤	(4.5)	10Y86-2C-A輪			
154		60-9h	3号		鉢形系土器	平底鋤	(9.0)	(11.7)	10Y86-3C-A輪		
155		60-9b	3号		土師器	甕	(11.6)	(6.4)	25YR4-6B輪		
156			3号		土師器	甕	(12.2)	(5.3)	5YR4-6B輪		
157			3号		土師器	甕	(17.2)	(4.8)	25YR4-6B輪		
158			3号		土師器	甕	(21.6)	(5.9)	5YR5-6明未規		
159			3号		土師器	甕	22.6	(8.1)	5YR5-6明未規		
160			3号		土師器	甕	(23.6)	(6.1)	5YR5-6明未規		
161		60-9a	3号		土師器	甕	20.4	21.0	5YR6-6燈		
162		60-8g	3号		土師器	羽茎	(26.2)	(7.6)	7.5YR4-4輪		
163		60-9b	3号		土師器	瓶	(28.2)	(31.8)	5YR4-6B輪		
280	164	60-6a	4号		瓶	瓶形			5YR5-8B明未規		
165		60-6a	5号		瓶	瓶形			5YR6-8輪		
166		60-8g	3号		瓶	人物?			5YR5-4C-A輪未規		
167			3号		瓶	人物(草摺)			5YR5-4C-A輪未規		
168		60-10	3号		瓶	瓶形			7.5YR7-4C-A輪		
169		60-9j	3号		瓶	円筒			10Y4-4輪	ヘラ記号	頭忠質
170		60-10	3号		瓶	円筒			7.5YR7-6輪		
171		60-71	3号		瓶	円筒			5YR5-3C-A輪未規		頭忠質
172		60-7e	3号		瓶	円筒			10Y7-3C-A輪		頭忠質
173		60-10	3号		瓶	円筒			5YR5-1輪未規		頭忠質
174		60-71	下位	193-190C-1指標	瓶	瓶形			7.5YR8-29E		
281	175		60-7c	3号	瓶	瓶形			7.5YR7-4C-A輪		
176		60-7d	3号下位		瓶	瓶形			10Y7-2C-A輪		
177		60-7a	4号		土師器	高杯	(15.6)	(4.7)	5YR4-6B輪		
2		60-7b	4号		土師器	瓶形(馬の脚?)			7.5YR8-6C-A輪		
3		60-6a	5号		土師器	甕又は甌	(2.2)	10Y7-8A-6C-A輪	輪御8.0		
4		60-7b	5号		瓦				10Y6-13K		
5		60-8d	5号		鉢形	甕	(16.0)	(8.0)	N-60K	左回り	
6		60-7b	5号		鉢形	甕	13.2	3.9	SPHS-1青白	右回り ヘラ記号	

表34 出土遺物觀察表 (25)

番号	地区	遺物 番号	遺物 種類	形狀	備考	種別	器種	法量		色調	特徴
								(mm)	形態		
282 -7	60 -6a	5	瓦器	鉢身	須志器	杯身	(124)	3.8	5PB5-1青灰	右回り	
8	60 -7b	5	瓦器	鉢身	須志器	垂			(17.9) N -696	鏡底	
283 -1	7N -6e	2	瓦器	口部	土師器	ミニチャア			(3.9) 5YR4-6赤褐色	鏡底後穿孔	
2	7N -4	3	瓦器	口部	瓦器	小皿	8.4	1.95	2.572/191		
3	7N -1g	2	瓦器	口部	瓦器	碗	(112)	2.8	N -696		
4	7N -5f	2	瓦器	口部	須志器	平瓶			(2.8) N -596	鏡徑(6.8)	
5		2	瓦器	口部	須志器	平瓶			12.9 N -796白	右回り	
6	7N -5e	2	瓦器	口部	須志器	垂	7.8	(7.8) N -896白			
7	7N -6e	2	瓦器	口部	須志器	垂			(3.4) N -796白	高台律(10.0) 右回り	
8	7N -5f	2	瓦器	口部	須志器	垂			(7.4) 10Y7/13白	高台律(9.0) 右回り	
9	83 -9	7N -89-8c	2	瓦器	須志器	圓足円筒罐			506-1青灰		
10	83 -12	7N -6f	1	瓦器	須志器	円筒罐			(2.6) 7.5Y4-191	鏡面径20.0	
11	7N -6f	2	瓦器	須志器	桶		(16.4)	(1.1)	N -596		
12	7N -5f	2	瓦器	須志器	桶		(20.8)	(1.9)	N -496		
13	7N -6f	2	瓦器	須志器	桶		(11.8)	(4.9)	5PB6-1青灰	右回り	
284 -4	70 -1e	3	瓦器	須志器	桶付鉢			(3.6)	5PB7-1明青灰	鏡徑(8.6) 左回り	
2	70 -1d	3	瓦器	須志器	桶		(10.2)	(2.6)	10Y5-1綠灰	右回り	
3	7N -1a	3	瓦器	須志器	桶		(11.0)	(1.5)	10Y5-193	右回り	
4	70 -3d	3	瓦器	須志器	桶		(11.6)	(3.3)	7.5Y6-191	右回り ヘラ記号	
5	70 -2b	3	瓦器	須志器	桶		13.6	4.0	N -596	右回り	
6	70 -1d	3	瓦器	須志器	桶		(8.8)	2.4	5PB7-1明青灰	右回り	
7	70 -2b	3	瓦器	須志器	桶		(12.4)	(4.0)	10Y6-191		
8		3	瓦器	須志器	桶		(12.2)	(3.5)	N -696	ヘラ記号	
9	83 -7	7N -6f	3	瓦器	須志器	圓筒罐	(12.1)		N -896白	右回り	
10	83 -11	3	瓦器	須志器	圓筒罐		(16.4)	(1.4)	N -696		
11	7N -11	3	瓦器	須志器	平瓶		(7.2)	(5.2)	N -696		
12	70 -2a	3	瓦器	須志器	平瓶		(7.4)	(5.0)	N -696		
13		3	瓦器	須志器	壺		(11.0)	(5.5)	7.5Y2-191		
14	70 -2b	3	瓦器	須志器	壺			(8.9)	N -696	左回り	
15	7N -6f	3	瓦器	須志器	別腹壺		(5.6)	(5.1)	N -796白		
16	70 -4b	3	瓦器	須志器	別腹壺		7.8	(6.1)	N -696		
17	7N -2b	3	瓦器	土師器	杯		(10.0)	3.0	5YR4-6赤褐色		
18		3	瓦器	土師器	杯		(13.4)	(4.6)	5YR4-6赤褐色		
19	70 -4b	3	瓦器	土師器	杯		14.2	5.7	2.5Y4-6未端		
20	70 -1a	3	瓦器	土師器	高杯			(6.1)	7.5Y2-14.4cm×粗	鏡徑10.4	
21	70 -4b	3	瓦器	土師器	小柄鉢		10.4	6.5	5YR-6橙		
22	7N -11	3	瓦器	土師器	鉢			(8.9)	2.5Y6-8明赤褐色	鏡徑(7.0)	
23	70 -3b	3	瓦器	須志器	圓筒				5Y3-196	須志質	
24	7N -6f	3	瓦器	瓦					2.5Y6-296黃		
83 -1	6N -10g	1890	堅穴墳物		須志器	圓筒罐					
83 -6		1890	堅穴墳物		須志器	圓筒罐					
83 -10	6N -9e	1893	漆		須志器	圓筒罐					
85 -2	7N -7g	163	土壤		須志器	壺					
3	70 -7a	1	漆	下層	須志器	壺					
85 -4	60 -7b	400	漆	上層	須志器	壺					
5		400	漆	上層	須志器	壺					
85 -6	60 -7e	401	漆	下層	須志器	壺					
7		401	漆	F層	須志器	壺					
8		401	漆	F層	須志器	壺					
9	60 -7i	400	漆	F層	須志器	壺					
10	60 -7g	400	漆	F層	須志器	壺					
11	60 -7h	400	漆	F層	須志器	壺					
12	60 -7i	400	漆	F層	須志器	壺					
86 -1	60 -7g	2	漆	須志器	壺						
2	60 -10g	982	柱穴	建物39	須志器	壺					
3	60 -8d	3	漆	須志器	壺						
4	6N -8j	3	漆	須志器	壺						
5	60 -7c	3	漆	須志器	壺						
6	7N -6b	2	漆	須志器	壺						
7	7N -6e	3	漆	須志器	壺						
8	7N -6g	2	漆	須志器	壺						
9		2	漆	須志器	壺						
10	7N -1j	2	漆	須志器	壺						
108 -8	7N -6f	142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
9		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
10		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
11		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
12		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
13		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
14		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
15		142	井口	非戶衿内	土製品	製塙土器					
109 -1	7N -6g	149	漆	非戶衿内	土製品	製塙土器					
2	70 -6f	92	漆	非戶衿内	土製品	製塙土器					
3	7N -6e	149	漆	非戶衿内	土製品	製塙土器					
6	7N -6	2	漆	非戶衿内	土製品	製塙土器					

表35 出土遺物觀察表(26)

番号	地区	遺物		層位	備考	種別	器種	法量		色調	特徵
		固	液					口径	部高		
109	7	60	-7b	2層		土製品	鋸齒土器				
	8			2層		土製品	鋸齒土器				
9	78	-6g		3層		土製品	鋸齒土器				
10	78	-6f		3層		土製品	鋸齒土器				
11				3層		土製品	鋸齒土器				
112	-7	70	-3a	1	溝	土製品	鋸齒口				
	8		1	溝		土製品	鋸齒口				
9		1	溝			土製品	鋸齒口				
10		1	溝			土製品	鋸齒口				
11		1	溝			土製品	鋸齒口				
12		1	溝			土製品	鋸齒口				
13		1	溝			土製品	鋸齒口				
14		1	溝			土製品	鋸齒口				
15		1	溝			土製品	鋸齒口				
16	70	-6e	1	溝		土製品	鋸齒口				
113	-1	70	-3a	1503	溝	土製品	鋸齒口				
	2		1503	溝		土製品	鋸齒口				
3		1503	溝			土製品	鋸齒口				
4		1503	溝			土製品	鋸齒口				
5	78	-7g	163	土坑		土製品	鋸齒口				
6	70	-3a	1503	溝		土製品	鋸齒口				
7	78	-7g	163	土坑		土製品	鋸齒口				
8	70	-6b	1	溝		土製品	鋸齒口				
9	78	-7g	163	土坑		土製品	鋸齒口				
10	60	-7e	400	溝	上層	土製品	鋸齒口				
11	60	-9a		3層		土製品	鋸齒口				
12				3層		土製品	鋸齒口				
13	60	-10a		3層		土製品	鋸齒口				
14				3層		土製品	鋸齒口				
15	70	-5b	1	溝		土製品	鋸齒口				
16	60	-7e	401	溝		土製品	取瓶				
17	60	-7g	403	溝		陶形浮					
119	7	60	-8e	1340	柱穴	建物46	木製品	柱板		又年	
	8	60	-10f	1014	柱穴	建物40	木製品	柱板		又年	
9	60	-8e	896	柱穴		建物46	木製品	柱板		又年	
122	-3		1352	柱穴		建物46	木製品	梁板		又年	
4		1352	柱穴			建物46	木製品	梁板		又年	
5		1352	柱穴			建物46	木製品	梁板		又年	
126	-1	60	-7b	405	井戸		木製品	井戸枠		又年	
	2		405	井戸			木製品	井戸枠		又年	
127	-1		405	井戸			木製品	井戸枠		又年	

表36 出土遺物観察表 [27]

国番号	国版番号	地 区	出土層位・遺構	名 称	長さ	幅	厚さ	重量
262-1	117-2	60-9g	黄灰色地山内	縦長剥片	4.9	2.7	0.6	5.5
2	117-3	60-8i	59柱穴	調整剥片	8.8	4.5	1.8	65.0
3	117-1	70-3e	598柱穴	石核	4.9	5.1	1.7	31.0
4	116-8	60-10e	黄灰色地山内	縦長剥片石核	8.2	7.9	6.7	451.0
263-1	118-5	7N-6f	1層	ナイフ形石器	(4.2)	(2.0)	0.9	9.0
2	118-3	7N-5i	搅乱坑	ナイフ形石器	(2.9)	1.9	0.7	4.0
3	118-6	60-7d	401溝上層粘質土	ナイフ形石器	(3.6)	1.7	0.6	4.5
4	116-4	6N-10i	1506溝	横長剥片石核	(4.3)	(5.1)	1.2	23.5
5		60-8g	634柱穴	横長剥片石核	5.0	5.2	1.8	68.0
6		60-7f	400溝下層砂質土	横長剥片石核	4.5	6.3	2.2	46.8
7	116-7	60-7b	2層	横長剥片石核	8.4	9.4	3.0	264.0
8	116-3	60-8f	3層	横長剥片石核	7.3	3.9	1.7	44.0
9		6N-9h	3層	横長剥片石核	2.8	5.5	0.9	13.0
10		60-7g	400溝上層粘質土	横長剥片	5.0	2.0	1.0	8.0
11		70-3b	1溝	横長剥片石核	7.7	5.3	2.6	149.5
12		60-7b	5層	横長剥片石核	5.3	8.7	2.7	107.0
264-1		60-7g	400溝下層砂質土	円基式石鏃	2.5	1.8	0.3	1.0
2	118-2	6N-8g	上層	円基式石鏃	3.0	1.2	0.4	1.0
3		60-7b	4層	有舌尖頭器	(7.4)	2.5	1.1	20.0
4	118-7	60-7d	3層	搔器	4.7	3.1	1.3	19.0
5		6N-9j	3層	搔器	4.8	4.8	1.6	27.0
6	118-1	60-7d	3層	使用痕のある剥片	3.4	4.4	0.9	12.5
7		6N-9j	3層	使用痕のある剥片	3.1	4.2	0.6	8.0
8	118-8	60-7g	400溝下層砂質土	削器	(5.6)	4.2	1.0	22.0
9		6N-8f	2層	使用痕のある剥片	4.8	7.1	0.9	38.8
10		60-7e	404溝	使用痕のある剥片	6.1	5.7	1.1	31.0
11	116-1	60-7a	3層	縦長剥片	5.3	(3.7)	1.0	17.0
12	116-5	60-7g	400溝下層砂質土	縦長剥片	6.3	3.6	0.9	25.5
13	116-2	60-9c	3層	石核	(5.2)	2.7	3.3	33.5
14	116-6	60-9a	3層	縦長剥片石核	7.6	6.3	1.4	6.5
15	116-9	6N-9e	2151井戸	縦長剥片石核	9.3	7.8	5.9	256.0

報 告 書 抄 錄

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第135集

藤井寺市

はざみ山遺跡

藤井寺团地建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2005年9月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号



付図1 はざみ山（02-1）平面図

